平成１９年度文部科学省「グローバル COE プログラム」研究拠点形成費補助金

（京都大学　機関番号１４３０１　拠点番号Ｄ－０７）

心が活きる教育のための国際的拠点

Revitalizing Education for Dynamic Hearts and Minds

平成１９年度活動報告書

２００８年３月

平成１９年度文部科学省「グローバル COE プログラム」研究拠点形成費補助金

（京都大学　機関番号１４３０１　拠点番号Ｄ－０７）

心が活きる教育のための国際的拠点

Revitalizing Education for Dynamic Hearts and Minds

平成１９年度活動報告書

２００８年３月

研究拠点の名称

心が活きる教育のための国際的拠点

Revitalizing Education for Dynamic Hearts and Minds

（京都大学　機関番号１４３０１　拠点番号　D－０７）

研究拠点形成費

平成１９年度　　直接経費１１０,０００千円　　間接経費３３,０００千円

学内関連部局

教育学研究科（教育科学専攻、臨床教育学専攻）

高等教育研究開発推進センター（高等教育教授システム研究開発部門）

文学研究科（行動文化学専攻・心理学専修）

人間・環境学研究科（共生人間学専攻・社会行動論講座、認知科学講座、行動制御学講座）、

こころの未来研究センター

*霊長類研究所（思考言語分野）

*協力部局

研究組織

ユニットＡ　「基礎過程：心が活きるとは？」

ユニットＢ　「システム：社会システムの設計」

ユニットＣ　「サポート：個人と関係のサポート」

ユニットＤ　「開発評価：ユニットの評価尺度開発」

構成メンバー

	職階		氏 名	所属ユニット	専門分野
人間・環境学研究科	教授	○	岡田敬司	A	教育人間学
	教授		小山静子	A	教育史学
	教授	○	杉万俊夫	B	社会心理学
	教授	○	齋木 潤	A	認知科学
	教授		松村道一	C	認知神経科学
	准教授		永田素彦	B	社会心理学
	助教		山本洋紀	A	視覚心理学
	助教		久代恵介	A	認知神経科学
文学研究科	教授	○	苧阪直行	A	知覚心理学
	教授	◎	藤田和生	A	比較認知科学
	教授	○	櫻井芳雄	A	認知神経科学
	准教授		板倉昭二	A	発達認知科学
	准教授		蘆田 宏	A	認知心理学
教育学研究科	教授	○	辻本雅史	A	教育史学
	教授	◎	鈴木晶子	D	教育哲学
	教授	○	山田洋子	C	生涯発達心理学
	教授		田中耕治	B	教育方法学
	教授	◎	子安増生	D	発達心理学
	教授	○	楠見 孝	B	認知心理学
	教授		岩井八郎	B	教育社会学
	教授		稲垣恭子	B	教育社会学
	教授		川崎良孝	B	図書館情報学
	教授		前平泰志	B	生涯教育学
	教授		高見 茂	B	教育行政学
	教授	◎	杉本 均	B	比較教育学
	教授		矢野智司	C	教育人間学
	教授		西平 直	A	教育人間学
	教授		藤原勝紀	C	臨床心理実践学
	教授		桑原知子	C	心理臨床学
	教授		伊藤良子	C	臨床心理実践学
	教授		皆藤 章	C	臨床教育学
	准教授		駒込 武	B	教育史学
	准教授		遠藤利彦	C	生涯発達心理学
	准教授		西岡加名恵	B	教育方法学
	准教授		齊藤 智	A	認知心理学
	准教授		渡邊洋子	B	生涯教育学
	准教授	○	佐藤卓己	B	メディア社会学
	准教授		金子 勉	B	教育行政学
	准教授	○	齋藤直子	C	教育人間学
	准教授		田中康裕	C	心理臨床学
	准教授	○	角野善宏	C	臨床心理実践学
	准教授		大山泰宏	D	臨床教育学
	助教		中池竜一	B	認知科学
	助教		川部哲也	C	社会心理学
	助教		安川由貴子	B	生涯教育学
	助教		石井英真	B	教育方法学
	助教		片畑真由美	C	臨床心理実践学
	助教		竹中菜苗	C	心理臨床学
	助教		楠山 研	B	比較教育学

高等教育研究開発センター	教授	○	田中毎実	D	人間形成論
	教授		大塚雄作	D	教育心理学
	教授	○	松下佳代	D	教育方法学
	准教授		溝上慎一	D	青年心理学
	助教		酒井博之	D	音響心理学
こころの未来研究センター	教授	○	吉川左紀子	A	認知心理学
	教授		船橋新太郎	A	認知神経科学
	教授		カール・ベッカー	D	倫理学、宗教学
	教授	◎	河合俊雄	C	心理臨床学
	助教		久保南海子	A	認知発達心理学
	助教		番　浩志	A	認知神経科学
	助教		内田由紀子	A	社会心理学
	助教		平石　界	A	認知心理学
霊長類研究所	教授		松沢哲郎	A	比較認知科学
	准教授		友永雅己	A	比較認知科学
	准教授		佐藤　弥	A	認知心理学
	助教		田中正之	A	比較認知科学
	助教		林　美里	A	比較認知科学
グローバルCOE	COE助教		大塚結喜	A	認知心理学
	COE研究員		小島隆次	B	認知心理学
	COE研究員		廣瀬信之	A	実験心理学
	COE研究員		櫻井里穂	D	比較教育学

所属・職階は平成20年3月末時点のものを示している。

◎はリーダー職、○はリーダー以外の事業推進担当者を示す。

目　　次

はじめに……1

拠点形成の目的 ……3

各ユニットの成果の概要 ……10

講演会、シンポジウム、ワークショップの開催記録 ……25

若手研究者養成プログラム及び研究開発コロキアム ……55

修士論文及び博士論文 ……59

業績 ……67

資料 ……139

はじめに

京都大学グローバルCOE「心が活きる教育のための国際的拠点」（拠点番号D-07）は、平成19年度文部科学省研究拠点形成費等補助金「グローバルCOEプログラム」に採択され、平成19年6月より活動を開始した。本報告書は、その初年度の活動内容を報告するものである。

グローバル COE プログラムは、平成 17 年 9 月の中央教育審議会答申「新時代の大学院教育ー国際的に魅力ある大学院教育の構築に向けて」や、平成 18 年 3 月に閣議決定された「科学技術基本計画」等を踏まえ、我が国の大学院の教育研究機能を一層充実・強化し、世界最高水準の研究基盤の下で世界をリードする創造的な人材育成を図るため、国際的に卓越した教育研究拠点の形成を重点的に支援し、国際競争力のある大学づくりを推進することを目的としている。平成 19 年度は、全国の国公私立大学 111 校から 281 件の申請があり、グローバル COE プログラム委員会により行われた審査において、28 校 63 件が採択された。本拠点がこのように厳しい競争と厳正な審査を経て採択されたことを大変名誉に思うとともに、それに相応しい活動を展開していきたいと一同決意を新たにしている。

本拠点の平成19年度の主な活動内容は、以下の通りである。

本拠点では、研究上の組織としてユニットA「基礎過程」、ユニットB「システム」、ユニットC「サポート」、ユニットD「開発評価」の４つの研究ユニットを構成し、ユニット・リーダー、授業推進担当者、授業推進協力者の連携のもとに、ユニットごとの研究活動を展開している。そして、拠点リーダーの主導のもとに、ユニット・リーダー４人を含む７人の委員から構成される執行委員会が中心となって、拠点の管理運営にあたっている。執行委員会は、平成19年度に合計16回開催され、次のような事項を決定していった。

拠点の運営組織を固めるため、COE助教２人、COE研究員４人を全国公募により採用し、専任の事務職員２名を雇用した。また、現在COE助教１人の国際公募を現在行っているところである。

本学の情報学術メディアセンター・コンテンツ作成室の協力のもとに拠点のホームページを立ち上げ（http://www.educ.kyoto-u.ac.jp/gcoe/）、和文ページを適宜更新する体制ならびに英文ページを充実する体制を整えた。なお、拠点のロゴマークは、著名グラフィックデザイナーの奥村昭夫氏（学術情報メディアセンター客員教授）のデザインによる。

グローバル COE 間の連携協力体制として、学内のグローバル COE プログラム推進委員会に参加するとともに、慶應義塾大学グローバル COE「論理と感性の先端的教育研究拠点形成」（拠点リーダー・渡辺茂教授）と協力して事業を進めていくことを決定し、2008 年 1 月に東京で開催されたシンポジウムに共催・参加した。また、2008 年２月に本学で開催された日本学術会議シンポジウム「ゲノムから心まで～心の先端研究拠点への展望～」にも後援団体として連携協力を行った。

平成 19 年度に本拠点が主催または共催して開催した行事は、講演会 20 回、シンポジウム７回、ワークショップ４回である。2007 年 11 月には、拠点のスタートアップ事業として、グローバル COE 拠点形成記念公開シンポジウム「心が活きる教育に向かって」を開催した。

また、国際的拠点の形成という点で重要なシンポジウムをあげると、次のようなものを実施した。

- 「PISA 調査の特徴と課題－日中合同検討会」（2007 年 12 月、中国・中央教育科学研究所の研究者を招聘）
- 「International symposium on executive function in the mind」（2007 年 12 月、イギリス・ランカスター大学ほかの研究者を招聘）
- 「Happiness and risk」（2008 年 2 月、ドイツ・ベルリン自由大学ほかの研究者を招聘）
- 「The self, the other & language」（2008 年 3 月；イギリス・ロンドン大学教育研究所に大学院生 7 人を帯同し開催）

国際的研究拠点の形成と並ぶグローバルCOEプログラムの重要な柱は、人材育成である。この点については、次の４つの人材養成プログラムを公募して実施した。

- 20 代、30 代助教を対象とする「若手教員支援研究費」を５人に助成。
- 博士課程大学院生対象の「海外留学資金」を７人に助成。
- 博士課程大学院生対象の「大学院養成プログラム研究費」を 15 人に助成。
- 博士課程大学院生が実施する課題探究型授業「研究開発コロキアム」経費を８人に助成。

なお、院生対象説明会を３回（2007 年７月、10 月、および 2008 年２月）開催し、上記の公募の趣旨と内容の周知に努めた。

以上のように、初年度は９か月に満たない短い期間であったが、申請内容に添って活発に事業を展開してきたと言える。

2007年３月

拠点リーダー・子安 増生

拠点形成の目的

20 世紀は、科学・技術・産業などが飛躍的進歩を遂げると同時に、貧困・犯罪・テロリズム・地域紛争・戦争・環境破壊のような人類の宿痾というべき矛盾を克服することができず、21 世紀においても、近代社会の限界から生ずる個人、社会、地球全体のさまざまなレヴェルにおける解決困難な課題が持ち越されている。学校教育という場面に限定して考えても、いじめ、校内暴力、不登校という学校関係者や保護者を悩ませる現象は、人間の心のあり方について大きな問題を投げかけてきた。人間が作り出すさまざまな制度や組織は、本来そこに生きる人間の心が活きるものでなければならないが、現実には制度や組織が人間を苦しめたり、心を萎えさせたりしている。

人間は、教育というものを通じて、知識と技能を獲得することによって自身が何事かをなすことができるという「有能感」を得、自然や社会とつながることによってこの世界に生きているという「生命感」を得る。さらに、この２つの感覚を一定の目標に向けて十分に発揮することによって何かをなしえた「達成感」というものが得られる。そこに、同時に「幸福感」というものを感ずることもできよう。反対に、このリンクの一部あるいは全部がうまく機能しないとき、様々な問題が起こってくる。心と教育の諸問題に注目が集まる今日の社会において、このような枠組みから「心が活きる教育」を研究する国際的教育・研究拠点を構想し、その諸問題に取り組む人材を育成する拠点の設置が強く求められており、本プログラムはそれに真正面から応えようとするものである。

拠点形成計画の概要

本プログラムは、21 世紀 COE「心の働きの総合的研究教育拠点」（平成 14 年度～18 年度）の多大な成果を基礎として、京都大学の心理学および教育学の研究者が有機的に連携しながら、国際的に活躍する有為な人材育成のための新たな拠点を形成するものである。具体的には、「心が活きる教育」とはどのようなものかを解明し、それをどのように理解し、あるいは実践していくかについて、教育学研究科（教育科学専攻、臨床教育学専攻）、高等教育研究開発推進センター（第一部門）、文学研究科（行動文化学専攻）、人間・環境学研究科（共生人間学専攻）、および、平成 19 年度に設置される「こころの未来研究センター」に所属する心理学および教育学の研究者が参加して研究拠点を形成し、拠点リーダーが全体を統括しながら、(A)「心が活きる」とはどういうことか、逆に「心が活きていない」状態とはどのようなものかを研究する基礎過程、(B)「心が活きる」ために必要な制度設計と、それを社会に説明し実際に運用する仕組みについて研究するシステム、(C)「心が活きる」ために有効な心理的サポートや教育的かかわりのあり方について研究ならびに実践を行うサポート、(D) 以上の各ユニットが提案する理論・実践を「心が活きる」という観点から評価し、同時に国際共同研究として「幸福感の国際比較研究」を実施する開発評価、という

４つの研究ユニットを中心に高度な水準のユニークな研究を進めていく。

人材育成の面では、心が活きる教育ということについて心理学・教育学の観点から深く考えることのできる高度の専門性と幅広い視野を持ち、外国語による論文の投稿や国際学会での発表など、国際的に情報発信ができる人材を育成するために、心理学・教育学の大学院教育を拠点全体で担う教育体制を一層整備・充実すると共に、国際拠点形成の活動として、米ミシガン大学、英ランカスター大学、中国中央教育科学研究所、北京師範大学、独ベルリン自由大学、英ロンドン大学教育研究所などの世界的研究機関との間に築いてきた学術交流協定に基づく教育・研究活動をさらに展開し、京都大学を世界中の心理学・教育学の研究者が研究の発展を求めて集まる拠点としていく。また、広い視野から深く考え、心と教育に関する諸問題の解明・理解・実践に貢献しうる人材の進路が、大学等の研究機関のほか、官庁・企業等にも広がるよう、その支援体制を一層整備する。

博士課程学生を含む若手研究者のテニュア取得にいたるまでの支援としては、大学院生に対する競争的人材育成経費（海外留学資金、院生養成プログラム研究費、研究開発コロキアム）の支援、公募によるポスドク研究員（４人）の採用、国際的公募による助教の採用（3 人）、および、テニュア取得以前、あるいは、テニュア取得からまだ年数の浅い 30 歳代の若手教員に対する競争的研究費の支援などを行う。

以上のような活動を通じて、心理学と教育学が交差する新たな教育・研究領域の創成をはかり、京都大学の内部は言うにおよばず、学術全体における人文科学の発展に貢献し、社会の改革や改良に資する学術的情報を提供し、自らも有効かつ効果的な教育実践を行っていくものである。

心が活きる教育とは

20 世紀は、科学・技術・産業などが飛躍的進歩を遂げると同時に、貧困・犯罪・テロリズム・地域紛争・戦争・環境破壊のような人類の宿痾というべき矛盾を克服することができず、21 世紀においても、近代社会の限界から生ずる個人、社会、地球全体のさまざまなレヴェルにおける解決困難な課題が持ち越されている。学校教育という場面に限定しても、いじめ、校内暴力、不登校という学校関係者や保護者を悩ませる現象は、人間の心のあり方について大きな問題を投げかけてきた。人間が作り出すさまざまな制度や組織は、本来そこに生きる人間の「心が活きる」ものでなければならないが、現実には制度や組織が人間を苦しめたり、心を萎えさせたりしている。

心の問題は、さまざまなフィールドで取り上げられるべきでものであるが、中でも教育というフィールドは最も重要なものの代表格である。ただし、高度に情報化された現代社会においては、教育が学校教育という狭いフィールドに限定されるのではなく、時間的空間的に拡張された、人間の生きる包括的な文脈での生涯学習あるいは生涯発達の視点が不可欠である。

人間は、教育というものを通じて、知識と技能を獲得することによって自身が何事かをなすことができるという「有能感」を得、自然や社会とつながることによってこの世界に生きているという「生命感」を得る。さらに、この２つの感覚を一定の目標に向けて十分に発揮することによって何かをなしえたという「達成感」が得られる。そこに、同時に「幸福感」というものを感ずることもできよう。反対に、このリンクの一部あるいは全部がうまく機能しないとき、様々な問題が起こってくる。

心と教育の諸問題に注目が集まる今日の社会において、このような枠組みから「心が活きる教育」を研究する国際的教育・研究拠点を構想し、その諸問題に取り組む人材を育成する拠点の設置が強く求められているのである。また、本拠点で育成される人材像として、大学等の研究機関で活躍できる者は言うまでもなく、少子高齢化社会において社会の活性化をはかるために期待されている新たな教育産業の創生に貢献できるような、ユニークな人材をも視野に入れている。

Purposes of Forming Our Project Basis

In the 20th century, despite the rapid progress that was achieved in science, technology and industry, conflicts relating to poverty, crime, terrorism, local conflicts, and wars, and environmental disruption became firmly entrenched as the major problems facing human beings. Unsolved tasks which are derived from the limitations of modern societies have been carried over to the societies of the 21st century at various levels, involving individuals, societies and the international community as a whole. In school settings, those who are involved in education, including parents and teachers have been suffering from such difficult challenges as bullying, violence and refusal of children to attend schools. These issues raise a serious question concerning the state of the human mind. Ideally, the human mind should be revitalized through social systems and organizations produced by human beings, but in reality, these social systems and organizations have sometimes tormented human beings and enfeebled our minds.

Through education and through the acquisitions of knowledge and skills, human beings obtain a sense of competence, and through connection with nature and society, we obtain a vital sense of life, or the feeling that we are living on earth. Further, when we direct these two senses to the same direction to the fullest amount, we obtain a sense of accomplishment that we have achieved something and in this, we can also feel a sense of happiness. Conversely, if a part of this interconnectedness does not function properly, various problems occur. In contemporary society, in which problems concerning the mind and education are prominent, it is urgently needed to envision an international research base that explores revitalizing education for dynamic hearts and minds from these perspectives and to foster researchers who are capable of addressing these challenging topics. Our project will challenge these goals.

An Outline of the Formation and Activities Plan for Our Project Basis

Based upon the results of the program, "Center for Excellence for Psychological Studies," the 21st Century COE program of 2002-2006, our Global COE project center is to be established through dynamic collaboration

between researchers in psychology and educational studies for the purpose of developing talented researchers who can demonstrate their achievements on a global scale. More specifically, in order to conduct research on what constitutes revitalizing education for dynamic hearts and minds and address the issue of how to advance practice in relevant fields, the Center will involve the participation of researchers in psychology and educational studies from the following departments: the Graduate School of Education (Departments of Education and Clinical Studies of Education), Institute for the Promotion of Excellence in Higher Education (Section I), the Graduate School of Letters (Department of Psychology), Graduate School of Human and Integrated Studies (Department of Human Coexistence), and the Kokoro Research Center, a center scheduled to be established in 2007. In a coordinated manner, we will promote high-quality research, centering on the following four research units: (A) Basic Processes Unit, which conducts research on the vital state of the mind, and conversely, the non-vital state of the mind; (B) Systems Unit, which conducts research into the design of the system necessary for revitalizing education for dynamic hearts and minds, and the scheme through which it is explained and applied to society; (C) Support Unit, which conducts research on the psychological support and educational commitments that are effective for revitalizing education for dynamic hearts and minds, and that puts them into practice; and (D) Development and Evaluation Unit, which conducts evaluation on the theory and practice proposed by each unit, and which has the task of implementing a project on "Cross-Cultural Research on the Sense of Happiness."

We aim to develop researchers in psychology and educational studies who can think deeply, with high-level expertise and a broad perspective, about revitalizing education for dynamic hearts and minds; and who can publish in international, high quality academic journals and present papers at international conferences. To accomplish this task, an educational system will be developed that will enable graduate education programs in psychology and educational studies to be provided by the Center as a whole. At the same time the Center will reinforce its position as an international center for research and education through official academic exchange agreements with high-level research institutions abroad, including the University of Michigan, Lancaster University, the China National Institute for Educational Research, Beijing Normal University, the Free University of

Berlin, and the Institute of Education at London University. The aim is to create at Kyoto University a meeting place for scholars in psychology and educational studies from all over the world.

The Center will also promote further support system for the career development of researchers, attracting especially those who can think deeply and broadly, who can contribute to the analysis and understanding of problems concerning revitalizing education for dynamic hearts and minds, and who can put solutions into practice, so that their career paths can be extended not only to universities and other research institutions but also to governmental organizations and business corporations.

The Center will encourage young researchers including doctoral students to get tenure through the following measures: financial support for graduate students through a competitive research fund; the employment of 4 post-doctoral researchers recruited through public advertisement; the employment of 3 assistant professors by world-wide general advertisement, and we will also offer research funding for young professors in their thirties who have not yet or only recently received tenure.

Through these activities the Center aims to create a new research and education field in which psychology and educational studies are integrated. Through this integration, it is hoped that (a) significant developments in the humanities discipline will be achieved within Kyoto University and in academia as a whole; (b) scholarly information and understanding will be promoted, which in turn will promote social reform and innovation; and (c) wider engagement in effective and fruitful educational practice will be facilitated.

What is Revitalizing Education for Dynamic Hearts and Minds?

In the 20th century, despite the rapid progress that was achieved in science, technology and industry, conflicts relating to poverty, crime, terrorism, local conflicts and wars, and environmental disruption became firmly entrenched as the major problems facing human beings. Unsolved tasks which are derived from the limitations of modern societies have been carried over to the societies of the 21st century at various levels, involving individuals, societies and the international community as a whole. In school settings, those who are involved in education, including parents and teachers have been suffering from such difficult challenges as bullying,

violence and refusal of children to attend schools. These issues raise serious questions concerning the state of the human mind. Ideally, the human mind should be revitalized through social systems and organizations produced by human beings, but in reality, these social systems and organizations have instead sometimes tormented human beings and enfeebled our minds.

The problems of minds should be explored by various disciplines; we believe that education should be the area that is most essential to the study of the state of the human mind. However, in a contemporary, highly information-oriented society, it is critical to remember that education should not represent a limited concept such as schooling, but rather education should be understood in a larger, more comprehensive context. This perspective should incorporate the perspectives of lifelong learning and lifelong development in the comprehensive context of how human beings live.

Through education and through the acquisition of knowledge and skills, human beings obtain a sense of competence , and through connection with nature and society, we obtain a vital sense of life, or the feeling that we are living on earth. Further, when we direct these two senses in the same direction to the fullest amount, we obtain a sense of achievement and in this, we can also feel a sense of happiness. Conversely, if a part of this interconnectedness does not function properly, various problems may occur.

Recently, the problem of minds and education has been a heated topic and, therefore, it is from this framework that we have formed the basis for the Revitalizing Education for Dynamic Hearts and Minds project, incorporating international perspectives to foster human resources to solve the problems of minds and education. In addition, we plan to foster not only the human resources that will play an active role at academic institutions, but also the diverse personnel who will contribute to other educational industries and will be invaluable in activating those education fields vital to activating the aging society.

各ユニットの成果の概要

平成１９年度の成果（UnitA）

平成１９年度、Unit A では、計画課題と６件の公募課題を推進した。以下にその成果の概要を示す。

計画課題「幸福感に関する基礎的研究－幸福感の科学をめざして」（代表：藤田和生）

本研究計画においては、感情の総合的研究である「感情科学 Affective Science」を一層発展させ、「心が活きる」とはどういうことか、有能感、達成感、生命感から構成される幸福感を達成するためにはどのような条件が必要なのかを明らかにするための基礎資料を、以下の５サブプロジェクトを推進することにより収集した。

１）幸福感の発生（○藤田、子安、板倉）

幸福感を達成するための大きなカギの１つである感情の進化と発達を明らかにするための予備的研究をおこなった。フサオマキザルは、同種他個体の感情の原因を推理できることを示した。また食物分配においては他者の利益を気にかけることから、このサルには優しさやねたみといった高次感情が存在することを示した。乳児では、他者の分配行動に対する感受性の検討を、馴化法を用いておこなうべく、刺激映像を作成した。さらに、最後通告ゲームを利用して、こうした高次感情と行動の自己制御の過程を種比較・発達比較する研究を開始した。

２）達成感に関する基礎的研究（○苧阪、櫻井、蘆田、齊藤）

学習と記憶、知覚、思考、動機づけとその神経基盤を、認知科学的、神経科学的に分析している。ワーキングメモリ（WM）課題の遂行に報酬期待や達成感が及ぼす影響を fMRI により検討し、報酬期待と遂行の関係には WM 容量の個人差がかかわることがわかった。また、WM 課題実行中に左背外側前頭前野に磁気パルス刺激（TMS）を与えると言語性 WM の遂行が有意に低下することがわかった（苧阪）。WM の容量ではなく、どれだけ長く情報を保持できるかという WM の耐久性を測定する新テスト方法、ワーキングメモリピリオド（working memory period: WMP）の課題分析をおこなった。WMP 得点と WM スパン課題の得点には高い相関があり、WM の容量と耐久性は相互に関連していることがわかった（齊藤）。動的な環境内にある目標物に対し手の到達運動を達成するためには、物体の位置を予測的に符号化する必要がある。ヒトを用いた研究から、刺激の輝度変化を含む視覚的運動情報がそのような予測に用いられていることがわかった（蘆田）。動的な環境内で目標点へ移動し到達するためには、その環境全体を符号化する必要がある。ラットを用いた研究から、環境内を探索する際、海馬の神経細胞で場所情報の変換と統合が行われていることが明らかになった（櫻井）。

３）生命感に関する基礎的研究（○吉川、楠見、桑原、岡田、平石、内田）

深い対話、相互の心理理解を促進する対話の特徴を明らかにすることを目的として、心理臨床場面（ロールプレイ）でのカウンセラー・クライエント間の対話の分析を行い、身

体運動にみられる同調や、対話中の沈黙時間の生起、「深い発話」と相づちの関係等に関して、熟練のカウンセラーによる臨床対話の特長をが明らかにした（吉川・桑原）。また、ネットワーク上の仮想環境を利用したコミュニケーション・システムを、がん患者のサポートグループに導入し、患者のメンタルヘルスとコミュニティの形成に及ぼす効果を解明すること目的として研究を行った。３年にわたる会話の感情語の出現頻度を分析した結果、コミュニティの成熟によって、発話の内容に質的な変化が見られ、不安・倦怠に関わる発言が減少し、快や親和に関わる発言が増加することを明らかにした（楠見）。

４）有能感に関する基礎的研究（○齋木、船橋、角野）

どのような研究を取り上げ、進めていくかを検討した。本課題では「複雑な外界に対して適切に対処できること」を「有能さ」の重要な側面ととらえ、この問題に焦点をあてて研究する。その中で、３つの具体的研究課題を設定した。第１に、この有能さの基盤となる注意機能、ワーキングメモリ機能の基礎研究を進める。特に、視覚的注意、視覚性ワーキングメモリに焦点をあてる。第２に、これらの機能の個人差に注目し、その背後にあるメカニズムを行動実験、機能的脳イメージング、行動・分子遺伝学的解析を併用して解明する。第３に、これらの機能の訓練に関する研究を進める。外界との有効な相互作用を可能にする注意や認知の機能、及び環境要因に関する基礎的研究をおこなう。その文化的、社会的、個体的差違やその障害（ADHD）に着目して、認知心理学、臨床心理学、神経科学などの多角的なアプローチを用いて解析する。

５）幸福感の文化史・教育史（○辻本、小山）

「現代における台湾先住民族の幸福感の調査」を主目的に、2008 年 3 月 7 日～3 月 12 日、辻本が教育学研究科在籍の大学院学生 4 名（PD1 名を含む）を帯同して、台湾調査に入った。まず台湾大学で開催の、東アジア経典詮釈に関する国際シンポジウムに参加（辻本がパネラーとして発表）するとともに、台北中央研究院において文献的調査をした。その後、台湾中部の阿里山中に居住する鄒族の村に入り調査した。鄒族の現代社会への適応の現状、目指す方向、及び抱える課題について把握した。

公募課題１）動物観と幸福感－日独におけるヒトと動物の関係の分析を通じて（○藤田、鈴木）

宗教的・文化的背景を著しく異にするが、自然への愛着という面では共通した傾向を示す日独において、動物とヒトとの関わり方と幸福感の関連性を探る試みを開始した。ベルリン自由大学との共同研究である。本年度は、コンパニオンアニマルとヒトとの関わりを探る予備的質問紙調査を実施した。資料は現在分析中である。その結果に基づき、次年度には本調査を実施する。また異なる関係の中で構築される動物の知性や感情を実験的に分析することを計画している。

公募課題２）知覚、認知、行為に対する文化の影響：実験心理学的アプローチ（○齋木、吉川、内田、Kitayama、Meyer、Rensink、Leaman）

本年度は、従来から継続しているマルチタスキングの文化比較実験をミシガン大学のメンバーを中心に論文にまとめて投稿し、現在審査中である。視覚探索の文化比較実験については、新たにブリティッシュコロンビア大学と共同で研究を開始し、予備的な実験を行ない、その結果について議論した。Rensink 教授との議論から「注意の解像度」に注目して今までの実験結果を整理し、いくつか追加実験を行なうことになった。その他、今年度はいくつかの新しいプロジェクトの可能性についてプロジェクトメンバーが海外の共同研究者と打ち合わせを行なった。

公募課題３）ワーキングメモリと注意に及ぼす情動脳の影響（○苧阪、大塚、廣瀬）

本研究では、認知的側面を強調されてきたワーキングメモリと情動脳の関係を検討するために、情動脳として想定されている前部帯状回(anterior cingulate cortex: ACC)を含む辺縁系(limbic system: LS)がワーキングメモリを利用する際にどのように関わっているかを高齢者や若年者を対象に機能的磁気共鳴画像法(fMRI)によって検討し、その結果、若年者では一部のシステムに限定されているACCの影響が高齢者ではワーキングメモリのシステム全体に及んでいる可能性が示された。

公募課題４）注意の制御メカニズムとその障害にみられる特徴に関する研究（○船橋、斎木、山本、番、角野）

注意の制御メカニズムに関する脳機能画像による検討を進めるための基礎実験として、ヒトの脳における前頭眼野の位置の確定方法の確立を目指した。２名の実験協力者に、画面中央から周辺位置への眼球運動課題、注視点の注視課題、人差し指のタッピング課題をブロックごとに実施してもらい、この間の脳活動を fMRI で計測した。その結果、眼球運動時には上前頭溝と前中心溝の交点付近で顕著な活動が観察された。指タッピング課題時には前中心回の背側部で顕著な活動が観察された。眼球運動時と指タッピング時の活動部位を同一人で比較したところ、眼球運動関連領域は指運動関連領域の吻側でやや背側に位置し、両者は重なりのない明確に異なる皮質領域を形成していることが明らかになった。

公募課題５）ユーモアの個体発生的起源に関する予備的検討（○板倉、Rochat、Lee）

乳児におけるユーモアの理解に関する予備的検討をおこなった。１２ヶ月児を対象に、透明、半透明、不透明のボードを用い、peek-a-boo ゲームをおこなった。実験者が、乳児と対面し、それぞれのボードで、顔を隠し、再度顔を見せるという一連の動作を３回繰り返した。実験者の動作と乳児の顔の合成画面を作成し、分析をおこなったところ、まだ予備的検討段階ではあるが、半透明のボードを使用したときに笑いが多い印象を得た。現在、乳児の笑いを引き出すと思われる別の刺激を作成中である。

公募課題６）Collaborative executive control に関する探索的研究（○齊藤、Towse、Cheshire）

本プロジェクトでは、２者あるいは複数の個人が集まって、柔軟な集団行動を生成するために必要な、協同実行コントロール (collaborative executive control)について、探索的な検討を行った。具体的には、実行コントロールの働きを測定すると考えられている乱数生成課題 (random number generation task)を個人、あるいはペア（この場合、２者が交互に数字を生成する）で行い、生成された数字系列のランダムさを比較した。いくつかの指標でペアのランダムさの程度が高いことが示されたほか、日本と英国でほぼ同じ傾向の結果が得られた。

平成１９年度の成果（ユニットB）

平成１９年度、ユニット B では、企画課題と 2 件の公募課題を推進した。以下にその成果の概要を示す。(敬称略)

企画課題「幸福感の国際比較」(BD 合同企画)（代表：B 杉本均・D 鈴木晶子）

D ユニットとの共同企画である「幸福感の国際比較研究」は、心理幸福尺度班(○楠見、子安、中池、小島)、社会幸福尺度班（○岩井、稲垣)、歴史・文化班（○鈴木・駒込・佐藤・辻本・ベッカー・櫻井)、システム班（○杉本、金子、高見、楠山）フィールド班（○杉万、川崎、前平、渡邊）から構成され、幸福感に関する多角的な総合的研究を行ってきた。

○ブータン王国幸福感調査（杉本・鈴木・辻本・櫻井）

本調査はユニット合同チームにおける歴史・文化班およびシステム班を中心として、幸福感や生活満足度に関する、日本との比較のうえで興味深い国・フィールドについて調査を行う企画である。2007 年度内は調査可能時期において候補地であるブータン王国が天候不順等の要因により国内研究に特化した。ブータン王国はインド北方ヒマラヤの王国で、2006 年に第 5 代国王ジグミ・ケサル・ナムゲル・ワンチュックが即位し、現在 2008 年議会制民主主義国家への移行の過程にある。ブータンは先代国王による国家開発計画の中核概念として、「国民総幸福(Gross National Happiness)」を提唱し、既存の物質的繁栄や経済的成長を中心とした開発を否定し、仏教に根ざし、ブータン文化に立脚した持続的発展と近代化の方向を模索している点で幸福感研究にとって重要な国である。GNH の実現を目指して、2005 年から 2008 年にかけてブータン中央研究所(Centre for Bhutan Studies)を中心に GNH インデックスの作成が試みられており、本企画にとっても来年度が現地調査に最適の時候であることを確認し準備を行ってきた。国内においてブータンの最新情報や、ブータンに関する情報を収集し、来年度の現地調査における質問項目の開発、ブータンにおける指導者との対話の可能性などについて検討した。また 2008 年 2 月には阪大学大学院人間科学研究科・草郷孝好准教授を招き、「繁栄と幸福に関する開発研究：ブータン王国などの事例から」と題する講演会を行った。

○幸福感に関する比較教育学的アプローチ(杉本他院生)

国際比較研究の前提として、比較教育学は幸福感の研究にどのようなアプローチとトピックを持っているのか。参加者それぞれのフィールドにおいて幸福感研究、生活満足度に関するどのような研究があり、どのような研究方法をとっているのか、また教育研究と幸福感研究にはどのような関係があるかなどについて、アメリカ、英国、インドなどについて専門国・地域にわかれて研究レビューを行った。また 2008 年 3 月ニューヨークにおいて開催されたアメリカ比較・国際教育学会(CIES)に出席し、直接関連研究者と対話するとともに ERIC(Education Resources Information Center)、Comparative Educational Review などの分析を行い、にアメリカ・比較教育学研究者の幸福感研究動向について調査を行っ

た。アメリカにおける幸福感の教育研究は、自尊心、自信、連帯感、言語能力などに関連した肯定的トピックが多いのに対して、日本の比較教育学研究には、環境、いじめ、非行、不登校、校内暴力をキー概念として用いた研究が多いことがわかった。またオランダ・エラスムス大学の Veenhoven 教授が構築した幸福感に関する世界幸福データベース（World Database of Happiness)、世界価値調査(1990 年～4 回)における地域バロメータ、Springer Netherlands 発行の「幸福感に関する研究（Journal of Happiness Studies)」や、「社会指標研究（Social Indicators Research)」などについてもレビューを行った。また 2008 年 2 月には高見茂教授を中心として、英国 Boxgrove Primary School 教員交流講演会「教員の幸福感－日英比較」を開催した。

公募課題１）「e-learning と学習者間インタラクションを通した高次リテラシーの育成」
（○楠見、大塚、吉川、中池、久保、小島）

本課題の目的は、e-learning と学習者間インタラクションを通した高次リテラシーの育成について、その認知的基盤と教授手法について検討を行うことであった。第１に、専門英語の授業における e-learning システム moodle と VR コミュニケーションシステム 3D-IES を用いた専門英語コミュニケーション能力の育成、心理学基礎演習の授業における Jigsaw 法やグループ討論を通した心理学リテラシーの育成について実践研究をおこない、学生の学習活動と事前事後の変化について明らかにした（楠見）。第 2 に、カリキュラム設計論の一つである「逆向き設計」論をベースに教育工学における複数の情報技術を適用したカリキュラムを設計・検討した。具体的には、リアルな文脈（コンピュータシミュレーションおよび学習者間の共同活動を含む）の中で知識やスキルを総合的に使いこなすことを求める課題であるパフォーマンス課題とその評価指標であるルーブリックの作成・改善を通して、評価にもとづくカリキュラムを検討した（中池）。第 3 に、英語・独語の前置詞と、そこから派生する空間表現語などの理解及び活用を支援する VR による CALL 教材を開発し、その学習効果を実験的に検討した。また、教材のユーザビリティと被験者のコンピュータリテラシーの関係なども検討した（小島）。

公募課題２）「算数・数学学習におけるつまずきの克服に関する国際的比較研究」
（○田中耕治・杉本均・楠見孝・楠山研）

本研究は、子どもの算数・数学学習における「つまずき」に学び、「つまずき」を生かす(活かす)という観点から、複数の国の子どもたちの算数・数学の学びの風土を比較し、授業における「つまずき」への教師の指導のありようについて、国際的な類似点と相違点、そしてその結果としての学びの達成の違いについて分析を行った。2007 年 12 月には教育実践コラボレーションセンターとの共催で、日中教育課程改革検討会の一部として「PISA 調査の特徴と課題―日中合同検討会」を開催し、楠見孝教授（京都大学大学院教育学研究科）「PISA の経験と日本」内村浩准教授（京都工芸繊維大学）「国際学力調査から見えること―

科学的リテラシーを中心に」胡軍氏（中国・中央教育科学研究所・研究員）「2006-2009 国家重要課題―小中学生における学力調査研究の概要」の講演を行った。

2008 年 3 月には中国山西省調査（北京・大同・平遥）を行い、太原市の通宝育傑学校（私立）にて授業観察を行った後、授業検討会を開催した。1992 年より「子どもの生命・命を重んじて、子どもの一生の発展を考えた教育」という理念の下で質の高い教育を提供してきた同校における、算数授業(小学校４年)、発見学習（小学校 5 年)、数学授業（中学校 3 年）などを見学した。この観察と議論のなかで、授業における子どもたちの予想外の反応や返答を利用する授業展開、つまずきを大切にするという実践に関して、「子ども同士の教えあいによるつまずきの解消」「教員の机間巡視によるつまずきの発見と調整」というアプローチを確認した。次年度においては、中国や韓国との教育評価改革における交流、フィールドとしては算数・数学的技能の実生活での応用能力や創造的発展性において評価の高い北欧諸国で調査を予定している。

平成１９年度の成果（ユニットＣ）

平成１９年度、Unit C では、計画課題と６件の公募課題を推進した。以下にその成果の概要を示す。

計画課題１.「個の成長と幸福のための教育：教育学と心理学の学際的国際交流プロジェクト」（○斉藤直子）

＜国際会議成果報告＞

題目：ロンドン大学教育研究所・京都大学大学院教育学研究科　国際会議　「自己・他者・言語：哲学、心理学、比較教育学の対話」

企画：齋藤直子

日時：2008 年３月２５日～２６日

場所：ロンドン大学教育研究所 クラークホール

概要：本企画は、ロンドン大学教育研究所(IoE)と京都大学大学院教育学研究科（京大）の学術・学生交流の一貫として、大学 GP とグローバル COE の共催で行なわれた。これに先立つ準備として、2008 年 2 月 15 日に、IoE のポール・スタンディッシュ教授によるご講演に続き、参加大学院生の英語プレゼンテーションとディスカッション、同教授による発表指導が、6 時間以上に渡って行なわれた。これに続き今回の 3 月の企画では、IoE において総参加者数 50 名近くが集う国際会議で、IoE 側 14 名と京大側 11 名の教員、研究員、大学院生が英語による発表と活発な質疑応答に二日間に渡り従事した。参加者：約５０名

ポースタンディッシュ教授（ロンドン大学教育研究所）講演会

2008 年 2 月 10 日　13:30-15:30、および 2 月 13 日　14:00-17:00 に、それぞれ「危機にある批判的思考(Critical Thinking in Crisis)」と、「読むこと・書くこと・語ること(Reading, Writing and Narrative)」という題で講演を行った。スタンディッシュ教授（Prof. Paul Standish）の専門は教育哲学で、デリダ、リオタール、レヴィナスなどポスト構造主義の言語哲学およびエマソンやカベルのアメリカ哲学と教育との関わりを中心とした研究が中心である。前者の講演は主に教育学と心理学の学際的国際交流の試みとして、後者は「幸福と教育」の問題を考え討議する場として、「読むこと・書くこと・語ること」という主題でスタンディッシュ教授の最新著 The Therapy of Education: Philosophy, Happiness and Personal Growth (2007)をもとにご講演をいただいた。

研究課題２.「心が活きるフィールド教育と生涯発達のサポートとシステム」

（○山田洋子）

このプロジェクトでは、３つの新しい観点「ポリフォニック・フィールド」「クロノ・トポス」「協働の対話的学び」から、国際的・地域的に多フィールドで実践研究し、多様な人々

が生き生きと暮らせるための国際教育、地域教育、生涯発達を支援する、サポートとシステムづくりのモデルを提案してきた。

2007年度は、ウィーン大学から、ヨーロッパ発達心理学会長 Prof. Christiane Spiel,Dr. Georg Spiel および Dr. Dagmar Strohmeier, Anna Grabner の４人の生涯発達心理学者を招聘した。そして、"Kyoto-Vienna International Lectures: Life-Span Development and Life Long Learning"、"Bildung-Psychology: A developmental perspective on education" と題した２つの国際講演会、および若手研究者と大学院生を中心とした「多文化研究の国際ワークショップ：京都大学とウィーン大学の共同研究会」を開催した。

研究課題３.「臨床における物語ることの意味」（○皆藤章）

「物語」といテーマに関して、それが心理臨床の学として位置づく在りようを、ナラティブセラピーも含めて広く心理臨床の実践をサーベイしながら、新たな試みとして自身の active imagination 体験を通して心理臨床における「物語」の生成について研究を行い、論文を発表した。

皆藤章(2008)「心理臨床における物語の生成ーactive　imagination の体験からー」『京都大学大学院教育学研究科紀要』第 54 号、39-57 頁。

研究課題４.「学校臨床における教育モデルと臨床モデルの違いと国際比較」（○大山泰宏）

日本とスイスにおける、教師とカウンセラーに対して行った調査のデータ分析を行い、投稿の準備を行った。日本で非常にはっきりと認められた教育モデルと臨床モデルの違いが、ややスイスでははっきりとせず、カウンセラーも教師的な視点ももっていることが言えそうである。

３月にスイスのチューリッヒ教育大学を訪れ、今後の調査の打ち合わせを行った。

研究課題５.「特殊環境における心理的サポート　―南極越冬隊員の心理に関する研究―」（○桑原知子）

現代においては多様なフィールドでヒトが活動することが求められるようになった。南極や宇宙ステーションなどの閉鎖環境もその一つである。これらは地上とは異なる特殊環境である。本研究においては、閉鎖環境におけるヒトの心理的状態を適切に評価する手法を提言するとともに、閉鎖環境で活動するヒトが危機的状況に陥らずにすむための予防的「サポート」、あるいは、実際に破綻してしまったときにはそれを回復させる緊急「サポート」の方法を確立しようとするものである。

平成１９年度においては、第４９次南極越冬隊への質問紙調査に加え、帰国後の隊員を対象とした面接調査を行った。また、5年分の南極越冬隊の調査データの整理と分析を引き続きおこなった。

今後は、閉鎖環境に対するサポートとして、テレビ電話を介した遠隔カウンセリングの技法開発にも取り組んでいきたい。

研究課題６．「発達障害への心理臨床的アプローチ」（○河合俊雄）

発達障害に関しては、近年脳科学による研究が進み、またそれに伴い、薬物療法と訓練教育が中心的な対応になりつつある。心理療法は二次障害に主に関わると考えられてきて、副次的なものになりつつある。しかしながら、京都大学の心理教育相談室を中心とした心理療法では、子ども・大人の発達障害に対して、心理療法が行われ、成果をあげている。それと同時に、この事実や知識が、事例研究を中心としているために、一般にあまり伝えられていないということになっている。

そこでこのプロジェクトでは、事例検討会から、発達障害に対しての心理療法のエッセンスを把握し、専門家・一般の両方に向けて発信することを目指している。

今年度においては、いずれもやや軽症の子どもの発達障害についての 2 回の事例検討会を行い、またそのうちの 1 回は、京都大学医学部・保健学科教授の十一元三教授を外部の専門家として招いた。

まだ暫定的であるが、いくつかの作業仮説が出てきており、それを検証していきたい。

平成１９年度の成果（ユニットＤ）

ユニットＤは大きくわけて、幸福感の学際的国際比較研究の企画実施と、FD・教育改善におけるオルターナティヴ・モデルの構想の一貫として「心が活きる教育」のためのFD・教育改善とその評価の実施という二つの研究課題を有する。ユニットＤの特徴は、「心が活きる教育」プロジェクトの特に幸福感に関わる調査・研究の企画・運営・実施において、その要として機能しつつ、他のユニットA、B、Cの間の連携や調整を行う点にある。以下にその成果の概要を示す。(敬称略)

１）幸福感の国際比較研究に向けた比較尺度設定のための予備研究

（○子安増生、カール・ベッカー、鈴木晶子、櫻井理穂）

普遍的な幸福感と文化や宗教固有の幸福感に関する国際比較調査実施に向けて、過去に行われた幸福感やQOLに関する調査に関する資料を収集し検討した。WHO、ユネスコ他、国際機関や海外の大学で行われた幸福感調査に関するデータの収集および調査を行った。また、ベルリン自由大学との共同研究を開始した。共同研究に向けての双方の研究関心と方向性についてすり合せるために、京都大学：鈴木晶子、ベルリン自由大学：クリストフ・ヴルフによる第１回グローバルCOE主催国際シンポジウム「幸福とリスク」を２月21、22日に行った。幸福とリスクという軸を設定した本プロジェクトの基幹部分をなす研究主題に関して、ベルリン自由大学歴史人間学学際研究センターのWulf教授以下４人の研究者と幸福概念をリスク・マネジメントやリスク・パフォーマンスとの連関のうちに見ていくための今後の共同研究の可能性について検討を加えた。教育哲学、臨床心理学、人間学、社会学など人間科学とはいえ様々なアプローチ方法を有する隣接諸科学がフィールドを共有しつつ行うという、学際的かつ国際的な研究の体制、組織、方法についても検討した。国際的かつ学際的な研究となる当該研究主題に対して、文化、宗教、社会といった諸要因の影響、および幸福とリスクの交差による研究視点の設定、調査対象となる世代、調査方法としてのアンケートによる量的調査、聞き取りおよび映像による質的調査、描画法・質問法による認知心理学的アプローチなど種々の方法論の組み合わせの可能性などについて吟味した。

平成２１年度には、まずはパイロット調査として、日本とドイツの学校および家庭に入ってのフィールドワークを行うという方向が提示された。日独でそれぞれの国のフィールドを共有しつつ、聞き取り調査、映像記録による分析といった質的方法論を介して行う調査では、クリスマスや正月など、それぞれの国の代表的な年中行事の時期に集中的に家庭や学校に入る。①年中行事をそれぞれの家庭の文化がどのように受容し、それぞれの家庭の固有な文化として、また家庭内コミュニケーションへと反映させているか、②年中行事という時期がそれぞれの家庭がどのような意味づけに向かって相互の関係性をマネージメントしていくか、③家族構成員それぞれ、また夫婦、親子間のパフォーマンスを通して形成

されていく「幸福な時空間」イメージはどのようなものか、など様々な調査の視点について検討した。
また、ユニット B との合同企画として、WHO の幸福調査、ブータンでの幸福調査の成果についても質問項目、方法の点から、検討した。

2） FD・教育改善におけるオルターナティヴ・モデルの構想 ―「心が活きる教育」のための FD・教育改善とその評価

（○田中毎実、松下佳代、大塚雄作、大山泰宏、溝上慎一、酒井博之、林創、中村夕衣、田中優子）

日本の大学教育の領域では 1990 年代以降、工学的経営学的モデル（PDCA モデルなど）が力をもち、FD に関連したプログラムや支援も、このモデルのもとで制度化が進められてきている。しかしながら、このモデルにおいては、目的に合致しないが重要なアウトカムが低く見積もられたり、教育に携わる者にとって重要な精神的な報酬（相手に言葉が届いたという感覚や子どもたちがたしかに成長しているという感覚など）が軽視されたりするおそれがある。これでは、教育を行う者、受ける者の両者にとって「心が活きる教育」につながらない。
本プロジェクトでは、このような問題意識から、大学教育における工学的経営学的モデルへのオルターナティヴを構想し、「心が活きる教育」のための FD・教育改善のあり方を探究することをめざしている。
本プロジェクトにおいて、FD・教育改善におけるオルターナティヴ・モデルの中核的概念と位置づけているのは、「相互研修型 FD(mutual faculty development)」である。これは、固有の文脈に埋め込まれた生成的で自律的な教員・組織が、相互に影響し、協働しあいながら、教育する集団としての形成と充実をはかっていくという考え方であり、工学的経営学的モデルのもとでの「啓蒙的・操作的な FD」とは対比される。相互性(mutuality)の形態には、教員-学生間の相互性、教員間の相互性、組織（部局・大学）間の相互性がある。この三重の相互性が、オルターナティヴ・モデルの中心となる。
平成１９年度は、これまで手薄だった大学間の相互的連携をはかるために、関西地区 FD 連絡協議会の設立準備に向けて活動した。まず、活動の前提として、関西地区の大学の FD に対するニーズをさぐるため、「FD に関する実態とニーズ調査」を実施した。対象となったのは、138 大学・71 短大、計 209 大学であり、83 大学・34 短大、計 117 大学より回答を得た（回収率 56.0%）。調査項目は「教育の現状、FD の現状」「FD による変化」「FD のニーズ、今後の見通し」などであり、結果として、「FD 観としては、FD は日常的な教育の工夫と改善を、さらに意識的・組織的に発展させたものであるべきだという見方が多い」「教育上の問題では、学生側の問題として、基礎学力の低さ、学習方法の知識の乏しさ、動機づけの低さ、私語などがあげられるとともに、教員側の問題としては、過密スケジュール、授業改善の知識・技術の不足などが比較的高い」「FD のニーズとしては、授業アンケート

活用の方法が高く、次いで、大学評価等の評価に関する研修、職員研修、初任者研修などが続く」といった点が明らかになった。FD のニーズにおいては、FD の制度化への対応という面が強く、認識されている教育上の問題への取組とはややギャップがあることがうかがわれる。

さらに、このニーズ調査の結果を受けて、平成 20 年 1 月には「第 1 回授業評価ワークショップ」を立命館大学衣笠キャンパスにおいて実施した（関西地区の 53 大学が参加）。

これらの活動の成果は、京都大学高等教育研究開発推進センター『関西地区 FD 連絡協議会設立に向けて』（平成 20 年 3 月）という冊子にまとめられ、本センターの Web ページ上でも公開されている（http://www.highedu.kyoto-u.ac.jp/index_publication.html）。

講演会、シンポジウム、ワークショップの開催記録

■ 講演会

第１回主催講演会

講師：クレア・ヒューズ博士（ケンブリッジ大学リーダー）
企画：子安増生
日時：2007 年 12 月 4 日　16:30-18:00
場所：京都大学教育学部２階　第１演習室
題目：働く母親への福音－発達心理学研究からのサポート
概要：クレア・ヒューズ博士（Dr. Claire Hughes）は、1989 年ケンブリッジ大学（実験心理学）卒、1993 年ケンブリッジ大学大学院博士課程修了（Ph.D.）。ロンドン大学精神医学研究所講師を経て、2000 年からケンブリッジ大学社会・政治学部勤務、現在同大学の家族研究センターのリーダー（Reader）であり、「心の理論と実行機能」の研究で著名な研究者であるが、家庭では１歳児を含む３児の母として、子ども連れで世界中を飛び回っていることでも知られている。今回も京大グローバル COE の招きで家族揃って来日したヒューズ博士に、その活躍の秘訣を聞いた。参加者は 11 名。
成果：女性研究者が育児をしながら高いレヴェルの研究を行うための秘訣を知る会であり、参加者も企画者ほか１名を除くと全員女性であった。母親の権利について知ること、母親がポジティブに生きることが子どもをポジティブにすること、よい保育条件を設定すること、睡眠を優先し、完全主義でない「まずまず」の母親をめざすこと、職場の上司と緊密に連絡を取ることなど、聴衆にとって有益な提言が示された。

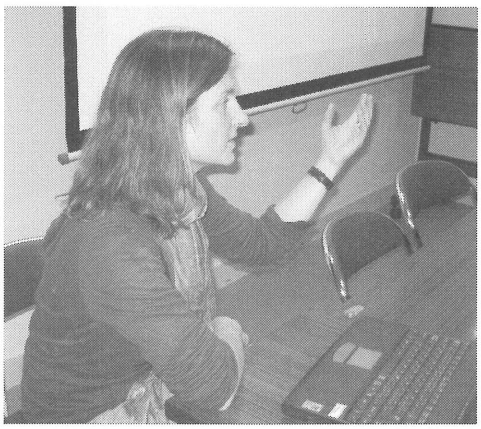


写真１：講演中のクレア・ヒューズ博士

第２回主催講演会

講師：ポール・スタンディッシュ教授（ロンドン大学教育研究所）
企画：楠見 孝、齋藤直子
日時：2008 年 2 月 10 日　13:30-15:30
場所：京都大学百周年時計台記念館２階　会議室Ⅲ
題目：危機にある批判的思考（Critical Thinking in Crisis）
概要：京都大学大学院教育学研究科グローバル COE の国際交流企画のひとつとして、本講演会を開催した。スタンディッシュ教授（Prof. Paul Standish）の専門は教育哲学で、デリダ、リオタール、レヴィナスなどポスト構造主義の言語哲学およびエマソンやカベルのアメリカ哲学と教育との関わりを中心とした研究が中心である。著書は、Beyond the Self: Wittgenstein, Heidegger and the limits of language (1992)（単著）、Education in an age of nihilism (2000)、The Therapy of education: Philosophy, happiness and personal

growth (2007)（共著）を含め多数ある。 当グローバル COE の主旨のひとつである教育学と心理学の学際的国際交流の試みとして、教育哲学と認知心理学の接点に関わる講演が行なわれた。イギリスの教育における批判的思考の動向についての批判的考察、「批判的思考」が批判的であるために求められる「危機」(crisis)の概念の哲学的議論を含め、真に批判し思考できる人間の育成について討議した。参加者は約 30 名。

成果：「批判的思考」を共通テーマとして、教育学、哲学、認知心理学、心理学に関わる研究者と活発な議論が行われた。またイギリスにおける批判的思考の教育をめぐる動向についてもスタンディッシュ教授よりお話があり、これについても関連研究を行う日本の研究者との間で質疑応答が交わされた。学際的、国際的な対話交流の成果を収めることができた。

写真２、３：講演中のポール・スタンディッシュ教授（左）と齋藤直子准教授（右）

写真４：講演中のフロア風景

第３回主催講演会

講師：ポール・スタンディッシュ教授（ロンドン大学教育研究所）アマンダ・フルフォード准教授（英ハダスフィールド大学）
企画：齋藤直子
日時：2008年２月13日　14:00-17:00
場所：京都大学教育学研究科１階　会議室
題目：読むこと・書くこと・語ること（Reading, Writing and Narrative）
概要：スタンディッシュ教授の専門は教育哲学で、デリダ、リオタール、レヴィナスなどポスト構造主義の言語哲学およびエマソンやカベルのアメリカ哲学と教育との関わりを中心とした研究が中心である。著書は、Beyond the Self: Wittgenstein, Heidegger and the limits of language (1992)（単著）、Education in an age of nihilism (2000)（共著）、The Blackwell Guide to the Philosophy of Education (2003)（編著）など多数ある。本講演では、スタンディッシュ教授は、最新著 The Therapy of Education: Philosophy, Happiness and Personal Growth (2007)をもとに、ナラティブと自伝的に書くことの関わりを中心として、幸福と個の成長につながる教育のあり方を哲学的に論じた。

フルフォード准教授の専門は教育哲学で、成人教育や教養教育におけるリテラシーについての研究が中心である。フルフォード准教授は、専門の観点からイギリスにおけるリテラシー教育の問題を含め、「リテラシーをもつ人間であること」の哲学的考察を行なった。
成果：心理学、哲学、教育学の学際的交流場として多様な領域の参加者が集い、自己と言語の流動的な関係性、ナラティブと自伝的に書くことの関わりなどを中心に哲学的な議論が行われた。外国からの参加者もあり、国際的な対話交流の場となった。参加者約30名。

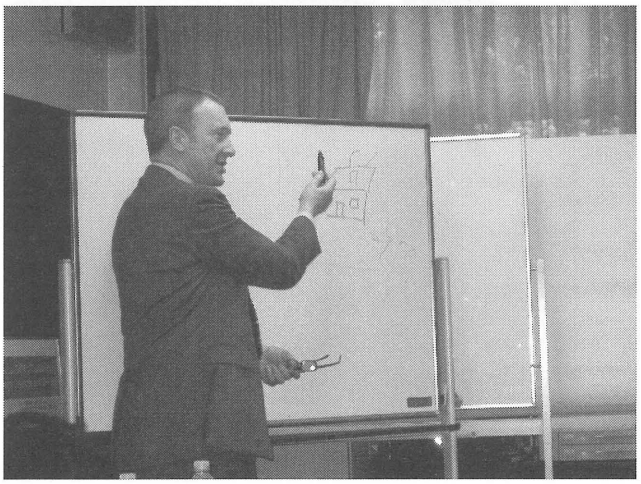


写真５：講演中のポール・スタンディッシュ教授

第４回主催講演会

講師：草郷孝好准教授（大阪大学大学院人間科学研究科）
企画：杉本 均
日時：2008年２月27日　15:00-17:00
場所：京都大学教育学研究科１階　会議室
題目：繁栄と幸福に関する開発研究：ブータン王国などの事例から
概要と成果：本講演は、ユニットＤとの共同研究である「幸福感の国際比較研究」の一環として開催された。1950年代以降の各国の国家開発戦略は、産業化による経済成長をその中核として、物質的な意味での豊かさ、すなわち繁栄をその目標としてきた。しかし深刻化する社会問題や環境問題のなかで、経済中心的な開発のあり方が、果たして人間の幸福の増

進に貢献しているのだろうかという疑問が提起され、経済的豊かさに加えて、非経済的（包括的な）豊かさへの関心が高まってきた。

これまでの経済的指標である、GDPやジニ係数、貧困線などの指標に対して、教育や保健衛生、住居などの指標を加えて合算した複合指標が開発されるようになった。代表的なものが国連開発計画で考案された人間開発指標(Human Development Index)である。また経済的成長（所得の増加）が国民の生活の質の向上、主観的健康、幸福感を増大するであろうという一般的予測を必ずしも支持しない研究成果が1970年代から現れ、また所得の上昇は、個人が設定する目標である野心レベルを引き上げ、相対的な達成感や充足感が低下する傾向が指摘されるようになった。戦後日本の日本人の生活満足度の推移から、経済的・教育的な向上は達成されながら、国民の生活満足度はゆるやかな低下を示していることなどがその典型的事例である。こうした開発や経済成長の客観的評価と、主観的充足感との乖離を縮小するような開発政策や研究が必要とされている。

幸福に関わる論文専門の学術誌には、オーストラリアのJournal of Happiness Studies、幸福や生活満足度に関するデータ収集や、幸福感の国際比較を行う World Database of Happiness（レスター大学）、World Value Survey（ミシガン大学）などがある。しかしこれらの雑誌やデータベースは西洋的な幸福概念や指標を中心としたもので、非西洋世界の幸福感の分析として十分であるとは言い切れない。

こうした開発や経済成長の客観的評価と、主観的充足感との乖離という観点から、草郷氏はブータン王国の開発政策に注目している。ブータン王国は中印国境ヒマラヤ山系に位置する人口63万(2005)のチベット仏教系国家である。同国は1907年から世襲の君主制をとっているが、2006年に第5代国王ジグミ・ケサル・ナムゲル・ワンチュックが即位し、現在2008年立憲君主制への移行の過程にある。ブータンは先代国王による国家開発計画の中核概念として、「国民総幸福(Gross National Happiness)」を提唱し、既存の物質的繁栄や経済的成長を中心とした開発を否定し、仏教に根ざし、ブータン文化に立脚した持続的発展と近代化の方向を模索している。その骨子は国家運営の大原則として、①公正な社会経済発展、②環境保全、③文化保存、④よい統治、から構成される。現在ブータン憲法の草案が起草されているが、そのなかに「政府の役割とは、国民が幸福(GNH)を追求できるような環境整備に努めることである（第9条案）」としてGNHが盛りこまれる可能性がある。

その一環として、選挙後に召集される議会において検討策定される国家発展計画において、GNHの実現を目指して、2005年から2008年にかけてブータン中央研究所(Centre for Bhutan Studies)を中心にGNHインデックスの作成を目指したGNHサーベイが行なわれている。将来は首相を議長とし、官房長官を副議長とするGNH委員会を設置する予定である。GNHインデックスとしては現在474項目の膨大な質問票が試作されているが、パイロット調査を経て、より厳選精査されたBDI(Bhutan Development Index)として開発される予定である。

草郷氏によれば、そのパイロット調査(2006－07)の調査領域は、①生活水準、②健康（幸福な人生）、③心理的・主観的幸福感(well-being)、④教育、⑤エコシステムと環境、⑥社会活力、⑦時間の活用とバランス、⑧文化的活力と多様性、⑨よい統治、の9項目が設定されているという。パイロット調査による4項目（幸福感(10スケール)、生活の質、人生を楽しむこと、生活満足度(各4スケール)）による試行調査(N=350)によれば、ブータン人の幸福感の平均値は6.93(10点満点)と高く、幸福ではないと回答したのはわずかに1.4%であった。また生活の満足度については、家族関係(96.9%)、健康(90.0%)、仕事(89.8%)、経済面(80.3%)について「満足」または「まあ満足」と答えた。さらに「幸福の源泉は何か」という質問（複数回答可）に対して、最も多かった回答は経済的安定(66.0%)であったが、第2位がよい家庭生活と家族の幸福(44.3%)、第3位が健康(43.1%)であった。GNHはブータン国家の開発の方向性と政府のあり方を規定する上位概念であり、哲学ともいえるが、具体的な政策レベルへの適用において、GNH指標の策定の必要に迫られている。これは慎重かつ膨大な作業量を要求する課題であり、開発実践からの評価は2～3年後先になると思われる。

開発学の観点から「幸福感」を考えた場合、客観的指標に加えて主観的指標を取り込むことが必要であり、住民の持つ生活実感を反映した政策評価や政策選択につながる指標の開発がその課題といえる。しかし、主観データや主観指標には、信憑性の問題、機会費用の高い指標作成の問題、国際比較の是非などの問題や課題もあり、それらの制約には注意を払うことが必要である。開発学は開発経済が主流であった時代から、徐々に多面的で学際的な学問へと発展してきており、客観的評価中心主義から主観的指標を取り込む方向へと変化してきている。開発に関係する経済学、政治学、社会学、環境学、公衆衛生学、教育学などにおける「主観的幸福」への研究関心も高まっている。そもそも「豊かさ」とは何か、その概念や主観的幸福の研究成果が開発政策や実践にどのように生かされるのかについては、ブータン王国における GNH の取り組みは先進的で貴重な生きた事例である。参加者約 20 名。

第５回主催講演会

講師：マルタ・ヒル＝ラクルス教授（スペイン・サラゴサ大学）
企画：子安増生
日時：2008 年 3 月 14 日　16:30-18:00
場所：京都大学百周年時計台記念館２階　会議室Ⅲ
題目：Health Communication and Environment: A complex link
要旨：The importance of the links between health and environmental issues are recognized internationally. In 2005, Public and Environment Health Department from the World Health Organization published an exhaustive research evidencing how approximately one-quarter of the global disease burden is due to modifiable environment factors. These dates are even greater for children and adolescent populations. Environment risk information and education could help us to change this situation. This preventive strategy not refers only to nature of the risks, but also to the concerns, opinions or reactions of individuals to risk messages and to legal and institutional arrangements for risk management. These are topics very complex, because we do not find a unique definition or right approach to them. Health communication in relation to environment risks is approached by two ways:

－ First, we will analyze the communication as a process integrated by: source of the message, message characteristics, audience and risk perception, and channel (as for example the role of mass media in the social amplification or risk).

－ Second, we will pay attention to the communication planning to commitment to the community and their social agents. This strategy involves: community knowledge needs, goals and planning and evaluation.

With this talk, we will try to reflect about these barriers and social marketing opportunities and we will analyze the psychologist role.

成果：マルタ・ヒル＝ラクルス教授（Prof. Marta Gil Lacruz）は、1967 年スペイン生まれ、ヴァレンシア大学大学院博士課程修了（Ph.D.）、現在サラゴサ大学社会科学・人文科学部教授。2004 年 3 月～5 月、キャノンヨーロッパ財団からの派遣により招聘外国人学者として京都大学に滞在。現在の研究テーマは、ライフスタイル、健康の社会的決定因、社会資本と地域健康などである。この講演で教授は、現代人の日常生活において健康に悪影響を及ぼすさまざまなリスクの問題を取り上げ、世界保健機関（WHO）のデータに基づきながら環境と健康リスクの関係を論じ、リスク・コミュニケーションの重要性を指摘した。ここで論じられた問題は、本拠点の幸福感の比較文化的研究の基礎となる重要な知見を提供するものとして意義深い。

第6回主催講演会

企画：山田洋子
日時：2008年3月17日　13:30-16:30
場所：百周年時計台記念館　国際交流ホールI
タイトル：Kyoto-Vienna International Lectures: Life-Span Development and Life Long Learning
講師①：　Prof. Christiane Spiel（ウィーン大学教授、ヨーロッパ発達心理学会長）
題目①：Promoting positive youth development: The ViSC social competence program to prevent bullying at school
概要①：In the last years many programs with the aim to reduce or prevent aggressive behaviour have been developed. The majority of these programs applied a fixed set of components and strategies independently of the group dynamics in the respective school classes. However, within a sample of 86 single school classes (1910 pupils, grades 4 to 9) we found a tremendous variability in prevalence rates for bullying ranging from 54.5% to 0% bullies (mean = 12.3%) and for victims ranging from 41 % to 0% (mean 10%) per class. The Vienna Social Competence Training (ViSC) systematically takes into account differences between school classes. The training is based on social information theory (Crick & Dodge, 1996) and results of research on bullying as a group process (Salmivalli et al, 1996). The two main principles are behavioural enrichment and participation. In the first pilot phase of ViSC we applied a summative evaluation model using a cohort-sequence design. Results showed higher democracy in the two training classes (9th and 10th grades) and lower perceived aggression than in the control classes. In the second pilot phase we also applied a formative evaluation. Trainers and pupils (4 classes; grades 6 and 8) were asked to assess the training components. In addition, students were asked to describe what they have learned during the training. Analyses show that behavioural enrichment was very effectively implemented, and that students liked the interactive components of the training most. Integration of the ViSC program in a national strategy for violence prevention will be discussed.
講師②：　Dr. Georg Spiel（Klagenfurt 総合病院・神経精神医学・医師）
題目②：Social psychiatric Services for Adolescents and Young Adults
概要②：Since 1996, the association pro mente: kinder jugend familie (Pmkijufa) makes efforts into establishing social psychiatric, outpatient services. Pmkijufa started with two residential homes, followed by prevocational trainings targeting a vocational integration after the course. This program proved helpful for adolescents with moderate handicaps, whereas clients with severe mental disorders (e.g. psychosis and affective disorders) couldn't be supported adequately, because rapid vocational integration is not a realistic aim for all clients. According to our experience, Pmkijufa made efforts to develop and provide different vocational services, bridging the broad transition from hospital based programs to the first labor market step-by-step. On this note, day-care and work therapy were established as well as apprenticeship, and transitional employment. By now a rehabilitative continuum is established. In the meantime, also the residential offers were fully developed to a sociotherapeutic step-by-step-model. Smooth and bidirectional transitions among all these modules are crucial. Since the year 2000, specialized crisis-intervention programs could be developed and provide necessary backing to the residential and vocational institution. Over the time, the necessity of early diagnostic and interventions becomes evident. Therefore we made efforts to establish local ambulatories for children and their parents, offering medical and Clinical psychological diagnostic work up and treatment,

functional therapies, psychotherapies and family-oriented social work. Beyond all these high structured, therapeutic offers, pmkijufa is also busy in the field of primary prevention: for example carrying out a youth-centre or health-promotion in schools.

成果： Prof. Christiane Spiel は、ウィーン大学心理学部長。教育心理学と評価研究学科教授。心理学部の創立学部長、ヨーロッパ発達心理学会会長、DeGEval 会長。研究テーマは、発達心理学・教育心理学・評価の境界領域で、いじめ、多文化の学校での統合的実践、生涯学習、推論能力の評定、変化の測定、評価、教育システムの品質管理などの業績で世界から注目されている。Dr. Georg Spiel と共に、オーストリア連邦政府教育省と共同プロジェクトを多数行っており、両者の今回の講演は、学術的研究成果であると共に実践的なアクション・リサーチとしてもん有意義で応用範囲が広く、GCOE のテーマとしているサポート・システムを考える上に大いに役立つものであり、聴衆の関心も大きかった。参加者約 30 名。

第 7 回主催講演会

講師： Prof. Christiane Spiel（ウィーン大学、ヨーロッパ発達心理学会長）
企画：山田洋子
日時：2008 年 3 月 19 日　15:00-17:00
場所：大阪国際会議場
題目："Bildung-Psychology"：A developmental perspective on education

企画主旨：教育に関する根本的な問い返しは、旧来の教育システムが前提としていた社会システムが大きな変化を被るときに必須となる。旧ユーゴやトルコからの移民を迎え、ウィーンの学校では、半数に及ぶ子どもたちがドイツ語を母語としない。そこでは、ドイツ語とオーストリア文化のなかのみでの発達を前提にした教育システムではなく、多言語・多文化を前提とした生涯学習と社会的なちからを保障するための教育システムへの組み替えが模索され続けている。本企画では、その国家的プロジェクトの中心者で、ヨーロッパ発達心理学会会長のクリスチアーナ・スピール教授を招き、社会構造の変化や教育システム構築と深く関係する子どもたちの発達と教育を総合的に理解しようとする学術的営みのスタンスを講演して頂いた。スピール教授が見通す社会のあり方やそこに生きる人々の人生の展望をうかがい、今後の日本の社会と発達と教育の総合的な見取り図を私たち自身が描出していくための契機にしたいと考えた。

概要：従来は、教育と学習にかかわる心理学は、統合的なモデルや枠組を欠き、この分野の活動の組織的なイメージ提供や、生涯発達的見方の組み込みができなかった。本講演は、その課題に取り組むべく Bildung-Psychology の概念化を主題とした。ドイツ語の術語である Bildung には、英語に完全な同義語はなく、教育と学習の広い領域を包含するのみならず、この領域を超えた含意をもっている。Bildung-Psychology は、＜生涯学習への明確な焦点化＞と、＜基本的原理と調査からエビデンスに基づく実践への過程＞としてシステマティックに構造化されている。Bildung-Psychology は、次の３つの次元に沿った構造モデルのなかにその課題と活動に根ざしている。(a)個々人の生涯にわたる教育的キャリアという年譜 (b)その分野の諸活動 (c)これらの活動のレベル（ミクロレベル、メゾレベル、マクロレベル）Bildung-Psychology の理論的アプローチを描出するために、自己調整的学習の促進の領域からの例を提示し、さらに Bildung-Psychology の意義と科学における位置づけと応用について議論した。

成果： Prof. Christiane Spiel は、ウィーン大学心理学部長。教育心理学と評価研究学科教授。心理学部の創立学部長、ヨーロッパ発達心理学会会長、DeGEval 会長。京都大学における講演に続いておこなわれた「日本発達心理学会」における本講演では、Bildung-Psychology というドイツ語でしか表すことができない「教育」と「発達」をむすぶ概念を新たに理論化する意味とその教育場面における実践の在り方を明確なモデルによって示された。アメリカを中心にした細分化した発達理論に対し、ドイツ語圏から世界に向けたトータルで有

機的なものの見方の発信であり、アカデミックな根底的理論化を行いながら、きわめて実践的なアクションプランともむすびついているモデルである。本拠点のサポート・モデル構成に直接に役立つ、非常に注目すべき、また応用範囲の広い提案であった。
Bildung-Psychology という概念を中心に、活発な討論が行われた。参加者約 50 人。

第８回主催講演会

講師： マルタ・ヒル＝ラクルス教授（スペイン・サラゴサ大学）
企画：子安増生
日時：2008 年 3 月 21 日　12:45-14:45
場所：大阪国際会議場
題目：WHO-QOL 尺度－知覚される生活の質への実証的アプローチ（WHO-QOL：An empirical approach to the quality of life perceived）
概要：生活の質（QOL）は、主観的と客観的の両方の視点から定義可能である。客観的視点からは、文化的・社会経済的指標、たとえば、健康、教育、職業、収入、余暇、社会および自然環境のようなもので規定される。主観的視点あるいは知覚される生活の質の視点は、全体的満足、幸福観、ウェルビーイングなどで評価される。今日、この両視点は統合され、等しく重要と認識されている。この両視点を掘り下げるため、1990 年代に世界保健機関（World Health Organization）は、WHO-QOL プロジェクトを開始した。その主要な目標は、生活の質についての普遍的な概念が存在するかどうかを検討することであった。この目標を達成するため、様々な国の 15 の地域が研究に参加した。自律性や十分なエネルギーの保持などは、インタヴューを受けた集団に共通の心理的に知覚される変数とされた。この研究の結果、WHO-QOL 尺度ができあがった。この尺度は、社会心理学あるいは認知心理学の様々なトピック、治療および評価の両側面において適用可能なものである。また、宗教的信念、スピリチュアルな信念、個人的信念の測定と関連する尺度も含まれる。項目の中には、高齢者、障害者、HIV 患者などの集団にも適用可能なものがある。この講演では、理論面と実証面の両方から、このような定義を再分析し、尺度の因子構造を説明したい。スペインの郊外地域（サラゴサ市カサブランカ地区）で私たちの研究班が行っている研究を紹介する。この研究では、プライマリーヘルスケアの調査として WHO-QOL 短縮版を用い、社会経済的地位（SES）との関連性を調べている。この研究の結果は、心理学者の予防的介入に必要な有益な情報を提供し、平等性とウェルビーイングの関係について問題提起を行うものである。
成果：マルタ・ヒル＝ラクルス教授（Prof. Marta Gil Lacruz）は、1967 年スペイン生まれ、ヴァレンシア大学大学院博士課程修了（Ph.D.）、現在サラゴサ大学社会科学・人文科学部教授。現在の研究テーマは、ライフスタイル、健康の社会的決定因、社会資本と地域健康などである。この講演で教授は、幸福観、ウェルビーイング、生活の質（quality of life; QOL）という概念の変遷を歴史的に概観し、自身が深く関わっている世界保健機関（WHO）WHO-QOL プロジェクトの概要と、WHO-QOL 尺度短縮版を用いた自身の研究成果を示した。ここで論じられた問題は、本拠点の幸福感の比較文化的研究の基礎となる重要な知見を提供するものとして意義深い。また、この講演は、日本発達心理学会第 19 回大会の一環として行われ、発達心理学を専門とする研究者との対話の場を提供した。

写真６：講演中のマルタ・ヒル＝ラクルス教授

第１回共催講演会

講師：子安増生（京都大学大学院教育学研究科）
主催：京都大学総合博物館
企画協力：京都大学学術出版会
日時：2007 年 10 月 20 日　10:30-12:00
場所：京都大学総合博物館 ミューズ・ラボ
題目：三つ子の魂、どんな魂？−幼児期の心の発達をさぐる−
概要：話しことばが身につき、身辺の自立がはじまる４歳前後は、自分と人との考えの違いも理解できるようになる点で、子どもの心理的な成長のうえでの大きな転換期といわれている。本講演では、幼児期の発達の転換期といわれる４歳前後の時期を中心に、「心の理論」研究など発達心理学の最新の研究成果を参照しながら、幼児の発達心理について一般の方（特に子育て世代）を対象に説明をおこなった。
成果：本講演は、京都大学学術出版会が企画し京都大学総合博物館が主催する講演シリーズの一つとして開催された。総合博物館の入館者を対象とする一般向け講演である。比較的狭い会場に溢れる聴衆が詰めかけ、グローバル COE の社会への広報活動の取り組みとして大きな意義があったと言えよう。

第２回共催講演会

講師：Dr. Nikolaus Troje（Canada Research Chair in Vision and Behavioural Sciences, Department of Psychology and School of Computing Queen's University, Canada）
主催：第 47 回京都国際心理学セミナー
企画：藤田和生
日時：2007 年 10 月 22 日　16:30-18:00
場所：京都大学大学院文学研究科新館２階 第６講義室
題目：A visual invariant for the detection of animate motion
概要：If biological motion point-light displays are presented upside-down, adequate perception is strongly impaired. Reminiscent of the inversion effect in face recognition, it has been suggested that the inversion effect in biological motion is due to impaired configural processing in a highly trained expert system. I will present data that are incompatible with this view. Particularly, I will show that observerscan readily

retrieve information about direction from scrambled point-light displays of humans and animals. Based on these findings I will suggest that the visual mechanism conveying this ability functions to detect another animal in the visual environment and direct attention to it – independent of the animal's particular shape. I will then present further experiments which support this idea and help to further characterize the critical invariants that trigger the proposed mechanism. The data will be discussed in the context of a multi-level processing system for biological motion perception.

成果：通常バイオロジカルモーションの知覚は configural な情報処理の産物で、倒立効果はそのために生じるものだと考えられている。しかし、ドットの動きをスクランブルにした刺激であっても、足の軌跡や加速度といった部分的情報だけで、運動の方向を認識することができ、局所的な情報の処理もバイオロジカルモーションの知覚に貢献していることが、ビデオを交えて説得的に示された。たいへん興味深く、有意義な講演であった。学内外から約 40 名の参加者があり、討議も活発になされ、盛会であった。

第 3 回共催講演会

講師：Dr. Andrew Leber (University of New Hampshire, USA) & Dr. Julie Golomb (Yale University, USA)

企画：齋木 潤

日時：2007 年 10 月 24 日　16:30-18:30

場所：京都大学大学院人間・環境学研究科棟 3 階 333 演習室

題目：Talk 1. Predicting cognitive control from behavior and fMRI (Andrew Leber)
Talk 2. Spatial attention remains in retinotopic coordinates immediately following saccadic eye movements (Julie Golomb)

概要：Talk 1. Goal-directed, or "top-down," control allows us to flexibly adjust how we process and respond to external stimuli in the world. Despite the ever-growing research focus on this area, much remains unknown about how control is implemented successfully. In an effort to begin filling this gap, my recent research has probed two general questions about control. First, what factors predict the choice of top-down strategy? Consider a fan at a baseball game trying to locate the ball; he can either search for, say, white things or fast moving things. Which strategy will he choose? A series of experiments designed to ask this question shows that learning from past experience plays a fundamental role. Such learning persists for at least 1 week and survives the changing of low-level stimulus features used in our displays, suggesting that the learning is high-level in nature. The second general question relates to control success, and it is one that bears considerable practical relevance to our increasingly multitask-filled lives: when we need to switch from one strategy to another, what determines how successful we will be? Further, does our degree of success fluctuate over time? Here, I describe a neuroimaging analysis technique (using fMRI) that my colleagues and I have used to identify distinct brain regions involved in task switching success. Specifically, by measuring neural activity before each trial begins, we have been able to predict observers' task switching success from moment to moment. Predictive regions include the basal ganglia as well as lateral prefrontal, anterior cingulate, and parietal cortices. In my concluding remarks, I will discuss the implications of these results and talk about future directions in my work.
Talk 2. During everyday natural behavior, we cannot process every detail in our visual environment. Attention and eye movements are two mechanisms that can select and enhance processing of the most relevant inputs. Attention and eye movements are

often tightly coupled, but what if we attend to one location, while moving our eyes to other parts of a scene? Our image of the world shifts on the retina with each eye movement. What, then, happens to our internal representation of the attended location? I will present data from a novel behavioral paradigm designed to measure how a locus of sustained spatial attention is represented at various times following a saccadic eye movement. Immediately following an eye movement, spatial attention is maintained in retinotopic coordinates (relative to the eye), even though there is no behavioral advantage associated with facilitation at this location. This residual retinotopic facilitation is robust but transient, decaying over the first 100-200ms following the saccade. If behavioral relevance is attributed to the retinotopic coordinates, however, attentional facilitation at this location can persist for much longer. Thus, despite previous evidence to the contrary, attention can be dissociated from oculomotor planning and maintained across multiple saccades, primarily in retinotopic coordinates.

成果：講師の Andrew Leber 博士（New Hampshire 大学）、Julie Golomb 博士（Yale 大学）とも視覚認知研究の気鋭の若手研究者である。産業技術総合研究所の招きで日本に滞在している機会に京都大学での講演を引き受けていただいた。Leber 博士は視覚的注意、認知的制御に関する多くの業績を持ち、今回は fMRI 信号から行動レベルでの認知的制御活動を予測する最新の研究を紹介した。Golomb 博士も Yale 大学の認知神経科学研究室で視覚認知の fMRI 研究などを行なっているが、今回は眼球運動と注意の関係に関する行動実験研究を紹介した。海外の若手研究者の講演を聴くことで大学院生、ポスドクレベルの若手研究者にとって大きな刺激になったと思われる。参加者は大学院生やポスドクが中心で約 20 名。

第４回共催講演会

講師：Dr. John N. Towse (Lancaster University, UK)
企画：齊藤 智
日時：2007 年 10 月 26 日　13:00-14:30
場所：京都大学大学院教育学研究科本館１階　第１講義室
主催：日本学術振興会招聘外国人研究者講演
題目：The ins and outs of memory: New perspectives in understanding working memory in children and adults

概要：Working memory is a central construct in cognitive science, used as both a specific experimental model and as a more general framework for thinking about individual differences. However, a notable feature about much research to date is that the focus is often on just the maintenance of working memory representations. This emphasis has been certainly been productive and justified. Nonetheless, in this talk, I will describe experiments that demonstrate the value of also considering (a) the conditions under which memory items are acquired and (b) the processes by which items are sequentially recalled. Evidence from both the ins and the outs of working memory tasks is used to offer new theoretical insights.

成果：英国ランカスター大学の John N. Towse 博士は、日本学術振興会招へい外国人研究者として、2007 年 10 月ー11 月に京都大学に滞在した。本講演会は、招へい外国人研究者としての同氏の活動の一環として実施された。講演内容は、作動記憶（working memory）の機能とメカニズム、ならびにそれらの発達的変化をターゲットする同氏の最近の研究成果を中心としたもので、特に、作動記憶ピリオド（working memory period）といった作動記憶の新しい測定方法や、作動記憶スパン課題 における口頭反応のタイミングの詳細な検討を通じて得られた理論的発展について詳述するものであった。学部生、大学院生、教員、そし

て一般聴衆を含む60名以上の参加者を得て、活発な質疑応答が行われたが、特に、大学院生からの質問を促す事で大きな教育的成果が得られた。

第5回共催講演会

講師：板倉昭二（京都大学大学院文学研究科）
主催：京都大学総合博物館
企画協力：京都大学学術出版会
日時：2007年11月10日　10:30-12:00
場所：京都大学総合博物館 ミューズ・ラボ
題目：ロボットから知る赤ちゃんの心
概要：赤ちゃんは、私たちが思っている以上に、豊かな世界に住んでいる。特に、人に対しては特別な感受性があり、非常に早くから人とものとを区別している。また自分以外の存在にも「心がある」と感じて心を見つける能力は「他人の気持ちになって考える」ことの出発点であり、社会生活に欠かせないものである。人はもちろん、人以外のロボットなどに対して、赤ちゃんはどのように心を見つけるのだろうか。この講演では、ロボットなどを使った研究から、他者を理解する赤ちゃんの心の発達を一般の方（特に子育て世代）を対象に紹介した。
成果：

第6回共催講演会

講師：Barbara C. Malt (Lehigh University, USA)
企画：楠見 孝
日時：2007年12月3日　13:00-14:00
場所：京都大学教育学部1F会議室
題目：Naming and Knowing: Representing the World in Language and Thought（名づけることと知ること：言語と思考における世界を表象する活動）
概要：I present an overview of several different intertwined projects including cross-linguistic and some of the bilingual and second-language learning work that was motivated by finding the cross-linguistic differences for artifacts.
成果：モルト教授　(Lehigh 大学心理学部）の研究テーマは、概念、カテゴリー、意味表象とその発達，第二言語学習などである。今回、慶應義塾大学の今井むつみ教授の招聘により来日し，同教授とともに来学した。この講演で教授は、英語話者・非英語話者がなじみのある対象・なじみのない対象を、どのように名づけるかというこれまで進めてきた実験のデータを通して、名づけることとカテゴリー化の関係やその構造についての理論的考察をおこなった。講演後には、今井教授の解説があり、今井教授も含めて言語と思考をめぐって活発な議論をおこなった。ここで論じられた問題は、参加した教員、院生にとって、きわめて意義深いものであった。参加者は15名。

第7回共催講演会

講師：土谷尚嗣　博士（カリフォルニア工科大学）
企画：齋木 潤
日時：2008年1月10日　16:00-17:30
場所：京都大学大学院人間・環境学研究科棟２階２３３演習室
題目：Attention, Awareness and Aftereffects

概要：Historically, the pervading assumption among sensory psychologists is that what a subject attends to is what she is conscious of. That is, attention and consciousness are very closely related, if not identical, processes. However, a number of recent authors have argued that these are two distinct processes, with different neuronal mechanisms. While the neuronal correlates of consciousness remain elusive, significant progress has been made in studying the neuronal correlates of "unconscious" processing; a multitude of techniques---such as masking, binocular rivalry, and continuous flash suppression---permit visual scenes to be presented to subjects without subjects becoming aware of them. I will present recent psychophysical studies of aftereffects showing 1) that invisible stimuli can be attended with top-down attention, 2) that to observe some aftereffects, top-down attention to invisible stimuli is necessary and 3) that under some conditions top-down attention and awareness can result in opposite effects. These, taken together with recent neurophysiological studies, argue that attention and awareness are distinct neuronal process.

成果：講師の土谷尚嗣博士（カリフォルニア工科大学）はKoch教授のもとで学位を取得し、現在Adolphs教授のポスドクとして研究を続けている気鋭の若手研究者である。Continuous Flash Suppression（CFS）という現象の発見で著名であり、Koch教授の「意識の探求（岩波書店）」の訳者の一人としても知られている。玉川大学の招きで日本に滞在している機会に京都大学での講演を引き受けていただいた。講演では、CFSを用いた自身の研究を含め、多くの関連する研究を引用しながら、意識と注意の関係に関する新たな見方を提案した。従来の、意識と注意は同一、或いは注意は意識に包含されるという見方とは異なり、注意と意識は別々の神経過程であると主張した。参加者は大学院生やポスドクを中心に約50名で、活発な議論が展開された。同世代の若手研究者にとって非常によい刺激となる講演会であった。

第8回共催講演会

講師：アンネ・ボルゲ教授（ノルウェー・オスロ大学）
企画：子安増生
日時：2008年1月15日　16:30-18:00
場所：京都大学教育学部2階　215室（中央装置室）
テーマ：心の理論と幼児の社会的行動－友人関係による差
概要：心の理論は、子どもの向社会的行動や共感の発達と関連するとされているが、友人関係など子どもが育つ社会的背景との関連性はよくわかっていない。この講演では、子どもの友人関係（近隣と保育所）に焦点をあて、ノルウェーの学術審議会研究補助金によるハーデラン地区の11か月～77か月児625人を対象とする研究（Hadeland First Friendship Project）の結果が紹介された。この研究の結果において、心の理論の発達は保育所の友人関係は予測しないが近隣の友人関係は予測すること、心の理論と向社会的行動の発達の関連性は女児のみに見られることなどが示された。参加者は11名。

成果：アンネ・ボルゲ（Anne Borge）教授は、1949年生まれ、オスロ大学心理学専攻博士課程修了（Ph.D.）、2003年からオスロ大学心理学研究所教授、専門は発達心理学（児童・青年期の心理-社会的問題など）。今回ボルゲ教授は、愛知県立大学教員養成GPプログラムにより来日。この講演でボルゲ教授は、幼児・児童の友人関係に焦点をあてたノルウェー・ハーデラン地区の11か月～77か月児625人を対象とする自身の研究により、心の理論の発達は保育所の友人関係は予測しないが近隣の友人関係は予測すること、心の理論と向社会的行動の発達の関連性は女児のみに見られることなどの知見を示した。わが国ではあまり知られていないノルウェーの研究状況の一端に接するとともに、わが国の研究にも示唆を与える研究結果を知る機会となった。

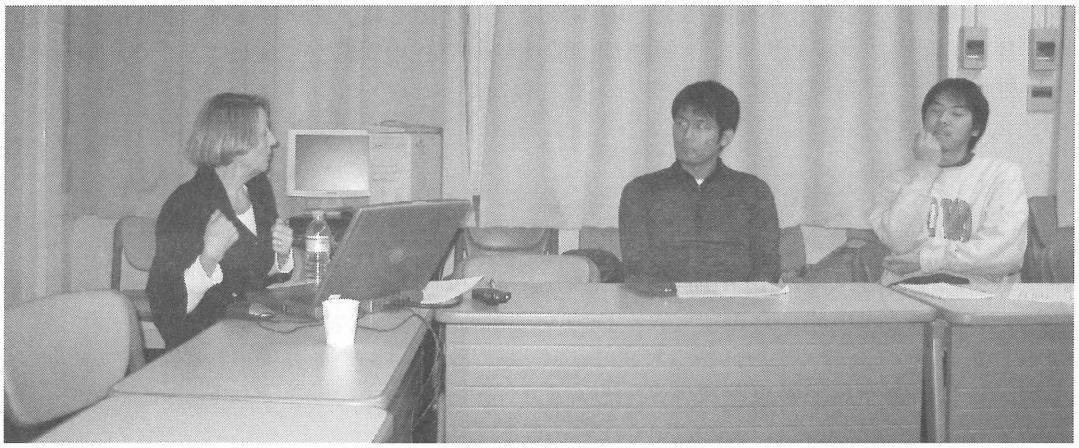


写真７：講演中のアンネ・ボルゲ教授（左）

第９回共催講演会

講師：Lael Schooler（ドイツ・マックスプランク人間発達研究所適応行動認知センター、シニア・リサーチ・サイエンティスト）
企画：楠見 孝
日時：2008年１月26日　13:30-16:30
場所：芝蘭会館別館２階研修室
題目：The cognitive foundations of heuristics　（ヒューリスティクスの認知的基盤）
概要：A few theorists, ranging from William James to contemporarypsychologists, have argued that forgetting should not be seen as a nuisance but as key to the proper working of human memory. Schooler & Hertwig (2005) have proposed that forgetting may in addition prove beneficial for making judgments that depend on whether objects are recognized and the speed of this recognition. For example, you could use the Recognition Heuristic (RH) to predict which of two candidates is likely to win an election based on the heuristic that if you recognize one but not the other, then predict the recognized one will win. To explore the mechanisms by which forgetting could boost the efficiency of such memory based inference heuristics, I describe a recent modeling and empirical effort that bridges two research programs grounded in an appreciation of the adaptive value of human cognition: The program on fast and frugal heuristics explores cognitive processes that use limited information to make effective decisions (Gigerenzer, Todd, & the ABC Research Group, 1999); and the ACT-R research program (Anderson & Lebiere, 1998) that strives for a unified theory of cognition, a language in which to implement cognitive models, such as those studied by the ABC Research Group. I will show how the ignorance that forgetting brings can, paradoxically, enhance inferences about real objects in the world. In Mata, Schooler, & Rieskamp (2007) we ask whether aging compromise decision-making abilities. Measures of fluid intelligence, not crystallized intelligence, explained age-related differences in information search and strategy selection. Thus, while older adults, like younger adults, may know which strategies are appropriate for a given environment, cognitive decline may lead them to rely on simpler strategies.
成果：Lael Schooler 博士は，マックスプランク人間発達研究所適応行動認知センターの Senior research scientist である。博士は、記憶の適応的な役割，とくに現在と過去の環境の構造を統計的に分析したり，判断や意思決定に及ぼす影響を心理学実験や調査，シミュレーションによって研究してきた。講演においては、加齢による忘却のもつ適応的意義を、再認

および迅速・節約ヒューリスティックスの観点から、研究グループの実験データに基づいて紹介し、さらに、幸福感研究への示唆について論じた。講演終了後、1時間にわたって、B・D合同プロジェクト「幸福感の国際比較研究」の懇談会において、今後の研究の方向性について、意見交換をおこない、有意義な議論ができた。参加人数は約30名。

第１０回共催講演会

講師：英国側　Mrs. Phillipa Bridge　(Boxgrove校校長)
　　日本側　成田健之介氏　　(日英国際交流学習研究会代表)
企画：高見茂
主催：日英国際交流学習研究会
日時：2008年2月20日　16:30-
場所：京大会館　102号室
題目：教師の幸福感－日英比較
概要：本講演会では、英国ロンドン郊外のボックスグローブ小学校のフィリパ・ブリッジ校長と、日英国際交流学習研究会の成田健之介先生を招き、教師の幸福感について日英比較を試みた。日本の教育問題として，授業が成立しない「学級崩壊」，無理な苦情を言う「モンスター・ペアレント」，教師の長時間労働等が話題になっている。こうした実情を踏まえ、英国との比較を通じて、教師の仕事について，どのような場面でやり甲斐を感じるか，教師としての幸福感とは何かということについて考えた。
成果：出席者は約30名であった。日本側からは、成田健之助先生による日本の教育現場における問題を踏まえ、教師の幸福感について30年近い教職経験に照らして講演された。その内容は、英国Boxgrove校の先生方にとっては日本の教育現場の実情の概要を知る良い機会となった。またBoxgrove校側からは、Phillipa Bridge校長を始め、各学年担当の教員から自分の仕事を通じての「教師の幸福感」が披露された。学校経営者としてのPhillipa Bridge校長からは、教師が幸福感を得るベースとして学校経営の継続的安定が不可欠であり、それを確保するためには父母との信頼関係の構築が最も重要な鍵であるとの指摘があった。信頼関係構築のための同校での具体的な実践例も紹介され、わが国にとって大いに参考になるものであった。また現場のクラス担任からは各自の経験に照らした幸福感についての報告があり、「子どもの成長発達を見届けること」や「教育によって子どもが良い方向に変化した時」に教師としての大きな幸福感を得るとの指摘が多くあった。この点は極めて当然の事とはいえ、日英に共通する重要な観点であるとの意を強くした。

第１１回共催講演会

講師：千住淳博士（英ロンドン大学バークベック・カレッジ、リサーチフェロー）
企画：子安増生
日時：2008年2月27日　10:30-12:00
場所：京都大学教育学部　第1講義室
題目：社会脳の定型・非定型発達
概要：これまでの研究により、ヒトの脳の一部は社会的な情報の処理に特化したネットワーク、いわゆる「社会脳」を形成していることが明らかとなってきた。しかしながら、こういった「社会脳」が発達的にどのように形成されるのかについての研究は未だ進んでいない。今回の講演では、社会脳の定型・非定型発達の様相について、演者がこれまでに行ってきた研究を中心に概括し、社会脳の発達的基盤について議論した。前半では主に定型発達乳児の研究を通して、アイコンタクトなどコミュニケーションに関連した刺激への反応性が、社会脳の発達的基盤の一つとなっている可能性について議論した。後半では対人相互反応やコミュニケーションに発達的な障害を抱える自閉症スペクトラム障害児を対象とした研

究を通じて、自閉症者がコミュニケーション関連刺激に対して非定型な反応を示すことを紹介し、その認知的基盤について議論した。さらには、自閉症者における社会脳の非定型発達が臨床像の発現に与える影響について、実証データを中心に議論した。参加者 22 名。

成果：千住博士は、東京大学教養学部卒業、東京大学大学院総合文化研究科博士課程修了の後渡英、現在ロンドン大学バークベック・カレッジ(Birkbeck College, University of London)の脳・認知発達センターで社会脳（social brain）の発達的起源ならびに自閉症スペクトラム障害の非定型脳機能発達の研究を行っている新進気鋭の研究者である。これまで、日本基礎心理学会優秀発表賞、東京大学総長賞、日本心理学会国際賞奨励賞などの賞を受け、その研究は若くして既に国際的に定評がある。今回は、日本でのシンポジウム出席の合間をぬう形で、京都大学でも「社会脳の定型・非定型発達」というテーマで講演が行われた。大変刺激的かつ示唆的な研究発表であり、今後の認知発達研究、障害児研究に資するものである。

第１２回共催講演会

講師：三村　將准教授（昭和大学医学部）
企画：苧阪直行
主催：日本ワーキングメモリ学会（第５回大会特別講演）
日時：2008 年 3 月 8 日　11:00-11:45
場所：京都大学文学部新館　第３講義室
題目：加齢とワーキングメモリ：老年期うつ病、アルツハイマー病、高齢者に関する光トポグラフィと磁気刺激を用いた検討

概要：ワーキングメモリ課題を遂行中の脳内活動を検討するには、さまざまな脳機能画像が用いられる。近年では、PET や fMRI とともに、非侵襲的で簡便な光トポグラフィを用いた報告が増えている。若年・高齢健常者、アルツハイマー病や老年期うつ病の患者さんを対象に、2-back 課題や乱数生成課題を用いて、前頭前野の酸化ヘモグロビン（oxy-Hb）値の変化を検討してきた取り組みについて紹介された。これらはまだ研究途上であるが、今後、いくつかの認知課題と光トポグラフィを組み合わせて、アルツハイマー病と老年期うつ病とを鑑別し得る可能性がある。健常者や患者さんのワーキングメモリを薬物療法や非薬物療法による介入で改善していくことが可能であろうか。反復経頭蓋磁気刺激(rTMS)を用いて、ワーキングメモリ課題の成績を向上しようという試みも行なわれている。情報の保持期間に左頭頂葉にリアル刺激を当てた場合、シャム刺激を与えた場合と比較して、ワーキングメモリ課題成績自体には差はみられなかった。しかし、rTMS が保持と反応の過程に影響を与え、遠隔地である前頭前野の oxy-Hb 値に影響することが示されている。rTMS がワーキングメモリを増強させ得ると考える今日の知見と問題点について述べた。

成果：光トポグラフィによってアルツハイマー病と老年期うつ病とを鑑別し得る可能性、健常者や患者さんのワーキングメモリを薬物療法や非薬物療法による介入で改善していく可能性、これまで脳の機能を解明するためだけに用いられてきた rTMS を治療に利用しようという試みなど臨床経験に裏付けられた非常に興味深い講演であり、そのような医学現場での先駆的な試みについて出席者は見聞を深めることができた。参加者 65 名。

■ シンポジウム

グローバル COE 拠点形成記念公開シンポジウム「心が活きる教育に向かって」

日時：2007 年 11 月 17 日
場所：京都大学文学部　第１講義室、第２講義室

9:00-9:30　子安増生　心が活きる教育に向かって
9:30-10:00　杉万俊夫　当事者と研究者の協同的実践における研究者の役割』
10:00-10:30　辻本雅史　「教育のメディア史」の構想
10:30-11:00　西平 直　世阿弥「離見の見」－意識・自意識・メタ認知
11:00-11:20　総合討論
11:20-13:00　ポスター（掲示開始 11:20，在席責任時間 12:00-13:00）
13:00-13:30　藤田和生　比較感情研究の可能性
13:30-14:00　齊藤 智　実験的エラー誘導法で探る認知と行為のメカニズム
14:00-14:30　渡邊洋子　医学教育への生涯教育学的アプローチ
14:30-15:00　齋藤直子　Philosophy as translation, globalisation, and the understanding of other cultures
15:00-15:20　総合討論
15:30-16:00　やまだようこ ナラティブ研究の人間観と方法
16:00-16:30　大山泰宏　FD・教育改善におけるオルターナティブ・モデルの構想－「心が活きる教育」のための FD・教育改善とその評価－
16:30-17:00　杉本 均　才能教育の国際動向と国際比較
17:00-17:30　鈴木晶子　哲学，教育学，心理学におけるタクト
17:30-17:50　総合討論

成果：本拠点の「立ち上げシンポジウム」として企画・開催された。本拠点の事業を担う 12 人のメンバーが自身の研究経歴・研究内容を紹介し、それを「心が活きる教育」とどのように結び付けていくかが論じられた。心理学と教育学という異なる研究領域が今後どのようにコラボレーションを行っていけば以下を考える貴重な機会となった。特に、方法論の多様性が確認されると同時に、関心およびテーマの共通性も明らかになった。学内外から 79 名の参加者があった。また、ポスターセッションにおいては、大学院生を中心に 34 件の発表があった。

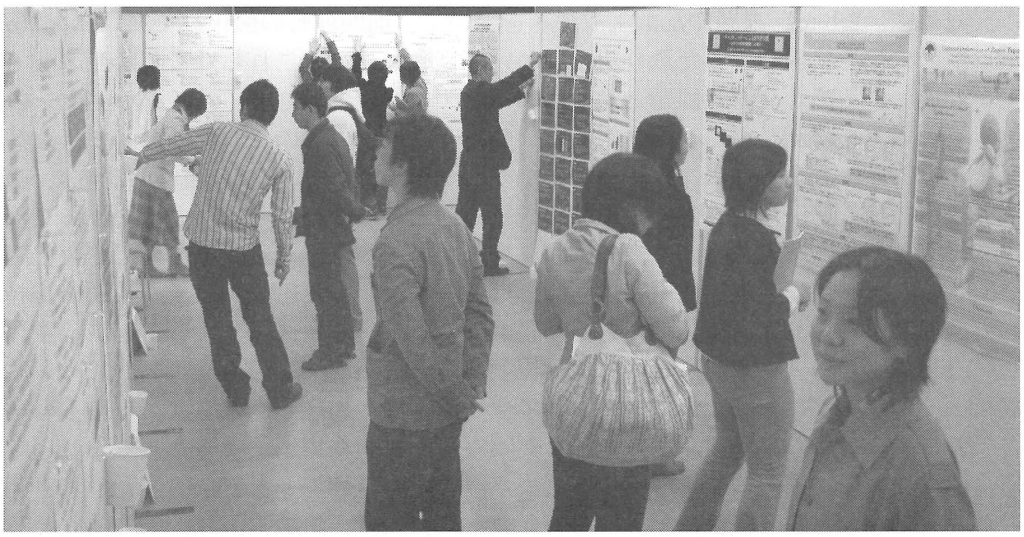


写真８：拠点形成記念公開シンポジウムのポスター発表風景

「PISA 調査の特徴と課題－日中合同検討会」

企画：田中耕治
主催：教育実践コラボレーション・センター
日時：2007 年 12 月 4 日　10:00-12:00

場所：芝蘭会館別館　研修室１
概要：

司　　会　　大塚雄作教授（京都大学大学院教育学研究科）
開会の挨拶　　田中耕治教授（京都大学大学院教育学研究科）
報　告　者　　楠見孝教授（京都大学大学院教育学研究科）「PISA の経験と日本」
内村浩准教授（京都工芸繊維大学）「国際学力調査から見えること―科学的リテラシーを中心に」
胡軍氏（中国・中央教育科学研究所・研究員）「2006-2009 国家重要課題―小中学生における学力調査研究の概要」

成果：PISA2006 の結果が世界で同時に発表されるというタイムリーな日に実施された本シンポジウムには、学内を中心に約 30 名の参加があり、学力調査の意味や実施方法についての活発な意見交換がなされた。京都大学大学院教育学研究科の楠見孝教授からは「PISA の経験と日本」と題して、PISA 調査の概要や実施方法に関する説明をしていただいた。世界各国と比較した日本の調査結果の特徴について、詳細な解説をしていただくとともに、PISA のリテラシー概念を超える創造的リテラシー概念の必要性について提案してくださった。京都工芸繊維大学の内村浩准教授からは「国際学力調査から見えること―科学的リテラシーを中心に」と題して、理科教育の専門家の立場から科学的リテラシー問題の意味について説明していただいた。PISA で実際に使用された問題について、長年の高校教員としてのご経験をもとに、日本の子どもが得意とする問題、不得意とする問題の例を示し、その要因を明確に解説してくださった。中国・中央教育科学研究所の胡軍副研究員からは「2006-2009 国家重要課題―小中学生における学力調査研究の概要」と題して、現在中国で計画されている大規模な学力調査について、その企画者としての説明をしていただいた。中国独自の条件をふまえた、大都市から農村までをカバーするための実施方法や分析方法に関する、具体的な方策を説明してくださった。３名のパネリストによる報告の後、日中双方から、PISA 調査と TIMSS 調査の違いや、学力調査の実施方法に関する質疑応答がおこなわれ、充実したシンポジウムとなった。

International Symposium on Executive Function in the Mind

企画：子安増生・齊藤　智・大塚結喜
主催：京都大学大学院教育学研究科
共催：京都大学教育研究振興財団および京都大学グローバル COE プログラム「心が活きる教育のための国際的拠点」
日時：2007 年 12 月 5 日・6 日
場所：京都大学時計台記念館
概要：

<December 5>
International Seminar for Young Psychologists on Cognitive and Developmental Sciences
09:30-09:35　Opening Remark
09:35-10:50　Session 1: Working Memory and Executive Control (Chair: Yusuke Moriguchi)
Taiji Ueno (Graduate School of Education, Kyoto University)
When binding of two features falls into apart
Azumi Tanabe (Graduate School of Letters, Kyoto University)
Inhibition in visual working memory of scene images
Yukio Maehara (Graduate School of Education, Kyoto University)
The workings of working memory in a theory-of-mind task for adults
Ivonne Solis-Trapala (Department of Psychology & School of Medicine,

Lancaster University)
Statistical models of executive function test performance in children

11:00-12:15 Session 2: Development of Executive Function in Young Children (Chair: Yukio Maehara)
Macarena Silva Trujillo (Department of Psychology & School of Medicine, Lancaster University)
Narrative development: Moving from questions to independent narrative
Ayako Ogawa (Graduate School of Education, Kyoto University)
The role of executive function in Japanese preschooler's explanation of other person's wrong action
Tomohiro Nabeta (Graduate School of Education, Kyoto University)
Can young children reduce false recognition?
Yusuke Moriguchi (Graduate School of Letters, Kyoto University)
Executive function and socio-cognitive development: Evidence from human children and chimpanzee
12:15 -12:30 General Discussion and Closing Remark

International Symposium on Executive Function in the Mind
14:50-15:00 Opening Remark: Naoyuki Osaka (Kyoto University, Japan)

Executive Function and Action Control (Chair: Satoru Saito)
15:00-15:40: Explorations of task-set control through experiments on task-switching Stephen Monsell (University of Exeter, UK)
15:40-16:20: Exploring the role of verbal short-term memory in task-switching and action control Satoru Saito (Kyoto University, Japan)
16:20-16:30: Coffee Break
16:30-17:10: Control dilemmas and the dynamic regulation of complementary executive control processes Thomas Goschke (Dresden University of Technology, Germany)
17:10-17:50: Thinking is for doing: Individual differences in working memory, inattention, and goal-neglect errors Michael J. Kane (University of North Carolina at Greensboro, USA)
17:50-18:00: Commentary and Discussions Naoyuki Osaka (Kyoto University, Japan)
18:30- Reception

<December 6>
Executive Function and Theory of Mind (Chair: Shoji Itakura)
10:00-10:40: Is there a place for emotion in the relation between executive function and theory of mind? Louis J. Moses (University of Oregon, USA)
10:40-11:20: Executive function & social understanding from 2 to 6: Which way the links? Claire Hughes (University of Cambridge, UK)
11:20-11:30: Tea Break
11:30-12:10: Lying, theory of mind, and executive function: A developmental perspective Kang Lee (University of Toronto, Canada)
12:10-12:50: Toward a unified theory of young children's development of understanding others' mind Masuo Koyasu (Kyoto University, Japan)
12:50-13:00: Commentary and Discussions Shintaro Funahashi (Kyoto University, Japan)

Executive Function in Context (Chair: Masuo Koyasu)

14:30-15:10: Understanding others: Challenge from the developmental cybernetics
Shoji Itakura (Kyoto University, Japan)

15:10-15:50: Culture, interaction and the development of social and executive skills
Charlie Lewis (Lancaster University, UK)

15:50-16:00: Coffee Break

16:00-16:40: Experience and executive functions: Evidence from training, schooling, and culture　Priti Shah (University of Michigan, USA)

16:40-17:20: The unity and diversity of executive functions: Individual differences and behavioral genetic analyses　Akira Miyake (University of Colorado at Boulder, USA)

17:20-17:30: Commentary and Discussions　Jun Saiki (Kyoto University, Japan)

17:30- Closing Remark: Masuo Koyasu (Kyoto University, Japan)

成果：このシンポジウムは、2005 年度に京都大学 21 世紀 COE 心理学連合によって開催された「心の抑制機能」に関する国際シンポジウム（2006 年 1 月 14 日、15 日開催）をさらに発展・展開させたものであり、抑制機能だけでなく、心の働きの高次制御機能全般に関する議論の場を提供することを目的としていた。上記のプログラムにある通り、３つの大きなテーマのもと、12 人の講演者が発表を行い、テーマごとにコメンテータが討論を行うという形式であった。3 つのテーマは、「高次制御機能と行為制御」、「高次制御機能と心の理論」、そして「高次制御機能の諸相」というものであり、それぞれ、基礎的な心理学実験に基づいた研究から、高次制御機能の個人差や発達差に関する研究発表が含まれていた。「高次制御機能と行為制御」のセッションでは、環境に応じて心的状態を切り替える心の働きや、そうした働きに対する感情の影響、注意の個人差の影響等について話題が提供された。「高次制御機能と心の理論」のセッションでは、心の理論の発達に関わる高次制御機能の役割についての話題が提供され、感情の役割や嘘の発達における高次制御機能の役割、偽りの感情表出の理解といった問題が論じられた。「高次制御機能の諸相」のセッションでは、社会的な文脈での他者理解における高次制御機能の役割、高次制御機能のトレーニング、高次制御機能を支える遺伝的基盤についての話題が提供された。学内外からのべ約 100 名の参加者があり、活発な議論が行われた。

写真９：「心の実行機能」国際シンポジウム参加者

第１回グローバル COE 主催シンポジウム

企画：子安増生

主催：慶應義塾大学グローバル COE プログラム「論理と感性の先端的教育研究拠点」および京都大学グローバル COE プログラム「心が活きる教育のための国際的拠点」

日時：2008 年 1 月 19 日　10:00-18:00

場所：東京国際フォーラム

題目：理屈？　屁理屈？　理屈抜き？　考える心、感じる心

概要：

第 1 部 10:00-11:30　拠点紹介
渡辺 茂（慶應義塾大学）　子安増生（京都大学）

第 2 部 13:00-15:00　講演：“生命 ”と “非生命 ”の感情世界 瀬名秀明（東北大学）
対談：論理と感性のせめぎ合い―言語教育の視点から
田尻悟郎（関西大学）　× 大津由紀雄（慶應義塾大学）

第 3 部 15:30-18:00　講演 安西祐一郎（慶應義塾長）
パネルディスカッション
話題提供：伊東裕司（慶應義塾大学）　藤田和生（京都大学）
鈴木晶子（京都大学）　入来篤史（理化学研究所）

成果：京都大学グローバル COE プログラム「心が活きる教育のための国際的拠点」と慶應義塾大学グローバル COE プログラム「論理と感性の先端的教育研究拠点」は、同じく平成 19 年度の人文科学分野グローバル COE プログラムに採択され、心理学・教育学・哲学・歴史学な度の研究分野を包摂している点でも共通の基盤を有している。この両プログラムの間で連携の話し合いが行われ、協力関係を結ぶことが確認された。その第一回の共同事業として、慶應グローバル COE が既に企画していた一般向けのシンポジウム「理屈？　屁理屈？　理屈抜き？　考える心、感じる心」に共催する形で、京大グローバル COE の 3 人の担当者が参加・発表した。今後、両拠点間の間で進められる協力関係の第一歩として、大変意義の大きい会合であった。

写真 10：講演中の子安増生教授（写真提供：慶應義塾大学グローバル COE）

日本学術会議シンポジウム「ゲノムから心まで～心の先端研究拠点への展望～」

日時：2008 年 2 月 2 日

場所：京都大学百周年時計台記念館

概要：開会あいさつ：長谷川壽一（東京大学教授、日本学術会議会員）

Ⅰ講演（１３：３０－１５：３０）心の先端研究

1) 下條信輔（カリフォルニア工科大学、教授）心理物理学の研究から

2) 入来篤史（理化学研究所、東京医科歯科大学、教授）神経科学の研究から

3) 浅田稔（大阪大学大学院工学研究科、教授）認知ロボティクスの研究から

Ⅱ討論（１５：４５－１７：４５）バーチャル共同研究拠点への展望

司会：長谷川壽一（東京大学）

パネリスト（50 音順）：阿形清和（京都大学）、今井むつみ（慶応義塾大学）、内田伸子（お茶の水女子大学）、子安増生（京都大学）、坂上雅道（玉川大学）、実森正子（千葉大学）、積山薫（熊本大学）、辻敬一郎（名古屋大学）、西田眞也（ＮＴＴコミュニケーション科学基礎研究所）、藤田和生（京都大学）、松沢哲郎（京都大学）、山岸俊男（北海道大学）、吉川左紀子（京都大学）、渡辺茂（慶応義塾大学）、渡邊正孝（東京都神経科学研究所）

コメンテーター：松本紘（京都大学研究担当理事・副学長）

閉会あいさつ：内田伸子（お茶の水女子大学教授、日本学術会議会員）

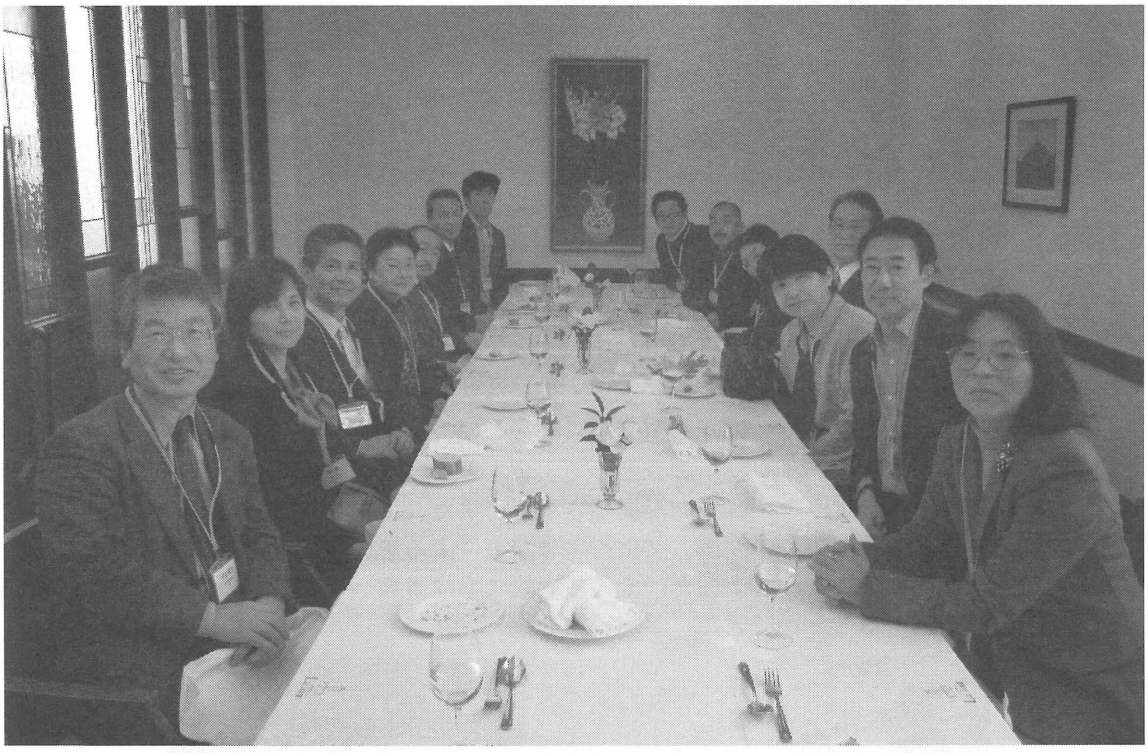


写真 11：「ゲノムから心まで～心の先端研究拠点への展望～」参加者の打ち合わせ風景

第１回グローバル COE 主催国際シンポジウム「幸福とリスク」

企画：鈴木晶子、クリストフ・ヴルフ

日時：2008 年 2 月 20 日・21 日

場所：京都大学文学部新館　第１講義室

概要：幸福とリスクという軸を設定した本プロジェクトの基幹部分をなす研究主題に関して、ベルリン自由大学歴史人間学学際研究センターの Wulf 教授以下４人の研究者を招聘し、日本側のスタッフも含めた国際シンポジウムを行った。また、シンポジウムを引き継いだ形で、今後の共同研究の方向性や可能性について、多角的に討議をした。教育哲学、臨床心理学、人間学、社会学など人間科学とはいえ様々なアプローチ方法を有する隣接諸科学が

フィールドを共有しつつ行うという、学際的かつ国際的な研究の体制、組織、方法についても話し合われた。

2 月 20 日（水）

09.30－09.40：拠点リーダー挨拶

子安増生（京都大学、グローバル COE 拠点リーダー）

09.40－09.50：鈴木晶子（京都大学）／クリストフ・ヴルフ（ベルリン自由大学）

09.50－10.35：クリストフ・ヴルフ（ベルリン自由大学）

「未来へのリスクと課題―平和・文化的多様性・持続可能な発展に向けた教育」

11.05－11.50：鈴木晶子（京都大学）

「幸福とリスク―国際比較研究に向けて」

11.50－12.20：ディスカッション

14.00－14.45：イェルク・ツィルファス（エアランゲン・ニュルンベルク大学）

「幸福の哲学的・教育学的モデル」

14.45－15.30：藤田和生（京都大学）

「ヒト以外の動物の社会的相互交渉における感情の機能」

16.00－16.45：ユルゲン・ケルナー（ベルリン自由大学）「人間の幸福」

16.45－17.30：河合俊雄（京都大学）

「幸福原則の彼岸（Jenseits des Glücksprinzips）」

17.30－18.00：ディスカッション

懇談会

2 月 21 日（木）

意見交換：今後の共同研究について

09.30－09.50：子安増生 （京都大学）による GCOE 研究の紹介

10.15－12.00：フリー・ディスカッション

コーディネート：鈴木晶子（京都大学）

クリストフ・ヴルフ（ベルリン自由大学）

成果：幸福概念をリスク・マネジメントやリスク・パフォーマンスとの連関のうちに見ていくという研究企画に対して、様々な角度から今後の研究推進について議論した結果、平成２１年度には、まずはパイロット調査として、日本とドイツの学校および家庭に入ってのフィールドワークを行うという方向が提示された。また、幸福という概念そのものの歴史的な背景、思想史的な概念の変遷、文化や宗教などによる影響といった、幸福研究への細やかなパースペクティブの必要性と、その多層的な幸福事象へのアプローチの可能性について十分に議論することができた。参加者約 30 名。

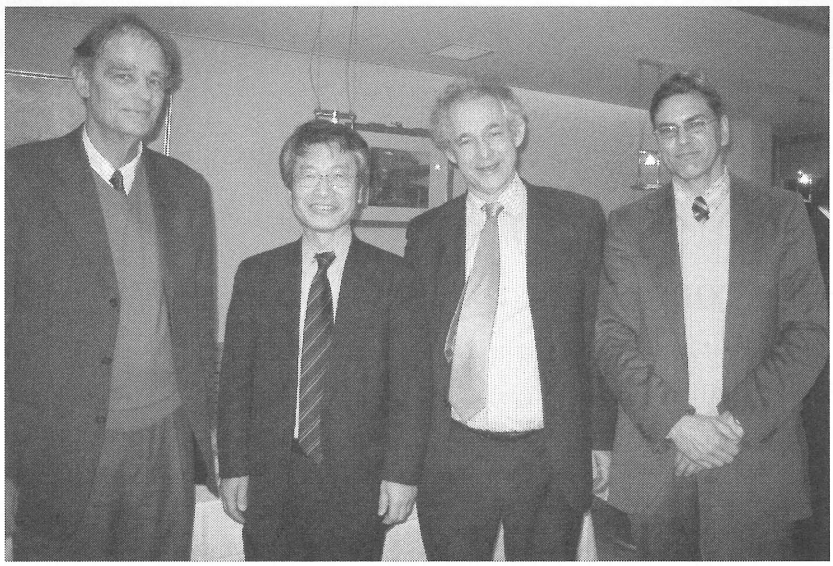


写真 12：左から、ケルナー、子安、ヴルフ、ツィルファス各教授

Self, other & language

企画：齋藤直子、子安増生

日時：2008年3月25日・26日

場所：Institute of Education, University of London, UK.

概要：

<March 25>

9:00 Welcome: Paul Standish and Masuo Koyasu

9:15 Paul Standish & Naoko Saito
Introduction to Beyond the Self

11:00 Nobuhiko Itani & respondent: Anna Kouppanou
"Beyond the Self" as a Goal of Education: Heidegger's Philosophy and Education in the West and in Japan

Tatsuya Ishizaki & respondent: Moyra Fowler
Critical consideration on the notion of "language" and "beyond": "Beyond the Self" and the issue of "transcendence" in Emmanuel Levinas

14:00 Michael Bonnett
Education and the Self

Mitsutoshi Takayanagi & respondent: Amanda Fulford
The Economy of Beyond the Self: Teacher Education in and as Higher Education

15:45 Hanako Ikeda & respondent: Fiona Brettel
The Concept of Attention in Simone Weil: The Pure Eyes for Nothing

Yasuko Miyazaki & respondent: Jade Nguyen
Children's experience of "beyond the self" and the rustle of language in Georges Bataille

17:15 Atsuko Tsuji & respondent: Anna Strhan
Writing and experience: Reading Walter Benjamin's "Franz Kafka"

Mitsutoshi Takayanagi & respondent: Amanda Fulford
The Economy of Beyond the Self: Teacher Education in and as Higher Education

<March 26>

9:15 Masuo Koyasu
Young children's development of understanding self, other, and language

Jan Derry
Brandom, Vygotsky and Psychology

11:00 Ruth Cigman
Self-Esteem and Education

Manami Ozaki & respondent: Nadine Cartner
Spiritual Health Education: Restoration of Connectedness with Others, with Nature, and/or with the Transcendent

14:00 Michael Hand
Should patriotism be taught in schools?

Riho Sakurai
The Potential of Non-Formal Education through Community Learning Centers throughout the World to Encourage Basic Literacy, Personal Development, and Societal Inclusion

15:45 Yuki Ohara & respondent: Shilpa Sharma
Language and the Formation of Self-Identity: The Case of "Dalits" in India

Katsura Saito & respondent: Ian Munday
Language minority students and parent-school partnership

17:15 Conclusion – Paul Standish and Naoko Saito

成果：(1) IoE と京大のスタッフ及び学生が対等な立場で協力しつつ、言語の壁を越えて異文化間交流に携われたこと、(2)教育哲学、心理学、比較教育学の多角的視点から「自己—他者—言語」のテーマを中心に学際的交流が行なわれたこと、(3) 京大側大学院生の発表については、一人一人が IoE 側大学院生から応答発表を受けるという貴重な機会を得て対話的交流が行なわれたことである。参加者 50 名。

写真 13：京大－IOE 国際シンポジウムの日本側参加者（ロンドン大学 IOE 玄関にて）

写真 14：京大－IOE 国際シンポジウムの参加者

■ ワークショップ

ラウンドテーブルディスカッション：

若きサイコロジストの悩み－若手から見た心理学後継者育成環境のいま、これから

企画：藤田和生・大塚結喜
日時：2008 年 2 月 2 日　9:30-12:00
場所：百周年時計台記念館 国際交流ホールⅢ
趣旨：若手助教、ポスドク、現役院生に、研究上の喜びや悩み、将来への抱負などを語ってもらい、若手の目から見た心理学後継者育成環境の現状を知り、より良いシステム作りへの提言に向けた前向きの討論をおこなう。
討論者：大江朋子（東京大学）、大神優子（お茶の水女子大学）、片畑真由美（京都大学）、後藤和宏（日本学術振興会・慶應義塾大学）、米田英嗣（日本学術振興会・生理学研究所）、篠原郁子（京都大学）、杉尾武志（同志社大学）、十河宏行(愛媛大学)、高田明（京都大学）、林創（京都大学）
司会者：大塚結喜（京都大学）
成果：主としてポスドク、助教、若手准教授として活躍中の研究者をまねき、研究にまつわる苦労や喜び、研究環境の現状、改善への提言などを、それぞれの立場から自由に討議していただいた。さまざまな意見が出されたが、共通していたのは、当然とはいえ、よい研究成果が得られたときの喜びである。研究テーマの選定ではよく自由度が確保されており、この点では悩みが聞かれなかった。研究環境としては、欧米に比べて雑務が多いといった声が聞かれた。全体として、現在の後継者育成環境は、比較的好ましい状態にあるように思われたが、より広い意見を集める必要があるように感じられた。討論者・企画者を除いて、約 50 名の参加者があった。ふだんあまり聞くことのない声を耳にする貴重な機会であった。

多文化研究の国際ワークショップ：京都大学とウィーン大学の共同研究会

企画：山田洋子、大学院生の企画担当：浦田悠、荘島幸子
日時：2008年2月6日　13:00-19:00
場所：京都大学大学院教育学研究科3階　320教室

Schedule

Part1. 13:00-15:00

Presentations by Dagmar Strohmeier & Anna Grabner　of University of Vienna, Austria.

13:00-14:00

1-1　Dagmar Strohmeier (University of Vienna, Austria)
"A Cross Cultural Study on Aggressive Behaviour In Japanese and Austrian Pupils"

14:00-15:00

1-2　Anna Grabner (University of Vienna, Austria)
"Image Maps of Life - Exploring Students' Concepts of Life-Span Development and Lifelong Learning embedded in Cultural Contexts"

Break. 15:00-15:30

Part2. 15:30-18:50

Presentations by graduate school students of Kyoto University

15:30-15:55

2-1　Yuko Yasuda (Graduate School of Education)
"Diversity of Women's Experiences in Coping with Infertility over Time"

15:55-16:20

2-2　Mako Okanda (Graduate School of Letters)
"Children's Response Tendencies to Yes-No Questions: Cross-cultural Differences"

15:20-16:45

2-3　Yu Urata (Graduate School of Education)
"The Nest of the Meaning of Life: From a Personal Meaning in Life to the Ultimate Meaning of Life."

16:45-17:10

2-4　Kayoko Yamamoto (Graduate School of Human and Environmental Studies)
"How to talk about Life and Death in High School: From an Interview with High School Teachers in Japan"]

17:10-17:35

2-5　Sachiko Shojima (Graduate School of Education)
"A Transgender Person and Family: Rashomon-like Narrative of Life Events."

17:35-18:00

2-6　Manami Ozaki (Graduate School of Human and Environmental Studies)
"Joy: The Spiral Dynamics of Spiritual Health Realization".

18:00-18:25

2-7　Kazumi Takeya (Graduate School of Education)
"The Narratives of Women who received Infertility Treatment: The Choice of a Life as a "Woman without Children".

18:25-18:50

2-8　Naoko Nishiyama & Yoko Yamada (Graduate School of Education)
"Female Adolescents' Perspectives on Relationships with Their Mothers and Grandmothers: In Drawn Images"

成果：ウィーン大学から若手研究者 Dagmar Strohmeier と大学院生 Anna Grabner を招聘し、ウィーン大学と京都大学の協働で行う国際 WS を開催した。京都大学の若手研究者と大学院生の発表者を公募で募集したところ、予想以上の応募者があり、当初の予定を延長してスケジュールを組んだ。国際 WS の企画、準備、ポスター作成、資料作成、当日の打ち合

わせ、運営や司会などを大学院生と協働で行うことにより、国際会議などを行う際の準備教育の場とした。大学院生たちの国際 WS に対する意欲と関心は非常に高く、熱心に討論が行われた。若手研究者と大学院生が英語で研究発表を行い、討論するスキルを磨くための場として大変有効であった。また、招聘者や参加者にも大変好評であり、次回はウィーン大学で同様の国際WSを開催することがウィーン大学から提案された。参加者　約30名。

第３回こころの未来ワークショップ

タイトル：日本文化とこころの行方―『こもる』ことの意味
日時：3月1日　13:00-17:00
場所：京大会館 101 号室

13:00-13:15	はじめに 吉川　左紀子（京都大学こころの未来研究センター　センター長）
13:15-14:15	ひきこもり：現代日本社会の”行きづまり”を読み解く マイケル・ジーレンジガー（ カリフォルニア大学バークレー校/ジャーナリスト）
14:15-15:15	文化と自己：ゆらぐ現代日本の構造 北山　忍　（ミシガン大学/文化心理学）
15:30-16:30	日本における若者の病理の変化：ひきこもりと行動化 河合　俊雄（ 京都大学こころの未来研究センター/臨床心理学）
16:30-17:00	総合討論 マイケル・ジーレンジガー 北山　忍 河合　俊雄 嘉志摩　佳久（メルボルン大学/社会心理学） 吉川　左紀子

概要：「日本文化とこころの行方」をテーマに、現代日本の若者のこころのあり方、特に「ひきこもり」や、対人関係の問題、価値観の揺らぎなどについてとりあげる一般公開ワークショップとした。ジーレンジガー氏には「アメリカから見た日本の現状」を、北山氏には「アメリカと日本」両文化の狭間からみた日本の現状を、そして河合氏には「日本の臨床現場」から、それぞれ日本文化とこころの行方についての最新の研究成果報告ならびに意見提示を行ってもらった。また総合討論の時間には、メルボルン大学の社会心理学者である嘉志摩佳久氏、こころの未来研究センター長の吉川左紀子氏を加えて、日本のこころに対する「取り組み」についての討論を行った。

成果：参加者 180 名、研究者以外にも多くの方からの関心が集まった。価値観が多様化する現代日本社会の中での「こころ」のあり方について再検討し、様々な問題について取り組んでいく糸口を見つけるための研究方策などについて、パネリストによる具体的意見交換がなされた。多くの聴衆からひきこもりや日本文化についての新たな視点を得たというコメントが寄せられた。

若手研究者養成プログラム及び研究開発コロキアム

海外留学資金

若手研究者の育成及び海外との研究協力の推進を目的として、大学院生が、一定期間、海外の研究機関に在留し、研究を実施できるよう支援するものである。すなわち、グローバルCOE「心が活きる教育のための国際的拠点」に参加する部局博士課程在籍の大学院学生を対象に、「募集人員20人（審査適格の者のみ採択）、申請額は1件60万円以内」として公募を行い、6人の応募者の中から、厳正な審査により5件を採択した。下表に採択された5件の内容を示す。

氏名：家島 明彦（教育学研究科　博士課程3年）
研究題目：　The Influence of Pop Culture in Adolescent Self Development:
What do American youth learn from manga and anime?
期間：2007年11月16日～2008年2月29日
渡航先：　Northeastern Illinois University　（アメリカ合衆国）
交付額：　600千円
指導教員：　山田 洋子

氏名：石橋　遼（教育学研究科　博士課程1年）
研究題目：　意味表象の処理を支える脳機能の探索
－Transcranial magnetic stimulation(TMS)を用いて
期間：2008年1月15日～2008年2月29日
渡航先：　マンチェスター大学（イギリス）
交付額：　592千円
指導教員：　齊藤　智

氏名：木村　裕（教育学研究科　博士課程2年）
研究題目：　オーストラリアにおける開発教育の教育方法学的研究
－理論と実践の両面から見た特質の分析－
期間：2007年10月6日～2008年2月29日
渡航先：　Global Education Centre（オーストラリア）
交付額：　600千円
指導教員：　田中 耕治

氏名：竹腰 千絵（教育学研究科　博士課程1年）
研究題目：　イギリス高等教育におけるチュートリアル伝播の背景と現状
期間：2007年12月16日～2008年1月8日
渡航先：　オックスフォード大学（イギリス）
交付額：　400千円
指導教員：　杉本　均

氏名：中嶋 智史（教育学研究科　博士課程1年）
研究題目：　異人種効果における社会的カテゴライズの効果についての研究
期間：2008年1月13日～2008年2月28日
渡航先：　Tufts 大学、Miami 大学（アメリカ合衆国）
交付額：　600千円
指導教員：　吉川 左紀子

院生養成プログラム

院生養成プログラムは、グローバル COE「心が活きる教育のための国際的拠点」の研究プロジェクトに関連する優れた研究計画に対し、科学研究費に準ずる形式で大学院生の個別研究プロジェクトを支援するものである。すなわち、グローバル COE「心が活きる教育のための国際的拠点」に参加する部局博士課程在籍の大学院学生を対象に「募集人員 20 人程度、申請額は 1 件 30 万円以内または 50 万円以内(国際学会発表を含む場合)」として公募を行い、16 人の応募者の中から、厳正な審査により 14 件を採択した。下表に採択された 14 件の内容を示す。

平成 19 年度大学院養成プログラム研究発表会は、2008 年 3 月 31 日（月）京都大学教育学部第 2 講義室において実施された。

氏　名	所属部局	学　年	指導教員	交付額（千円）
研究テーマ				
井谷 信彦	教育研究科	博士 3 年	矢野 智司	300
研究テーマ「存在論に立脚した教育/教育学の可能性 —O．F．ボルノウ「人間学的な教育学」の再考を軸に—」				
浦田　悠	教育学研究科	博士 3 年	山田 洋子	300
研究テーマ「人生の意味についての心理学モデルの構成」				
河﨑 美保	教育学研究科	博士 3 年	子安 増生	300
研究テーマ「非規範的解法聴取による算数学習：能動的聴取の支援法」				
近藤 あき	教育学研究科	博士 2 年	齋木　潤	300
研究テーマ「物体視における形と色の関係性に関する知覚的及び認知的研究」				
篠原 郁子	教育学研究科	博士 3 年	遠藤 利彦	300
研究テーマ「母親の mind-mindedness の個人差と幼児の「心の理論」獲得の関連」				
田中 史子	教育学研究科	博士 3 年	角野 善宏	300
研究テーマ「物語をもつことの意味についての検討-生み出すことと語ることを中心に－」				
田中 優子	教育学研究科	博士 2 年	楠見　孝	480
研究テーマ「批判的思考の抑制・促進に影響を及ぼす暗黙の前提の効果」				
田村 綾菜	教育学研究科	博士 1 年	子安 増生	300
研究テーマ「児童期における謝罪の理解の発達的研究」				
照屋 信治	教育学研究科	博士 1 年	駒込　武	300
研究テーマ「近代沖縄教育史の基礎的研究 －沖縄教育会機関誌「琉球教育」「沖縄教育」の整理と分析－」				
前原 由喜夫	教育学研究科	博士 2 年	齊藤　智	300
研究テーマ「社会に活きる記憶：心的状態推測における知識バイアスと作動記憶との関係」				
松吉 大輔	文学研究科	博士 2 年	苧阪 直行	300
研究テーマ「視覚的ワーキングメモリにおける注意制御メカニズムの個人差 —fMRI 及び行動実験による検討—」				
宮崎 康子	教育学研究科	博士 3 年	矢野 智司	300
研究テーマ「教育人間学におけるバタイユ - フーコー的「外」の語りの可能性 —教師は子どもの悪にどう向き合えるのか—」				
森本　陽	文学研究科	博士 1 年	藤田 和生	300
研究テーマ「フサオマキザルにおける他者の情動の認識」				
渡辺 創太	文学研究科	博士 1 年	藤田 和生	300
研究テーマ「ハトにおける外界認識：相対判断か絶対判断か」				

研究開発コロキアム

研究開発コロキアムとは、大学院生の学術研究活動の発展を図るため、本プログラムに関連する優れた研究計画に対し、科学研究費に準ずる形式でその研究の一部を助成するものである。採択された研究プロジェクトは、原則として、本プログラムの関係諸委員会と調整のうえ、新たに設置される大学院科目「研究開発コロキアム」として編成され、授業時間割に組み込まれた。すなわち、グローバル COE「心が活きる教育のための国際的拠点」に参加する部局博士課程在籍の大学院学生を対象に「募集人員 10 件程度、申請額は 1 件 50 万円以内」として公募を行い、23 件の応募の中から、厳正な審査により 8 件を採択した。下表に採択された 8 件の内容を示す。

研究代表者：	小川　絢子（教育学研究科　博士課程 3 年）
研究分担者：	上野　泰治、溝川　藍
研究題目：	幼児の心的推論能力解明に対する作動記憶からの発展的アプローチ：発達研究への言語データ導入と整理
交付額：	500 千円
指導教員：	子安　増生
研究代表者：	上田　祥行（人間・環境学研究科　博士課程 1 年）
研究分担者：	小宮　あすか、横尾　知子、坂野　逸紀
研究題目：	注意の制御スタイルに文化が及ぼす影響：実験心理学的アプローチをもちいて
交付額：	500 千円
指導教員：	齋木　潤
研究代表者：	廣瀬　智士（人間・環境学研究科　博士課程 1 年）
研究分担者：	山川　義徳、羽倉　信宏
研究題目：	他者理解におけるミラーシステムの役割の検討
交付額：	500 千円
指導教員：	松村　道一
研究代表者：	黒田　真由美（教育学研究科　博士課程 3 年）
研究分担者：	家島　明彦、浦田　悠、荘島　幸子、竹家　一美、平川　祥子、岩井　泰穂、木戸　彩恵、塚本　朱里、米田　量、西山　直子
研究題目：	ナラティヴデータに対する多角的検討
交付額：	450 千円
指導教員：	山田 洋子
研究代表者：	本島　優子（教育学研究科　博士課程 2 年）
研究分担者：	石井　佑可子、川﨑　裕美、大槻　綾
研究題目：	現代の家族状況から見る子どもの社会情緒的発達
交付額：	500 千円
指導教員：	遠藤 利彦
研究代表者：	山崎　徳子（人間・環境学研究科　博士課程 3 年）
研究分担者：	勝浦　眞仁、川上　大介
研究題目：	保育・教育実践に貢献しうる研究アプローチの構築：人の生きる場の「あるがまま」に迫る方法論とは
交付額：	450 千円
指導教員：	岡田 敬司
研究代表者：	服部　裕子（文学研究科　博士課程 3 年）
研究分担者：	森本　陽、高岡　祥子、瀧本　彩加、鹿子木　康弘、劉　波
研究題目：	共感(empathy)の比較認知科学的・比較認知発達科学的研究に向けた枠組みの構築
交付額：	500 千円
指導教員：	藤田　和生
研究代表者：	野口　剛（教育学研究科　博士課程 1 年）
研究分担者：	赤上　裕幸、大田　誠二、山崎　貴子、井上　烈、岡田　丈祐、岡田　蒔子、長崎　励郎
研究題目：	情報・メディア・コミュニケーションの社会的機能と役割に関する実証的研究
交付額：	450 千円
指導教員：	稲垣　恭子

修士論文及び博士論文

平成19年度に各研究科に提出された心理学関係の修士論文および博士論文を記載した。(なおアンダーラインは、拠点形成事業者ならびに研究協力者である。)

修士論文

文学研究科提出分

原康治郎　海馬と前頭前野ニューロン集団による連合記憶の情報表現
　主査：櫻井芳雄（文・教授）
　副査：苧阪直行（文・教授）、藤田和生（文・教授）、板倉昭二（文・准教授）、
　　蘆田　宏（文・准教授）

高岡祥子　イヌの社会的認知に関する実験的研究
　主査：藤田和生（文・教授）
　副査：苧阪直行（文・教授）、櫻井芳雄（文・教授）、板倉昭二（文・准教授）、
　　蘆田　宏（准教授）

梨原尚至　乳児期の色のカテゴリーに関する研究
　主査：板倉昭二（文・准教授）
　副査：藤田和生（文・教授）、櫻井芳雄（文・教授）

源　健宏　視覚性ワーキングメモリの情報保持に関わる神経基盤の検討
　　—ワーキングメモリ容量の個人差からのアプローチ—
　主査：苧阪直行（文・教授）
　副査：藤田和生（文・教授）、櫻井芳雄（文・教授）、板倉昭二（文・准教授）、
　　蘆田　宏（文・准教授）

勝原　麻耶　言語性ワーキングメモリ課題における感情情報の影響—高齢者を対象として—
　主査：苧阪直行（文・教授）
　副査：藤田和生（文・教授）、櫻井芳雄（文・教授）、板倉昭二（文・准教授）、
　　蘆田　宏（文・准教授）

矢追　健　自己に関わる情報の処理とその脳内神経基盤
　主査：苧阪直行（文・教授）
　副査：藤田和生（文・教授）、櫻井芳雄（文・教授）、板倉昭二（文・准教授）、
　　蘆田　宏（文・准教授）

教育学研究科提出分

赤上裕幸　活字から活映へ　—水野新幸と『映画教育（活映）』—
　主査：佐藤卓己（教育・准教授）
　副査：川崎良孝（教育・教授）、稲垣恭子（教育・教授）

岩井泰穂　稲荷信仰における「感謝」の意味づけ
　主査：山田洋子（教育・教授）
　副査：遠藤利彦（教育・准教授）、皆藤　章（教育・准教授）

上野泰治　言語性作動記憶における視覚的な長期記憶の関与
　主査：齋藤　智（教育・准教授）
　副査：子安増生（教育・教授）、西岡加名恵（教育・准教授）

魚野翔太　表情が視線による注意シフトに与える影響
　主査：吉川左紀子（こころの未来・教授）
　副査：齋藤　智（教育・准教授）、遠藤利彦（教育・准教授）

木戸彩恵　化粧による心理変容のナラティヴ分析—装う自己と見られる自己
　主査：山田洋子（教育・教授）
　副査：遠藤利彦（教育・准教授）、大山泰宏（教育・准教授）

桐村豪文　市場メカニズムに基づく大学経営の有効性の限界
　　—学生の大学選択に着目して—
　主査：高見　茂（教育・教授）
　副査：金子　勉（教育・准教授）、鈴木晶子（教育・教授）

小見茂樹　野村芳兵衛による生活指導の理論と実践

－児童の村小学校期に焦点をあてて－
主査：田中耕治（教育・教授）
副査：西岡加名恵（教育・准教授）、駒込　武（教育・准教授）
小宮あすか　対人的－個人的状況における後悔：日米比較研究
主査：楠見　孝（教育・教授）
副査：吉川左紀子（こころの未来・教授）、岩井八郎（教育・教授）
武田一浩　社会人の「学び直し」における課題と展望
－ヨーロッパにおける学習休暇制度を手がかりに－
主査：前平泰志（教育・教授）
副査：渡邊洋子（教育・准教授）、西岡加名恵（教育・准教授）
塚本朱里　モデル物語「松田聖子」と同時代を生きる女性のライフストーリー
主査：山田洋子（教育・教授）
副査：遠藤利彦（教育・准教授）、稲垣恭子（教育・教授）
土出郁子　国立大学病院における「患者図書室」の現状と課題
－医学図書館との協力体制に基づく患者への図書館サービスの提案－
主査：川崎良孝（教育・教授）
副査：佐藤卓己（教育・准教授）、角野善宏（教育・准教授）
馬場智子　タイにおける「人間の権利および尊厳に関する教育」
主査：杉本　均（教育・教授）
副査：高見　茂（教育・教授）、渡邊洋子（教育・准教授）
平井千晶　児童養護施設における愛着障害の変化プロセス
－事例研究を通した考察－
主査：遠藤利彦（教育・准教授）
副査：山田洋子（教育・教授）、伊藤良子（教育・准教授）
松井保樹　英国におけるシティズンシップ教育に関する一考察
－アンドリュー・ドブソンの所論に焦点をあてて－
主査：西岡加名恵（教育・准教授）
副査：田中耕治（教育・教授）、杉本　均（教育・教授）
溝川　藍　幼児期・児童期における見かけの泣きの理解の発達
主査：子安増生（教育・教授）
副査：吉川左紀子（こころの未来・教授）、遠藤利彦（教育・准教授）
嶺本和沙　表情判断課題における順応効果の検討
主査：吉川左紀子（こころの未来・教授）
副査：齋藤　智（教育・准教授）、皆藤　章（教育・准教授）
三宅浩子　オルタナティブな教員資格に関する制度設計の理論的検討
主査：金子　勉（教育・准教授）
副査：高見　茂（教育・教授）、齋藤直子（教育・准教授）
向　真平　西尾実国語教育における読方教育の特質
－「通じ合い」による生涯修養をめざして－
主査：田中耕治（教育・教授）
副査：西岡加名恵（教育・准教授）、辻本雅史（教育・教授）
山崎貴子　戦間期日本における「職業婦人」の変容と社会的受容
主査：稲垣恭子（教育・教授）
副査：岩井八郎（教育・教授）、渡邊洋子（教育・准教授）
横尾知子　聴覚誘導性フラッシュ錯視における視聴覚統合様式
主査：齋藤　智（教育・准教授）
副査：吉川左紀子（こころの未来・教授）、角野善宏（教育・准教授）

井上典子　児童期における論証能力の発達と批判的思考力との関連性
主査：子安増生（教育・教授）
副査：楠見　孝（教育・准教授）、田中耕治（教育・教授）
須賀みな子　言語と生命　－野村芳兵衛の「生活綴方」を手がかりに－

主査：鈴木晶子（教育・教授）
副査：矢野智司（教育・教授）、前平泰志（教育・教授）
米田　量　　米づくり作業における経験の意味づけと成員間の結びつき
～交流を目的とした実験的なグループの活動実態とインタビューから～
主査：山田洋子（教育・教授）
副査：遠藤利彦（教育・准教授）、前平泰志（教育・教授）
大石真吾　　箱庭制作という構造がもたらす作り手・見守り手の在りように関する一研究
－「立ち会い」をめぐる両者の体験に着目して－
主査：皆藤　章（教育・准教授）
副査：伊藤良子（教育・教授）、稲垣恭子（教育・教授）
河野一紀　　ことばをめぐる論考　心理臨床・分析哲学・記号論を通じて
主査：伊藤良子（教育・教授）
副査：田中康裕（教育・准教授）、矢野智司（教育・教授）
佐々木麻子　　「内的な異質性」に関する一考察
－箱庭に置かれなかったアイテムを手がかりに－
主査：桑原知子（教育・教授）
副査：田中康裕（教育・准教授）、杉本　均（教育・教授）
芝池有紀　　認知症を生きる高齢者の時間体験に関する考察
主査：角野善宏（教育・准教授）
副査：伊藤良子（教育・教授）、遠藤利彦（教育・准教授）
長谷川千紘　　箱庭に生まれる物語　－＜わたし＞と物語世界との関わりに着目して－
主査：桑原知子（教育・教授）
副査：皆藤　章（教育・准教授）、山田洋子（教育・教授）
林明日香　　日記体験から見た書き手と受け取り手のつながりのありようについて
主査：皆藤　章（教育・准教授）
副査：角野善宏（教育・准教授）、佐藤卓己（教育・准教授）
春木奈美子　　贈与としての語り
主査：河合俊雄（こころの未来・教授）
副査：田中康裕（教育・准教授）、矢野智司（教育・准教授）
平井久世　　触れることについての一考察　－粘土制作を通して
主査：伊藤良子（教育・教授）
副査：角野善宏（教育・准教授）、駒込　武（教育・准教授）
古川裕之　　描き手が自身の風景構成法作品を見るという体験について
－PAC 分析を用いて－
主査：皆藤　章（教育・准教授）
副査：角野善宏（教育・准教授）、渡邊洋子（教育・准教授）
本多沙希　　きょうだいという存在を通して体験される「私」
主査：皆藤　章（教育・准教授）
副査：田中康裕（教育・准教授）、渡邊洋子（教育・准教授）
沖部陽子　　現代の「主体」についての一考察
－世界と心理学の二重性と Paul　Klee のコンポジション－
主査：河合俊雄（こころの未来・教授）
副査：伊藤良子（教育・教授）、矢野智司（教育・教授）
鍛冶まどか　　風景構成法における空間の生成過程について
主査：皆藤　章（教育・准教授）
副査：桑原知子（教育・教授）、齋藤直子（教育・准教授）
河野奈央　　智恵としての「あきらめ」　－乳がん体験者の視点から－
主査：角野善宏（教育・准教授）
副査：桑原知子（教育・教授）、西平　直（教育・教授）
佐藤　健　　子どもの遊びにおける宗教的イメージについて
主査：伊藤良子（教育・教授）
副査：河合俊雄（こころの未来・教授）、前平泰志（教育・教授）

松本拓磨　　贈り物の心理臨床学的考察　－子供の贈り物像から－
　主査：伊藤良子（教育・教授）
　副査：河合俊雄（こころの未来・教授）、岩井八郎（教育・教授）
宮嶋由布　　イメージとしての「キャラクター」に関する研究
　　～小学生に生じるファンタジーに注目して～
　主査：角野善宏（教育・准教授）
　副査：田中康裕（教育・准教授）、遠藤利彦（教育・准教授）
山村総一郎　　ミシェル・フーコーにおける主体概念の変遷から見た心理学的主体の再考
　　－中期から後期のテキストを中心に－
　主査：河合俊雄（こころの未来・教授）
　副査：皆藤　章（教育・准教授）、佐藤卓己（教育・准教授）
黒江ゆり子　　慢性の病いとともに生きることについての論考
　　－他者への「言いづらさ」を手がかりとして－
　主査：矢野智司（教育・教授）
　副査：西平　直（教育・教授）、山田洋子（教育・教授）

人間・環境学研究科提出分
鮫島輝美　　近代医学によって失われた〈医師の姿〉
　－京都・西陣の地域医療の事例を通じて－
　主査：杉万俊夫（人環・教授）
　副査：カール・ベッカー（こころの未来・教授）、永田素彦（人環・准教授）
Jorge Mario Andreau　　Top-down signal from lateral prefrontal cortex in memory retrieval: behavioral and neural study」
　主査：船橋新太郎（こころの未来・教授）
　副査：斎木潤（人環・教授）、大東祥孝（人環・教授）
田中暁生　　メタ記憶に関与する神経機構の解明に向けた行動課題の検討
　主査：船橋新太郎（こころの未来・教授）
　副査：斎木潤（人環・教授）、大東祥孝（人環・教授）
風間明日香　　退行療法が探る潜在意識～事例収集による再検討
　主査：カール・ベッカー（こころの未来・教授）
　副査：杉万俊夫（人環・教授）、永田素彦（人環・准教授）
駒田安紀　　アトピー性皮膚炎患者の寛解過程における病気感～教育入院患者の語りより
　主査：カール・ベッカー（こころの未来・教授）
　副査：多賀茂（人環・准教授）、高橋由典（人環・教授）
小畑タバサ　　幼児の人格形成における幼稚園教育の影響
　　～「まことの保育」が果たせる役割をめぐって～
　主査：カール・ベッカー（こころの未来・教授）
　副査：岡田敬司（人環・教授）、吉田純（高等教育・教授）

博士論文

文学研究科提出分
課程博士
廣瀬信之　　視対象のアウェアネスからの消失
　　－オブジェクト置き換えマスキングに関する実験心理学的検討－
　主査：苧阪直行（文・教授）
　副査：櫻井芳雄（文・教授）、蘆田　宏（文・准教授）
木原　健　　視覚的意識の形成過程と脳内機構
　主査：苧阪直行（文・教授）
　副査：櫻井芳雄（文・教授）、蘆田　宏（文・准教授）

池田尊司　　ワーキングメモリにおける色彩情報の処理過程
　主査：苧阪直行（文・教授）
　副査：櫻井芳雄（文・教授）、蘆田　宏（文・准教授）
大神田麻子　　反応バイアスのメカニズムと文化差
　　－はい／いいえ質問に対する就学前児の回答に関する検討－
　主査：板倉昭二（文・准教授）
　副査：藤田和生（文・教授）、櫻井芳雄（文・教授）
森口佑介　　社会的世界における抑制機能の発達的研究
　主査：板倉昭二（文・准教授）
　副査：苧阪直行（文・教授）、藤田和生（文・教授）

論文博士
村瀬俊樹　　社会－文化的環境における子どもの語彙獲得
　主査：藤田和生（文・教授）
　副査：子安増生（教育・教授）、板倉昭二（文・准教授）
安藤新樹　　輝度に基づいた視線方向知覚の研究
　主査：苧阪直行（文・教授）
　副査：板倉昭二（文・准教授）、蘆田　宏（文・准教授）

教育学研究科提出分
課程博士
開沼太郎　　高度情報ネットワーク社会における「教育の情報化」施策に関する研究
　　～初等中等教育における「人的資源配分」の重要性に着目して～
　主査：高見　茂（教育・教授）
　副査：楠見　孝（教育・教授）、杉本　均（教育・教授）
楠山　研　　中国における学校制度改革の論理　－学制改革における格差への「配慮」－
　主査：杉本　均（教育・教授）
　副査：田中耕治（教育・教授）、高見　茂（教育・教授）
中野祐子　　臨床実践体験としての「見立て」に関する心理臨床学的研究
　　－その生成プロセスと心理臨床的機能の観点から－
　主査：藤原勝紀（教育・教授）
　副査：皆藤　章（教育・教授）、田中康裕（教育・准教授）
石原　宏　　製作者の主観的体験からみた箱庭療法に関する研究
　主査：藤原勝紀（教育・教授）
　副査：皆藤　章（教育・教授）、桑原知子（教育・教授）
伊藤実歩子　　戦間期オーストラリアの学校改革　－労作教育の理論と実践を中心に－
　主査：田中耕治（教育・教授）
　副査：西岡加名恵（教育・准教授）、松下佳代（高等教育・教授）

高野秀晴　　１８世紀日本における民衆教化の展開と学問への視線
　　－石門心学を中心に－
　主査：辻本雅史（教育・教授）
　副査：駒込　武（教育・准教授）、前平泰志（教育・教授）
田　世民　　近世日本における儒礼受容の研究
　　－『文公家礼』をめぐる儒家知識人の思想実践を中心に－
　主査：辻本雅史（教育・教授）
　副査：駒込　武（教育・准教授）、西平　直（教育・教授）

論文博士
福本（田熊）友紀子　水イメージからみた心理療法
　主査：河合俊雄（こころの未来・教授）
　副査：田中康裕（教育・准教授）、桑原知子（教育・教授）

中村（河原）紀子　乳幼児の食行動における自律プロセス
－養育者との対立と調整を中心に－
主査：山田洋子（教育・教授）
副査：遠藤利彦（教育・准教授）、子安増生（教育・教授）
前川美行　心理療法における偶発事について～破壊性と力～
主査：河合俊雄（こころの未来・教授）
副査：伊藤良子（教育・教授）、田中康裕（教育・准教授）
長田（黒川）嘉子　心理臨床における遊ぶことの空間
－移行対象概念の＜不確かさ＞をめぐって－
主査：伊藤良子（教育・教授）
副査：皆藤　章（教育・教授）、角野善宏（教育・准教授）
濱野清志　「気」の心理臨床学的研究
主査：藤原勝紀（教育・教授）
副査：皆藤　章（教育・教授）、角野善宏（教育・准教授）
服部憲児　フランスにおける大学評価委員会（CNE）による大学評価に関する研究
－大学改善の促進の観点から－
主査：高見　茂（教育・教授）
副査：杉本　均（教育・教授）、金子　勉（教育・准教授）
小股憲明　明治期における不敬事件の研究
主査：辻本雅史（教育・教授）
副査：駒込　武（教育・准教授）、佐藤卓己（教育・准教授）
田中建夫　学生相談臨床からみた“知ることの制止”の諸相
主査：藤原勝紀（教育・教授）
副査：桑原知子（教育・教授）、大山泰宏（教育・准教授）

人間・環境学研究科提出分

課程博士
番浩志　レチノトピー表象を有するヒト大脳皮質低次視覚野における空間的・時間的な視覚文脈の処理：fMRI 研究
主査：齋木潤（人環・教授）
副査：大東祥孝（人環・教授）、船橋新太郎（こころの未来・教授）、江島義道（京都工芸繊維大学・学長）
渡邉　慶　意思決定に関与する前頭連合野神経機構の解明」
主査：船橋新太郎（こころの未来・教授）
副査：斎木潤（人環・教授）、大東祥孝（人環・教授）

業　績

2007年4月～2008年3月の期間の業績（公刊予定のものを含む）を、著書、論文、紀要、総説、科研等報告、翻訳、辞典・事典、書評、学会発表、講演、受賞歴、社会的貢献などの順に並べた。これは、グローバル COE「心が活きる教育のための国際的拠点」の教員・研究員・院生・ポスドクなど、全構成メンバーのこの一年間の活動記録であり、必ずしもグローバル COE プログラムの補助金による成果だけを収録したものではない。

下線は教員メンバー（教授、准教授、助教、COE 研究員）であることを、*印は査読付雑誌などに掲載されたことを示す。

1．著書

赤沢真世 (2007). 学力保障をめざした到達目標・評価論—中内敏夫の場合　田中耕治（編）人物で綴る戦後教育評価の歴史　三学出版　pp. 137-152.

赤沢真世 (印刷中). 英語科の学力　田中耕治（編）（仮）学力テストを読み解く　日本標準

赤沢真世 (印刷中). 阿原成光と英語教育—人間らしさを尊重した英語教育　田中耕治（編）（仮）続・時代を拓いた教師たち—戦後教育実践からのメッセージ—　日本標準

赤沢真世 (印刷中). 英語教育のカリキュラム編成と評価—天野小学校の実践に対するコメント　東京学芸大学教員養成カリキュラム研究開発センター（編）小学校英語の可能性と課題　東京学芸大学刊行会

浅田剛正 (2007). 適応指導教室の実践体験からみえてくるもの　藤原勝紀（編）現代のエスプリ別冊 教育心理臨床パラダイム　至文堂　pp278-279.

浅田剛正 (2008). 描画法における臨床イメージ体験とアセスメント　藤原勝紀・皆藤章・田中康裕（編）京大心理臨床シリーズ6 臨床イメージ体験　創元社　pp373-380.

Ashida H. (2007). Influence of visual motion on object localisation in perception and action. In N. Osaka, I. Rentschler, & I. Biederman (Eds), *Object recognition, attention, and action.* Springer, Tokyo. pp. 207-218.

ベッカー, C. (2007). 日本史から世界が倫理を学べるか　上廣哲治（編）　倫理的叡智を求めて 上　東洋館出版　pp.53-80.

Carvalho, M.K.F. (印刷中). ブラジルの教育：多様性の国における希望　富野幹雄（編）ラテンアメリカ研究シリーズ第2巻：グローバル化時代のブラジルの実像に迫る　南山大学

Carvalho, M.K.F.・楠見孝 (印刷中). メタ記憶と社会・文化　清水寛之（編）メタ記憶：記憶のモニタリングとコントロール　北大路書房

Ejima, Y. , Takahashi, S. ,Yamamoto, H. & Goda, N. (2007). Visual Perception of Contextual Effect and Its Neural Correlates. In Funahashi S.(Ed.) , *Representation and Brain.* Tokyo: Springer Verlag. pp 3-20.

遠藤貴広 (2007). 自己の活動の改善のために—安彦忠彦の場合　田中耕治（編）人物で綴る戦後教育評価の歴史　三学出版　pp. 196-211.

遠藤利彦 (2007). 臨床心理学の基礎：発達　桑原知子（編）朝倉心理学講座：臨床心理学　朝倉書店　pp. 3-47.

遠藤利彦 (2007). 感情の機能を探る　藤田和生（編）感情科学の展望　京都大学学術出版会　pp. 3-54.

遠藤利彦 (2007). アタッチメント理論とその実証研究を俯瞰する　数井みゆき・遠藤利彦（編）アタッチメントと臨床領域　ミネルヴァ書房　pp. 1-58.

遠藤利彦 (2007). 「質的研究」という思考法に親しもう　遠藤利彦・坂上裕子（編）はじめての質的研究：生涯発達　東京図書　pp. 1-43.

遠藤利彦 (2008). 発達の予兆を読む：糸島プロジェクトの奇蹟　大神英裕（著）発達障害の早期支援：研究と実践を紡ぐ新しい地域連携　ミネルヴァ書房　pp. 233-241.

遠藤利彦 (2008). 解題：愛着理論と精神分析—対立から対話へ—　ピーター・フォナギー（著）愛着理論と精神分析　誠信書房　pp. 245-265.

遠藤利彦 (印刷中). 喜怒哀楽を感じる心：感情心理学入門　繁桝算男（編）初めての心理学：心理のメカニズムに迫る20の扉　医学出版

遠藤利彦 (印刷中). 雑感：感情と動機づけ研究のこれからに寄せて　上淵寿（編）感情と動機づけの発達

心理学　ナカニシヤ出版
藤田和生（編著）（2007）．感情科学　京都大学学術出版会　405pp.
藤田和生（2007）．動物たちのゆたかな心　京都大学学術出版会　181pp.
Fujita, K., Kuroshima, H., Hattori, Y., & Takahashi, M. (in press). Social intelligence in capuchin monkeys (*Cebus apella*). In: S. Itakura & K. Fujita (Eds.), Origins of the social mind. Springer Verlag.
Fujita, K., Nakamura, N., Sakai, A., Watanabe, S., & Ushitani, T. (in press). Amodal completion and illusory perception in birds and primates. In Lazareva, O., Shimizu, T., & Wasserman, E. (eds.), How animals see the world: Behavior, biology, and evolution of vision. Oxford University Press.
藤田朱雀・道方芳堂・岡田薪子（2007）．書―中国の部―　書学研究舎
藤原勝紀（2008）．教育心理臨床パラダイムの提案　藤原勝紀（編）教育心理臨床パラダイム　至文堂 pp.35-43.
船橋新太郎（2007）．感情の神経科学　藤田和生（編）感情科学　京都大学学術出版会 pp.85-110.
Funahashi, S.（2007）. General-purpose working memory system and functions of the dorsolateral prefrontal cortex. N. Osaka, R.H. Logie, & M. D'Esposito (Eds.), *The Cognitive Neuroscience of Working Memory: Behavioural and Neural Correlates*. Oxford University Press, pp. 213-229.
Funahashi, S. (Ed.)（2007）. *Representation and Brain*. Springer Verlag, Tokyo, pp. 1-350.
Funahashi, S.（2007）. The prefrontal cortex as a model system to understand representation and processing of information. S. Funahashi (Ed.), *Representation and Brain*. Springer Verlag, Tokyo, pp. 311-336.
厳 平（印刷中）. 三高の見果てぬ夢―中等・高等教育成立過程と折田彦市―　思文閣出版
原清治・山内乾史・杉本均（編著）（2007）. 教育の比較社会学（増補版）　学文社
八田幸恵（印刷中）. 国語の学力と読解力―「自分の考え」とは何か　田中耕治（編著）学力テストを読みとく　日本標準
八田幸恵（印刷中）. 松崎運之助と夜間中学―仲間と語り合いながら文字を学ぶ　田中耕治（編著）続・時代を拓いた教師たち　日本標準
八田幸恵（印刷中）. 国語科のカリキュラム　田中耕治（編著）よくわかるカリキュラム　ミネルヴァ書房
林美里（2007）．物の操作と道具使用の発達　京都大学霊長類研究所（編），霊長類進化の科学　京都大学学術出版会　pp. 233-245.
林 創（2007）. 発達の理論―発達を見つめる枠組み　藤田哲也（編）絶対役立つ教育心理学―実践の理論，理論を実践―　ミネルヴァ書房　pp. 117-131.
林 創（2008）. 再帰的事象の認識とその発達に関する心理学的研究　風間書房
平松朋子（2007）．スクールカウンセラーとしての実践体験から　藤原勝紀（編）　現代のエスプリ別冊 教育心理臨床パラダイム　至文堂　pp.258-259.
家島明彦（印刷中）. 青年期の自己形成とマンガの影響　榎本博明（編）生涯発達心理学へのアプローチ（シリーズ自己心理学 第２巻）　金子書房.
池田尊司・苧阪直行（2008）．色のワーキングメモリの脳内表現　苧阪直行（編）ワーキングメモリの脳内表現　京都大学学術出版会　pp.29-42.
生駒佳也（2007）. 第８章 第４節 戦争体制のなかで・第９章 戦後の民主化と経済成長．石躍胤央・北條芳隆・大石雅章・高橋啓・生駒佳也（編）徳島県の歴史　山川出版社　pp. 250-284.
生駒佳也（2007）. 第８章 第４節 戦争体制のなかで・第９章 戦後の民主化と経済成長．石躍胤央・北條芳隆・大石雅章・高橋啓・生駒佳也（編）徳島県の歴史　山川出版社　pp. 250-284.
石井英真（2007）．子どもの内面世界を育てる評価の方法――梶田叡一の場合――　田中耕治（編著）人物で綴る戦後教育評価の歴史　三学出版　pp.168-183.
石井英真（2008）．学力を育てる授業　田中耕治、井ノ口淳三（編著）学力を育てる教育学　八千代出版 pp.103-124.
石井英真（印刷中）算数・数学の学力と数学的リテラシー――PISA の提起するものをどう受け止めるか――アメリカにおける学力向上政策の教訓――アカウンタビリティを民主的な教育改革の力に――

田中耕治（編著）学力テストを読みとく　日本標準
石井英真（印刷中）浜之郷小学校と学びの共同体――学校を改革するとはどういうことか――　田中耕治（編著）　続・時代を拓いた教師たち　日本標準
石井英真（印刷中）　第５章　教科書，算数・数学科のカリキュラム，アメリカ合衆国のカリキュラム　田中耕治（編著）よくわかるカリキュラム　ミネルヴァ書房
Ishii, Y. (in press). Negative communication as social skill. In D. Chadee and A. Kostic (Eds.), *Research in social psychology*. University of West Indies Press.
板倉昭二（2007）．心を発見する心の発達　京都大学学術出版会
板倉昭二（2007）．感情の発達　藤田和生（編著）感情科学の展望　京都大学出版会　pp.113-141
Itakura, S, Okanda, M., & Moriguchi, Y. (in press). Discovering mind: development of mentalizing in human children.S. Itakura & K. Fujita (Eds.), *Origins of social mind: Evolutionary and developmental View*. Springer.
Itakura, S. & Fujita, K. (Eds.). (in press). *Origins of social mind: Evolutionary and developmental view*. Springer.
伊藤良子（2007）．感情と心理臨床―今日の社会状況をめぐって―　藤田和生（編）感情科学　京都大学出版会　pp.307-330.
角野善宏（2007）．第10章　感情と描画　藤田和生（編）感情科学　京都大学学術出版会　pp.259-283.
角野善宏（2007）．第１章　総説―夢分析における夢の意味・意義，第４章　角野善宏による夢の解釈：コメント（川嵜克哲との対談）　川嵜克哲（編）　セラピストは夢をどうとらえるか―五人の夢分析家による同一事例の解釈　誠信書房　pp.9-29, pp.95-140.
角野善宏（2007）．3.2 精神病圏を中心に　桑原知子（編）臨床心理学 朝倉心理学講座 9　朝倉書店　pp.69-76.
角野善宏（2007）．コラム：箱庭とアイテム　岡田康伸・皆藤章・田中康裕（編）京大心理臨床シリーズ第４巻 箱庭療法の事例と展開　創元社　pp.58-59.
皆藤章（2007）．よくわかる心理臨床　ミネルヴァ書房
皆藤章（2008）．臨床実践指導者養成のための大学院教育体制の現状と課題　藤原勝紀（編）現代のエスプリ別冊　教育心理臨床パラダイム　至文堂　pp.155-158.
金沢晃・隈元みちる・久米禎子・桜井良行・高木綾・古野裕子（2007）．第Ⅲ部用語集　倉光修・桑原知子（編）カウンセリング・ガイドブック　岩波書店　pp.229-323.
柏倉康夫・佐藤卓己・小室広佐子（2007）．日本のマスメディア　日本放送出版協会
加藤奈奈子（2007）．箱庭という「私」と対峙すること 岡田康伸・皆藤章・田中康裕（編）京大心理臨床シリーズ第４巻 箱庭療法の事例と展開　創元社　pp.140-150.
河合俊雄（2007）．分析的アプローチによる初回面接　伊藤良子（編）　現代のエスプリ別冊・臨床心理面接研究セミナー　志文堂　pp. 43-51.
河合俊雄（2007）．河合俊雄による夢の解釈：コメント．川嵜克哲（編）　セラピストは夢をどうとらえるか：五人の夢分析家による同一事例の解釈　誠信書房　pp. 226-262.
Kawai, T. (2007). Jung in Japanese academy. In: Casement, A. (Ed.), *Who owns Jung?* Karnac: London. pp. 5-18.
Kikuzawa, S. (2007). A study on Rousseau's "Nature": A text and a reader. In S. Suzuki & Ch. Wulf (Eds.) *Mimesis, poiesis, and performativity in education* (pp. 44-53). Waxmann Verlag, Münster/Berlin/München/New York.
木村裕（印刷中）．社会科の学力と思考力・判断力―問題分析を通して見えてくる学力実態―　田中耕治（編著）（仮）学力テストを読み解く　日本標準
木村裕（印刷中）．きのくに子どもの村学園と自由学校の創造―自由な子どもと教師が育つ学校づくりをめざして―　田中耕治（編著）（仮）続・時代を拓いた教師たち―戦後教育実践からのメッセージ―　日本標準
木村裕（印刷中）．外国語科のカリキュラム，保健体育科のカリキュラム，環境教育のカリキュラム，国際理解教育のカリキュラム，市民性教育のカリキュラム　田中耕治（編著）よくわかるカリキュラム　ミネルヴァ書房
木之下隆夫（2007）．心理臨床の場（フィールド）を一事例としてみる視点－フィールドの経験と課題－

木之下隆夫（編）　日本の心理臨床の歩みと未来－現場からの提言－　人文書院　pp. 9-25, 285-286.
木之下隆夫（2008）．愛知県豊橋市における教育支援の取り組み．藤原勝紀（編），『教育心理臨床パラダイム』．至文堂. pp.124-126.
木之下隆夫（印刷中）．治療者のイメージ体験がひらかれるとき－面接構造の新たな視点を基本として－藤原勝紀・皆藤 章・田中康裕（編）京大心理臨床シリーズ第6巻 心理臨床における臨床イメージ体験　創元社　pp 476-488.
北山忍・内田由紀子・新谷優（2007）．文化と感情：現代日本に注目して　藤田和生（編）感情科学　京都大学学術出版会　pp173-210
Kitayama, S., Duffy, S., & Uchida, Y.（2007）．Self as cultural mode of being. In S. Kitayama & D. Cohen(Eds.), Handbook of cultural psychology. Guilford Press. pp 136-174.
駒込武（2007）．「御真影奉戴」をめぐるキリスト教系学校の動向―天皇神格化とキリスト教主義のはざま―　富坂キリスト教センター（編）十五年戦争期の天皇制とキリスト教　新教出版社　pp. 569-612.
駒込武（2007）．国際政治の中の植民地支配　川島真・服部龍二（編）東アジア国際政治史　名古屋大学出版会　pp. 179-210.
駒込武（2007）．「忘却された連関」を見いだすために―日本軍「慰安婦」問題と私―　竹本修三・駒込武（編）「偏見・差別・人権」を問い直す　京都大学出版会　pp. 77-96.
駒込武（2007）．在台軍部と「反英運動」―ジュノー号事件を中心に―　松浦正孝（編）昭和・アジア主義の実像―帝国日本と台湾・「南洋」・「南支那」　ミネルヴァ書房　pp. 259-285.
小西行郎・遠藤利彦（印刷中）．小児科の活動と発達心理学　丹野義彦・利島保（編）医療心理学を学ぶ人のために　世界思想社
小山静子（2008）．教育の近代化とジェンダー　辻本雅史（編）　教育の社会史　放送大学教育振興会　pp.183-193
小山静子（2008）．女学生の誕生　辻本雅史（編）　教育の社会史　放送大学教育振興会　pp.195-208
子安増生（2007）．経済活動に関する信念と知識―仮説検証的思考　子安増生・西村和雄（編）経済心理学のすすめ　有斐閣　pp. 215-238.
子安増生（2007）．イントロダクション―経済学と心理学の協同に向けて　子安増生・西村和雄（編）経済心理学のすすめ　有斐閣　pp. 1-12.
子安増生（2007）．「心の理論」とメタファー・アイロニー理解の発達　楠見孝（編）メタファー研究の最前線　ひつじ書房　pp. 61-80.
子安増生（2007）．7章 心を読み取る―心の理論の発達　内田伸子・氏家達夫（編）発達心理学特論　放送大学教育振興会　pp.95-107.
子安増生（2007）．9章 才能をはぐくむ―多重知能理論と教育　内田伸子・氏家達夫（編）発達心理学特論　放送大学教育振興会　pp.127-137.
子安増生（2007）．12章 メディアからの学び―メディア環境と発達　内田伸子・氏家達夫（編）発達心理学特論　放送大学教育振興会　pp.167-179.
子安増生・田村綾菜・溝川 藍（2007）．感情の成長：情動調整と表示規則の発達　藤田和生（編）　感情科学　京都大学学術出版会　pp.143-171.
窪田知子（2007）．仮説実験授業を通してみる教育評価論―板倉聖宣の場合―　田中耕治（編）人物で綴る戦後教育評価の歴史　三学出版　pp. 123-136.
窪田知子（印刷中）．発達検査の歴史的展開―発達検査のルーツをたどる―　田中耕治（編著）（仮）学力テストを読み解く　日本標準
窪田知子（印刷中）．青木嗣夫と与謝の海養護学校―子どもを発達の主人公としてとらえる―　田中耕治（編著）（仮）続・時代を拓いた教師たち―戦後教育実践からのメッセージ―　日本標準
窪田知子（印刷中）．技術・家庭科のカリキュラム，生活科のカリキュラム，表現教育のカリキュラム，メディア・リテラシー教育のカリキュラム，いのちの教育・性教育のカリキュラム　田中耕治（編著）よくわかるカリキュラム　ミネルヴァ書房
倉光修・桑原知子（編著）（2007）．カウンセリング・ガイドブック　岩波書店

黒江ゆり子（2007）．エンパワメントモデル　安酸史子（編）　ナーシンググラフィカ 成人看護学：セルフマネジメント(第1版2刷)　MCメディカ出版　pp.34-37.
黒江ゆり子（2007）．病みの軌跡　安酸史子（編）　ナーシンググラフィカ 成人看護学概論(第1版4刷)　MCメディカ出版　pp.205-217.
黒江ゆり子（2007）．看護を学ぶにあたって、代謝疾患患者の看護　黒江ゆり子・高澤和永・吉岡成人他4名（共著）　系統看護学講座 専門 10 内分泌・代謝(第 12 版第 1 刷)　医学書院　pp.2-17, pp.211-261.
日下部達哉（2007）．バングラデシュ農村の初等教育制度受容　東信堂
楠見孝(編著)（2007）．メタファー研究の最前線　ひつじ書房
楠見孝(2007)．リスク認知の心理学　子安増生・西村和雄(編)経済心理学のすすめ　有斐閣　pp.215-238.
楠見孝・上市秀雄（印刷中）．人は健康リスクをどのようにみているか　吉川肇子（編）健康リスクコミュニケーションンの手引き　ナカニシヤ出版.
楠見孝・米田英嗣（2007）．感情と言語　藤田和生（編）感情科学　京都大学学術出版会　pp.55-84.
楠山研（2008）．中国　清水一彦・山内芳文他（著）国際化と義務教育　全国海外教育事情研究会　pp. 141-150.
桑原知子　（編著）　（2007）．臨床心理学 朝倉心理学講座9　朝倉書店
桑原知子（2007）．臨床心理アトラスにおける“つなぐ”機能ー心理臨床における査定を支えるもの　佐藤忠司（編）　臨床心理査定アトラス法への招待　培風館　pp.162-179.
桑原知子（2007）．スクールカウンセラーのための教育研修の現状と課題　藤原勝紀（編）　エスプリ別冊 教育心理臨床パラダイム　至文堂　pp.131-135.
松田憲（印刷中）．単純接触効果と概念形成　宮本聡介・太田信夫（編）単純接触効果研究の最前線　北大路書房
松田憲（印刷中）．広告の効果　宮本聡介・太田信夫（編）　単純接触効果研究の最前線北大路書房.
松沢哲郎（2008）　チンパンジーから見た世界．コレクション認知科学12，東京大学出版会，pp248.
松嶋秀明・徳田治子・荒川歩・浦田悠・やまだようこ（2007）．協働の学びを活かした語りデータの分析合宿　やまだようこ（編著）質的研究の方法　新曜社　pp. 238-251.
松下佳代（2007）．パフォーマンス評価　日本標準
松下佳代（2007）．パフォーマンス評価による学びの可視化　秋田喜代美・藤江康彦（編）はじめての質的研究法―教育・学習編―　東京図書　pp. 275-295.
松下佳代（2007）．数学リテラシーと授業改善―PISAリテラシーの変容とその再文脈化―　日本教育方法学会（編）教育方法36 リテラシーと授業改善　図書文化　pp. 52-65.
松下佳代（2007）．パフォーマンスと学力―算数・数学学力調査で何をどう評価するか？―　耳塚寛明・牧野カツコ（編著）閉ざされた大人への道―学力とトランジッションの危機―（お茶の水女子大学21世紀COEプログラム 誕生から死までの人間発達科学 第4巻）　金子書房　pp. 25-46.
溝上慎一（印刷中）．授業・授業外学習による学習タイプと知識・技能の獲得・大学教育満足度との関連性―単位制度の実質化を見据えて―　山田礼子(編)転換期の高等教育における学生の教育評価　東信堂
森口佑介（印刷中）．幼児における社会的感染　大藪泰（編）　現代心理学入門―進化と文化のクロスロード　川島書店.（トピック執筆）
森下稔・鴨川明子（編著）（2007）．理工系学生のための日本語表現法―大学における初年次教育―　東信堂
森田健一（印刷中）．イメージにおけるにおい体験　藤原勝紀・皆藤章・田中康裕（編）京大心理臨床シリーズ第6巻 心理臨床における臨床イメージ体験　創元社
永山智之（印刷中）．コラム：イメージ体験としての二者関係・三者関係　藤原勝紀・皆藤章・田中康裕（編）京大心理臨床シリーズ第6巻 心理臨床における臨床イメージ体験　創元社　pp.196-197.
中西美貴（印刷中）．第十六章 台湾抗日運動における東京台湾留学生の役割と女性の位置　蘭信三（編）日本帝国をめぐる人口移動の国際社会学をめざして　不二出版.
根本真弓（印刷中）．空想ー沈黙の中から生まれたものー　藤原勝紀・皆藤章・田中康裕（編）京大心理臨床シリーズ第6巻 心理臨床における臨床イメージ体験　創元社

西平直（印刷中）．概念と方法　末木文美士（編）　岩波講座哲学 第13巻 宗教
西平直（印刷中）．ライフサイクルの二重性―矛盾・逆説・循環　武川正吾・西平直（編）　シリーズ死生学第三巻 死とライフサイクル
西平重喜・岡田直之・佐藤卓己・宮武実和子（2007）．輿論研究と世論調査　新曜社
西嶋雅樹（2007）．適応指導教室における個と集団　岡田康伸・河合俊雄・桑原知子（編）京大心理臨床シリーズ第5巻 心理療法における個と集団　創元社　pp.338-350.
西岡加名恵（2007）．教育評価を活かした授業づくり　田中耕治（編）よくわかる授業論　ミネルヴァ書房　pp. 108-119.
西岡加名恵（2007）．コラム 総合的な学習の実践　荒木紀幸（編著）教育心理学の最先端―自尊感情の育成と学校生活の充実　あいり出版　pp. 28-29.
西澤伸太郎（印刷中）．関係性におけるイメージ体験としての『響き』　藤原勝紀・皆藤章・田中康裕（編）京大心理臨床シリーズ第6巻 心理臨床における臨床イメージ体験　創元社　pp. 443-452.
布柴靖枝（2007）．ウオーミングアップ　樋口和彦・岡田康伸（編）　現代のエスプリ別冊特集号　イメージによるグループワークの実際―ファンタジーグループの体験から　至文堂　pp.167-171.
布柴靖枝（2007）．家族療法の立場から見た心理教育　村尾泰博（編）　現代のエスプリ 483号 青年期自立支援の心理教育　至文堂　pp.125 - 134.
岡田康伸・河合俊雄・桑原知子(編著)（2007）．京大心理臨床シリーズ第5巻 心理療法における個と集団　創元社
Okada, K.（2008）．*Du retablissement de l'autonomie.*　Editions Matrice, pp1-208
冲永隆子（2007）．バイオエシックスと死生ケア教育の可能性―死の看取り・ターミナル・ケアを中心に　特集宗教教育の地平　国際宗教研究所（編）　現代宗教２００７　秋山書店　pp. 277-299.
Ono, F. (2007). Subjunktive-mimetic performance and the art of multiplicity. In S. Suzuki & Ch. Wulf (Eds.) *Mimesis, poiesis, and performativity in education* (pp. 81-94). Waxmann Verlag, Münster/Berlin/München/New York.
苧阪直行（編著）（2008）．ワーキングメモリの脳内表現　京都大学学術出版会
Osaka, N., Logie, R., & D'Esposito, M. (Eds.) (2007). *Cognitive neuroscience of working memory.* Oxford University Press.
Osaka, N., Rentschler, I., & Biederman, I. (Eds.) (2007). *Object recognition, attention & action.* Springer Verlag.
大塚義孝・村山正治・滝口俊子・藤原勝紀（2008）．座談会：教育支援における学校臨床心理士の意義を考える―スクールカウンセラー事業のさらなる展開を求めて―　藤原勝紀（編）　教育心理臨床パラダイム　至文堂　pp.9-34.
大塚結喜・苧阪直行（2008）．高齢者のワーキングメモリ　苧阪直行（編著）ワーキングメモリの脳内表現　京都大学学術出版会　pp. 103-122.
大塚雄作（2007）．授業評価とアカウンタビリティ　山地弘起（編著）授業評価活用ハンドブック　玉川大学出版部　pp. 80-101.
大塚雄作（2007）．授業評価アンケート項目の特徴を探る　山地弘起（編著）授業評価活用ハンドブック　玉川大学出版部　pp. 139-165.
大塚雄作（2007）．Q＆A　山地弘起（編著）授業評価活用ハンドブック　玉川大学出版部　pp. 199-213.
大家聡樹（印刷中）．臨床イメージからみた〈超越〉―「自分を超えた何か」の体験の語りを手がかりに　藤原勝紀・皆藤章・田中康裕（編）京大心理臨床シリーズ第 6 巻 心理臨床における臨床イメージ体験　創元社
大山泰宏（2007）．グループワークにおける差異と器　岡田康伸・河合俊雄・桑原知子（編）京大心理臨床シリーズ第5巻 心理臨床における個と集団　創元社　pp. 164-173.
大山泰宏（2007）．臨床心理学の対象―実存的な課題　海保博之（監修）・桑原知子（編）朝倉心理学講座9 臨床心理学　朝倉書店　pp. 91-99.
大山泰宏（2007）．授業評価の発想と歴史　授業評価活用ハンドブック　東信堂　pp. 11-29.
大山泰宏（2007）．コラム 日本での授業評価の歴史　授業評価活用ハンドブック　東信堂　pp. 23-25.
大山泰宏（2007）．第5章 大山泰宏による夢の解釈：コメント（川嵜克哲氏との対談）　川嵜克哲（編著）

セラピストは夢をどうとらえるか―五人の夢分析家による同一事例の解釈　誠信書房　pp. 141-180.
尾崎真奈美（2007）．自分をこえていく心理学　ナカニシヤ出版
齋木潤（2007）．物体、属性に対する注意　大山 正・今井省吾・和氣典二・菊地 正（編）　感覚知覚心理学ハンドブック増補版　誠信書房　pp. 64-72.（分担執筆）
齋木潤（2007）．視覚認知：視覚科学のフロンティア　大津由紀雄・波多野誼余夫・三宅なほみ（編）　認知科学への招待２　研究社　pp. 60-77.
Saiki, J. (2007). Representation of objects and scenes in visual working memory in human brain. In S. Funahashi (Ed.), *Representation and brain*. Springer－Verlag. pp. 103-119.
Saiki, J. (2007). Feature binding in visual working memory. (pp. 173-185) In N. Osaka, I. Rentschler, & I. Biederman (Eds.), *Object recognition, attention & action*. Springer-Verlag.
酒井律子（印刷中）．　心理臨床場面におけるイメージ体験の共有に関する一考察－比喩によるイメージ表現を通して－　藤原勝紀・皆藤章・田中康裕（編）京大心理臨床シリーズ第６巻 心理臨床における臨床イメージ体験　創元社
坂田浩之・松本聡子・駿地眞由美・石原宏・藤本麻起子・小橋正典・高木綾・野口寿一・福田斎・梅村高太郎（2007）．個人心理療法と集団心理療法の統合を目指して–不登校児童通所施設での実践から　岡田康伸・河合俊雄・桑原知子（編）　京大心理臨床シリーズ第 5 巻 心理療法における個と集団　創元社　pp64-76.
Sakurai, R, & Aoyagi S. (in press). *UNESCO's efforts in promoting community-based learning—Field offices' activities on community learning centres (CLCs) and community multimedia centres (CMCs)*. Paris, France: UNESCO.
櫻井芳雄（2008）．脳の情報表現を見る　京都大学学術出版会
Sakurai, Y. (2007). How can we detect ensemble coding by cell assembly. In Funahashi, S. (Ed.), *Representation and Brain*. Springer, pp.249-270.
Sakurai, Y. (2007). Brain-machine interface to detect real dynamics of neuronal assemblies in the working brain. In Wu, J.L., Ito, K., Tobimatsu, S., Nishida, T. & Fukuyama, H. (Eds.), *Complex Medical Engineering*. Springer, pp.407-412.
櫻井芳雄・八木透・小池康晴・鈴木隆文（2007）．ブレイン－マシン・インタフェース最前線－脳と機械を結ぶ革新技術－　工業調査会
佐藤卓己 (2008). テレビ的教養－一億博知化の系譜　NTT 出版
佐藤卓己 (2008). 放送教育の時代―もうひとつの放送文化史　NHK 放送文化研究所（編）現代社会とメディア・家族・世代　新曜社
佐藤卓己 (2008). キャッスル事件をめぐる＜怪情報＞ネットワーク　猪木武徳（編）戦間期日本の社会集団とネットワーク　NTT 出版
佐藤卓己 (2008).『8 월 15 일의 신화 일본 역사 교과서, 미디어의 정치학』, 출간일 ：2007 년 08 월 06 일（『八月一五日の神話』の韓国語版）
佐藤卓己・井上義和（編）(2008). ラーニング・アロン―通信教育のメディア学　新曜社
佐藤卓己・孫安石（編）(2007). 東アジアの終戦記念日―敗北と勝利のあいだ　ちくま新書
Sato, T., Yasuda, Y., Kido, A., Arakawa, A., Mizoguchi, H., & Valsiner, J. (2007). Sampling reconsidered: Personal histories-in-the-making as cultural constructions. In A. Rose & J. Valsiner (Eds.), *Cambridge Handbook of Socio-Cultural Psychology* (pp. 82-106). Cambridge University Press.
Sato, T., Yasuda, Y., Kido, A., Arakawa, A., Mizoguchi, H., & Valsiner, J. (2007). Sampling Reconsidered : Personal histories-in-the-making as cultural constructions. Rosa, A., & Valsiner, J. (Eds.) . Cambridge Handbook of Socio-Cultural Psychology. Cambridge University Press. pp.82-106.
清家理（印刷中）．急性期病院からの障害のある人の在宅支援とストレングスパワーアプローチ　浅野仁（編）　福祉実践の未来を拓く　中央法規
清水亜紀子（印刷中）．「体験の語り」においてイメージが果たす機能－「自我体験の語り」に現われるイ

メージを素材にして－　藤原勝紀・皆藤章・田中康裕（編）京大心理臨床シリーズ第6巻 心理臨床における臨床イメージ体験　創元社
荘島幸子（2007）．＜私＞の＜当事者＞試論　宮内洋・今尾真弓（編）あなたは当事者ではない―＜当事者＞をめぐる質的心理学研究　北大路書房　pp. 45-51.
荘島幸子（2007）．性に揺らぎを持つ人が語り始めるとき―ボトムアップの契機として　サトウタツヤ（編）ボトムアップな人間関係―心理・教育・福祉・環境・社会の12の現場から　東信堂　pp. 128-145.
Sugiman, T.（2008）．A theory of construction of norm and meaning: Osawa's theory of body. In T. Sugiman, K.J. Gergen, W. Wagner, & Y. Yamada (Eds.), *Meaning in action: Constructions, narratives, and representations.* Tokyo: Springer, 135-148.
Sugiman, T., Gergen, K.J., Wagner, W., & Yamada, Y.（2008）．*Meaning in action: Constructions, narratives, and representations.*　Tokyo: Springer.
Sugiman, T., Gergen, K.J., Wagner, W., & Yamada, Y.（2008）．The social turn in the science of human action. In T. Sugiman, K.J. Gergen, W. Wagner, & Y. Yamada (Eds.), *Meaning in action: Constructions, narratives, and representations.* Tokyo: Springer. pp. 1-20.
杉本　均（2007）．シンガポールの教育改革　大桃敏行・上杉孝實・井ノ口淳三・植田健男（編）教育改革の国際比較　ミネルヴァ書房　pp. 127-144.
杉本　均（2008）．多文化社会における教育的受容と排除　山内乾史・原清治（編著）教育・訓練と職業の比較社会学　ミネルヴァ書房
Suzuki, S.（2007）．Brush calligraphy. Mimesis, and poiesis in rinsho. In Y. Imai & Ch. Wulf (Eds.) *Concepts of aesthetic education: Japanese and European perspektives* (pp. 149-161). Waxmann Verlag, Münster/Berlin/München/New York.
鈴木晶子・小野文生（2007）．喩えの詩学　楠見孝（編）メタファー研究の最前線　ひつじ書房　pp. 503-521.
Suzuki, S., & Wulf, Ch.（2007）．*Mimesis, poiesis, and performativity in education.* Waxmann Verlag, Münster/Berlin/München/New York.
平知宏（印刷中）．第18章 比喩の親しみやすさが文章読解過程に及ぼす影響　楠見孝（編）メタファー研究の最前線　ひつじ書房　pp. 369-384.
Takahashi, Y.（2007）．Risk Communication in the Case of Medical Treatment Conditions. In S. Suzuki & Ch. Wulf (Eds.) *Mimesis, poiesis, and performativity in education* (pp. 210-216). Waxmann Verlag, Münster/Berlin/München/New York.
高見　茂（印刷中）．第1部 教育法規・政策の基礎，第7部 教育行財政に関する法制度・政策　高見　茂・開沼太郎（編）教育法規・政策スタートアップキット　昭和堂
高瀬泉（2007）．性犯罪，家庭内暴力　佐藤喜宣（編）　臨床法医学テキスト（仮称）　中外医学社
田中史子（印刷中）．物語についての物語―イメージ体験としての物語　藤原勝紀・皆藤章・田中康裕（編）京大心理臨床シリーズ第6巻 心理臨床における臨床イメージ体験　創元社
田中耕治（2007）．I　授業づくりの基礎理論　田中耕治（編著）よくわかる授業論　ミネルヴァ書房　pp. 2-23.
田中耕治（2007）．序章 戦後教育評価論はどのように展開されてきたか　田中耕治（編著）人物で綴る戦後教育評価の歴史　三学出版　pp. 1-9.
田中耕治（2007）．5章 教育評価　荒木紀幸（編著）教育心理学の最先端　あいり出版　pp. 105-121.
田中毎実（印刷中）．研究大学におけるFDとFD地域連携―京都大学の場合　東北大学高等教育開発推進センター（編）研究・教育のシナジーとFDの将来　東北大学出版会
田中康裕（2007）．神経症圏を中心に　桑原知子（編）　朝倉心理学講座9 臨床心理学　朝倉書店 pp. 60-68.
田中康裕（2008）．ユングの「ファルスの夢」―そのイメージ体験と思惟　藤原勝紀・皆藤章・田中康裕（編）　京大心理臨床シリーズ第6巻 心理臨床における臨床イメージ体験　創元社　pp.69-80.
谷村綾子（印刷中）．特別支援教育　高見茂・開沼太郎・出口英樹・宮村裕子・大城愛子・古田薫・谷村綾子（編）（仮）教育法規・政策スタートアップキット　昭和堂
友久茂子（印刷中）．心理療法におけるイメージの意味　現代の青少年問題への対応について　甲南大学総合研究所 叢書97　pp.39-59.

東畑開人（印刷中）．美的体験をめぐる面接の場について－風景・ブロット・三角形のイメージ体験を手がかりに　藤原勝紀・皆藤章・田中康裕（編）京大心理臨床シリーズ第６巻 心理臨床における臨床イメージ体験　創元社

土田陽子（2007）．青少年の性的被害と恋人からのDV被害の現状と特徴　財団法人日本性教協会（編）「若者の性」白書 第６回 青少年の性行動調査全国調査報告　小学館　pp. 122-144.

土田陽子（2007）．中等教育（高等女学校）和歌山県教育史編纂委員会（編）　和歌山県教育史 第１巻 通史編Ⅰ　（第３章３節 第４章２節 第５章２節 第６章２節）　和歌山県教育委員会　pp.212-225, 374-381, 543-547, 646-650.

辻河昌登（印刷中）．対人関係精神分析におけるイメージ　藤原勝紀・皆藤章・田中康裕（編）京大心理臨床シリーズ第６巻 心理臨床における臨床イメージ体験　創元社

辻本雅史（2008）．教育の社会史　（財）放送大学教育振興会（1・4・5・6・15各章）pp.3-6 ,11-27,.55-104,. 235-249

築山裕子（印刷中）．身体内部イメージにおけるいくつかの側面について―心臓病者の心臓イメージより　藤原勝紀・皆藤 章・田中康裕（編）　京大心理臨床シリーズ第６巻 心理臨床における臨床イメージ体験　創元社

浦田悠（印刷中）．実存的空虚について　榎本博明（編）シリーズ自己心理学 2 生涯発達心理学へのアプローチ　金子書房

浦田悠（印刷中）．心理臨床の諸理論　榎本博明（編）現代心理学の視点シリーズ 臨床心理学　ブレーン出版

渡部幹・小宮あすか（2007）．第９章　感情と集団行動――社会的適応の観点から――　藤田和生（編）感情科学　京都大学出版会．pp237-257.

渡部みさ（印刷中）．第４章　思春期における心理療法．永井撤・井上果子・神谷栄治（編）ライフサイクルの臨床心理学シリーズ 第２巻 思春期・青年期の臨床心理学　培風館

渡部みさ（印刷中）．心理臨床家のイメージ体験に関する一考察―箱庭制作の見守り手として　藤原勝紀・皆藤章・田中康裕（編）　京大心理臨床シリーズ 6 心理臨床における臨床イメージ体験　創元社

やまだようこ（2007）．喪失の語り―生成のライフストーリー――　新曜社

やまだようこ（編）（2007）．質的心理学の方法―語りをきく―　新曜社

やまだようこ（2008）．指さしはどのように発達するのか　内田伸子（編）よくわかる乳幼児心理学　ミネルヴァ書房　pp. 80-81.

やまだようこ（編）（印刷中）．人生と病いの語り　東京大学出版会

やまだようこ（印刷中）．たましいのイメージと循環する時間　武川正吾・西平直（編）死生学３巻 死とライフサイクル　東京大学出版会

やまだようこ・家島明彦・塚本朱里（2007）．ナラティヴ研究の基礎実習　やまだようこ（編）質的心理学の方法―語りをきく―　新曜社　pp. 202-222.

Yamada, Y. (2007). Opposite and coexistent dialogues: Repeated voices and the side-by-side position of self and other. In T. Sugiman, K. J. Gergen, W. Wagner, & Y. Yamada (Eds.), *Meaning in action: Constructions, narratives, and representations* (pp. 223-239). Springer-Verlag, Tokyo.

山本有恵（印刷中）．事例検討会におけるイメージ体験　藤原勝紀・皆藤 章・田中康裕（編）京大心理臨床シリーズ第６巻 心理臨床における臨床イメージ体験　創元社

山本尚代（印刷中）．コラム：イメージとしての身体　藤原勝紀・皆藤 章・田中康裕（編）　京大心理臨床シリーズ第６巻 心理臨床における臨床イメージ体験　創元社

Yamamoto, H., Ban H., Fukunaga M., Umeda M., Tanaka C. and Ejima Y. (in press). Large- and small-scale functional organization of visual field representation in the human visual cortex. Portocello T. A. and Velloti R. B. (Ed.), *Visual cortex: New research*. New York: Nova Science Publisher.

矢野智司（2008）．贈与と交換の教育学―漱石、賢治と純粋贈与のレッスン　東京大学出版会

安田裕子・サトウタツヤ（2007）．フィールドワークの論文指導　やまだようこ（編）質的心理学の方法　新曜社　pp. 224-236.

吉川左紀子（2007）．表情認知と感情　藤田和生（編）　感情科学　京都大学出版会　pp.35-54.

2．論文

*Adachi, I., & Fujita, K. (2007). Cross-modal representation of human caretakers in squirrel monkeys. *Behavioural Processes*, 74, 27-32.

*Adachi, I., Kuwahata, H., Fujita, K., Tomonaga, M., & Matsuzawa, T. (in press). Plasticity of ability to form cross-modal representations in infant Japanese macaques. *Developmental Science*.

赤沢真世（印刷中）．学力調査にみる日本の英語教育の現状と課題―「書くこと」の指導を中心に―　京都大学大学院教育学研究科・北京師範大学教育学院学術交流協定締結記念：日中教育学系合同シンポジウム論文集　2007年度：第6回京都大学大学院教育学研究科国際シンポジウム論文集

*Anderson, J. R., Hattori, Y., & Fujita, K. (in press). Quality before quantity: Rapid learning of reverse-reward contingency by capuchin monkeys (*Cebus apella*). *Journal of Comparative Psychology*.

*Anderson, J. R., Kuwahata, H., & Fujita, K. (2007). Gaze alternation during "pointing" by squirrel monkeys (*Saimiri sciureus*)? *Animal Cognition*, 10(2), 267-271.

*浅田剛正（印刷中）．描画法におけるセラピストの主体的関与について―風景構成法を用いた関与の多様性の検討から―　心理臨床学研究.

*Ashida, H., Yamagishi, N., & Anderson, S. J. (2007). The relative contributions of colour and luminance signals towards the visuomotor localisation of targets in human peripheral vision. *Experimental Brain Research*, 183, 425-434.

*ベッカー, C.（2007）．SOC の現状とスピリチュアル教育の意味　*Comprehensive Medicine*～ 全人的医療, 8(1), 23-52.

*ベッカー, C.（2007）．治癒力とスピリチュアリティ　*Mind-Body Science* 人体科学会会誌, 8-11 頁.

*Carvalho, M.K.,F.（印刷中）．Metacognitive judgments in a naturalistic setting: Monitoring performance in classroom tests. *International Journal of Psychology*.

Carvalho, S., Sousa, C. & Matsuzawa, T. (2007) . New nut-cracking sites in Diecke Forest, Guinea: An overview of the surveys, *Pan Africa News,* 14 (1), 11-13.

*江上園子・久津木文・小椋たみ子・中川佳弥子・板倉昭二（印刷中）．社会的随伴性に対する乳児の反応における月齢変化と性差の検討　心理学研究

遠藤利彦・伊藤匡（2007）．自閉症児の発達を促す環境づくり：あえて巻き込まれることと巻き込まれないこと　発達, 112, 77-88.

*遠藤利彦（印刷中）．アタッチメント理論の現在：特に臨床的問題との関わりにおいて　乳幼児医学心理学研究.

藤井陽奈子（2007）．教育の市場化と消費者行動　関西教育学会年報通巻,No.31,126-130

*藤田和生・高岡祥子・古見昌宏（2007）．イヌ（*Canis familiaris*）新生児における母親の匂い弁別　動物心理学研究, 57(2), 89-94.

*福田斎・伊藤良子・楠見孝・藤田潤・駿地眞由美・山本喜晴・井上嘉孝・築山裕子・西田麻衣子・松本拓磨（2008）．大学生の遺伝子診断に関する意思決定と支援ニーズとの関連　日本遺伝カウンセリング学会誌,28(2),33-41

Granier, N., Huynen, M., & Matsuzawa, T. (2007). Preliminary surveys of chimpanzees in Gouela area and Dere Forest, the Nimba Mountain Biosphere Reserve, Republic of Guinea. *Pan Africa News*, 14(2), 20-22.

*Grove, P., Ashida, H., Kaneko H., Ono, H. (in press). Interocular transfer of a rotational motion aftereffect as a function of eccentricity. *Perception*.

*Hagura, N., Takei, T, Hirose, S., Aramaki, Y., Matsumura, M. , Sadato, N. & Naito, E. (2007). Activity in the posterior parietal cortex mediates visual dominance over kinesthesia. *The Journal of Neuroscience*. 27(26):7047-53. s

*Hagura, N., Oouchida Y, Aramaki, Y., Okada, T., Matsumura, M. , Sadato, N. & Naito, E. (2007).

Visuo-kinesthetic perception of hand movement is mediated by cerebro-cerebellar interaction between left cerebellum and right parietal cortex." *Cerebral Cortex*. (in press)

花岡三賀 (印刷中). 自治体における学校統廃合の跡地利用—京都市中京区（番組小学校）の事例を中心に— 教育方法の探求.

*Hattori, Y., Kuroshima, H., & Fujita, K. (2007). I know you are not looking at me: Capuchin monkeys' (*Cebus apella*) sensitivity to human attentional states. *Animal Cognition*, 10(2), 141-148.

*Hayashi, M. (2007). Stacking of blocks by chimpanzees: developmental processes and physical understanding. *Animal Cognition*, 10, 89-103.

*Hayashi, H. (2007). Children's moral judgments of commission and omission based on their understanding of second-order mental states. *Japanese Psychological Research*, 49, 261-274.

林 創 (印刷中). 作為と不作為の理解に関する認知発達的研究（中間報告） 発達研究.

*日比野愛子・永田素彦 (印刷中). バイオテクノロジーをめぐるメディア言説の変遷 科学技術社会論研究, 5.

*Hiraishi, K., Yamagata, S., Shikishima, C., and Ando, J. (2008). Maintenance of genetic variation in personality through control of mental mechanisms: A test of trust, extraversion, and agreeableness. *Evolution and Human Behavior*, 29, 79-85.

*Hirose, N., Kihara, K., Mima, T., Ueki, Y., Fukuyama, H., & Osaka, N. (2007). Recovery from object substitution masking induced by transient suppression of visual motion processing: A transcranial magnetic stimulation study. *Journal of Experimental Psychology: Human Perception and Performance*, 33, 1495-1503.

*Hirokawa, J., Bosch, M., Sakata, S., Sakurai, Y., & Yamamori, T. (in press). Functional role of the secondary visual cortex in multisensory facilitation in rats. *Neuroscience*.

樋浦郷子 (2008). 植民地期朝鮮半島における初等教育経験—鄭淳泰氏への聞き取り記録から— 教育史フォーラム, 3,133-148.

*本多祐子・真継和子・伊藤ちぢ代・川村千恵子・池西悦子・西野弘員・堀田佐知子・中島美繪子・近田敬子 (2007). 看護大学生の学生生活における体験と変化—入学後6ヶ月間の実態から「向き合う力」の育成に向けて— 園田学園女子大学論文集, No.42, 153-166.

*Hockings, K., Humle, T., Anderson, J., Biro, D., Sousa, C., Ohashi, G. & Matsuzawa, T. (2007). Chimpanzees share forbidden fruit. *PLos ONE*, Issue 9, 1-4.

細尾萌子 (印刷中). 昭和2年の中学校入学者選抜方法改正時における二つの評価論の位相 —栃木県内中学校の昭和3年度入学考査の方針及び人物考査問題の分析を通じて— 関西教育学会年報.

*本所恵 (印刷中). スウェーデンの総合制高等学校における教育課程改革—履修方式の転換に焦点をあてて— カリキュラム研究.

*Ichihara-Takeda, S. & Funahashi, S. (2007). Activity of primate orbitofrontal and dorsolateral prefrontal neurons: Task-related activity during an oculomotor delayed-response task. *Experimental Brain Research*, 181, 409-425.

*Ichihara-Takeda, S. & Funahashi, S. (in press). Activity of primate orbitofrontal and dorsolateral prefrontal neurons: effect of reward schedule on task-related activity. *Journal of Cognitive Neuroscience*.

*Igarashi, Y. Kimura, Y. Spence, C. & Ichihara, S. (2008). The selective effect of the image of a hand on visuotactile interactions as assessed by performance on the crossmodal congruency task. *Experimental Brain Research*, 184 (1), 31-38.

*Ikeda, T., & Osaka, N. (2007). How are colors memorized in working memory? A functional magnetic resonance imaging study. *NeuroReport*, 18, 111-114.

*Imura, T., & Tomonaga, M., & Yagi, A. (2008). The effects of linear perspective on relative size discrimination in chimpanzees (*Pan troglodytes*) and humans (*Homo sapiens*). Behavioural Processes, 77, 306-312..

*Imura, T., Tomonaga, M., Yamaguchi, M. K., & Yagi, A. (in press). Asymmetry in the detection of

shapes from shading in infants. *Japanese Psychological Research.*
*Imura, T., Shirai, N., Tomonaga, M., Yamaguchi, M. K., & Yagi, A. (in press). Asymmetry on the perception of motion in depth by moving cast shadows. *Journal of Vision.*
*Imura, T., Yamaguchi, M.K., Kanazawa, S., Shirai, N., Otsuka, Y., Tomonaga, M., & Yagi, A. (in press). Infants' sensitivity to shading and line junctions. *Vision Research*
*猪原敬介・堀内孝・楠見孝 (2008). 文理解における文脈制約が下位目標・上位目標・因果的前提の推論に及ぼす効果. 認知心理学研究, 5(2),141-152.
*Inoue, S., & Matsuzawa, T. (2007). Working memory of numerals in chimpanzees. *Current Biology,* 17(23): R1004-R1005.
*石井英真(2007).「アメリカにおけるスタンダード設定論の検討——McRELデータベースに焦点を当てて——」『教育目標・評価学会紀要』第17号, 46-56頁.
石川裕之 (2007). 韓国の大学における早期入学者の受け入れ状況に関する考察 アジア教育研究報告, 8, 51-68.
*石岡学 (2007). 昭和初期の小学校職業指導にみる普通教育と職業世界との関係性 教育社会学研究, 第80集, 291-308.
板倉昭二 (2007). メタ認知の系統発生と個体発生 心理学評論, 50, 204-215.
*板倉昭二 (2007). 社会的シグナル検出者としての赤ちゃん：その発達的変化 日本周産期・新生児医学会雑誌, 43, 847-849.
Itakura,S. (2007). Gaze processing in nonhuman animals. In K.Lee et al. (Eds.), *Ontogeny of gaze processing in infants and children.* Lawrence Erlbaum.
*Itakura, S., Ishida, H., Kanda, T., Shimada, Y., Ishiguro, H., & Lee, K. (in press). How to build an intentional android: infants' imitation of a robot's goal-directed actions. *Infancy*
*井藤美由紀 (印刷中).「生と死の教育」を考える—生活に根ざした伝統的死生観から— ホスピスケアと在宅ケア, 16(1).
伊藤良子 (2007). 心理臨床を学ぶ—無意識に開かれた「場」との出会い 臨床心理学, 7(1), 3-7.
伊藤良子 (2007). 箱庭療法の不思議と可能性 臨床心理学, 7(5), 739-743.
伊藤良子 (2007). 河合隼雄という巨木 臨床心理学, 8(1), 3-7.
角野善宏 (2007). 箱庭療法の限界と効用—風景構成法と夢分析を併用した事例から 臨床心理学, 7(6), 758-764.
*Kaneko, T. (in press).「比較」がある認知現象に関する新たな視点をもたらす 動物心理学研究.
金子勉 (印刷中). 教育の多様性と学校のアクレディテーション 教育行財政論叢.
*金田みずき・苧阪直行 (2007). 言語性ワーキングメモリと長期記憶情報とのかかわりにおける実行系機能の役割 心理学研究, 78, 235-243.
*Kaneda, M. & Osaka, N. (in press). Role of anterior cingulate cortex during semantic coding in verbal working memory. *Neuroscience Letters.*
*Kano, F., Tanaka, M., & Tomonaga, M. (in press). Enhanced recognition of emotional stimuli in the chimpanzee (*Pan troglodytes*). Animal Cognition. *online* http://dx.doi.org/10.1007/s10071-008-0142-7.
*Kawahara, J., Nabeta, T., & Hamada, J. (2007). Area-specific attentional effect in the Delboeuf illusion. *Perception*, 36, 670-685.
河合俊雄 (2007). 箱庭療法の光と影 臨床心理学, 7(6), 744-748.
河合俊雄 (2008). 心理療法と超越性の弁証法 横山博 (編) 心理療法と超越性 新曜社 pp.103-125.
*Kawakami, K., Takai-Kawakami, K., Tomonaga, M., Suzuki, J., Kusaka, F., & Okai, T. (2007). Spontaneous smile and spontaneous laugh: An intensive longitudinal case study. Infant Behavior & Development, 30, 151-157.
川崎良孝 (章騫訳) (2007). 法体系上的公共図書館地位与図書館目的 (日美比較) 上海市図書館学会・日本図書館学会・上海図書館 (編・発行) 図書館立法与制度建設：第五届中日国際図書館学検討会論文集 (図書館法を考える：第5回国際図書館学セミナー論文集) pp. 37-46.

川崎良孝・村上加代子 (2008).「『図書館の原則 (*Intellectual Freedom Manual*, Office for Intellectual Freedom, ALA)』の変遷と図書館界」京都大学生涯教育学・図書館情報学研究, 第 7 号, p. 43-61.
川崎良孝「法体系上での公共図書館の位置づけと図書館の目的 (日米比較)」京都大学生涯教育学・図書館情報学研究, 第 7 号, p. 143-153.
木戸彩恵 (2007). 化粧行為を構成する文化―社会・文化的アプローチの視点から― 教育方法の探究, **10**, 57-63.
*Kihara, K., Hirose. N., Mima, T., Abe, M., Fukuyama, H., & Osaka, N. (2007). The role of left and right intraparietal sulcus in the attentional blink: Transcranial magnetic stimulation study. *Experimental Brain Research*, **178**, 135-140.
*Kihara, K., & Osaka, N. (2007). Early mechanisms of negativity bias: An attentional blink study. *Japanese Psychological Research*, **51**, 1-11.
*桐村豪文 (2007). 営利大学に対する政府による統制のあり方に関する考察―ニューヨーク州を対象として― 教育行財政研究, 34, 74-85.
桐村豪文 (2007). 株式会社立学校の特例措置化の政策形成過程 教育行財政論叢, **10**, 1-25.
近藤千寿枝 (印刷中). 『非公教育閾』についての考察―杉並区立和田中学校『夜スペ』からの検討― 教育行財政論叢.
*Kitaoka, A. Ashida, H. (2007). A variant of the anomalous motion illusion based upon contrast and visual latency. *Perception*, **36**, 1019-1035.
Kobayashi, A., Takase, I., Kitamura, T., Takamure, A., Nakagawa, T., Ohyagi, M., Morimoto, A., Yamasaki, S., Yamamoto, Y., Ohkubo, I., Nishi K. (2007). Immuno-histochemical characteristics of necrotic area in the old-infarction area of human brain by using of antibodies against cystatin C, Cathepsin B, puromycin sensitive alanyl-aminopeptidase and Prostaglandin D2 synthase - A preliminary examination. *Anil Aggrawal's Internet Journal of Forensic Medicine and Toxicology*, 8(1).
*小島隆次・米田英嗣・竹鼻圭子・森本雅博・楠見孝 (2007). 仮想空間を用いた英語前置詞教材の効果的利用 日本教育工学会論文誌, **31**(2), 219-228.
*Kojima, T. & Kusumi, T. (2007). Spatial term apprehension with a reference object's rotation in three-dimensional space. *Cognitive Processing*, published online in Springer (http://www.springerlink.com/content/1612-4782)DOI.10.1007/s10339-007-0181-z)
*Kojima, T. & Kusumi, T. (2007). Computing positions indicated by spatial terms in three-dimensional space. *Psychologia*, **50**, 203-223.
*Kojima, T. & Kusumi, T. (in press). Spatial term apprehension with a reference object's rotation in three-dimensional space. *Cognitive Processing*.
*小島隆次・竹鼻圭子・楠見孝 (2008). 視覚イメージを利用した英語前置詞 over の空間的意味学習における接触要素に関する実験的検討 日本教育工学会論文誌, 31 (Suppl.), 205-208.
*米田英嗣・楠見孝 (2007). 物語理解における感情過程：読者-主人公相互作用による状況モデル構築 心理学評論, **50**(2), 163-179.
*Komeda, H., Kawasaki, M., Tsunemi, K., & Kusumi, T. (in press). The differences between estimating protagonists' and evaluating readers' emotion in narrative comprehension. *Cognition and Emotion*.
*小宮あすか・渡部 幹・楠見孝 (2007). 個人-集団意思決定における後悔 心理学研究,**78**,165-172.
*小森政嗣・長岡千賀 (印刷中). ロボットに対する心理評価における社会的比較過程－ロボットのユーザへの選択的接近行動が好意評価に及ぼす影響－ 感性工学
近藤あき・齋木潤. (2008). 視覚性短期記憶における属性結合の記憶特性 Technical Report on Attention and Cognition (2008), No.21.
日下部達哉・森下稔・鴨川明子 (2007). 比較教育学におけるフィールドから結論への道程―方法論の比較― アジア教育研究報告, **8**, 69-84.
日下部達哉 (編集中). バングラデシュの農村内教育格差とグローバリゼーションからの影響 次世代フォーラム報告集 第 1 巻.

*黒江ゆり子（2007）．病いのクロニシティ（慢性性）と生きることについての看護学的省察　日本慢性看護学会誌, 1(1), 3-9.
黒江ゆり子（2007）．「クロニックイルネス」とは何か　看護学雑誌, 71(12), 1062-1070.
黒江ゆり子（2007）．世界の介入研究から何を学んだか－療養指導－　肥満と糖尿病, 7(1), 103-106.
*黒田真由美（印刷中）．小学校におけるALTと子どもの関わりの変化:子どもの発話に対するALTの応答に注目して　Step Bulletin.
*Kuroshima, H., Kuwahata, H., & Fujita, K.（in press）. Learning form other's mistakes in capuchin monkeys (*Cebus apella*). *Animal Cognition.*
*Kuroshima, H., Kuwahata, H., & Fujita, K.（in press）. Learning form other's mistakes in capuchin monkeys (*Cebus apella*). *Animal Cognition.*
*Kushiro, K., Taga, G. & Watanabe, H.（2007）. Frame of reference for visual perception in young infants during change of body position. *Experimental Brain Research,* 183, 523-529.
*楠見孝・米田英嗣・小島隆次（2007）．アバターの感情表出機能によるマルチユーザ仮想空間コミュニケーション・システムの改良　日本教育工学会論文誌, 31(4) ,415-424.
*楠見孝・栗山直子・齊藤貴浩・上市秀雄（印刷中）．進路意思決定における認知・感情過程：高校から大学への追調査に基づく検討　キャリア教育研究, 26
*楠見孝・小倉加奈代・三浦麻子・大井賢一・竹中文良（印刷中）．がん患者支援NPOにおけるICT活用国際CIO学会論文誌.
*Kutsuki, A., Egami, S., Ogura, T., Nakagawa, K., Kuroki, M., & Itakura, S.（2007）. Developmental changes of referential looks in 7-and 9-month-olds: a transition from dyadic to proto-referential looks. *Psychologia*, 50, 319-329.
桑原知子（2007）．教師にとっての自己カウンセリング　児童心理, 61(3),12-19.
桑原知子（2007）．A report of Japan Workshop on Antarctic Medical Research and Medicine 2006　南極資料(極地研究所発行), 51(2),241-249.
李 霞（印刷中）．日本の初等教育における道徳教育に関する一考察　日中教育学系合同シンポジウム論文集
Logie, R.H., Osaka, N., & D'Esposito, M.（2007）. Working memory capacity, control, components and theory. In N. Osaka, R. Logie, & M. D'Esposito (Eds.), *Cognitive Neuroscience of Working Memory.* Oxford: Oxford University Press, pp. xiii-xvii.
前田恭兵・長岡千賀・小森政嗣（2007）．カウンセラーとクライエントの身体同調傾向－心理カウンセリングビデオの解析－　信学技報, 107(308), (HCS2007-42～62), 13-18.
前原由喜夫（2007）．高次認知能力と作動記憶容量の個人差に関する検討：言語性および視空間性認知課題を用いて　京都大学大学院教育学研究科紀要, 53, 366-378.
前平泰志・渡邊洋子・武田一浩・元根朋美・柴原真知子・辻喜代司（印刷中）．京都大学シニアキャンパス（2005～2007年）—参加者の意識調査の分析から　第5章 新聞報道について　京都大学生涯教育学・図書館情報学研究.
前平泰志・渡邊洋子・武田一浩・元根朋美・柴原真知子・辻喜代司（印刷中）．京都大学シニアキャンパス（2005～2007年）—参加者の意識調査の分析から　第4章 応募はがき・感想分析　京都大学生涯教育学・図書館情報学研究.
*前川直哉（2007）．明治期における学生男色イメージの変容　教育社会学研究, 81,5-23.
*真継和子・池西悦子・堀田佐知子・近田敬子（2007）．生活援助技術学習における教育的方法論の検討　園田学園女子大学論文集, No.42,129-144.
*Matsuno, T., & Tomonaga, M.（2007）. An advantage for concavities in shape perception by chimpanzees (*Pan troglodytes*). *Behavioural Processes*, 75, 253-258.
*Matsuno, T., & Tomonaga, M.（in press）.Temporal characteristics of visibility in chimpanzees (*Pan troglodytes*) and humans (*Homo sapiens*) assessed using a visual masking paradigm. *Perception*
Matsuno, T., & Tomonaga, M.（2007）. Global and local visual processing by chimpanzees (*Pan troglodytes*). 基礎心理学研究, 25, 281-282.

松下佳代 (2007). コンピテンス概念の大学カリキュラムへのインパクトとその問題点—Tuning Projectの批判的検討— 京都大学高等教育研究, 13. 101-119.
松下佳代 (2007). カリキュラム研究の現在 教育学研究, 74(4), 567-576.
*Matsuyoshi, D., Hirose, N., Mima,T., Fukuyama, H., & Osaka, N. (2007). Repetitive transcranial magnetic stimulation of human MT+ reduces apparent motion perception. *Neuroscience Letters*, 429, 131-135.
*Matsuzawa, T. (2007) . Comparative cognitive development. *Developmental Science,* 10(1), 97-103.
Matsuzawa, T. (2007) . Assessment of the planted trees in Green Corridor Project. *Pan Africa News*, 14(2), 27-29.
*McCarthy, A., Itakura, S., Lee, K. & Muir, D. (in press). Gaze display when thinking depends o culture and context. *Journal of Cross-cultural Psychology.*
三宅浩子 (印刷中). 地方教育行政機関による教員養成支援事業の展開 教育行財政論叢.
*Miyata, H., & Fujita, K. (in press). Pigeons (*Columba livia*) plan future moves on computerized maze tasks. *Animal Cognition*. Published online.
溝上慎一 (2007). ポストモダン社会におけるアイデンティティの二重形成プロセスと心理学者の仕事 心理科学, 28 (1), 54-71.
溝上慎一 (2007). 青年期における自己対象関係の再構成と自己形成との接続—原田和典論文へのコメント— 青年心理学研究, 19, 97-101.
*Mizokawa, A., & Koyasu, M. (2007). Young children's understanding of another's apparent crying and its relationship to theory of mind. *Psychologia*, 50, 291-307.
*溝川藍 (2007). 幼児期における他者の偽りの悲しみ表出の理解 発達心理学研究, 18, 174-184.
*Moriguchi,Y., Lee K., & Itakura,S (2007). Social transmission of disinhibition in young children. *Developmental Science*, 10, 481-491.
*Moriguchi, Y. & Itakura, S. (in press). Young children's difficulty with inhibitory control in a social context. *Japanese Psychological Research.*
*Moriguchi, Y., Okanda, M. & Itakura, S. (in press). Young children's yes bias; How does it relate to verbal ability, inhibitory control, and theory of mind ?. *First Language.*
*Moriguchi, Y., Sanefuji, W., Itakura, S. (2007). Disinhibition transmits from television to young children. *Psychologia*, 50, 308-318.
*森本洋介 (2007). オンタリオ州におけるメディア・リテラシー教育導入過程の再考 カナダ研究年報, 27, 35-51.
森本洋介 (2008). 日中におけるメディア・リテラシー教育発展の考察 京都大学大学院教育学研究科・北京師範大学教育学院 日中教育学系合同シンポジウム 2007 論文集 附：日中教育学系合同シンポジウム報告書
*森下正修・近藤洋史・蘆田佳世・大塚結喜・苧阪直行 (2007). 読解力に対するワーキングメモリ課題の予測力：リーディングスパンテストによる検討 心理学研究, 77, 495-503.
*Morita, A., & Saito, S. (2007). The homophone effect in semantic access tasks using Kanji words: Its relation to the articulatory suppression effect. *Quarterly Journal of Experimental Psychology,* 60, 581-600.
*Morita, T., Itakura, S., Saito, D., Nakashita, S., Harada, T., Kochiyama, T., Sadato, N. (2008). The Role of the Right Prefrontal Cortex in Self-Evaluation of the Face: A Functional Magnetic Resonance Imaging Study. *Journal of Cognitive Neuroscience,* 20, 342-355.
*守田知代・板倉昭二・定藤規弘 (2007). 自己認知と自己評価の発達とその神経基盤 ベビーサイエンス, 22-30,
*Murai, C., & Tomonaga, M. (in press). Fear responses of Japanese monkeys to scale models. *Journal of Ethology.*
*鍋田智広・目久田純一・神垣彬子・松井剛太・朴信永・山崎晃 (印刷中). 幼児の連想的虚偽記憶における意味的知識の発達 心理学研究.
*Nagaoka, C., & Komori, M. (in press). Body movement synchrony in psychotherapeutic counseling,

body movement synchrony in psychotherapeutic counseling: A study using the video-based quantification method. IEICE Transactions.

長﨑励朗 (印刷中). 現代日本の幻影の公共圏　生涯教育学・図書館情報学研究.

*永田素彦・日比野愛子 (印刷中). バイオテクノロジー受容の規定因：意識調査に基づく日英独仏比較　科学技術社会論研究, 5.

*Nakamura, N., Watanabe, S., & Fujita, K. (in press). Pigeons perceive an assimilation illusion induced by the Ebbinghaus-Titchener circles. *Journal of Experimental Psychology: Animal Behavior Processes.*

*中西美貴 (2007). 宗主国民衆の日常における植民地理解—博覧会報道における台湾へのまなざしに注目して—　ソシオロジ, 52(3), 105-121.

西克治・高瀬泉 (2007). 死亡診断書（死体検案書）の記載留意事項と検死・検案について大津市医師会誌, 30(5), 20-27.

*Nomura, M., Sakurai, Y., & Aoyagi, T. (2007). Analysis of multi-neuroral activities by means of a kernel method. *Journal of Robotics and Mechatronics,* 19, 364-368.

野村光江・吉川左紀子 (2007). 視線認知による人物選好への影響—Gaze cueing を用いた検討—　信学技報, IEICE Technical Report, HCS2007-39(2007-09), 1-5

野村光江・吉川左紀子・Reginald B. Adams, Jr. (印刷中).「まなざしから心を読む」ことと文化　信学技報, IEICE Technical Report, HCS.

*小川絢子・子安増生 (印刷中). 幼児における「心の理論」と実行機能の関連性：ワーキングメモリと葛藤抑制を中心に　発達心理学研究.

小川絢子 (印刷中). 他者の誤った行動に対する幼児の理由づけにワーキングメモリが及ぼす影響　発達研究, 22.

*小原優貴 (2007). インドにおけるダリット女性のエンパワーメント—農村地域のインフォーマル教育を事例に　アジア教育研究報告, 8, 24-35.

Ohara, Y. (in press). The study on career decision-making of high school girl students in Japan. Graduate School of Education, Kyoto University and College of Education, Beijing Normal University, *Collection of Papers at Japan-China Joint Symposium on Educational Studies 2007.*

*Okada, T., Sato, W., Kubota, Y., Usui, K., Inoue, Y., Murai, T., Hayashi, T., & Toichi, M. (2008). Involvement of medial temporal structures in reflexive attentional shift by gaze. *Social Cognitive and Affective Neuroscience,* 3, 80-88.

*Okamoto-Barth, S., Kawai, N., Tanaka, M., & Tomonaga, M. (2007). Looking compensates for the distance between mother and infant chimpanzee. *Developmental Science,* 10, 172-182.

*Okamoto-Barth, S., Tomonaga, M., Tanaka, M., & Matsuzawa, T. (2008). Development of using experimenter-given cues in infant chimpanzees: Longitudinal changes in behavior and cognitive development. *Developmental Science*, 11, 98-108.

*Okanda, M. & Itakura, S. (2007). Do Japanese children say 'yes' to their mothers? A naturalistic study of response bias in parent-toddler conversations. *First Language*, 27, 421-428.

*Okanda, M. & Itakura, S. (2008). Children in Asian cultures Say Yes to Yes-No question: Common and Cultural differences between Vietnamese and Japanese Children. *International Journal of Behavioral Development,* 32, 131-136.

*Okanda, M. & Itakura, S. (2008). Young infants' sensitivity to social contingency from mothers and strangers. A pilot study of 1-month-old infants. *Psychological Reports,* 102, 293-298.

*小野文生 (2007). 分有の思考へ—ブーバーの神秘主義的言語を対話哲学へ折り返す試み　教育哲学研究, 96, 42-62.

*太田拓紀 (2007). 昭和初期における私学出身中等教員のキャリア特性—4 私学の卒業生名簿を用いた数量的分析—　日本教師教育学会年報, 16, 66-76.

*太田拓紀 (2008). 教師志望の規定要因に関する研究—大学生の家庭的背景に着目して—　京都大学大学院教育学研究科紀要, 54, 318-330.

*大内田裕・内藤栄一・松村道一 (2007). 他者運動のキネマティクス情報を利用した運動制御の脳内メカニズム　ボバースジャーナル (日本ボバース研究会), 30, 44-50.
大家聡樹 (2008). 面接関係を生きる―沈黙という共感体験を通じて―. 創造の臨床事例研究　ＦＪＫ報告書　第四号, 88-98.
*Osaka, M., Komori, M., Morishita, M., & Osaka, N. (2007). Neural basis of focusing attention in working memory. *Cognitive, Affective & Behavioral Neuroscience*, 7, 130-139.
Osaka, M., & Osaka, N. (2007). Neural bases of focusing attention in working memory: An fMRI study based on individual differences. In N. Osaka, R. Logie, & M. D'Esposito (Eds.), *Cognitive Neuroscience of Working Memory*, Oxford: Oxford University Press, pp. 99-117.
苧阪直行 (2007). 笑いと痛み　―擬音・擬態語の脳内表現―　人工知能学会・ことば工学研究会資料, SIG-LSE-A602-6, 55-64.
*苧阪直行 (2007). 記憶の適応メカニズム　教育と医学, 6, 4-11.
*苧阪直行 (2007). オノマトペの脳科学　日本語学, 26, 16-23.
*苧阪直行 (2008). メタ認知と前頭葉 ―ワーキングメモリの認知神経科学からのアプローチ―　心理学評論, 50, 216-226.
苧阪直行 (2007). 志向する意識の脳内表現　紀平英作 (編)　グローバル化時代の人文学 (下巻)　京都大学学術出版会　pp. 41-65.
苧阪直行 (2007). メタ記憶とワーキングメモリの脳内表現 ―社会脳をめぐる自己知(TOMS)と他者知(TOMO)の問題―　清水寛之 (編) メタ記憶　北大路書房
*Osaka, N., Otsuka, Y., Hirose, N., Ikeda, T., Mima, T., Fukuyama, H., & Osaka, M. (2007). Transcranial magnetic stimulation (TMS) of left dorsolateral prefrontal cortex disrupts verbal working memory performance in human. *Neuroscience Letters*, 418, 232-235.
Osaka, N. (2007). Corteccia del cingolo anteriore umana e dolore affecttivo indotto da parole mimiche: uno studio con immagini da risonanza magnetica funzionale. In M. Mancia (Ed.), *Psicoanalisi e Neuroscienze*, Springer Italia, pp. 273-284.
大塚雄作 (2007). 高等教育の個別的実践と普遍的理論化の狭間で―大学評価・FD 実践の体験を通して―　高等教育研究, 10, 111-127.
*大塚雄作 (2007). 大学教育評価における評価情報の信頼性と妥当性　工学教育, 55, 14-20.
*尾崎真奈美 (2007). 心身・時空を超越したスピリチュアルヒーリングと、メタレベルとしてのスピリチュアル・ヘルス　トランスパーソナル学研究, 9, 33-44.
*尾崎真奈美・村川治彦・深尾篤嗣 (2007). 医療におけるからだとスピリチュアリティをめぐる対話　トランスパーソナル学研究, 9, 97-101.
*尾崎真奈美(2007). ホリスティック医学におけるスピリチュアル・ヘルス- ウイルバーモデルからの提言　ホリスティック医学研究, 7, 45-53.
尾崎真奈美 (2007). 援助職に問われる「自己犠牲」と「健全な自己愛」―首尾一貫感覚、癒しの本質「コア」　スピリチュアリティ, こころケアー, 9(4) 2-12.
Ozaki, M. (2007). Spiritual healing: Its scientific proving and the authentic meaning. *Journal of International Society of Life Information Science,* 24(1), 107-114.
Ozaki, M. (2007). Personality maturity doesn't promise mental health necessarily?: The dimensional difference between spiritual health and mental health. *Journal of International Society of Life Information Science,* 24(1), 119-122.
Ozaki, M. (in press). Mechanism of spiritual health realization. *Journal of International Society of Life Information Science,* 25(1).
*Saiki, J. (印刷中). Stimulus-driven mechanisms underlying visual search asymmetry revealed by classification image analyses. Journal of Vision.
*Saito, N. (2007). 'Our education is sadly neglected': Reading, translating and the politics of interpretation. *Philosophy of Education 2007*, 139-147.
*Saito, N. (2007). Truth is translated: Cavell's Thoreau and the transcendence of America. *Journal of Speculative Philosophy*, 21(2), 124-132. [*アメリカ哲学促進学会にて最優秀賞受賞論文]

*Saito, N. (2007). Philosophy as translation: Education for inter-/intra-cultural understanding with Cavell and Thoreau. *Educational Theory*, 57(3), 261-275.
斉藤直子 (2007). 大人の教育としての哲学—デューイからカベルへ— 近代教育フォーラム,(教育思想史学会), No.16, 51-66.
斉藤直子 (2007). 目覚めとしての教育—終わりなき成長の彼方、ウォールデン 現代思想, 35(6), 166-188.
*Saito, S., Logie, R. H., Morita, A., & Law, A. (in press). Visual and phonological similarity effects in verbal immediate serial recall: A test with Kanji materials. *Journal of Memory and Language*.
*Saito, S., & Towse, J. N. (2007). Working memory as a construct in cognitive science: An illustrious past and a highly promising future. *Psychologia*, 50, 69-75.
*酒井博之 (2007). 京都大学におけるICTを活用したFD実践の取り組み—「遠隔連携ゼミ」と「Web公開授業」— メディア教育研究, 4, 41-51.
酒井晃二・酒井博之 (2007). 「学術プレゼンテーションスキルズ」の実践 京都大学高等教育研究, 13, 133-147.
Sakurai, R. (2007). "Child Labour and Education". A commissioned paper for the EFA Global Monitoring Report 2007 Strong Foundations Early Childhood Care and Education. Paris, France: UNESCO.
佐藤卓己 (2007). 学校放送から「テレビ的教養」へ 放送メディア研究, 4, 59-85.
佐藤卓己 (2007). セロンにまよわず ヨロンにもかかわらず—第8回 中曽根政治のテンポとリズム 考える人 春号 pp. 142-149.
佐藤卓己 (2007). セロンにまよわず ヨロンにもかかわらず—第9回 世論天皇制と昭和の終焉 考える人 夏号 pp. 137-145.
佐藤卓己 (2007). セロンにまよわず ヨロンにもかかわらず—第 10 回 世論の中心で、輿論を叫べ! 考える人 秋号 pp. 159-167.
佐藤卓己 (2007). コラム 1925年創刊雑誌『キング』のメディア論 アジア遊学, 103, 128-130.
*Sato, W., Noguchi, M., & Yoshikawa, S. (2007). Emotion elicitation effect of films in a Japanese sample. *Social Behavior and Personality*, 38, 863-874.
*Sato, W., Okada, T., & Toichi, M. (2007). Attentional shift by gaze is triggered without awareness. *Experimental Brain Research*, 183, 87-94.
*Sato, W. & Yoshikawa, S. (2007). Spontaneous facial mimicry in response to dynamic facial expressions. *Cognition*, 104, 1-18.
*Sato, W. & Yoshikawa, S. (2007). Enhanced experience of emotional arousal in response to dynamic facial expressions. *Journal of Nonverbal Behavior*, 31, 119-135.
*Sato, W. & Yoshikawa, S. (2007). Spontaneous facial mimicry in response to dynamic facial expressions. *Cognition*, 104, 1-18.
*清家理・岡本真紀・北澤園子・佐藤求・副島彰典・清谷哲朗 (印刷中). 退院支援におけるMSWの役割の重要性～地域連携パス未充足部分を担う専門性の検証にむけて～ 日本医療マネジメント学会雑誌, 日本医療マネジメント学会
柴原真知子 (印刷中). イギリス成人教育史研究における労働者階級と女性の位置—R. Peers, T. Kelly, R. Fieldhouseの著作を手がかりに— 京都大学生涯教育学・図書館情報学研究.
*嶋田容子・板倉昭二 (2007). 乳児の泣き声への母親の解釈 母性衛生, 48, 337-339
塩瀬隆之・やまだようこ (2007). 生涯まなびつづけるために 計測と制御, 46(1), 2-5.
*荘島幸子 (印刷中). トランスジェンダーを生きる当事者と家族—人生イベントの羅生門的語り 質的心理学研究.
*荘島幸子 (印刷中). 「私は性同一性障害者である」という自己物語の再組織化過程—自らを「性同一性障害者」と語らなくなったAの事例の質的検討 パーソナリティ研究.
*荘島幸子 (2007). 物語論アプローチへの《語り得ないもの》という視点導入の試み 心理学評論, 49(4), 655-667.
Sogo, H., & Osaka, N. (2007). Interaction between shape perception and egocentric localization. In N. Osaka, I. Rentschler, & I. Biederman (Eds.), *Object Recognition, Attention*

and Action, Springer Verlag, pp.159-171.
*Sogo, H., & Osaka, N. (2007). Distortion of apparent shape of an object immediately before saccade. *Spatial Vision*, 20, 265-276.
*尹秀安 (2008). 月刊『英語研究』(1919～1923) にみる「世界の大勢と日本」 教育史フォーラム, 3, 1-23.
*Sugiman, T. (2007). Emergence and development of I-positions in the dialogical self theory. *European Journal of School Psychology*, 4(2), 425-435.
*杉森絵里子・楠見孝 (2007). メタ記憶におけるソースモニタリングエラー：インプット－アウトプットモニタリングの観点から 心理学評論, 50(2), 9-118.
*Sugimori, E. & Kusumi, T. (2008). Interaction of specificity of instruction and familiarity of cue words in prospective performance. *Psychological Report*, 102, 317-327
*Sugimori, E. & Kusumi, T. (2008). Output monitoring error: Effects of previously encoded action phrases. *Psychologia*,51,76-88.
*Sugimori, E. & Kusumi, T. (in press). Limiting Attentional Resources Influences Performance and Output Monitoring of an Event-Based Prospective Memory Task. *European Journal of Cognitive Psychology.*
*Suzuki, S. (2007). Ueber die 'Musse' aus japanischer Sicht. *Pragrana –Zeitschrift fuer historische Anthropologie* (Akademie Verlag), 114-124.
*平知宏・中本敬子・楠見孝 (2007). 比喩理解における親しみやすさと解釈の多様性 認知科学, 14, 322-338.
*Takahashi, S., Ban, H., Ohtani, Y., Sawamoto, N., Fukuyama, H., & Ejima, Y. (in press). V1 contributes to the perception of phenomenal permanence in the tunnel effect. *Gestalt Theory.*
*Takahashi, K., Saiki, J., & Watanabe, K. (2008). Realignment of temporal simultaneity between vision and touch. *NeuroReport*, 19 (3), 319-322.
*高橋 康介・齋木潤 (印刷中). 動的な変形に対する視触覚間同時性判断 心理学研究.
高橋康介・齋木潤・渡邊克巳 (2007). 仮想物体の変形に対する視触覚間同時性知覚の順応電子情報通信学会マルチメディア・仮想環境基礎研究会信学技報, 107(80), 21-26.
*Takahashi, M., Ushitani, T. ,& Fujita, K. (in press). Inference based on transitive relation in tree shrews (*Tupaia belangeri*) and rats (*Rattus norvegicus*) on a spatial discrimination task. *The Psychological Record.*
*Takahashi, S., & Sakurai, Y. (2007). Coding of spatial information by soma and dendrite of pyramidal cells in the hippocampal CA1 of behaving rats. *European Journal of Neuroscience*, 26, 2033-2045.
高見茂 (印刷中). 金主方、学校法人その実力と可能性 教育行財政論叢.
*Takamure, A., Nakagawa, T., Kobayashi, A., Morimoto, S., Yamasaki, S., Takase, I., Yamamoto, Y., Nishi, K. (2007). Traumatic intercostal artery pseudoaneurysm following a bicycle accident. *Forensic Sci Med Pathol*, 3(3), 217-220.
高瀬泉・西克治 (2007). 性虐待被害者からの証拠採取法 –米国カリフォルニア州での研修報告 日本医師会雑誌,136(3), 554-557.
*高瀬泉・西克治 (2007). 日本における「強かん」の被害者への対応 —医療者および警察官からみた現状および問題点 犯罪学雑誌, 73(6), 149-164.
*高嶋雄介・須藤春佳・高木綾・村林真夢・久保明子・畑中千紘・山口智・田中史子・西嶋雅樹・桑原知子 (2007). 学校現場における教師と心理臨床家の「視点」に関する研究 心理臨床学研究, 25(4), 419-430.
*高嶋雄介・須藤春佳・高木綾・村林真夢・久保明子・畑中千紘・山口智・田中史子・西嶋雅樹・桑原知子 (印刷中). 学校現場における教師と心理臨床家の「視点」に関する研究II 心理臨床学研究, 26(3).
*Takayanagi M. (2007). Transforming the Profession of Teaching in a Changing Society: Teaching as Philosophical Inquiry and Stanley Cavell's. *The Senses of Walden. Educational Studies in Japan*, 2, 95-105.

Takei, T., Matsumura, M. & Seki., K. (in press). Modulations of spinal cord neuronal activity during spike triggered activities. *Journal of Neurophysiology*.

*竹中菜苗 (2007). 自閉症児への心理療法における「〈私〉の生成」 心理臨床学研究, 25(5), 582-592.

*田中亜以子 (2007). ウーマン・リブの「性解放」再考—ベッドの中の対等性獲得に向けて— 女性学年報, No.28, 2007.

*田中暁生・船橋新太郎 (2007). サルを用いたメタ記憶の神経生理学的研究に向けて 霊長類研究, 23.

*田中耕治 (2007). 日本的学力問題 教育科学研究, 第7期, 54-57.

*Tanaka, M. (2007). Recognition of pictorial representations by chimpanzees (*Pan troglodytes*). *Animal Cognition*, 10, 169-179

*Tanaka, M. (2007). Development of visual preference of chimpanzees (*Pan troglodytes*) for photographs of primates: effect of social experience. *Primates*, 48, 303-309.

田中毎実 (2007). 臨床的教育理論と近代教育批判の射程 近代教育フォーラム, 16, 25-32.

*田中優子・楠見孝 (2007). 批判的思考の使用判断に及ぼす目標と文脈の効果 教育心理学研究, 55, 514-525.

*田中優子・楠見孝 (2007). 批判的思考プロセスにおけるメタ認知の役割 心理学評論, 50(3), 256-269.

*竹家一美 (印刷中). 不妊治療を経験した女性たちの語り:「子どもを持たない人生」という選択 質的心理学研究.

*Thompson, M. E., Jones, J. H., Pusey, A. E., Brewer-Marsden, S., Goodall, J., Marsden, D., Matsuzawa, T., Nishida, T., Reynolds, V., Sugiyama, Y., & Wrangham, R. (2007). Aging and Fertility Patterns in Wild Chimpanzees Provide Insights into the Evolution of Menopause. *Current Biology*, 17, DOI 10.1016/j.cub.2007.11.033.

*田世民 (2008). 懐徳堂における儒教儀礼の受容—中井家の家礼実践を中心に— 懐徳堂センター報 2008, 3-23.

*徳永俊太 (印刷中). 戦後イタリアにおける歴史教育理論の変遷—歴史学と歴史教育の関係に着目して— 教育方法学研究.

*Tomonaga, M. (2007). Visual search for orientation of faces by a chimpanzee (*Pan troglodytes*): Face-specific upright superiority and the role of configural properties of faces. *Primates*, 48, 1-12.

*Tomonaga, M. (2007). Is chimpanzee (*Pan troglodytes*) spatial attention reflexively triggered by the gaze cue? *Journal of Comparative Psychology*, 121, 156–170.

*Tomonaga, M. (2008). Relative numerosity discrimination by chimpanzees (*Pan troglodytes*): Evidence for approximate numerical representations. *Animal Cognition*, 11, 43-57.

*Tomonaga, M., Imura, T., Mizuno, Y., & Tanaka, M. (2007). Gravity bias in young and adult chimpanzees (Pan troglodytes): Tests with modified opaque-tubes task. *Developmental Science*, 10, 410-420.

*東畑開人 (印刷中). 容姿の美醜についての体験における「他者」の関与. 心理臨床学研究, 25(6).

*Tsai, J. L., Louie, J Y., Chen, E. E., & Uchida, Y. (2007). Learning what feelings to desire: Socialization of ideal affect through children's storybooks. *Personality and Social Psychology Bulletin*, 33, 17-30.

辻本雅史 (2007). 日本近世における「四書学」の展開と変容 辻本雅史・黄俊傑 (責任編集) 季刊 日本思想史 ぺりかん社 pp. 3-16.

辻本雅史 (2008). 近世思想から教育を考える—儒学学習の意味— 教育学研究. 75－1,pp.97-99

*上田祥行・齋木潤 (2007). 視覚と触覚を用いた物体認識における視点独立性 基礎心理学研究, 26(1), 11-19.

上田祥行・齋木潤 (2007). 触覚刺激が視知覚に与える影響 電子情報通信学会技術報告, HIP2007-105.

*内田由紀子 (印刷中). 日本文化における自己価値の随伴性—日本版自己価値の随伴性尺度を用いた検証— 心理学研究

*Uchida, Y., Kitayama, S., Mesquita, B., Reyes, J. A. S., & Morling, B (in press). Is Perceived emotional support beneficial? Well-being and health in independent and interdependent

cultures. *Personality and Social Psychology Bulletin.*

*Uchikoshi, M., Matsuzawa, T. (2007). Tooth eruption in two agile gibbons (*Hylobates agilis*). *Gibbon Jouranl,* 3, 66-73.

*Uenishi, G., Fujita, S., Ohashi, G., Kato, A., Yamauchi, S., Matsuzawa, T., & Ushida, K. (2007). Molecular analysis of the intestinal microbiota of chimpanzees in the wild and in captivity. *American Journal of Primatology*, **69**, 1-10.

*Ueno, A., Hirata, S., Fuwa, K., Sugama-Seki, K., Kusunoki, K., Matsuda, G., Fukushima, H., Hiraki, K., Tomonaga, M., & Hasegawa, T. (2008). ERPs to stimulus deviance in an awake chimpanzee (*Pan troglodytes*): Towards hominid cognitive neurosciences. PLoS ONE, 3(1): e1442. doi:10.1371/journal.pone.0001442.

魚野翔太・佐藤弥・道又爾・吉川左紀子・十一元三 (2007). 状態不安と恐怖表情が視線による注意シフトに与える影響　電子情報通信学会技術研究報告 HCS, **2006-65**, 37-42.

脇奈七 (印刷中). 中央における教育政策実現の要因に関する考察―「指導力不足教員」認定制度の政策形成過程をもとに―　教育行財政論叢.

*Watanabe, K. & Funahashi, S. (2007). Prefrontal delay-period activity reflects the decision process of a saccade direction during a free-choice ODR task. *Cerebral Cortex*,**17**, i88-i100.

渡辺創太 (印刷中). 比較研究における多要因・多目的の意義　動物心理学研究

渡邊洋子 (2007). 人権学習における学習支援とチューターの役割―人権教育と人権文化の二つの観点から―　部落解放研究, **174**, 17-30.

渡邊洋子 (2007). 「おとな」を「おしえる」という考え方のすすめ　*Nursing BUSINESS*, 1(4), 30-35.

渡邊洋子 (2007). 成人教育学の基本原理と提起―職業人教育への示唆―　医学教育, **38**(3), 151-160.

渡邊洋子 (2007). シミュレーション学習に活きる成人教育理論―『経験』と『省察』を手がかりに―　救急医学, **31**(11), 1447-1450.

渡邊洋子 (2008). 沖縄における『伝統芸能』と生涯学習・社会教育　京都大学生涯教育学・図書館情報学研究, **7**, 63-81.

渡邊洋子・柴原真知子 (2008). 英国医事委員会『明日の医師を育てる―卒前医学教育への推奨事項』(General Medical Council "Tomorrow's Doctors: Recommendations on undergraduate medical education")　京都大学生涯教育学・図書館情報学研究, **7**, 123-141.

*和崎光太郎 (2007). 大正自由教育と「赤化思想」-川井訓導事件とその周辺-　信濃(信濃史学会 編), 59(10), 1-18.

*和崎光太郎 (2007). 青年期自己形成概念としての<修養>論の誕生　日本の教育史学(教育史学会 編), No.50, 32-44 .

項 純 (2008). 日本における新世紀の大学改革の動向―21 世紀 COE に焦点を当てて　大学研究と評価(日本"21 世紀卓越科研基地計划"評述　大学研究与评价)　pp. 87-89.

*項 純 (2008). 日本における最新の全国学力調査及びその結果についての分析　教育科学研究 (日本最新全国学力調查及其结果分析　教育科学研究) 2008 年 7 月

やまだようこ (2007). ナラティヴ (物語・語り) アプローチと家族研究　家族療法研究, **24**, 217-218.

*やまだようこ (2008). 多声テクスト間の生成的対話とネットワークモデル―「対話的モデル生成法」の理論的基礎　質的心理学研究, **7**, 21-42.

やまだようこ (印刷中). 老年期にライフストーリーを語る意味　老年看護学研究.

山本和行 (2008). 从日本殖民地教育的考察検讨教育課題　日中教育学系合同シンポジウム 2007 論文集, pp174-182.

*Yamamoto, S., Yamakoshi, G., Humle, T., & Matsuzawa, T. (in press) . Invention and modification of a new tool use behavior: ant-fishing in trees by a wild chimpanzee (*Pan troglodytes verus*) at Bossou, Guinea. *American Journal of Primatology.*

*安田裕子 (2007). 非血縁の親子関係を築く選択と経験―不妊治療では子どもを産むことができなかった女性のナラティヴ　心理臨床学研究, **25**, 550-560.

厳 平 (印刷中). 中等教育史研究の課題と展望　中等教育史研究.

矢野智司 (2007). 子どもが生命に触れる体験を生みだすメディア—体験と言葉とが出会う場所　初等教育資料(文部科学省小学校課・幼稚園課編集), 8月号, No.824, 80-86.

矢野智司 (2007). 死者への負い目と贈与としての教育—教育の起源論からみた戦後教育学の課題と限界点　近代教育フォーラム(教育思想史学会), No.16, 1-10.

*安田裕子 (2007). 精子・卵子・胚の提供による生殖補助医療で親子関係を築く人々への支援—子どもへの告知に焦点をあてて　家庭教育研究所紀要, **29**, 57-66.

*安田裕子・荒川歩・髙田沙織・木戸彩恵・サトウタツヤ (2008). 未婚の若年女性の中絶経験—現実的制約と関係性の中で変化する，多様な径路に着目して　質的心理学研究, **7**, 181-203.

*安田裕子・やまだようこ (印刷中). 不妊治療をやめる選択プロセスの語り—女性の生涯発達の観点からパーソナリティ研究.

安川由貴子 (2008). アルコール依存症者の意識変容のプロセス—セルフヘルプ・グループにおける体験談を手がかりに—　京都大学生涯教育学・図書館情報学研究, 7,9-25.

*Yoshikawa, S. & Sato, W. (2008). Dynamic facial expressions of emotion induce representational momentum. Cognitive, Affective, and Behavioral Neuroscience. **8**, 25-31.

ユン・スアン (2008). 月刊『英語研究』(1919～1923) にみる「世界の大勢」と日本　教育史フォーラム, **3**, 113-132.

3. 紀要

*赤沢真世 (2007). 現代アメリカにおける 4 ブロックス・アプローチの理論と実践—ホール・ランゲージとフォニックスの統合をめざして　日本児童英語教育学会紀要, **26**, 1-14.

*赤沢真世 (印刷中). 第二言語教育におけるホール・ランゲージ・アプローチに関する一考察—「ホール」の意味する言語観・言語教育観をふまえて—　京都大学大学院教育学研究科紀要.

福田斎 (2008). 重度身体障害を抱え，母親とわかれて生を刻んでいこうとする５０代男性との面接. 臨床心理事例研究 京都大学大学院教育学研究科心理教育相談室紀要, **34**, 160-168.

*古川雄嗣 (印刷中). 偶然性を通しての偶然性の克服—九鬼周造におけるニヒリズムの克服—　京都大学大学院教育学研究科紀要.

*羽野 (謝) 玲糸 (印刷中). 自己開示における内的体験について　京都大学教育学研究科紀要, **54**.

*原田宗忠 (2008). コーピングが自尊感情の変動性と自己概念に与える影響　京都大学大学院教育学研究科紀要, **54**, 639-650.

畑中千紘 (2007). 臨床心理面接における情報の扱い方についての一考察 —関係性の外から投げ込まれた一枚のバウムテストをめぐって—　京都大学大学院教育学研究科附属臨床教育実践研究センター紀要, **10**, 31-42.

*八田幸恵 (2008). リー・ショーマンの PCK 概念に関する一考察—「教育学的推論と活動」モデルに依拠した改革プロジェクトの展開を通して　京都大学大学院教育学研究科紀要.

*本所恵 (2008). スウェーデンの総合制高等学校における普通教育と専門教育の関連づけ—職業系課程のカリキュラム分析を中心に—　京都大学大学院教育学研究科紀要, **54**, 220-233.

家島明彦 (2008). マンガを介した青年の自己形成支援プログラム作成に向けて　京都大学大学院教育学研究科紀要, **54**, 98-111.

*池田華子 (2007). シモーヌ・ヴェイユにおける「メタクシュ」のはたらき—「関係」概念の捉えなおし—　京都大学教育学研究科紀要, **53**.

*石井英真 (2007). アメリカにおけるスタンダード設定論の検討——McREL データベースに焦点を当てて——　教育目標・評価学会紀要, No.17, 46-56.

伊藤良子 (印刷中). 並行面接について　京都大学大学院教育学研究科心理教育相談室紀要臨床心理事例研究, **34**. (印刷中)

柿慶子・辻河昌登 (印刷中). 小学生の学校ライフサイクルに関する臨床心理学的研究　学校教育学研究(兵庫教育大学附属学校教育研究センター紀要), **20**.

川部哲也 (印刷中). ロールシャッハ・テストを用いた風邪体験に対する意味づけの研究　京都大学カウンセリングセンター紀要, **37**.

河﨑美保 (2008). 算数授業における能動的聴取と多様な解法からの学び　京都大学大学院教育学研究科

紀要, 54. (印刷中)

*木村裕 (2007). オーストラリアの学校教育の場における開発教育カリキュラムの特徴と意義―『グローバル・パースペクティブ・シリーズ』の単元分析を通して― 教育目標・評価学会紀要, 17, 57-67.

*木村裕 (2008). フィエンの開発教育論に関する一考察―開発教育と批判的教育学との関わりに焦点をあてて― 京都大学大学院教育学研究科紀要, 54, 193-205.

*木之下隆夫 (2008). 子ども理解を巡る教師と専門家の接点－理解と指導をつなぐ方法論－ 京都大学大学院教育学研究科紀要, 54, 544-557.

*小林信一 (印刷中). 配偶者との死別研究に関する性差の視座―男性にとっての配偶者との死別経験とは何か― 京都大学大学院教育学研究科紀要.

*黒田真由美 (印刷中). 小学校英語における学び:「ズレ」とその解消に注目して 京都大学大学院教育学研究科紀要.

*楠山研 (印刷中). 中国の地方大学の特色作りに関する考察 京都大学大学院教育学研究科紀要.54

桑原知子 (2007). 終結について―終結「元型」という観点から― 京都大学大学院教育学研究科心理教育相談室紀要 臨床心理事例研究, 33,16-18.

*李基原 (2008). 反太宰春台論―『聖学問答』批判所を素材に― 京都大学教育学研究科紀要, 54, 58-69.

*李 霞 (2008). 国語の「読解」指導における児童の主体性に関する日中比較―教育課程政策と教科書の分析に焦点をあてて― 京都大学大学院教育学研究科紀要, 54, 385-397.

真継和子・宮島朝子 (2007). 学生がとらえた倫理的課題と看護者に求める倫理観 京都大学医学部保健学科紀要別冊 健康科学, No.4,39-44.

真継和子・宮島朝子 (2007). 介護保険制度による住宅改修に関する研究動向 京都大学医学部保健学科紀要 別冊 健康科学, No.4,63-66.

*宮崎康子 (2007). G.バタイユにおける「遊び」理解から見る幼児教育 - 遊びを遊ばせることは可能か - 関西教育学会研究紀要, 7, 16-30.

宮崎康子 (2007). 教育・遊び・人形 - ベルメール - バタイユにおけるメディアとしての人形／人間 - 臨床教育人間学, 8, 35-44.

宮崎康子 (2007). Open Economy In Education: Question and Possibility to Make Education Open 臨床教育人間学, 8, 149-153.

*森田健一 (印刷中). 幼児期記憶とその連想記憶における想起視点 京都大学教育学研究科紀要, 54.

森田健一・東畑開人 (印刷中). 心理臨床家の読み方 ―科学の臨床的読解― 京都大学大学院教育学研究科附属臨床教育実践研究センター紀要, 11.

*内藤みちよ (印刷中). クライエントの『語り』にみる時間―時間意識の近代化・疎外からの救済と物語の変容― 京都大学教育学研究科紀要, 54.

中藤信哉 (印刷中). 生きる意味を問う状況に関する一考察 ―生きる意味の性質の観点から― 京都大学大学院教育学研究科附属臨床教育学研究センター紀要, 11.

*根本真弓 (2008). 無意識から生成される空想にみる孤独感に関する一考察－心理臨床実践の素材から－ 京都大学教育学研究科紀要, 53.

根本真弓 (2007). 過食・多量服薬・自傷・キャンセルを繰り返す青年期女性との面接過程京都大学大学院教育学研究科心理教育相談室紀要臨床心理事例研究, 33, 114-123.

西嶋雅樹 (2008). 心理臨床の場としての適応指導教室 京都大学大学院教育学研究科附属臨床教育実践研究センター紀要, 11, 57-66.

*西岡加名恵 (2007).『逆向き設計』論にもとづくカリキュラム編成―中学校社会科における開発事例 教育目標・評価学会紀要, 17, 17-24.

西澤伸太郎 (印刷中). 多動傾向で来談した 11 歳男児との面接 京都大学大学院教育学研究科心理教育相談室紀要心理臨床事例研究, 34.

西澤伸太郎 (2008). 現代青年の生活実感としての「心の時代」と「心のない時代」 大谷大学学生相談室研究紀要, 6, 50-63.

小川絢子 (2007). 幼児期における心の理論と実行機能の発達 京都大学大学院教育学研究科紀要, 53, 325-337.

小川絢子 (印刷中). 幼児期における他者の誤った行動に対する理由づけの発達 京都大学大学院教育学

研究科紀要, 54.
*小原優貴 (印刷中). インドにおける留保制度の現状と課題　京都大学大学院教育学研究科紀要.
*大家聡樹 (印刷中). 〈超越〉についての心理臨床学的研究 - 「自分を超えた何か」の体験の語りを手がかりに - . 京都大学教育学部紀要, 54, 505-517.
*ラフマン-モクレスール・日下部達哉 (2007). 国際教育協力 NGO の戦略転換に関する研究—バングラデシュの事例をもとに—　九州教育学会研究紀要, 34, 99-107.
*斉藤桂 (印刷中). No Child Left Behind Act 制定後のバイリンガル教育の意義—カリフォルニア州・サンフランシスコ統合学区を事例に—　京都大学大学院教育学研究科紀要.
*笹倉尚子 (印刷中). <行為としての演技>からみた心理臨床　京都大学大学院研究科紀要, 54.
清水寛之・高橋雅延・齊藤智 (2007). 日常記憶に関する自己評価 —日常記憶質問紙, 認知的失敗質問紙, 及び記憶能力質問紙の標準データと因子構造—　神戸学院大学人文学部紀要, 27, 143-166.
清水亜紀子 (2007). ヒステリー症状を抱える思春期女子との面接過程　京都大学大学院教育学研究科心理教育相談室紀要, 33, 82-90.
*清水亜紀子 (2008). 自我体験について「語り-聴く」体験をめぐる一考察. 京都大学大学院教育学研究科紀要, 54,464-477.
*篠原郁子 (印刷中). 母親の mind-mindedness と母子相互作用および9ヶ月乳児の共同注意の発達　京都大学大学院教育学研究科紀要.
*志波泰子 (2007). 実行機能と「心の理論」の発達の関連性： 創発仮説・表現仮説・メタ表象仮説の検討　京都大学教育学研究科紀要, 53, 352-365.
*志波泰子 (2008). 3歳児における他者の意図と信念の理解：行為誤信念と背景誤信念からの検討　京都大学教育学研究科紀要, 54., 293-303.
荘島幸子 (印刷中). ナラティヴが生成される重層的コンテクストとその解釈—次なるナラティヴ・ベイスト・インクワイアリーに向けて　京都大学教育学研究科紀要.
*荘島幸子 (2007). ある性同一性障害者の自己構築プロセスの分析—同一トランスクリプトによる知見の羅生門的生成　京都大学教育学研究科紀要, 53, 206-219.
*須藤春佳 (印刷中). 前青年期の親しい同性友人関係"chumship"の心理学的意義について—発達的・臨床的観点からの検討—　京都大学大学院教育学研究科紀要, 54, 626-638.
*杉本均・隼瀬悠里 (2008). 北欧諸国における教師教育の動向　京都大学大学院教育学研究科紀要, 54, 1-23.
*高木綾 (2008).「自分とは思えないもの」との関わりについての一考察–心理臨床的な視点を踏まえて–. 京都大学大学院教育学研究科紀要, 54, 478-490.
*竹腰千絵 (印刷中). イギリス高等教育におけるチュートリアルの伝播と変容　京都大学大学院教育学研究科紀要.
*竹家一美 (印刷中). ある不妊女性のライフストーリーとその解釈—「不妊」という十字架を背負って—　京都大学大学院教育学研究科紀要.
髙橋歩美・辻河昌登・髙宮静男・植本雅治 (2008). 神経性食欲不振症の子どもをもつ母親の語りからみた世代間伝達の問題　発達心理臨床研究(兵庫教育大学附属発達心理臨床研究センター紀要), 14. 155-167.
高橋優佳 (2007). 学校現場における心理臨床的かかわり—教室の中に入る体験を通して—　京都大学大学院教育学研究科附属臨床教育学研究センター紀要, 11.
高瀬泉 (2007). 臨床心理学と法医学の接点　京都大学大学院教育学研究科附属臨床教育実践研究センター紀要, 11.
*田村綾菜 (2008). 加害者の表情が児童の謝罪の認識に及ぼす効果—3種類の表情図を用いて—　京都大学大学院教育学研究科紀要, 54. (印刷中)
*田中史子 (2007). 子どもの描画表現に関する一考察－白昼夢についての調査から－　京都大学大学院教育学研究科紀要, 53, 124 - 136.
田中史子 (2007). 衝動性や落ち着きのなさを問題として連れてこられた 11 歳男児とのプレイセラピー　京都大学大学院教育学研究科心理教育相談室紀要, 33, 93-103.
*田中史子 (印刷中). 白昼夢に関する研究－反復性・空想生を中心に－　京都大学大学院教育学研究科紀

要, 54. (印刷中).

田中耕治 (2007). 今日の学力問題をどうみるか　人間発達研究所紀要, 18-19, 75-106.

田中康裕 (2007). 心理療法は終結を目指しているのか?　臨床心理事例研究 京都大学大学院教育学研究科心理教育相談室紀要, 33,22-24.

*田中慶江 (印刷中). 13歳少女のイニシエーションに関する一考察－初潮と猫をとおして－　京都大学大学院教育学研究科紀要, 54.

*龍輪飛鳥 (2007). 運動図形のアニメーションを用いた心的帰属研究の展望　京都大学大学院教育学研究科紀要, 53, 313-324.

*龍輪飛鳥 (2007). 2つの運動図形のインタラクションの知覚と心的帰属の関係　京都大学大学院教育学研究科紀要, 54.

辻河昌登 (2008). 世代間伝達に関する精神分析学的考察　京都大学大学院教育学研究科紀要,54.572-584.

*徳永俊太 (印刷中). アントニオ・ブルーサの歴史教科書研究に関する一考察　京都大学大学院教育学研究科紀要.

友久茂子(2007).私のブックレビュー　―河合隼雄先生を偲んで―　甲南大学学生相談室紀要, 15, 31-39.

*東畑開人 (印刷中). 心理臨床と美の背反性－「偽の美」考. 京都大学教育学研究科紀要, 54.

*梅村高太郎 (印刷中). 身体化の心理療法――心身症概念の批判的検討を通して. 京都大学大学院教育学研究科紀要, 54.

梅村高太郎 (印刷中). 認めたくない自分を認めるために夢分析を求め来談した40代女性との面接. 京都大学大学院教育学研究科心理教育相談室紀要臨床心理事例研究, 34.

*浦田悠 (2008). 人生の意味への問いの諸相―問いのきっかけや重要性, 自我体験との関連から―　京都大学大学院教育学研究科紀要, 54, 112-124.

*渡部みさ (2007). 女性における対人恐怖心性―学校をめぐる離脱と参入の試練　京都大学大学院教育学研究科紀要, 53, 98-110.

渡部みさ (2007). 学校心理臨床事例研究における視点・対象の広がりに関する一考察　京都大学大学院教育学研究科附属臨床教育実践研究センター紀要, 10, pp.53-63.

*山本有恵 (印刷中). 事例検討会に関する一試論. 京都大学大学院教育学研究科紀要, 54, 598-611.

*山本和行 (印刷中). 台湾総督府学務部の人的構成について―国家教育社との関係に着目して―　京都大学大学院教育学研究科紀要.

*山本喜晴 (印刷中). 遺伝カウンセリングにおける臨床心理学的アプローチと〈遺伝子なるもの〉. 京都大学大学院教育学研究科紀要, 54.

*山崎貴子 (2007). ジェンダーと社会関係資本. 教育・社会・文化 (京都大学大学院教育学研究科教育社会学講座), 11, 61-69.

矢野智司 (2007). 「先生」としての漱石についての長い註. 臨床教育人間学(京都大学大学院教育学研究科臨床教育学講座), No.8, 61-68.

4. 総説

番浩志・山本洋紀・花川隆・麻生俊彦・浦山慎一・福山秀直・江島義道 (2007). 遮蔽された物体の低次視覚野V1/V2におけるトポグラフィックな表象:fMRI研究. *VISION*, 19(4), 201-204.

*ベッカー, C. (2007). 心身治療とサルトジェネシスSOC　永田勝太郎 (編)　心身症の診断と治療　診断と治療社　pp.62-67.

ベッカー, C. (2007). 生命の危機に対して、日本人は何が出来るのか　学士会会報, 864, 24-37.

ベッカー, C. (印刷中). 思いやり崩壊に警鐘　仏教タイムズ, No. 2271, p. 3.

遠藤利彦 (印刷中). 赤ちゃんの社会性の発達：人にとってもっとも大切な能力の芽生え　赤ちゃん学カフェ

藤田和生 (2007). 心を読むこと、他者を操作すること.　山極寿一 (編) ヒトはどのようにしてつくられたか (ヒトの科学1). 岩波書店. pp.133-152.

藤田和生 (2007). 動物の感覚・知覚 (視覚). 大山正・今井省吾・和気典二・菊池正 (編) 新編　感覚・知覚ハンドブック Part 2.　誠信書房　pp.21-47.

Fujita, K., Kuroshima, H., Hattori, Y., & Takahashi, M. Social intelligence in capuchin monkeys (*Cebus apella*). In: S. Itakura & K. Fujita (Eds.) (in press). Origins of the social mind. Springer Verlag.
藤田和生 (in press). メタ記憶の進化　清水寛之（編）メタ記憶　北大路書房.
藤原勝紀 (2007). 巻頭言：教育相談年報の発刊に寄せて　三重県総合教育センター 教育相談年報, 3-4.
藤原勝紀 (2007). いじめ自殺とスクールカウンセラー（第17回心の健康会議シンポジウム報告）　臨床心理士報, 33, pp.15-23.
藤原勝紀 (2007). いまこそ心を使った錬磨のとき　こころを使って(三重県教育委員会研修支援室教育相談グループ), 1-3.
藤原勝紀 (2007). 序：刊行に想いを込めて　木之下隆夫（編）　日本の心理臨床の歩みと未来　人文書院　pp.1-2.
藤原勝紀 (2007). 心が通い合うということ　平成１８年度学校カウンセリング支援講演録.三重県教育委員会, 1-22.
藤原勝紀 (2007). 洛風の心の音と風と温もり　学校臨床実践・調査研究報告：不登校生徒の自立と学習を支える洛風にふれて. 京都大学大学院教育学研究科・臨床実践指導者養成コース研究班, 1-4.
藤原勝紀 (2007). 心理臨床の体験を通しての立場から　吉備国際大学臨床心理相談研究所紀要, 4, 41-53.
藤原勝紀 (2008). クライエントに生身で学ぶ面接契約の不思議. 精神療法, 34(1), 111-113.
船橋新太郎 (2007). ワーキングメモリと意識　生体の科学, 58, 53-64.
船橋新太郎 (2007). 京都大学 こころの未来研究センター　学術月報, 60, 92-95.
林美里 (2007). 積木をつむ　発達, 104-112.
林美里 (2007). 物を扱う知性―チンパンジーとヒトの比較から　科学, 77, 628-631.
林美里 (2007). チンパンジーと対面する　科学, 77, 990-991.
林美里・渡邉祥平・宮部貴子 (2007). チンパンジーの介護　科学, 77, 1332-1333.
宮部貴子・兼子明久・渡邉祥平・林美里 (2008). 寝たきりになったチンパンジー、レオ　科学, 78, 34-35.
尾崎真奈美（印刷中）. こころの看護研究入門講座, 主任・中堅, 17(1),115-120, 17(2),125-129, 17(3),115-120.
佐藤義明・林美里 (2007). 場所をめぐる駆け引き　科学, 77, 528-529.
板倉昭二 (2007). 心を理解する心：メンタライジングの発達　物性研究, 88(4), 552-563
板倉昭二 (2007). 自己の認知、他者の理解　発達, 112, 2-9.
板倉昭二 (2008). 文化と生物学の融合：トマセロのアプローチ　田島信元（編著）文化心理学　朝倉書店
板倉昭二 (印刷中). アンドロイドの比較認知行動学的研究　小野哲雄他（編著）ロボットヒューマンインタラクション　共立出版
板倉昭二 (印刷中). 進化と行動　大藪泰（編著）心理学入門　川島書店
伊藤良子 (2007). 心理臨床を学ぶ―無意識に開かれた「場」との出会い　臨床心理学, 7(1), 3-7.
伊藤良子 (2007). 箱庭療法の不思議と可能性　臨床心理学, 7(5), 739-743.
伊藤良子 (2007). 広汎性発達障害児との遊戯療法について―吉見論文へのコメント―　天理大学大学院カウンセリングセンター紀要, 3, 178－180.
伊藤良子 (2007). 遊戯療法と子どもの主訴―小西論文へのコメント―　神戸女学院大学心理相談室紀要心理相談研究, 8, 72-74.
伊藤良子 (2007). 遺伝カウンセリングと臨床心理士　臨床心理士報, 32, 28-39.
伊藤良子 (2007). 広汎性発達障害と診断された男児の母親との面接についてのコメント　大阪大学大学院人間科学研究科心理教育相談室紀要, 13, 66-68.
伊藤良子 (2007). 河合隼雄という巨木　臨床心理学, 8(1), 3-7.
角野善宏 (2007). 森真美論文へのコメント　東洋英和女学院大学心理相談室紀要, 東洋英和女学院大学心理相談室.
角野善宏 (2007). 面接の終結　京都大学大学院教育学研究科心理教育相談室紀要臨床心理事例研究, 33, 19-21.
皆藤章 (2007). 田淵論文への心理臨床コメント　天理大学カウンセリングルーム紀要, 3, 118-122.

皆藤章(2007). 心理臨床家のためのこの1冊『明恵　夢を生きる』 臨床心理学(金剛出版), 7(2), 283-286.
皆藤章 (2007). 15分で読む『こころの臨床学』　人文会ニュース(人文会), 第101号, 6-18.
皆藤章 (2007). 河合隼雄先生のこと　臨床心理学(金剛出版), 8(1), 77-78.
駒込武 (2007). 帝国と「文明の理想」—比較帝国史研究というアレーナで考える—　駒込武・橋本伸也 (編) 帝国と学校　昭和堂　pp. 1-32.
駒込武・友澤悠季 (2007). 人権という言葉の廃墟から　竹本修三・駒込武 (編) 「偏見・差別・人権」を問い直す　京都大学出版会　pp. 3-14.
小山静子 (2007). 貴女之友 (復刻版) 解説　柏書房　pp.1-18.
子安増生 (2007). 『経済心理学のすすめ』のすすめ　書斎の窓, 3月号, 21-25.
楠見孝 (2008). ホワイトカラーにおける暗黙知とその継承. Global Edge,13,12-13.
桑原知子 (2007). 榊論文へのコメント—みることとみられること　天理大学カウンセリングルーム紀要, 3, 90-92.
桑原知子 (2007). 三枚論文へのコメント—生きるということ—　京都文教大学心理臨床センター紀要, 9, 85-87.
守田知代・板倉昭二・定藤規弘 (2007). 脳科学から考える自他理解の発達　発達, 112, 45-54.
Nagaoka, C, Komori, M. & Yoshikawa, S. (2007). Embodied Synchrony in Conversation, Engineering Approaches to Conversational Informatics (Nishida, T. ed.), John Wiley & Sons. pp. 331-351.
櫻井芳雄 (2007). ブレインーマシン・インタフェースの現状と可能性　システム/制御/情報, 51, 464-472.
佐藤卓己・米谷匡史・苅部直 (2007). 鼎談「思想の100年をたどる (1)」思想 2007年8月号 1000号記念号　pp. 6-46.
佐藤弥 (2007). 広汎性発達障害における対人相互作用の障害の神経基盤　こころの臨床アラカルト, 26, 243-247.
佐藤弥・魚野翔太・十一元三 (印刷中). アスペルガー障害と扁桃体. *Clinical Neuroscience.*
杉万俊夫 (2007). 人間科学：当事者と研究者の協同的実践　家族療法研究, 24(3), 203-207.
高見茂 (2007). 教育再生を実現する財源の確保　教職研修 2007年9月号　教育開発研究所　pp. 59-62.
田中耕治 (2007).「洗練」としての「刷新」　現代教育科学, 605, 5-7.
田中耕治 (2007). これからの教育評価のあり方—到達目標の明確化—　教育展望, 53, 28-33.
田中耕治 (2007). 読む力・書く力を育て続けている実践—「生活綴方」に学ぶ　児童心理, 863, 103-107.
田中耕治 (2007). 教育評価としての「学力調査」のために　現代教育科学, 611, 8-10.
田中耕治 (2007). 自己評価システムを支える教員組織のあり方　現代教育科学, 615, 8-10.
田中耕治 (2008). 時代を代表する教師たち—東井義雄、斎藤喜博、庄司和晃—　指導と評価, 637, 37-40.
友永雅己 (2007). チンパンジーは「わかっている」か?　科学, 77, 60-62.
友永雅己 (2007). ホミニッド認知科学の可能性 —誰のための比較認知科学か—　生物科学, 59(1), 32-41.
友永雅己 (2008). チンパンジーにおけるシンボルの獲得　中山剛史・坂上雅道 (編)　脳科学と哲学の出会い 脳・生命・心　玉川大学出版部　pp.58-81.
辻本雅史 (2007). 勉強とは何か—「江戸」から考える—　春秋 創刊号 (済美平成中等教育学校校誌) 創立10周辺特別号　pp. 120-130.
辻本雅史 (2007). 江戸の基礎教養—人間のあり方を教える教育で育った幕末の武士—　人間会議 2007年冬号　pp. 176-183.
渡邊洋子・金井壽宏 (2008). [対談・成人教育] 生涯学習時代の成人教育　CREO2008年No. 1　神鋼ヒューマンクリエイト　pp. 13-23.
山本真也 (2008). ただ乗りは許さない　科学, 78, 272-273

5. 科研等報告書

荒木浩子・清水亜紀子・田中史子・大家総樹・築山裕子・皆藤章 (2007). 糖尿病者の「生きること」の心理臨床的理解の試み　平成18年度 「魅力ある大学院教育」イニシアティブ研究成果報告書, 16-19, 23-25.
浅田剛正 (2007). 筋ジストロフィー研究を振り返って～乖離と「むくわれなさ」から臨床現場研究の固

有性を考える～　筋ジストロフィー（者）の自立支援に関する臨床心理学的研究，平成 18 年度厚生労働省精神・神経疾患研究委託費筋ジストロフィーの療養と自立支援のシステム構築に関する研究 研究成果報告書（研究代表者：藤原勝紀），73-78.

浅田剛正（2007）．専門家の「初心」と心理臨床学—ラウンドテーブルディスカッション『初心』より　研究フィールドとしての人間環境を考える—臨床実践体験に照らした新しい研究連携体制を求めて—，平成18年度科学研究費補助金-基盤研究B研究成果報告書(研究代表者:藤原勝紀)，143-147.

江上直樹（印刷中）．公教育財源の効果的調達と配分方法に関する調査：教育資金動向の調査研究 教育委員会　平成19年度文部科学省委託事業「新教育システム開発プログラム」課題番号24「新しいタイプの自律的な学校運営に関する調査」

遠藤由美・柴内康文・内田由紀子（2008）．人間関係はいかに well-being と関係するか　現代社会における人間関係の諸相 調査と資料, No.105, 関西大学経済・政治研究所.

藤原勝紀（2007）．創造の臨床事例研究(FJK 研究会報告書), 第 3 号.

藤原勝紀（2007）．筋ジストロフィー児（者）の自立支援に関する臨床心理学的研究　平成18年度厚生労働省精神・神経疾患研究委託費研究成果報告書（分担研究者：藤原勝紀）.

藤原勝紀（2007）．子どもの遊びと環境学習を目的とした環境設計と教材開発に関する実践的研究　平成17～18年度科学研究費補助金研究 基盤研究(C) 課題番号 17500594（研究代表者:伊東啓太郎）.

藤原勝紀（2007）．研究フィールドとしての人間環境を考える—臨床実践体験に照らした新しい研究連携を求めて—　平成18年度科学研究費補助金研究 課題番号 1700248（研究代表者：藤原勝紀）.

藤原勝紀（2007）．臨床心理士として生きること・成長すること(平成17年度：第6回公開シンポジウム) 平成 16～18 年度『学術フロンティア研究成果報告書』—「こころの専門家」養成後の研修プログラムの開発的研究—（愛知学院大学），421-463.

林 創（2008）．学内（全学への展開 1）：大学院生のための教育実践講座—大学でどう教えるか—　京都大学高等教育叢書 26 平成 16 年度採択特色 GP 報告書 相互研修型 FD の組織化による教育改善 2007—4 年間の活動の成果と自己評価—　pp. 165-200.

林 創・大塚雄作（2008）．関西地区 FD 連絡協議会「授業評価ワークショップ」事前アンケートとその結果　関西地区 FD 連絡協議会設立に向けて pp. 133-149.

林 創・大塚雄作（2008）．関西地区 FD 連絡協議会「授業評価ワークショップ」事後アンケートとその結果　関西地区 FD 連絡協議会設立に向けて pp. 150-171.（付録資料を含む）

平松朋子（2007）．研究フィールドとしての人間環境を考える－臨床実践体験に照らした新しい研究連携を求めて－　平成18年度 科学研究費補助金－基盤研究B（課題番号：17300248）『専門的教養知』の働きとその教育・育成に関する文理総合型研究，研究成果報告書.

平松朋子（2008）．筋ジストロフィー児（者）の自立支援に関する臨床心理学的研究　平成 17 年度～19 年度 厚生労働省精神・神経疾患研究委託費 筋ジストロフィーの療養と自立支援のシステム構築に関する研究(筋ジス研究神野班) 研究成果報告書（総集編）.

平松朋子（2008）．『専門的教養知』の働きとその教育・養成に関する文理総合型研究　平成 19 年度科学研究費補助金—基盤研究 B（課題番号:17300248），研究成果報告書.

廣瀬智士・羽倉信宏・山川義徳（2008）．他者理解におけるミラーシステムの役割の検討　グローバル COE「心が活きるための国際教育拠点」平成 19 年度研究開発コロキアム報告

池田華子（印刷中）．The possibility of the silence; The chasm of the language. 京都大学大学院教育学研究科研究開発コロキアム報告書.

井上明美.（2007）．臨床実践指導に関する授業の場と体験を考えるⅠ（京都大学大学院教育学研究科実践指導学講座 平成 19 年度「臨床実践指導学演習Ⅰ」「臨床実践指導学実習Ⅰ」受講体験記録集），35, 40.

井上明美.（印刷中）．臨床実践指導に関する状業の場と体験を考えるⅡ（京都大学大学院教育学研究科実践指導学講座 平成 19 年度「臨床実践指導学演習Ⅰ」「臨床実践指導学実習Ⅰ」受講体験記録集）.

井上明美・西嶋雅樹・本多早由里・森田健一・今西和美・近藤千寿枝・吉田啓子・佐藤健・菱田一仁・小西佳世・永山智之（2007）．学校現場においける心理臨床的関わりについての実践的研究—新しい学びと育ちの場・洛風中学校でのとりくみを通じて　平成19年度研究開発コロキアム報告書.

板倉昭二（2007）．基盤研究C「他者に関する暗黙的理解の発達と進化：暗黙的な「心の理論」の進化発

達心理学的研究」
鴨川明子（印刷中）. マレーシアにおける義務教育制度の導入とその背景　科学研究費報告書　科学研究費補助金（基盤研究（B））研究課題名「義務教育の機能変容と弾力化に関する国際比較研究」（課題番号 18330179 研究代表者・京都大学大学院教育学研究科・教授・杉本均）
加藤奈奈子・大石真吾・佐々木麻子・山本尚代（印刷中）. 心理臨床における箱庭を介したかかわりに関する研究ー特別養護老人ホームでの調査からー　2007 年度大学院 GP プログラムコロキアム報告書.
川崎良孝・高見茂・田中耕治・金子勉・西岡加名恵・中池竜一（2007). E.FORUM スクールリーダー育成研修　独立行政法人 教員研修センター委嘱事業 平成 18 年度「教員研修モデルカリキュラム開発成果報告書」
児玉華奈（2007). 『コモンスペース』をめぐる学びの一考察—『ひがしまち街角広場』の実践から—　京都大学大学院教育学研究科・北京師範大学教育学院 日中教育学系合同シンポジウム 2007 論文集附：日中教育学系合同シンポジウム報告書
児玉華奈・太田拓紀・生駒佳也・辻喜代司（印刷中). 野殿・童仙房地域における協働的な『学びの空間』をめぐるフィールドワーク　（仮）2007 年度グローバル COE 研究開発コロキアムの教育実践コラボレーション・センター事業 報告書
近藤千寿枝（印刷中). 公教育財源の効果的調達と配分方法に関する調査：教育資金動向の調査研究 保護者 平成 19 年度文部科学省委託事業「新教育システム開発プログラム」採択番号 24「新しいタイプの自律的な学校運営に関する調査」
黒田真由美（2007). グローバル COE 報告書「ナラティヴデータに対する多角的検討」
黒江ゆり子（研究代表者）（2008）. 慢性の病いにおける他者への「言いづらさ」についての研究(研究課題番号 17659674), 平成 17～19 年度科学研究費補助金「萌芽研究」研究成果報告書, 1-122.
日下部達哉（2007). 日本における義務教育改革—義務教育制度の弾力的運用に焦点をあてて—　『義務教育の機能変容と弾力的運用に関する国際比較研究』科学研究費補助金（基盤 B）報告書（代表　杉本均）
日下部達哉（2007). バングラデシュにおける EFA 実現に向けた義務教育の弾力的運用　『義務教育の機能変容と弾力的運用に関する国際比較研究』科学研究費補助金（基盤 B）報告書（代表　杉本均）
楠見孝（2008）. 広告のソース記憶の促進・混同に及ぼす懐かしさ感情の効果　平成 19 年度（第 41 次）吉
田秀雄記念事業財団助成研究集(要旨), pp.53-65.
楠見孝・平山るみ（印刷中）. 食品リスク認知を支えるリスクリテラシーの分析　文部科学省科学研究費基盤研究 A「科学を基礎とした食品安全行政/リスクアナリシスと専門職業、職業倫理の確立」平成 19 年度報告書.
楠見孝・小倉加奈代（2008）. 仮想空間を利用したガン患者サポートグループの構築　文部科学省科学研究費特定領域研究「情報爆発時代に向けた新しい IT 基盤技術の研究」平成 19 年度成果報告会報告書.
楠山研（2008). 日本の保育所入所基準見直しに関する考察—出産後に就職するという選択—　研究代表者 深掘聰子 平成 19 年度科学研究費補助金（基盤研究（C））課題番号 19600003「子育て支援制度の整合性・公共性・平等性に関する国際比較研究」中間報告書　pp. 101-109.
楠山研（印刷中). 中国における義務教育制度の弾力的運用に関する動向　研究代表者 杉本均 平成 19 年度科学研究費補助金（基盤研究（B））課題番号 18330179「義務教育の機能変容と弾力化に関する国際比較研究」最終報告書
前平泰志・渡邊洋子・武田一浩・元根朋美・柴原真知子・辻喜代司（2008). 京都大学シニアキャンパス（2005-2007）実施報告　京都大学生涯教育学・図書館情報学研究, 7, 177-229.
松下佳代（2008). 相互研修型 FD と SoTL　京都大学高等教育叢書 26 相互研修型 FD の組織化による教育改善 2007—4 年間の活動の成果と自己評価—　pp. 209-223.
松下佳代（印刷中). 算数・数学学力調査報告　牧野カツコ（編）青少年期から成人期への移行についての追跡的研究 JELS 第 11 集
宮島朝子・相良二郎・真継和子（2007）. 住宅改修必要性評価と福祉用具処方の一体化モデル開発に向けた

基礎的研究　平成17~19年度科学研究費補助金（萌芽研究）（課題番号17659670）, H18年度報告書.
三宅浩子（印刷中）. 公教育財源の効果的調達と配分方法に関する調査：教育資金動向の調査研究 小・中学校長　平成19年度文部科学省委託事業「新教育システム開発プログラム」採択番号24「新しいタイプの自律的な学校運営に関する調査」
溝上慎一（2007）. 大学生が大学教育で身につける汎用的能力（Generic Skills）の実証的検討　秦由美子代表 平成16-18年度科学研究費補助金研究基盤(B)（一般）『大学における学生の質に関する国際比較研究－教育の質保証・向上の観点から－』（課題番号17330165）中間報告書　pp. 14-26.
溝上慎一（2008）. 現代大学生の学びと人生形成—知識・技能獲得に影響を及ぼす学習タイプの差異—　京都大学大学院教育学研究科・北京師範大学教育学院 日中教育学系合同シンポジウム2007論文集 pp. 94-109.
溝上慎一（印刷中）. 授業・授業外学習による学習タイプと汎用的技能との習得の関連　秦由美子代表 平成16-18年度科学研究費補助金研究基盤(B)（一般）『大学における学生の質に関する国際比較研究－教育の質保証・向上の観点から－』（課題番号17330165）報告書
森川浩子（研究代表者）・稲垣美智子・江川隆子・大橋健・兼松百合子・黒江ゆり子他9名（研究分担者）（2007）. 糖尿病自己管理アウトカム指標を用いた糖尿病教育ガイドラインの策定(研究課題番号17390578), 平成17-18年度科学研究費補助金「基盤研究B一般」研究成果報告書, 1-86.
森本洋介（訳）（2007）. デビッド・バッキンガム（著）テクノロジーを超えて—デジタル文化世代の学びを再考する　部落解放・人権研究所（編）ヒューマンライツ No. 236　解放出版社　pp. 40-47.
内藤みちよ（2007）. 登校生徒への眼差しを通してSCの役割を考える－SCイメージアンケートの内容から－（学校臨床実践・調査研究報告）不登校生徒の自立と学習を支える洛風にふれて, 74－77.
内藤みちよ（2007）. 自己表現のグループ実施報告—実習のあり方について－（報告と考察）立命館大学心理・教育相談センター, 年報6号, 89－91.
南部広孝・楠山研（2008）.『中国の大学入学者選抜における「自主招生」の現状（資料集）』長崎大学アドミッションセンター　研究代表者 南部広孝 平成19年度科学研究費補助金（基盤研究（C））課題番号19530757「東アジア諸国・地域における大学入学者選抜制度の比較研究」中間報告書
西嶋雅樹・本多早由里・近藤千寿枝・長谷川千紘・小西佳世・中藤信哉（印刷中）. 現場体験報告から見る心理臨床家の専門性. 平成19年度研究開発コロキアム報告書.
西岡加名恵（2007）. ポートフォリオを活かした人権教育—自他の大切さを実感できる子どもの育成　加西市立下里小学校『平成17・18年度　人権教育開発事業「人権教育指定校」報告書』　pp. 52-57.
西岡加名恵（2007）. 評価方法と評価規準の開発—『逆向き設計』論の活用　田中耕治（編）学力向上をめざす評価規準と評価方法の開発　科学研究費補助金 基盤研究(C) 研究課題番号：16530502 研究成果最終報告書　pp. 10-19.
西澤伸太郎・荒木浩子・畑中千紘・清水亜紀子・野口寿一・松井華子（2007）. ノーステキサス大学 ランドレス博士を訪ねて －プレイセラピーセンターと子ども関連施設訪問－　遊戯療法学研究, 6(1), 77-83.
西澤伸太郎・吉水はるな・荒木浩子・畑中千紘・清水亜紀子・謝玲糸・野口寿一・松井華子・笹倉尚子・本多早由里・越智美幸・佐々木麻子・長谷川千紘・平井久世・角野善宏（2007）. 小児科領域における心理臨床の実践と教育に関する研究　平成18年度 「魅力ある大学院教育」イニシアティブ研究成果報告書, 25-33.
野口剛・赤上裕幸・大田誠二・山崎貴子・井上烈・岡田丈祐・岡田薪子・長﨑励朗（2008）. 情報・メディア・コミュニケーションの社会的役割と機能に関する実証的研究　京都大学グローバルCOEプログラム「心が活きる教育のための国際的拠点」研究開発コロキアム研究成果報告書
小原優貴（2008）. インドの義務教育改革の動向　研究代表者 杉本均『義務教育の機能変容と弾力化に関する国際比較研究』平成18-19年度科研費基盤研究(B)（課題番号18330179）研究成果報告書
大田誠二（2007）. 高等学校における情報科教育の現状　京都大学グローバルCOEプログラム「心が活きる教育のための国際的拠点」研究開発コロキアム研究成果報告書
大塚雄作（2008）. 工学部授業アンケートの結果と分析　京都大学高等教育叢書26 平成16年度採択特色GP報告書

大塚雄作・大山泰宏・中村夕衣・田中優子 (2008). FD に関する実態とニーズ調査　関西地区 FD 連絡協議会の設立に向けて

大山泰宏 (2007). ①モントリオールの諸大学の FD に関する調査報告. ②AUSIN 氏による講演・ワークショップ　京都大学高等教育叢書 25 平成 16 年度採択特色 GP 報告書 相互研修型 FD の組織化による教育改善 2006　pp. 119-128, 129-130.

大山泰宏 (2007). 3 年間の研究の流れ　京都大学高等教育叢書 24 大学授業実践の質的研究にもとづく電子メディア化と FD ネットワークの構築　pp. 14-17.

大山泰宏・酒井博之 (2007). Web 公開授業のシステムについて　京都大学高等教育叢書 24 大学授業実践の質的研究にもとづく電子メディア化と FD ネットワークの構築　pp. 245-255.

苧阪直行 (2007). 中央実行系の脳内表現—fMRI による研究—　基盤研究(A)(2)　課題番号 16203037.

李 霞 (印刷中). 中国における個性教育　アジア諸国における生徒の個性に応じた教育に関する研究—日本・インド・中国・タイを事例として—（グローバル COE「心が活きる教育のための国際的拠点」平成 19 年度研究開発コロキアム最終報告書).

Saito, K. (in press). Education for language minority students in Japan: The case study of Osaka prefecture. Collection of Papers at Japan-China JointSymposium on Educational Studies 2007, Graduate School of Education, Kyoto University.

齋藤桂・桐村豪文・三宅浩子 (印刷中). 落ちこぼれをつくらないための教育制度研究—アメリカを事例として—　京都大学教育実践コラボレーション-センター（編）平成 19 年度教育開発コロキアム報告書

酒井博之 (2008). II-A 第 3 回工学部教育シンポジウム　京都大学高等教育叢書 26 平成 16 年度採択特色 GP 報告書 相互研修型 FD の組織化による教育改善 2007—4 年間の活動の成果と自己評価—　pp. 65-72.

酒井博之・林 創 (2008). III 卒業研究調査プロジェクト　京都大学高等教育叢書 26 平成 16 年度採択特色 GP 報告書 相互研修型 FD の組織化による教育改善 2007—4 年間の活動の成果と自己評価—　pp. 109-164.

酒井博之 (2008). VI-C Web 公開授業の研究報告について　京都大学高等教育叢書 26 平成 16 年度採択特色 GP 報告書 相互研修型 FD の組織化による教育改善 2007—4 年間の活動の成果と自己評価—　pp. 239-245.

酒井博之・林 創 (2007). 平成 16 年度採択特色 GP「相互研修型 FD の組織化による教育改善」活動報告 2006 年度工学部卒業研究調査プロジェクト（速報版）

櫻井芳雄 (印刷中). 多様な長期記憶の形成を担う機能的神経回路の活動について　文部科学省科学研究費補助金基盤研究(B)報告書.

清水亜紀子 (2007). 筋ジストロフィーに関する研究体験を振り返って～患者さんの入院生活に関わるスタッフとの心理臨床面接から～　筋ジストロフィー児（者）の自立支援に関する臨床心理学的研究 平成 18 年度 厚生労働省精神・神経疾患研究委託費 筋ジストロフィー児（者）の自立支援に関する臨床心理学的研究, 研究成果報告書（研究代表者：藤原勝紀), 79-89.

清水亜紀子 (2007).「へだたり」における「つながり」の可能性～患者さんとの面接体験から～　研究フィールドとしての人間環境を考える－臨床実戦体験に照らした新しい研究連携を求めて－　平成 18 年度 科学研究費補助金－基盤研究 B(課題番号：1700248)『専門的教養知』の働きとその教育・育成に関する文理総合型研究, 研究報告書, 148-154.

清水亜紀子・田中史子・大家聡樹・築山裕子・西田麻衣子・佐々木麻子・森崎志麻 (印刷中). 糖尿病者の「生きる」ことの心理臨床的理解の試み. 平成 19 年度　大学院教育改革支援プログラム研究成果報告書.

荘島幸子 (2008). 科研合宿における新たな学びの経験（課題番号 16330131 山田洋子 基盤研究 (B)「フィールドの語りをとらえる質的心理学の研究法と教育法」（研究協力者）[交付年度 2004-2007])

杉万俊夫 (2007). 鳥取県智頭町「日本ゼロ分のイチ村おこし運動」：住民自治システムの内発的創造（NIRA Case Study Series No.2007-06-AA-3）NIRA ケーススタディ・シリーズ, 1, 57-75.

杉本均 (編著) (印刷中). 義務教育の機能変容と弾力化に関する国際比較研究　平成 18～19 年度科学研究費補助金成果報告書（研究代表者 杉本均)

高見茂（印刷中）. 民間資金活用手法の有効性と限界（CSR・SRI、PFI の証券化）、地方教育費歳入・歳出の動向（歳入の歳出への影響分析、集権と分権の教育財政基準の検討、税制改革と教育費負担）公教育財源の効果的調達と配分方法に関する総合的研究 平成 19 年度最終報告書（文部科学省委託事業、新教育システム開発プログラム）

高見茂（2008）. 学校の管理運営の状況　学校の第三者評価者研修テキスト　監査法人トーマツ　pp. 120-125, pp. 136-139.

高柳充利（2008）. V. 学内（全学への展開２）：リレー授業「ライフサイクルと教育」の一年を貫くもの－リレーをするのは誰か？－　京都大学高等教育研究開発推進センター（編）,『京都大学高等教育叢書 26　平成 16 年度採択 GP 報告書　相互研修型 FD の組織化による教育改善 2007－4 年間の活動の成果と自己評価－』, 200-207.

田中耕治（2007）. 目標準拠評価の意義と課題（pp. 2-9.）, 学力調査の特徴と分析視角（pp. 52-57.）研究代表者 田中耕治『学力向上をめざす評価規準と評価方法の開発』（平成 16-18 年度科学研究費補助金研究成果最終報告書）

田中毎実（2007）. 大学教育研究の失敗―臨床的大学教育研究をめぐって　「日本の教育システム」研究グループ：教育研究の「失敗」サブグループ　教育研究の「失敗」報告書　pp. 139-168.

田中毎実（2008）.「相互研修型 FD」組織化の可能性　京都大学高等教育叢書 26―平成 16 年度採択特色 GP 報告書　pp. 1-20.

谷村綾子（印刷中）. 全国自治体合併と教育費支出の動向　『公教育財源の効果的調達と配分方法に関する総合的研究―教育資金動向の調査研究』新教育システム開発プログラム研究成果報告書（研究代表者　高見　茂）.

辻本雅史（印刷中）. 知の伝達メディアの歴史研究　基盤研究（B）

築山裕子・梅村高太郎・笹倉尚子・谷垣紀子・友尻奈緒美・林明日香・古川裕之・小西佳世・高橋優佳・中野江梨子・永山智之（印刷中）. こころと身体の在り方についての心理臨床学的理解の試み――心身症を通して　大学院教育改革支援プログラム「臨床の知を創出する質的に高度な人材育成」研究開発コロキアム報告書.

やまだようこ（印刷中）. フィールドの語りをとらえる質的心理学の研究法と教育法（基盤研究 B 16330131 研究代表者）

山崎貴子（2007）. 方向付けと選択可能性にみる若者の職業展望の 4 分類―何が若者の職業展望を規定するのか―　平成 18 年度「魅力ある大学院教育」イニシアティブ京都大学大学院教育学研究科「理論・実践融合型による教育学の研究者養成」研究開発コロキアム研究成果報告書『新しい青年世代の生活と意識に関する実証的研究』

山崎貴子（2008）. 雑誌『婦人倶楽部』における戦時期の職業婦人イメージ　情報・メディア・コミュニケーションの社会的役割と機能に関する実証的研究　京都大学グローバル COE プログラム「心が活きる教育のための国際的拠点」研究開発コロキアム研究成果報告書

山崎徳子・勝浦眞仁・川上大介（2007）. 保育・教育実践に貢献しうる研究アプローチの構築―人の生きる場の「あるがまま」に迫る方法論とは―　平成 19 年度研究開発コロキアム報告書.

６．翻訳

ベッカー, C.（2007）.『死の体験』の韓国語訳、Seoul: Thinking Baeksung Publishing、pp.1-300.（ベッカー, C.（1992）死の体験　法蔵館）

遠藤利彦・北山修（監訳）（2008）. ピーター・フォナギー（著）愛着理論と精神分析　誠信書房

遠藤利彦・谷口弘一・金政祐司・串崎真志（監訳）（2008）. W・スティーヴン・ロールズ, ジェフリー・A・シンプソン（編）成人のアタッチメント：理論・研究・臨床　北大路書房

福田斎（2007）. 第 11 章 治療的な制限設定　山中康裕(監訳)　プレイセラピー 関係性の営み　日本評論社　pp.177-197.（G.Landreth.（2002）. *Play Therapy : The art of relationship*）

石井佑可子（2008）. 成人の近しい関係における葛藤―アタッチメントの視点から―　遠藤利彦・谷口弘一・金政祐司・串崎真志（監訳）成人のアタッチメント：理論・研究・臨床　北大路書房　pp. 238-267.

角野善宏 (2007). 第6章 プレイセラピスト　山中康裕(監訳)　プレイセラピー 関係性の営み　日本評論社　pp67-88.　(G.Landreth. (2002). *Play Therapy : The art of relationship*)
金田みずき (印刷中). 第9章 記憶と知覚　苧阪直行 (監訳)　意識の脳内表現－心理学と哲学からのアプローチー　培風館　(Rose,D.(2006) *Consciousness: Philosophical, psychological and neural theories.* Oxford University Press.)
川崎良孝 (2007). ジョン・E. ブッシュマン (著) 民主的な公共圏としての図書館：進公共哲学の時代に司書職を位置づけ持続させる　京都大学図書館情報学研究会：日本図書館協会 (発売)
川崎良孝 (2007). ダグラス・レイバー (著) 司書職と正当性：公立図書館調査 (Public Library Inquiry) のイデオロギー　京都大学図書館情報学研究会：日本図書館協会 (発売)
川崎良孝・川崎佳代子・村上加代子 (2007). アメリカ図書館協会知的自由部 (編) 図書館の原則改訂2版—図書館における知的マニュアル (第7版)　日本図書館協会
川崎良孝・櫻井待子・村上加代子 (2007). 呉建中 (著) 21世紀の図書館：世界のなかの中国の図書館　京都大学図書館情報学研究会：日本図書館協会
田口瑛子・川崎良孝・村上加代子 (2008). キャスリーン・デ・ラ・ペーニャ・マックック著, 訳『アメリカ公立図書館職入門　京都大学図書館情報学研究会：日本図書館協会
数井みゆき・遠藤利彦・北川恵 (監訳) (2008). ハインツ・ブリッシュ (著) アタッチメント障害とその治療：理論から実践へ　誠信書房
黒江ゆり子 (監訳) (2007).『クロニックイルネス－人と病いの新たなかかわり』. 医学書院. (IM. Lubkin, PD. Larsen (2002). Chronic Illness: Impact and Intervention (5th)., Jones and Barlett Publishsers)
小林信一 (2008). アタッチメントにおける精神生物学的観点—生涯にわたる健康への示唆—　遠藤利彦・谷口弘一・金政祐司・串崎真志 (監訳) 成人のアタッチメント：理論・研究・臨床　北大路書房 pp. 220-235.
久保明子 (2007). 第10章 促進的な応答の特性　山中康裕(監訳)　プレイセラピー 関係性の営み　日本評論社　pp.49-176. (G.Landreth. (2002). *Play Therapy : The art of relationship*)
前田拓人 (訳) (印刷中)　Thomas Macho (著) Tod　第1回グローバルCOE主催京都大学・ベルリン自由大学共同国際シンポジウム「幸福とリスク」発表原稿
前田拓人 (訳) (印刷中)　Jürgen Körner (著) Menscheliches Glück　第1回グローバルCOE主催京都大学・ベルリン自由大学共同国際シンポジウム「幸福とリスク」発表原稿
松本健三 (2007). 海外文献抄録－世界における心理療法　精神療法, 33, 780-781.　(L. P. Rehm (Ed.) (2007). Psychotherapy around the globe, Journal of Clinical Psychology: In Session, 63 pp. 707-790)
西浦太郎 (訳) (印刷中). 本来の自分を探し求める旅をはじめて：アイデンティティの危機に陥った中年男性との箱庭療法　箱庭療法学研究. (Kim,Bo Ai (2008). Starting on a Journey in search of Myself : A Case Study of Sandplay Therapy with a middle-aged Man in Identity Crisis.)
西澤伸太郎 (2007). プレイセラピーの諸問題　山中康裕(監訳)　プレイセラピー 関係性の営み　日本評論社　pp.213 - 226. (G.Landreth. (2002). *Play Therapy : The art of relationship*)
大塚結喜 (印刷中). 機能主義Ⅰの近年の発展－ホムンクルス機能主義－　苧阪直行 (監訳)　意識の脳内表現－心理学と哲学からのアプローチー　培風館　pp. 215-238. (Rose,D.(2006) *Consciousness: Philosophical, psychological and neural theories.* Oxford University Press)。
小野文生 (訳) (2007). ヘルマン・シュヴェンゲル「社会」(Hermann Schwengel, *Gesellschaft*)　Ch.ヴルフ (編著) 藤川信夫 (監訳) 歴史的人間学事典 第1巻　勉誠出版
小野文生 (訳) (2007). ゲルブルク・トロイシュ=ディーター「ジェンダー」(Gerburg Treusch=Dieter, *Geschlecht*)　Ch.ヴルフ (編著) 藤川信夫 (監訳) 歴史的人間学事典 第1巻　勉誠出版
苧阪直行 (印刷中). (監訳) 意識の脳内表現—心理学と哲学からのアプローチ—　培風館　(Rose,D.(2006) *Consciousness: Philosophical, Psychological and Neural Theories.* Oxford University Press.)
斉藤直子(訳) (2007). 第二章「ケアリング」, 第六章「自己をケアすること」. 佐藤学(監訳)　学校におけるケアの挑戦：もうひとつの教育を求めて　ゆみる出版. pp42-64, pp143-172.

(Noddings,N.(1992) *The Challenge to Care in Schools: An Alternative Approach to Education.* Teachers College Press.)
謝玲糸 (2007). 山中康裕 (監訳) 第15章 プレイセラピーの中の子どもたち プレイセラピー 関係性の営み 日本評論社 pp.233-253. (G.Landreth. (2002). *Play Therapy : The art of relationship*)
清水亜紀子 (2007). 第9章 関係性の始まり－子どものための時間 山中康裕 (監訳) プレイセラピー 関係性の営み 日本評論社 pp123-148. (G.Landreth. (2002). *Play Therapy : The art of relationship*)
篠原郁子 (2008). 妊娠前におけるアタッチメント障害への介入 数井みゆき・遠藤利彦・北川恵 (監訳) アタッチメント障害とその治療：理論から実践へ 誠信書房 (Brisch, H. K. (1999). Manifestations of Attachment Disorders Prior of Conception. In K. H. Brische (Ed.), *Treating Attachment Disorders from Theory to Therapy.* Klett Cotta Verlag.)
篠原郁子 (2008). 成人の対人関係における安全な避難場所と安全基地のケアギビングプロセス 遠藤利彦・谷口弘一・金政祐司・串崎真志 (監訳) 成人のアタッチメント：理論・研究・臨床 北大路書房 (Feeney, C. B., & Collins, L. N. (2004). Interpersonal safe haven and secure base caregiving processes in adulthood. In W. S. Rholes & J. A. Simpson (Eds.), *Adult attachment: Theory, research, and clinical implications.* Guilford.)
須藤春佳 (2007). 海外文献抄録—箱庭療法の解釈における21のポイント 精神療法 (金剛出版), 33(6), 776－777. (Martin Kalff (2007). Journal of sandplay therapy 16,(1),51-71.)
高柳充利 (訳) (2007). ポール・スタンディッシュ (著). 齋藤直子著『内なる光：デューイ、エマソンの道徳的完成主義と教育』書評 近代教育フォーラム, 16, 197-208. (N.Saito. (2005). *The Gleam of Light: Moral Perfectionism and Education in Dewey and Emerson.* Fordham University Press.)
田中史子 (2007). 第4章 子どもたちとは, 第5章 子ども中心セラピー 山中康裕 (監訳) プレイセラピー 関係性の営み 日本評論社 pp. 35-65.. (G.Landreth. (2002). Play Therapy : The art of relationship)
山本和行 (訳) (2007). 張東嬌 (著) 義務教育段階における学校選択行為とそのソーシャル・キャピタルの構造 日中教育学系合同シンポジウム2007記念論文集
横井公一・辻河昌登 (監訳) (2008). 関係精神分析の視座－分析過程における希望と怖れ ミネルヴァ書房 (Mitchel,S.A. (1993). Hope and Dread in Psychoanalysis.)

7. 辞典・事典

遠藤利彦 (印刷中). アタッチメント他17項目 佐藤学他 (編) 現代教育学事典 東京書籍
石井英真 (2008) 「パフォーマンスの評価」「熟達度」「アセスメント」「ルーブリック」「情報に関するコンピテンシー」「コンピテンシー課題」「パフォーマンス目標」岡本敏雄他 (編)『情報教育事典』丸善
小山静子 (2007). ウィメンズ・ブックストア松香堂. 学制. 共立女子大学. 識字. 下田歌子. 女子教育刷新要綱.『女性』.『女性日本人』. 男尊女卑. 帝国婦人協会. 鳩山薫. 鳩山春子.『婦人問題』.『我が子の教育』 金子幸子・黒田弘子・菅野則子・義江明子 (編) 日本女性史大辞典 吉川弘文館
楠見孝 (印刷中). 批判的思考 海保博之 (編) 感情と思考の科学事典 朝倉書店
松田 憲 (印刷中). 単純接触効果と広告 海保博之 (編) 感情と思考の科学辞典 朝倉書店
西平直 (2007).「青年ルター」,「魂のライフサイクル」,「完全なる人間」,「宗教心理の探究」(事典項目). 島薗進他 (編) 宗教学文献事典 弘文堂
布柴靖枝 (印刷中). カウンセリング関係, カウンセリングの限界, 思春期の自助グループ 産業カウンセリング事典 金子書房 (分担執筆)
杉本均. (2008).「アジアの教育」,「アジアの高等教育」,「マレーシアの教育」の項目執筆 東南アジアを知る事典 平凡社
高見茂 (2007). PFI 最新教育キーワード137 時事通信

高見茂 (2008). 収支に関する制度、補助金の適正化、授業料等の学校納付金　必携学校小六法　協同出版 pp. 891-893.
辻本雅史 (2007). 「藩校」項目執筆および「藩校表」　歴史考古学大事典　吉川弘文館　pp. 942-951.
内田由紀子 (2007). 「自尊感情」「文化と感情表出」　岡村一成（編）　応用心理学事典　丸善出版
渡邊洋子 (2007). 「処女会」「女子青年団」「女子拓務訓練所」「天野藤男」「花木チサヲ」　金子幸子・黒田弘子・義江明子（編）日本女性史大辞典　吉川弘文館

8．書評

伊藤良子 (2007). 書評『カウンセリングマインド再考』　心理臨床学研究, 25(4), 487-488.
角野善宏 (2007). 妄想はどのようにして立ち上がるか(書評). 臨床心理学, 6(6), 850.
金子勉 (2007). ウルリッヒ・タイヒラー『ヨーロッパの高等教育』(書評)　比較教育学研究, 35, 194-196.
溝上慎一 (印刷中). 書評 都筑学『大学生の進路選択と時間的展望』ナカニシヤ出版　大学論集（広島大学高等教育研究開発センター）
杉本均 (2007). 書評「アジアの教育計画（上下巻）」　比較教育学研究 第34号　東信堂
田中毎実 (2007). 下司晶（著）『<精神分析的子ども>の誕生』　教育学研究, 74(4), 577-579.
小山静子(2007).　書評　上村千賀子(著)『女性解放をめぐる占領政策』勁草書房　教育社会学研究,81,124-126.

9．学会発表

赤沢真世 (2007). 現代アメリカにおける入門期英語教育の一考察—M. プレスリーの「バランスのとれた指導」を中心に—　日本教育方法学会第43回大会自由研究発表　京都大学
Akazawa, M. (2007). The present situation and problems of English education in Japan from the analysis of a nationwide survey of academic ability. The Japan-China Joint Symposium on Educational Studies 2007. Kyoto University, JAPAN, 5-7 November.
Ando, H., Sakano, Y., Ashida, H. (2007). Human evaluation of visual and haptic interaction. *12th International Conference on Human-Computer Interaction*, Beijing, China, 22-27 July, 2007.
荒木浩子・平松朋子・浅田剛正・清水亜紀子・矢納あかね・山本有恵・山崎輝子・荒川喜博・林香織・小西哲郎・藤原勝紀 (2007). 臨床現場に根ざした研究を展開するための基盤構築プロセス—研究の「場づくり」とその臨床実践研究機能から　平成19年度厚生労働省精神・神経疾患研究委託費 筋ジストロフィーの療養と自立支援のシステム構築に関する研究, 筋ジストロフィー患者に対する心理的援助の研究 平成19年度班会議,2007.12.
Asada, K., Tomiwa, K., Okada, M., & Itakura, S. (2007) . Intact imperative function and impaired declarative function in verbal communication of children with Williams syndrome. Poster presented at the 13th European Conference on Developmental Psychology, Jena, Germany. , August,2007.
浅田剛正・平松朋子・荒木浩子・清水亜紀子・矢納あかね・山本有恵・山崎輝子・荒川喜博・林香織・小西哲郎・藤原勝紀 (2007). 筋ジストロフィー患児（者）の自立支援に関する心理臨床学的接近—臨床現場に生きる患者Aさんとの心理臨床面接から—　平成19年度厚生労働省精神・神経疾患研究委託費 筋ジストロフィーの療養と自立支援のシステム構築に関する研究, 筋ジストロフィー患者に対する心理的援助の研究 平成19年度班会議,2007.12.
Ashida, H., Lingnau A., Wall, M. B., Smith, A. T. (2007). Speed tuning in human visual cortex: an fMRI adaptation study. *Perception supplement, ECVP2007*, Arezzo, Italy, 27-31August, 2007.
蘆田宏・村上郁也・栗木一郎・北岡明佳 (2007). 回転運動錯視に対する脳活動計測の試み(2)　日本視覚学会2008年冬季大会, 2007. (*Vision*, 20, 41.)
番浩志・渡部幹・山本洋紀 (2007). 他者の信頼性情報に関する脳イメージング研究. 日本社会心理学会第48回大会, 東京都新宿区, 早稲田大学戸山キャンパス, 2007.9.22－24.
番浩志・山本洋紀・花川隆・麻生俊彦・浦山慎一・福山秀直・江島義道 (2007). 低次視覚野V1/V2における遮蔽された物体のトポグラフィックな表象と事前知識がその表象に与える影響：fMRI研究.

日本視覚学会2007年度夏季大会, 愛知県豊橋市, ホテル日航豊橋, 2007.7.23-25. (*VISION*, 19(3), 178-179).

Ban, H. & Yamamoto, H. & Hanakawa, T. & Urayama, S. & Aso, T. & Fukuyama, H. & Ejima, Y. (2007). Spatial specificity of V1/V2 responses to an occluded surface. *The Japan Neuroscience Society 30th Annual Meeting.* Pacifico Yokohama, Yokohama, Kanagawa, Japan, 10-12 September, 2007. (*Neuroscience Research*, 58 (Supplement 1), S152).

Carvalho, M.K.F.・楠見孝 (2007). 認識論的メタ認知の構造に関する文化比較　日本教育心理学会第49回総会, 2007. (発表論文集, 374.)

趙卿我 (2007). 韓国内の韓国語教育の研究動向と課題　関西教育学会第59回大会自由研究発表　京都大学

江上直樹 (2007). 我が国の進路指導制度の歴史的展開に関する考察　関西教育行政学会7月例会

江上園子・久津木文・板倉昭二・小椋たみ子 (2007). 社会的随伴性に対する乳児の反応における性差の検討-乳児の視線と表情の分析-　日本心理学会第７１回大会, 2007.

江上園子・遠藤利彦・無藤隆 (2008). 母親の日常的な生活文脈における母性愛信奉傾向と精神的健康 (1) 日本発達心理学会第19回大会　大阪国際会議場

Egami, S., Kutsuki, A., Kuroki, M., Ogura, T., Itakura, S., Kubo, K. (2007). Infants' responses to the still-face situation at 5- and 9-month-old. -Focusing on the gender difference-. 13th European Conference on Developmental Psychology, 2007.

遠藤貴広 (2007). PISA が測定する問題解決能力―『真正の評価』論の視点から　日本カリキュラム学会第17回大会自由研究発表　埼玉大学

遠藤貴広 (2007). 米国の中等学校改革実践における「真正の評価」論の位置―エッセンシャル・スクール連盟加盟校の改革実践を事例に　日本教育方法学会第43回大会自由研究発表　京都大学

遠藤利彦・船橋篤彦・大神英裕・中村知靖・実藤和佳子・小林隆児 (2008). 発達の予兆を読み・解く：社会的認知の定型・非定型発達とその発達支援をめぐって（シンポジウム）　日本発達心理学会第19回大会　大阪国際会議場

Fujita, K., Tsutsumi, S., Morimoto, Y., Coelho, C. G., Falótico, T., & Ottoni, E. B. (2007). Substrate choice in nut-cracking behavior of semi-wild tufted capuchin monkeys (*Cebus apella*). Poster presented at the XXXth International Ethological Conference, Dalhausie University, Halifax, Canada. Aug 20-22, Abstracts p.187.

藤田和生 (2007). フサオマキザルにおけるメタ記憶（2）－メモリフラッグか内容モニタリングか－　日本心理学会第71回大会, 東洋大学, 2007.9.

藤田和生・高岡祥子・寺岡彩 (2007). イヌにおける物理的推論　日本動物心理学会第67回大会, 早稲田大学, 2007.10.

Fujita, K.,Kuroshima, H., Hattori, Y., & Takahashi, M. (in press). Social intelligence in capuchin monkeys (*Cebus apella*). In: S. Itakura & K. Fujita (Eds.) Origins of the social mind. Springer Verlag.

藤谷萌絵・楠見孝 (2007). 大学生の将来展望に及ぼす相互独立的-協調的自己観の影響　日本認知心理学会第5回大会, 2007,5. (発表論文集, 149.)

福田 斎・伊藤良子・楠見孝・藤田 潤・駿地眞由美・山本喜晴・井上嘉孝・築山裕子・西田麻衣子・松本拓磨 (2007). 遺伝子診断に関する意思決定と支援者のニーズ　第３１回日本遺伝カウンセリング学会学術集会, 東京医科大学, 2007. 5.

Fukui, H., & Sugiman, T. (2007). Workplace activities to promote small attempts for safety: Toward development of safety culture in a nuclear power plant. International Symposium on Symbiotic Nuclear Power Systems for 21st Century (ISSNP), July 9-11, 2007, pp. 66-72.

Funahashi, S. & Shimizu, K. (2007). Primate model of attention-deficit/hyperactivity -disorders (ADHD). Paper presented at Dopamine 50 Years, Goeteborg, 30 May-2 June, 2007.

船橋新太郎・清水慶子 (2007). 注意欠陥/多動性障害 (ADHD) の霊長類モデル　第30回日本神経科学大会, 横浜市, 2007.9.10-12.

二見隆亮 (2007). 盲人マラソンの現代社会における意義　大阪YMCA創立125周年研究フォーラム

二見隆亮 (2008). 生涯スポーツ支援者としての伴走者の研究―視覚障害者マラソンを事例として― 第20回ランニング学会大会 群馬大学

後藤和宏・友永雅己 (2007). 視覚的文脈付加による特徴の創発性の種間比較 日本心理学会第71回大会, 東洋大学, 2007.9.18-20.

後藤和宏・友永雅己・伊村知子・渡辺茂 (2007). 異項目探索課題における視覚的文脈付加の効果と創発的特徴の知覚に関する比較検討 日本動物心理学会第67回大会, 早稲田大学, 2007.10.7-8.

羽倉信宏・武井智彦・廣瀬智士・荒牧勇・松村道一・定藤規弘・内藤栄一 (2007). 視覚情報を優先させた手の空間位置算出には上頭頂小葉後部領域が関与する.(口頭発表) 第1回Motor Control研究会, 愛知, 2007.6.

Hagura, N. , Takei, T., Hirose, S., Aramaki, Y. , Matsumura, M., Sadato, N. & Naito, E. (2007). Activity in posterior parietal cortex mediates the visual dominance over kinesthesia. The 30th annual meeting of the Japan Neuroscience Society; Yokohama, Japan, September, 2007.

羽倉信宏・廣瀬智士・内藤栄一・松村道一 (2007). 視覚情報と運動感覚情報を用いた手の空間位置知覚についての研究.(ポスター発表) 日本心理学会第7 1回大会, 東京, 2007.9.

花岡三賀 (2008). ストレングス・モデルを用いた高齢者支援に関するケース研究 第12回日本在宅ケア学会 一橋記念講堂

花岡三賀 (2008). 男性介護者は母親の死をどのように捉えているのか?―対象喪失による分離不安について― 日本発達心理学会19回大会 大阪国際会議場

原田宗忠 (2007). 青年期における長期的な自尊感情の揺れと自己概念との関係 日本教育心理学会第49回総会,2007. (発表論文集, 239.)

原田宗忠・西田麻衣子・山田裕子・国立淳子・杉原百合子・武地一 (2007). 初期認知症患者の不安と自己の側面 第8回認知症ケア学会, 2007. (プログラム・抄録集, 300.)

原康治郎・高橋晋・櫻井芳雄 (2007) . 条件性連合学習におけるラットの海馬と新皮質ニューロン集団活動のアトラクタ変動性 第30回日本神経科学学会大会, 横浜, 2007.9.10.

Hara, K., Takahashi, S. & Sakurai, Y. (2007) . Hippocampal and prefrontal multi-neuronal activities during acquisition, reversal, and reacquisition of a conditional association task in rats, 37th Society for Neuroscience Annual Meeting, San Diego, 2007.11.7.

服部裕子・藤田和生 (2007). 事前の協力は「お返し」に影響を与えるか?―フサオマキザルにおける相互的利他行動実験― 日本動物心理学会第67回大会, 早稲田大学文学学術院 (戸山キャンパス), 2007.10.7-8.

服部裕子・Kristi Leimgruber・Frans B.M. de Waal・藤田和生 (2007). フサオマキザルにおける食物分配行動実験 日本心理学会第71回大会, 東洋大学白山キャンパス, 2007.9.18-20.

Hattori, Y ,Kuroshima,H, Tomonaga, M. & Fujita, K. (2007). Begging for food vs. on the table: Chimpanzees and capuchin monkeys' understanding of others' attentional states. XXX. International Ethological Conference. Dalhousie University, Halifax, Nova Scotia, Canada. 15-23 August 2007.

隼瀬悠里 (2007). フィンランドの教職学位と質の高さ グローバルCOE拠点形成記念公開シンポジウム「心が活きる教育に向かって」 京都大学

一見真理子・石川裕之・中村浩子 (2007). 学会課題研究II オルタナティブ教育の国際動向 日本比較教育学会第43回大会 筑波大学

Hayashi, H. (2007). Is there a developmental difference in recognizing the harm through actions and inactions? Poster presented at the 15th Conference of the European Society for Cognitive Psychology. Marseille, France. 29 August-1 September, 2007.

林 創 (2007). 行為に伴う言動の有無による結果に与える影響の判断の違い 日本教育心理学会第49回総会, 文教大学

林美里 (2007). 物の扱い方にみるチンパンジーとヒトの認知発達 第4回子ども学会議,招待ポスター発表, 東京, 2007.9.15-16.

林美里・竹下秀子 (2007). 突起のついた積木をつむ課題にみる行動方略 : チンパンジーとヒトの比較 第

23 回日本霊長類学会, 彦根, 2007.7.15.

林美里・竹下秀子 (2008). 積木を使った課題にみるチンパンジーとヒトの認知発達　日本発達心理学会第 19 回大会, 大阪, 2008.3.20.

Hill, H., Ashida, H., Ando, H. (2007). Effects of haptic feedback on the perception of ambiguous visual stimuli. *8th International Multisensory Research Forum*, Sydney, Australia, 5-7 July, 2007.

平石界・敷島千鶴・安藤寿康 (2007). 公共財ゲームにおける遺伝と環境の効果. 日本心理学会第 71 回大会, 東洋大学. 2007.9.18-21.

平川祥子 (2007). 身体美容広告のナラティヴ―人はどのようなナラティヴによって動機づけられるのか?　日本質的心理学会第 4 回大会

Hirakawa, S., Ihori, N., & Sakamoto, A. (2007). Content analysis of educational video games for children: Development and use of a new checklist for educational video games. The 3rd DiGRA International Conference (DiGRA2007). Tokyo, JAPAN. 24-28 September, 2007.

平松朋子・荒木浩子・浅田剛正・清水亜紀子・矢納あかね・山本有恵・山崎輝子・荒川喜博・林香織・小西哲郎・藤原勝紀 (2007). 臨床現場に即した研究基盤整備の構造と意義―心理臨床の考え方による研究体制の構築プロセスから　平成 19 年度厚生労働省精神・神経疾患研究委託費 筋ジストロフィーの療養と自立支援のシステム構築に関する研究, 筋ジストロフィー患者に対する心理的援助の研究 平成 19 年度班会議,2007.12.

平野拓朗 (2007). ディレンマ・マネージングとしての学び―共通合意の関係性を越えて　日本カリキュラム学会第 18 回大会.

平山るみ・楠見孝 (2007). 批判的思考と科学および情報リテラシーとの関連性　日本心理学会第 70 回大会, 東洋大学, 2007.9. 18-20.(発表論文集, 842.)

廣瀬秀顕・崔圭完・筒井健一郎・櫻井芳雄・小池康晴・飯島敏夫 (2007). 上肢の到達運動と姿勢を再現するブレインマシンインターフェース　第 30 回日本神経科学学会大会, 横浜, 2007.9.11.

廣瀬秀顕・崔圭完・櫻井芳雄・小池康晴・飯島敏夫 (2007). ユーザーにやさしいブレイン・マシンインターフェース　第 46 回日本生体医工学会大会, 仙台, 2007.4.26.

廣瀬智士・羽倉信宏・松村道一・内藤栄一 (2007). 把持運動可能性判断の脳内神経機序.(口頭発表)　第 1 回 Motor Control 研究会, 愛知, 2007.6.

廣瀬智士・羽倉信宏・松村道一・内藤栄一 (2007). 把持運動可能性判断の脳内神経機序.(ポスター発表) 特定領域研究「統合脳」第 8 回夏のワークショップ 脳と心のメカニズム, 北海道, 2007.8.

Hirose, S., Hagura, N. , Matsumura, M. & Naito, E. (2007). Neural correlates of estimating graspability. The 30th annual meeting of the Japan Neuroscience Society, Yokohama, Japan , September, 2007.

廣瀬智士・羽倉信宏・松村道一・内藤栄一 (2007). 把持運動可能性判断の脳内神経機序. (ポスター発表) 京都大学グローバル COE プログラム「心が活きる教育のための国際拠点」公開シンポジウム「心が活きる教育に向かって」, 京都, 2007.11.

樋浦郷子 (2007). 朝鮮神宮における児童夏季早朝参拝―1936-37 年の参拝者数拡大の背景―　教育史学会第 51 回大会　四国学院大学

本所恵 (2007). スウェーデンの総合制高等学校における履修システムの転換―プログラム制の導入に焦点をあてて―　日本カリキュラム学会第 18 回大会自由研究発表　埼玉大学

本所恵 (2007). スウェーデンの全国学力テスト　教育目標・評価学会第 18 回大会自由研究発表　大阪経済大学

*堀田佐知子・池西悦子・真継和子・近田敬子 (2007). 生活援助技術学習の授業構成についての検討－学生の学びの認識からみえてきたもの－　日本看護学教育学会第 17 回学術集会, 福岡市, 2007.8.10-11. (日本看護学教育学会第 17 回学術集会講演集, 208.)

細尾萌子 (2007). 昭和 2 年旧制中学校入学者選抜方法改正における評価観の位相―昭和 3 年度栃木県旧制中学校人物考査問題の分析を通じて―　関西教育学会第 59 回大会自由研究発表　京都大学

市原有希子・清水亜紀子・川部哲也 (2007). 自我体験をめぐる動的過程(2)―インタヴューとロールシャッハ・テストに関する<ディスカッション>から―　日本心理臨床学会第 26 回大会, 東京国際フォーラム, 2007.9.29.

井手弘人・松本麻人・石川裕之 (2007). 学会ラウンドテーブルⅢ 韓国における『平準化』のゆくえ—30年の経験から学ぶ—（司会：石川裕之）　日本比較教育学会第43回大会　筑波大学

家島明彦 (2007). 心理学におけるマンガに関する研究の概観と展望　日本心理学会第71回大会ポスター発表　東洋大学

家島明彦 (2008). マンガ読者としての発達的変化　日本発達心理学会第19回大会ポスター発表　大阪国際会議場

Ieshima, A. (2007). A review and perspectives of a Japanese study on comics in relation to psychology: What do young people learn from Japanese comics? Oral presented at the Pre-conference of 3rd International Congress of Qualitative Inquiry "A Day in Japanese: Current Issues and Contributions of Qualitative Research in and outside of Japan", Champaign, 2 May, 2007.

Ieshima, A. (2007). Role of the fictitious story in adolescent personality development: How do youg people read Japanese comics? Oral presented at the 3rd International Congress of Qualititative Inquiry, Champaign, 2-6 May, 2007.

家島明彦・中澤潤・雑賀忠宏・夏目房之介・菅村玄二・無藤隆 (2007). マンガ心理学の可能性：これまでのマンガ研究とこれからのマンガ心理学　日本心理学会第71回大会ワークショップ（企画・話題提供）　東洋大学

今田容康（2007）．近代日本の学校教育の系譜学—M.フーコーの議論を基にして—　関西教育学会,2007.11.4.

Imura, T., & Tomonaga, M. (2007). Visual search on the ground-like surface defined by texture gradients in chimpanzees (Pan troglodytes) and humans (Homo sapiens). Vision Sciences Society 2007 Annual Meeting, Sarasota, USA.12 May, 2007.

伊村知子・友永雅己（2007）．陰影からの形状知覚における陰影方向の効果：チンパンジーとヒトの比較　日本動物心理学会第67回大会，早稲田大学, 2007.10.8.

伊村知子・友永雅己（2007）．チンパンジーとヒトにおける「地面優位性効果」：絵画的手がかりを用いて　日本基礎心理学会第26回大会，上智大学, 2007.12.9.

伊村知子・友永雅己・八木昭宏（2007）．絵画的手がかりで定義された面における視覚探索 —チンパンジーとヒトの比較—　日本心理学会第71回大会，東洋大学, 2007.9.20.

Imura, T., Yamaguchi, M.K., Kanazawa, S., Shirai, N., Otsuka, Y., Tomonaga, M., & Yagi, (2007). A. Perception of shape from shading and line junctions in infants. 30th European Conference on Visual Perception, Arezzo, Italy, 27-31 August, 2007.

猪原敬介・堀内孝・楠見孝（2007）．文章理解における下位目標の推論に及ぼす文脈の影響(2)　日本認知心理学会第5回大会，京都大学,2007.5.（発表論文集,104.）

猪原敬介・堀内孝・楠見孝（2007）．文章理解における下位目標の推論に及ぼす文脈の影響(1)　日本心理学会第70回大会，東洋大学 ,2007.9,(発表論文集, 690.)

猪原敬介・堀内孝・楠見孝（2007）．文章理解における下位目標，上位目標，因果推論に及ぼす文脈の影響　グローバルCOE拠点形成記念公開シンポジウム.

Inohara, K. (2007). The effect of script on types of inferences generated during reading (Oral Presentation). Workshop on memory and language, Satellite workshop of the 5th Conference of Japanese society of cognitive psychology, 2007.5.

井上紗奈・松沢哲郎（2007）．チンパンジーの子どもはよくできる；アラビア数字をもちいた系列記憶課題 Juvenile chimpanzees are bright at memory task using Arabic numerals　第23回日本霊長類学会大会,彦根, 2007.7.

井上紗奈・松沢哲郎（2007）．アラビア数字をもちいた系列記憶課題：チンパンジーとヒトの比較　日本動物心理学会第67回大会,東京, 2007.10.

井上紗奈・松沢哲郎 (2007)．数字系列記憶に優れたチンパンジーの子どもたち　SAGA10, 東京,2007.11.

井下理・大塚雄作 (2007). FDのダイナミックス（その3）—第一次調査のフォローアップと新たなモデルの構築— ラウンドテーブル司会，大学教育学会第29会大会

井岡 瑞日（2007）．19世紀末フランスの中間階層家族における『家庭教育』—週刊誌 *La Famille* からの一考察　教育史学会第五十一回大会, 2007.9.23.

石橋遼・齊藤智（2007）．内的な手のイメージの利用における言語の役割　日本基礎心理学会第26回大会，上智大学四谷キャンパス，東京，2007.12.8-9.

石井英真（2007）．授業の中の学力問題　日本教育学会第66回大会，一般研究発表B「学力問題――その後の展開――」，慶應義塾大学，2007.8.29.

石井英真（2007）．学力論議の現在　教育目標・評価学会第18回大会，課題研究I「学校教育において能力をどう語るか――PISA以後――」，大阪経済大学，2007.12.1.

石井素子（2007）．戦間期を中心とした文部省在外研究員の動向について　日本教育社会学会第59回大会　茨城大学，2007.9.23

Ishii, Y. (2007). Negative communication as the social skill: Toward the conceptualization of the meta-social skill. Poster presented at the 10th European Congress of Psychology. Prague, 3-6 July, 2007.

Ishii, Y., & Ishii, H. (2007). Development the scale of social skill for measuring adjustment of a skill use degree. Oral presented at the 22nd European Conference on Operational Research. Prague, 8-11 July, 2007.

Ishii, Y., & Shindo, K. (2007). A peculiarity of social skill use-style in a juvenile delinquent: Expression/non-expression skill. Poster presented at the 13th European Conference on Developmental Psychology. Jena, 21-25 August, 2007.

石井佑可子・遠藤利彦（2008）．13 情動経験傾向における「メタ・ソーシャルスキル」の影響　日本発達心理学会第19回大会　大阪国際会議場

石井佑可子・新堂研一・遠藤利彦（2007）．在宅非行少年における社会的スキル行使の様相（1）―対照群との比較から―　日本社会心理学会第48回大会　早稲田大学

石川裕之（2007）．韓国における高校早期卒業・大学早期入学制度に関する考察　日本比較教育学会第43回大会　筑波大学

石岡学（2007）．昭和初期の職業指導教授用図書にみる『職業精神』　日本教育学会第66回大会教育史③部会，慶応義塾大学，2007.8.30.

石岡学（2007）．戦前期の小学校における職業指導の実態　教育史学会第51回大会，四国学院大学，2007.9.23.

Isobe, M., & Carvalho, M.K.,F.（2007）．The relationship between parenting skills and preschoolers' relational aggression. Paper presented at the World Congress of Behavioral and Cognitive Therapies, Barcelona, Spain, July, 2007.

板倉昭二・小椋たみ子・久津木文・黒木美紗・江上園子・田中大輔・前田忠彦（2007）．社会的認知の発達的変化：視線選好と要求行動の関係　日本赤ちゃん学会第7回学術集会，2007.

Itani, N.（2008）．"Beyond the Self" as a Goal of Education: Heidegger's Philosophy and Education in the West and in Japan. Paper presented at International Colloquium between the Institute of Education (IoE), University of London, and the Graduate School of Education, Kyoto University (Kyoto), London, United Kingdom, March, 2008.

井谷信彦（2007）．ハイデガー哲学と教育学――有用性の教育への問いかけを軸に――　教育哲学会第50回大会，広島大学，2007,10.

井谷信彦・宮崎康子・高柳充利・辻敦子・石崎達也（2007）．プレゼントが開く未知なる教育――児童文学や絵本を事例として――　教育思想史学会第17回大会コロキウム，京都大学，2007.9.

伊藤和真（2007）．がん鍼灸治療の実際とがん患者が鍼灸治療に望むことについて　仏教ビハーラ・看護学会第2回年次大会，大本山成田山新勝寺，2007.8.26.

井藤美由紀（2007）．より良き看取りのために「生と死の教育」を考える―日本の文化的伝統を踏まえて―第15回 日本ホスピス在宅ケア研究会 全国大会 飛騨高山大会，高山，2007.6.30-7.1.

勝原摩耶・大塚結喜・苧阪満里子・苧阪直行（2008）．言語性ワーキングメモリ課題における感情情報の影響 ―高齢者を対象として―　日本ワーキングメモリ学会第 5 回大会，京都，2008.3.8.

勝原摩耶・大塚結喜・苧阪直行（2007）．比喩を含む文章理解と言語性ワーキングメモリ ―RSTを用いた比喩の影響と個人差の検討　日本心理学会第71回大会，東京 2007.9. 18-20.

上市秀雄・楠見孝（2007）．犯罪不安がリスク認知,対処行動,司法行政評価に及ぼす影響ー女子大学生の意識調査ー 日本心理学会第70回大会，東洋大学，2007.9.（発表論文集, 397.）

鴨川明子（2007）．マレーシアにおける就学前教育の現状と課題 日本比較教育学会第43回大会自由研究発表 筑波大学

鴨川明子（2007）．マレーシアにおける義務教育制度の導入とその背景—国民統合とマイノリティへの配慮— 日本教育学会第66回大会一般研究発表 慶應義塾大学

鴨川明子（2007）．マレーシアにおける国民統合と先住民族オラン・アスリ—2003年義務教育制度の導入をめぐって— 日本比較教育学会第43回大会ラウンドテーブル（江原裕美・児玉奈々との共同発表）「グローバル化における国民国家とマイノリティ」筑波大学

鴨川明子（2007）．女性をめぐる比較教育研究—フィールドにおける声とニーズ— 日本教育学会第66回大会ラウンドテーブル（北村友人・森下稔・石井山竜平・日下部達哉との共同発表）「比較教育学における研究アプローチの多様性—地域研究と開発研究の相互関係を探る—」 慶應義塾大学

Kamogawa, A. (2007). Islamic women and education in multiethnic society: The case of Malaysia. World Congress Comparative Education Society, Sarajevo, Bosnia and Herzegovina, 3rd September 2007.

兼子峰明・松崎治・友永雅己（2007）．新世界ザルにおける知覚認知研究への馴化ー脱馴化法の利用 第23回日本霊長類学会大会，滋賀県立大学, 2007.7.15.

兼子峰明・松崎治・友永雅己（2007）．新世界ザルにおける知覚認知研究への馴化ー脱馴化法の利用 日本動物心理学会第67回大会，早稲田大学, 2007.10.7.

兼子峰明・友永雅己（2007）．新世界ザルにおける馴化—脱馴化法の利用と新たな行動指標の探索 SAGA10,東京, 2007.11.17.

金子勉（2007）．ドイツモデルの現在—大学のガバナンスの主体の構成原理— 日本教育行政学会第42回大会 神戸大学

金子勉（2007）．ドイツの高等教育財政改革—フォーミュラを活用する予算配分— 関西教育行政学会例会

Kikuzawa, S., Maeda, T. & Takahashi,Y. Ritual Performance in Learning.: Beginning and Ending with Bow. International Workshop: Theoretical and Empirical Perspectives on Learning Cultures in Germany and Japan, Berlin, Germany, 20th March 2008

菅野幸恵・北上田源・実川悠太・伊藤哲司・やまだようこ（2007）．過去の出来事を“語り継ぐ”ということ 日本質的心理学会第4回大会（シンポジウム 指定討論）

狩野文浩・田中正之・友永雅己（2007）．系列再認課題を用いたチンパンジーの情動記憶の検討 第23回日本霊長類学会大会，滋賀県立大学, 2007.7.15.

狩野文浩・田中正之・友永雅己（2007）．系列再認課題を用いたチンパンジーの情動記憶の検討 日本動物心理学会第67回大会，早稲田大学, 2007.10.7.

唐牛祐輔・楠見孝（2007）．ジェンダーステレオタイプが対人印象判断に及ぼす効果—閾下プライミング課題とIATを用いた検討— 日本認知心理学会第5回大会，京都大学,2007.5.（発表論文集,115.）

唐牛祐輔・楠見孝（2007）．ステレオタイプ語への閾下・閾上接触が対人印象判断に及ぼす効果—潜在的・顕在的ステレオタイプからの検討— グローバルCOE拠点形成記念公開シンポジウム「心が活きる教育に向かって」（ポスター発表），京都, 2007.

勝原摩耶・大塚結喜・苧阪満里子・苧阪直行（2008）．言語性ワーキングメモリ課題における感情情報の影響 —高齢者を対象として— 日本ワーキングメモリ学会第5回大会，京都，2008.3.8.

勝原摩耶・大塚結喜・苧阪直行（2007）．比喩を含む文章理解と言語性ワーキングメモリ —RSTを用いた比喩の影響と個人差の検討 日本心理学会第71回大会，東京 2007.9.18-20.

川上清文・遠藤利彦・高橋雅延・徃住彰文・柴崎光世・鳥居修晃（2007）．異型を通して心の普遍を読む— "atypical" から "typical" へ—（ワークショップ） 日本心理学会第71回大会 東洋大学

川上清文・高井清子・川上文人・友永雅己・岸本健・南徹弘（2007）．クレーン行動(3) 日本心理学会第71回大会，東洋大学, 2007.9.18-20.

Kawakami, K., Takai-Kawakami, T., Kawakami, F., Tomonaga, M., Suzuki, M., & Shimizu, Y. (2008).

Roots of smile: A preterm neonates' study. XVIth International Conference on Infant Studies (ICIS2008), Vancouver, Canada, 27-29 March, 2008.
川部哲也・鳴岩伸生・佐々木玲仁・重田智・桑原知子（2007）．日本の南極越冬隊心理学調査の報告　2007年南極医学医療ワークショップ，国立極地研究所, 2007.8.25.
河﨑美保（2007）．児童は自分とは異なる解法の説明からいかに学ぶか　日本教育心理学会第49回総会，自主シンポジウムG4[教室で子ども主体の学び合いを研究している私を問う]での話題提供, 2007.（大会発表論文集, 106-107.）
河﨑美保（2007）．算数文章題の非規範的解法の発表に関する再生・評価と理解変化の関係.　日本教育心理学会第49回総会, 2007.(大会発表論文集, 368.）
河﨑美保（2007）．算数の混み具合比較課題における2つの解法の統合過程：小学生へのインタビューによる分析　日本認知科学会第24回大会, 2007.（大会発表論文集, 228-231.）
Kawasaki, M.（2007）．Children's ability to listen and to learn from their peer's explanation of a mathematical solution. Poster presented at the 12th Biennial Conference for Research on Learning and Instruction, Budapest, Hungary , 29 August, 2007. (Poster session D2, Program p.93).
川島大輔・家島明彦・浦田悠・荘島幸子・黒田真由美（2007）. 人生と死を現場（フィールド）にしたナラティブ・アプローチの可能性（ラウンドテーブル）　日本発達心理学会第18回大会　大宮ソニックシティ
木戸彩恵（2007）. 化粧行為に及ぼされる文化的影響の検討―米国日本人留学生の化粧行為変容過程から―　日本心理学会第71回大会
木戸彩恵（2007）. 文化的越境による化粧行為と心理的変容―ナラティヴ・アプローチから―　日本パーソナリティ心理学会第16回大会
木戸口英樹・齊藤智（2007）．日本語非単語の直後系列再生,－ポーズ及びピッチの実験操作による検討―日本認知科学会第24回大会，成城大学, 2007.9.3-5.（発表論文集, 450-451.）
Kihara, K., Hirose, N., & Osaka, N.（2007）．Visual event is labile during an attentional blink period: Direct evidence from first target performance. Poster presented at the 15th Annual Object Perception, Attention and Memory conference (OPAM 2007), Long Beach, CA, November 2007.
木原健・池田尊司・松吉大輔・廣瀬信之・苧阪直行（2008）．注意の瞬きに関わるトップダウン処理とボトムアップ処理　第6回注意と認知研究会合宿研究会，金沢，2008.3.
木原健・廣瀬信之・苧阪直行（2007）．注意の瞬き期間中における視覚刺激処理の継続可能性の検討　日本基礎心理学会第26回大会，東京，2007. 12.
木村裕（2007）. 現代オーストラリアにおける開発教育の展開―南オーストラリア州のSACSAとの関わりに焦点をあてて―　日本カリキュラム学会第18回大会　埼玉大学
北岡征毅（2007）. 対象との関係から見た共感概念　日本心理臨床学会第26回大会，東京国際フォーラム, 2007.9.（発表論文集, 266）
北岡征毅・木村友美（2007）. 精神科ディケアにおけるグループ書道のダイナミクス ―〈書道という場〉で生成されるものを巡って―　第39回日本芸術療法学会，明治学院大学, 2007.10.（プログラム集, 32）
小林伸行（2007）.〈名声〉メディアと『有名／無名』コード―ルーマン社会システム論の或るカイゼンの試み　第80回日本社会学会大会　関東学院大学
児玉華奈（2007）.『コモンスペース』の空間と身体―『ひがしまち街角広場』の実践から―　日本社会教育学会第54回研究大会　東京農工大学
児玉華奈（2007）.『コモンスペース』をめぐる学びの一考察―『ひがしまち街角広場』の実践から―　2007年日中教育学系合同シンポジウム　京都大学
小島隆次（2007）．空間表現語理解と指示対象の顕著性　日本心理学会第71回大会，ポスター発表，東洋大学，東京, 2007.
小島隆次（2007）．投影的空間表現語指示領域適合度計算モデルACAP　第24回日本認知科学会，ポスター発表，成城大学，東京

小島隆次（2007）．投影的空間表現語指示領域計算モデルACAPの認知心理学的意義　第5回日本認知心理学会，ポスター発表，京都大学，京都，2007.

Kojima,T., & Kusumi, T.（2007）. Construction of Acceptability Computation Algorithm for Projective Spatial Terms . Poster session presented at 28th Annual Conference on the Cognitive Science Society, Nashville, TN, 4 August, 2007.

Kojima,T., & Kusumi, T.（2007）. Construction of Acceptability Computation Algorithm for Projective Spatial Terms . Poster session presented at 28th Annual Conference on the Cognitive Science Society, Nashville, July, 2007.

Komeda, H., Saito D.N., Kusumi, T, & Sadato, N.（2007）. The detection of other's emotional shifts in narrative comprehension.　37th Annual Meeting of the Society for Neuroscience.　San Diego, November 6, 2007

小宮あすか・宮本百合・渡部幹・楠見孝（2007）．対人的-個人的状況における後悔：日米比較研究. 日本社会心理学会48回大会,早稲田大学, 2007.9.（大会論集,164-165.）

Komiya, A., Miyamoto, Y., Watabe, M. & Kusumi, T.（2008）. Cultural Differences in Regret under Interpersonal and Personal Situations: US-Japan Comparison. Poster session presented at The 9th Annual Meeting of the Society for Personality and Social Psychology , Albuquerque, February 8,2008.

近藤あき・齋木潤.（2007）．属性結合の視覚性短期記憶における検索負荷の影響　日本認知心理学会第5回大会，京都市左京区 京都大学百周年時計台記念館, 2007.5.26-27.

Kondo, A. & Saiki, J.（2007）. Single-probe advantage in standard change detection task does not reflect memory for feature binding. Poster presented at the 7th Annual Meeting of the Vision Sciences Society, Florida, May 11-16, 2007.

近藤あき・山本洋紀・齋木潤（2007）．色弁別における間隙効果の遮蔽手掛かり依存性　日本基礎心理学会第26回大会，東京都千代田区 上智大学四谷キャンパス, 2007.12.8-9.

子安増生（2007）．シンポジウム「「心の理論」と実行機能の発達（2）－日常生活場面の観察データから問う」の企画者　日本発達心理学会第19回大会, 2007.（大会論文集, 152-153.）

Koyasu, M.（2007）. Young children's development of understanding others' mind: From perspective-taking to theory of mind.　Paper presented at the 37th Annual Meeting of the Jean Piaget Society, Amsterdam, Netherland, 31 May-2 Jun, 2007.

Koyasu, M., & Goushiki, T.（2007）. Influences of viewing mass media on three-year olds human figure drawings.　Poster presented at the 10th European Congress on Psychology,　Prague, Czech Republic, 3-6 July, 2007.

窪田知子（2007）. イギリスの特別なニーズ教育におけるインクルージョン概念の探究　日本特別ニーズ教育（SNE）学会第13回大会　筑波大学

久保ゆかり・佐久間路子・山岸明子・藤崎春代・遠藤利彦（2007）. 関係性のなかの発達を捉える―「長い目」と「広い目」―（シンポジウム）　日本心理学会第71回大会　東洋大学

栗木一郎・蘆田宏・村上郁也・北岡明佳（2007）．回転運動錯視に対する脳活動計測の試み日本視覚学会2007年夏季大会, 2007.（*Vision*, 19, 178.）

黒田真由美（2007）. 小学校英語の授業において子ども同士のコミュニケーションが果たす役割　日本教育心理学会第49回大会　文教大学

黒田真由美（2008）. 多様な空間を形成する子ども：小学3年生の英語の授業の分析　日本発達心理学会第19回大会　追手門学院大学

黒木美紗・小椋たみ子・江上園子・久津木文・板倉昭二（2007）．社会的随伴性に対する乳児の反応における気質の影響　日本赤ちゃん学会第7回学術集会, 2007.

日下部達哉（2007）. バングラデシュにおけるマドラサ増加の背景と要因　第43回日本比較教育学会ラウンドテーブル「マドラサ急増の背景と要因」　東北大学

日下部達哉（2007）. バングラデシュにおけるマドラサの新展開—EFA との関わりをめぐって　NIHU プログラム・イスラーム地域研究早稲田拠点グループ2「アジア・ムスリムのネットワーク」・京都大学地域研究統合情報センター共催研究大会　京都大学

Kusakabe, T. (2007). Madrasa education in Bangladesh - Competition against the primary schools. Oral presented at the 13th World Congress of Comparative Education Societies, 3-7 September, 2007.

Kushiro, K., Bai, R., Kitajima, A. and Kitajima, N. & Uchino, Y. (2007). Properties of axonal trajectory of posterior canal-related vestibulospinal neurons. 37th Annual Meeting of the Society for Neuroscience, Diego, 3-7 Nov, 2007.

楠見孝・松田 憲 (2007). 批判的思考態度が支えるメディアリテラシーの構造　日本心理学会第７０回大会, 東洋大学, 2007.9. (発表論文集, 858.)

楠見孝・田中優子・平山るみ・冨江宏 (2007). 高校国語科における批判的読解指導の効果　日本教育心理学会第 49 回総会, 文教大学, 2007.9. 15-17. (発表論文集, 63.)

楠見孝 (2007). 意思決定スタイルとしての衝動性：決定過程と感情に及ぼす影響. 慶應義塾大学グローバルCOEプログラム 論理と感性の先端的教育研究拠点第13回シンポジウム「衝動性の科学　―感情・行動・合理性―」, 東京, 2007.12.17.

楠見孝・小倉加奈代・三浦麻子・大井賢一・竹中文良 (2008). がん患者支援 NPO における ICT 活用　国際 CIO 学会第 3 回研究大会, 東京, 2008.3.17.

*楠山研 (印刷中). 中国の地方大学の特色作りに関する考察　京都大学大学院教育学研究科紀要.

久津木文・小椋たみ子・江上園子・黒木美紗・板倉昭二 (2007). 他者の顔への参照行動とコミュニケーション　日本赤ちゃん学会第 7 回学術集会, 2007.

久津木文・江上園子・板倉昭二・小椋たみ子・中川佳弥子 (2007). 他者への共感性の発達―母親と他人の比較―　日本心理学会第７１回大会, 2007.

Kutsuki, A., Egami, S., Ogura, T., Itakura, S., Kubo, K. (2007). Triadic looking behaviour of 7 and 9 month-old infants confronted with a stranger and its developmental change. 13th European Conference on Developmental Psychology, 2007.

桑原知子 (2007). 南極越冬隊員のストレスに関する研究　日本宇宙航空環境医学会大会第 53 回 第 2 回宇宙基地医学会シンポジウム“閉鎖環境とストレス”, 愛知医科大学, 2007.11.

桑原知子・須藤春佳・畑中千紘・西嶋雅樹・本多早由里・森田健一 (2007). 学校現場における教師と心理臨床家が持つ「視点」に関する研究Ⅲ―日本とスイスの国際比較より―　日本心理臨床学会第 26 回大会, 東京国際フォーラム, 2007.9.

桑原知子・吉川左紀子・渡部幹・長岡千賀・仁平義明・名取琢自 (2007). カウンセリング対話を科学する（1）―非言語的行動の分析　日本心理学会第 71 回大会, 東洋大学, 2007.9.

李基原 (2007). 朝鮮儒者・丁若鏞における徂徠学　台湾大学京都国際シンポジウム：東アジアの経典と文化

李 霞 (2007). 中華人民共和国成立後の「公民」教育についての一考察―初等道徳教育に注目して―　日本公民教育学会第 18 回大会自由研究発表　東京学芸大学

李 霞 (2007). 国語教育における児童の主体性に関する日中比較　日本比較教育学会第 43 回大会自由研究発表　筑波大学

李 霞 (2007). 国語教育における児童の主体性に関する日中比較―「文学の読み」をめぐるインタラクション―　日本教育方法学会第 43 回大会自由研究発表　京都大学

李 霞 (2007). 国語の「読解」指導における児童の主体性に関する日中比較　関西教育学会第 59 回大会自由研究発表　京都大学

李 霞 (2007). 日本の初等教育における道徳教育に関する一考察　国際シンポジウム自由研究発表　京都大学

前田拓人 (2007). 社会環境問題から身を守るための環境教育理論について―木と向かい合う者の思想から考える　日本教育学会第 66 回大会　東京

高橋洋一 (2007). インフォームド・コンセントにみる「よさ」の問題―「よさ」の共有への教育可能性　第 19 回日本生命倫理学会年次大会　東京

Maehara, Y., & Saito, S. (2007). The nature of interference in working memory span: Operation or identification? 日本認知心理学会第 5 回大会, 京都大学, 京都, 2007.5.27. (発表論文集, 174.)

前原由喜夫・齊藤智 (2008). 視覚的あと知恵バイアスにおける実行機能　第 5 回日本ワーキングメモリ

学会大会口頭発表，京都大学，京都，2008.3.8.（アブストラクト集, 9.）
Maehara, Y., & Saito, S. (2008). The role of working memory in adults' reasoning about mental states. Poster presented at the 7th Tsukuba International Conference on Memory, Tsukuba, Ibaraki, Japan, 2008.3.21. (Abstracts, 30.)
Maehara, Y., Tanaka, T., Tanaka, M., Miyata, M., & Yano, Y. (2007). "I see into your mind too well!" Adults' success and failure in theory-of-mind use. 日本認知科学会第24回大会ポスター発表，成城大学，東京，2007.9.3.（発表論文集, 42-45.）
前原由喜夫・上野泰治（2007）．空間的視点取得における制御機能の役割に関する実験的検討の試み　日本教育心理学会第49回総会ポスター発表，文教大学，東京，2007.9.15.（発表論文集, 122.）
前川直哉（2007）．明治期の学生男色とヘテロセクシズム　第23回日本解放社会学会大会，松山大学，2007.9.8.
松田憲（2007）．情動連合記憶が広告効果に及ぼす影響　日本心理学会第71回大会ワークショップ「記憶・認知の応用研究：その広がりと可能性」，東洋大学, 2007.
松田憲（2007）．単純接触効果と広告　日本心理学会第71回大会ワークショップ「単純接触効果の最前線(2)：応用的可能性」，東洋大学, 2007.
松田憲・楠見孝（2007）．広告評価に及ぼす情動連合記憶とインターバルの効果　日本認知心理学会第5回大会，京都大学2007.5（発表論文集, 1.）
松田憲・楠見孝（2007）．広告評価に単純接触効果と情動連合記憶が及ぼす影響　日本認知科学会第25回大会, 2007.9.（発表論文集, 318-319.）
松田憲・楠見孝（2007）．広告情報処理ルートに批判的思考態度が及ぼす影響　日本心理学会第７０回大会，東洋大学, 2007.9.（発表論文集, 856）
Matsuda, K. & Kusumi, T. (2007) The effects of emotional association and intervals on evaluation of advertised products. Poster presented at 48th Annual Meeting of the Psychonomic Society. Long Beach, CL, November, 2007.
Matsuda, K. & Kusumi, T. (2008). Recognition of emotional association influences the evaluation of advertisement. Poster presented at Workshop on Psychological, Economic, and Environmental Rationality 2008. Tokyo Institute of Technology, Japan. Matsuda, K. & Kusumi, T. (2008). The effects of emotional association and exposure frequency on evaluation of advertised products. In K. Miura, T. Kawabe, & S. Sameshima (Eds.), *Proceedings of the 2nd International Workshop on Kansei* (p.139-142).
Matsuda, K., Sugimori, E., & Kusumi, T. (2008). The effect of nostalgia on evaluation of advertised products. Poster prepared at 7th Tsukuba International Conference on Memory.
*真継和子・宮島朝子（2007）．看護者のケアリングを持続させる要因ー事例分析からー　第27回日本看護科学学会学術集会，東京, 2007.12.7-8.（講演集, 496.）
松本学・遠藤利彦・高塩純一・船橋篤彦（2008）．身体に<瑕疵>を持つということ：可視的変形の心理的意味を考える（シンポジウム）　日本発達心理学会第19回大会　大阪国際会議場
松本光太郎・荒川歩・安田裕子・麻生武・松島恵介・大倉得史（2007）．研究行為における「歴史」と「因果性」について考える　日本質的心理学会第4回大会　奈良
松野響・藤田和生（2007）．オマキザルの形態知覚における統合過程についての検討　日本動物心理学会第67回大会プログラム，早稲田大学, 2007.10.7-8.
松野響・友永雅己（2007）．チンパンジーによる複数運動物体の視覚的追跡　日本心理学会第71回大会，東洋大学, 2007.9.18-20.
松野響・友永雅己（2007）．チンパンジーによる複数物体の追跡におけるターゲットの連結の効果　日本基礎心理学会第26回大会，上智大学, 2007.12.8-9.
Matsuno, T. & Tomonaga, M. (2007). Multiple object tracking in chimpanzees (*Pan troglodytes*). 30th European Conference on Visual Perception, Arezzo, Italy, 27-31 August.
松嶋秀明・岸野麻衣・やまだようこ・西條剛央・木下康仁・無藤隆（2007）．質的研究の入門書のあり方について考える―今、どのような入門書が求められているのか？　日本心理学会第71回大会（ワークショップ　話題提供）

松下佳代 (2007). 日常的教育改善への FD の再文脈化—ヒアリング調査をふまえて— 大学教育学会第29回大会, 東京農工大学
松下佳代 (2007). 大学教育実践の共有化とネットワーク形成 日本教育工学会 6 月シンポジウム, 東京工業大学
松下佳代 (2007). JELS-PA の知見と実践的示唆 日本教育心理学会第49回総会（自主企画シンポジウム「算数・数学学力テストから教授学習過程への示唆」）, 文教大学
松下佳代・遠藤貴広・伊藤実歩子・石井英真・斎藤里美 (2007). 学校教育において能力をどう語るか—PISA以後 教育目標・評価学会第18回大会 大阪経済大学（報告：遠藤「PISA は日本の学校を変えたのか」）
松吉大輔・廣瀬信之・苧阪直行（2007）. 仮現運動知覚の神経機構—反復経頭蓋磁気刺激による研究 日本認知心理学会第5回大会, 京都, 2007.5.
松吉大輔・苧阪直行（2007）. 視覚的ワーキングメモリにおける妨害刺激の排除過程 日本基礎心理学会第26回大会, 東京, 2007.12.
松吉大輔・苧阪直行（2007）. 視覚的ワーキングメモリにおける妨害刺激の排除過程 京都大学グローバル COE 拠点形成記念公開シンポジウム「心が活きる教育に向かって」, 京都, 2007.11.
松吉大輔・苧阪直行（2008）. 妨害刺激排除の効率性は視覚的ワーキングメモリ容量と逆相関する 日本ワーキングメモリ学会第5回大会, 京都, 2008.3.
松澤正子・田中正之（2008）. 幼児の空間的注意機能ー注意解放(disengagement)課題を用いた検討ー 日本発達心理学会第19回大会, 大阪, 2008.3.19.
源健宏・苧阪満里子・苧阪直行（2008）. 視覚性ワーキングメモリの情報保持に関わる神経基盤の検討 —ワーキングメモリ容量の個人差からのアプローチ— 日本ワーキングメモリ学会第5回大会, 京都, 2008.3.
源健宏・大塚結喜・苧阪直行（2007）. 語順整序における視空間性ワーキングメモリの関連性 日本心理学会第71回大会, 東京, 2007.9.18-20.
嶺本和沙・吉川左紀子（2007）. 表情の順応効果 日本認知心理学会第5回大会, 2007.(発表論文集, 127.)
嶺本和沙・吉川左紀子（2007）. 表情の順応効果：個人特性による影響 日本心理学会第71回大会, 2007.(発表論文集, 742.)
嶺本和沙・吉川左紀子（2007）. 表情の順応効果：先行刺激の提示時間の影響 日本基礎心理学会第26回, 東京, 2007.
Miyata, H. & Fujita, K. (2007). Pigeons plan future moves on computerized maze tasks. XXX. International Ethological Conference. O24-5. Dalhousie University, Halifax, Nova Scotia, Canada. 15-23 August 2007.
宮田裕光・藤田和生（2007）. 複数の目標を設けた空間移動課題における、ハトの経路選択方略 日本動物心理学会第67回大会, OD-8, 早稲田大学文学学術院戸山キャンパス, 2007.10.7-8.
宮田裕光・板倉昭二・藤田和生（2007）. ヒト 3-4 歳児における、十字形迷路課題遂行中のプランニング 日本心理学会第71回大会, 2AM109, 東洋大学白山キャンパス, 2007.9.18-20.
宮田裕光・藤田和生 (2007). LCD モニター上の巡回セールスマン課題におけるハトの経路方略 日本動物行動学会第26回大会, PA-48, 京都大学医学部芝蘭会館・京都大学理学研究科2号館, 2007.10.19-21.
宮崎康子（2007）. バタイユ思想における「悪」の教育人間学的意義 - 瞬間を生きる子どもの生と教育の可能性 - .教育哲学会第50回大会, 2007.10.
*Miyajima, A., & Matsugi, K. (2007). Analysis of Night Sleep and Expanded Actgram of Family. Caregiver, 8th International Family Nursing Conference, Thailand, 2007.6.5.
三好正彦（2007）. 学童保育の可能性ー第三の教育の場として 日本子ども社会学会第14回大会, 昭和女子大学, 2007.7.
三好正彦（2007）. 学童保育 第三の教育の場としての可能性 関西教育学会第 59 回大会,京都大学, 2007.11.
溝上慎一 (2007). 学生の学習の質を問うＦＤを求めて. 田中毎実・絹川正吉・井下理企画シンポジウム「FD のダイナミックス（その２）—第一次調査のフォローアップと新たなモデル— 大学教育学会第

29 回大会
Mizokami, S. (2007). Personal formation mode: Double dimentional self-definitions in adolescent identity formation. Paper presented at the 13th European Conference on Developmental Psychology.
溝上慎一 (2007). 批判的思考と大学教育—FD と学習成果— & 指定討論　水間玲子・山田剛史企画 WS「心理学者、FD 義務化への挑戦—FD の実質化を目指して—　日本心理学会第 71 回大会
溝上慎一 (2008). 金岡正夫企画・ラウンドテーブル「リベラル・アールにおける 1 年次英語教育のあり方ー実社会を視野に入れた「自己への気づき」学習をめざしてー」指定討論　第 14 回大学教育研究フォーラム
溝川藍・子安増生 (2007) . 幼児期における他者の見かけの泣きの理解—心の理論との関連—　日本心理学会第 71 回大会, 2007. (大会論文集, 1069.)
Mizokawa, A.,& Koyasu, M. (2007) . Young children's understanding of another's apparent crying. Poster presented at the 13th European Conference on Developmental Psychology, University of Jena, Germany, 21-25 August, 2007.
溝川藍・子安増生 (2008) . 児童期における見かけの泣きの発達—二次的誤信念の理解との関連ー　日本発達心理学会第 19 回大会, 2008. (大会論文集, 714.)
森口佑介・板倉昭二 (2007). ヒト以外の行為者は幼児の行動に影響を与えるか　第 71 回日本心理学会, 東洋大学, 2007.9.18-20.
Moriguchi, Y., Tanaka, M., & Itakura, S. (2007). "Executive function and theory of mind: Evidence from a comparative study"The 13th European Conference on Developmental Psychology, Jena, Germany, 21- 25 August, 2007.
Moriguchi, Y., Kanda, T., Ishiguro, H. & Itakura, S. (2007). Children mirror a biological action, but not a mechanical action.　The 13th European Conference on Developmental Psychology,　ena, Germany, 21- 25August,2007.
Moriguchi,Y., Minato, T., Ishiguro, H., & Itakura,S. (2007).　Do Android's Actions Affect Young Children's Actions?　The 6th IEEE International Conference on Development and Learning, London, UK, 11- 13 July, 2007.
森口佑介・田中正之・板倉昭二 (2007). 心の理論と実行機能：比較認知研究からの証拠　第 18 回日本発達心理学会, 大宮ソニック, 2007.3.24-26.
森本陽・藤田和生 (2007). フサオマキザルにおける他個体の情動の認識　日本心理学会第 71 回大会ワークショップ, 2007.9.
森本陽・藤田和生 (2007). フサオマキザルは他者の情動表出の原因を理解しているか?　日本動物行動学会第 26 回大会, 2007. 10.
森本洋介 (2007). 日中におけるメディア・リテラシー教育発展の考察—米加関係の視点を交えて—　日中教育学系合同シンポジウム 2007　京大会館
森本洋介 (2007). 日本における中・長期的なメディア・リテラシー教育のカリキュラム開発—高校 3 年生の取り組みから—　日本カリキュラム学会第 18 回大会口頭発表　埼玉大学
森本洋介 (2007). カナダのメディア・リテラシー教育とその成果—制作物の分析から—　日本比較教育学会第 43 回大会口頭発表　筑波大学
森本裕子・渡部幹・楠見孝 (2007). パニッシュメント行動におけるシグナリング効果の検討　人間行動進化学研究会第 9 回大会, 神奈川, 2007.12.
森崎礼子・高岡祥子・藤田和生 (2007). イヌにおけるヒトの感情読み取り能力の検討　日本心理学会第 71 大会, 東洋大学, 2007.9.
森田健一 (2007). においから記憶を想起する体験に関する研究　日本心理臨床学会第 26 回大会, 東京国際フォーラム, 2007.9.
本島優子・遠藤利彦 (2007). 妊娠期における母親の子ども表象と生後 2 ヶ月における母子相互作用との関連性　日本赤ちゃん学会第 7 回学術大会　埼玉
本島優子・遠藤利彦 (2007). 母親の子ども表象と母子相互作用との関連性　日本心理学会第 71 回大会東洋大学
本島優子・遠藤利彦 (2008). 生後 2 ヶ月における母親の乳児の表情知覚と生後 18 ヶ月における乳児のアタッチメントの安定性との関連性：縦断研究　日本発達心理学会第 19 回大会　大阪国際会議場

村井千寿子・小杉大輔・田中正之（2007）．チンパンジーおよびニホンザルにおける物理的支持事象の認識　日本心理学会第71回大会，東京，2007.9.18.
村井千寿子・小杉大輔・田中正之（2008）．ニホンザルおよびチンパンジーの物理的認識－物理的支持事象における検討－　日本発達心理学会第19回大会，大阪，2008.3.21.
鍋田智広（2007）．触覚・視覚・聴覚モダリティに固有の記憶が虚再認に及ぼす影響　日本心理学会第71回大会（小講演），東洋大学，9.18.
鍋田智広（2007）．片仮名と平仮名の筆記が虚偽記憶に及ぼす影響　日本心理学会第71回大会，東洋大学，9.20.
Nabeta, T. (2007). Can young children reduce false recognition? International Seminar for Young Psychologists on Cognitive and Developmental Sciences. Kyoto, 5 December, 2007.
鍋田智広・神垣彬子・目久田純一・松井剛太・朴信永・山崎晃（2007）．記憶課題実施の時間帯が幼児の虚偽記憶に及ぼす影響　日本認知心理学会5回大会，京都大学，5.26.
鍋田智広・神垣彬子・若林紀乃・朴信永・山崎晃（2007）．幼児の勘違いを抑制するにはどうしたらよいか?　日本発達心理学会第18回大会，埼玉大学，3.26.
Nabeta, T. & Kusumi, T. (2007). Haptic memory capacity. Poster session presented at the 48th Annual Meeting of the Psychonomic Society, Long Beach, 16 November, 2007.
Nagaoka, C., Maeda, K. & Komori, M. (2007). Body movement synchrony in psychotherapeutic counseling: A study using the video-based quantification method. Proc. of the International Conference on Kansei Engineering and Emotion Research 2007. (CD-ROM.)
長岡千賀・桑原知子・渡部幹・吉川左紀子（2007）．心理面接における話者理解に関する実証的検討(1)－Thの発話挿入がその後のClの発話速度に及ぼす影響－　日本心理学会第71回大会
長岡千賀・桑原知子・吉川左紀子・渡部幹（2007）．心理面接における話者理解～心理面接ビデオ視聴実験による予備的検討～　日本認知心理学会第5回大会
Nagata, M. (2007). Bridging discourses of ordinary people and experts on environment change. Paper presented at the 7th biennial conference of the Asian Association of Social Psychology, Kota Kinabalu, 25-28 July, 2007
永田素彦・吉岡崇仁（2007）．流域環境の価値評価に関する基礎的研究(2)　日本グループ・ダイナミックス学会第54回大会，名古屋大学，2007.6.16-17.（大会論文集，104-105.）
中池竜一・西岡加名恵（2007）．『逆向き設計』論にもとづくカリキュラム設計データベースの構築と検討　日本認知科学会第24回大会，ポスター発表，成城大学，2007.9.5.
中池竜一・西岡加名恵（2007）．『逆向き設計』論にもとづくデータベース開発――京都大学大学院教育学研究科E.FORUMにおける実践――　教育目標・評価学会第18回大会，口頭発表，大阪経済大学，2007.12.1.
中村絵美子・楠見孝（2007）．環境配慮行動に及ぼす罪悪感と社会的規範の影響　日本認知心理学会第5回大会，京都大学，2007.5.（発表論文集，150）.
Nakamura, N., Watanabe, S., & Fujita, K. (2007). Pigeons perceive an assimilation illusion induced by the Ebbinghaus-Titchener circles. Oral presented at the 30th International Ethological Conference, Dalhousie University, Canada, (Abstract p. 109; O11-5), 15-23 August, 2007.
Nakamura, N., Watanabe, S., & Fujita, K. (2007). Perception of concentric circles illusion in pigeons and humans. Paper presented at the 30th International Ethological Conference, Dalhousie University, Canada, (Abstract p. 163; P1-20), 15-23 August , 2007.
中村哲之・渡辺創太・藤田和生（2007）．ハトとヒトにおける同心正方形錯視の知覚－標的刺激が誘導刺激の外側にある場合－　日本心理学会第71回大会（発表番号：ポスター3EV054），東洋大学，2007.9.18-20.
中村哲之・渡辺創太・藤田和生（2007）．チャボにおけるエビングハウス錯視図形の知覚　日本動物心理学会第67回大会（発表番号：口頭OD-07）,早稲田大学，2007.10.7-8.
中村哲之・渡辺創太・藤田和生（2007）．ハトはヒトと同じようにだまされるのか?—Baldwin 錯視図形を用いた比較研究—　グローバルCOE拠点形成記念公開シンポジウム「心が活きる教育に向かって」（発表番号：ポスター22），京都大学，2007.11.17.
中村哲之・渡辺創太・藤田和生（2007）．ハトとニワトリにおけるエビングハウス錯視知覚日本基礎心理

学会第26回大会（発表番号：ポスター2P45），上智大学, 2007.12.8-9.

中西美貴（2008）．日本統治下の北部台湾における先住民女性と和服　第80回日本社会学会大会, 関東学院大学, 2007.11.17-18.

鳴岩伸生・桑原知子・川部哲也・佐々木玲仁・重田智（2007）．南極越冬隊員の心的体験について(2)―バウムテストの継時的変化を中心に―　日本心理臨床学会第 26 回大会, 東京国際フォーラム, 2007.9.29.

中嶋智史・Langton, S.・吉川左紀子（2007）．未知顔記憶における表情と視線方向の相互作用　日本認知心理学会第5回大会 , 2007.（大会発表論文集, 43.）

西田麻衣子・原田宗忠・山田裕子・国立淳子・杉原百合子・武地一（2007）．もの忘れ外来における初期認知症高齢者の自己概念について―「困っていること」に関する本人の語りの分析より―　第8回認知症ケア学会, 2007.（プログラム・抄録集, 197.）

西平直(2007)．子どもと無心–世阿弥における稽古の逆説　哲学雑誌(哲学会 東京大学文学部哲学科,(編)), 122（794）特集子ども　有斐閣　pp.58-76.

Nishiyama, N., & Yamada, Y. (2008). Female adolescents' perspectives on relationshipts with their mothers and grandmothers: In drawn images. International Workshop of Multicultural Studies: Collaboration with Kyoto University and University of Vienna (The 2nd Global COE Sponsored Workshop).

西山直子・やまだようこ（2008）. 祖母-母-娘三代の関係性：イメージ画によるライフストーリー　日本発達心理学会第19回大会

西澤伸太郎（2007）．手拍子体験法による「合う」感じに関する研究　日本心理臨床学会第26回大会, 東京国際フォーラム, 2007.9.

新田統昭・船橋新太郎（2007）．空間性、非空間性視覚刺激に応答する神経活動のサル前頭連合野背外側部における空間分布パターン　第30回日本神経科学大会, 横浜市, 2007.9.10-12.

能智正博・川野健治・山本登志哉・作道信介・遠藤利彦（2007）. 質的研究では「事実」をどのように考えるか　日本質的心理学会第4回大会　奈良女子大学

野口素子・吉川左紀子（2007）．ネガティブな表情表出のマスキングによる情動調整の特性　日本心理学会第71回, 2007.（大会発表論文集, 969.）

Nomura, M., Sakurai, Y. & Aoyagi, T. (2007). Kernel Analysis of Multi-neural Spike Trains. 2007 IEEE/ICME International Conference on Complex Medical Engineering. 上海, 2007.5.24.

野村真樹・櫻井芳雄・青柳富誌生（2007）．ラット海馬のマルチニューロン活動を用いた行動推測　第30回日本神経科学学会大会, 横浜, 2007.9.11.

野村真樹・櫻井芳雄・青柳富誌生（2007）．文字列カーネルを応用した多次元時系列データ解析　第10回情報論的学習理論ワークショップ（IBIS2007），横浜, 2007.11.5.

野村光江・吉川左紀子（2007）．発話の感情価の違いが発話者の視線・表情に及ぼす影響; 感情の強調意図の検討　日本心理学会第71回大会, 2007.

野村光江・吉川左紀子・魚野翔太（2007）．視線手がかりが人物の選好に及ぼす影響　日本認知心理学会第5回大会, 京都大学, 2007.

野村光江・吉川左紀子・魚野翔太（2007）．視線手がかりが人物の選好に及ぼす影響　日本認知心理学会第5回大会, 京都大学, 2007.

Nomura, M., Yoshikawa, S., & Uono, S. (2007). Gaze cueing influences preference for cue faces. Xth European Congress of Psychology.

布柴靖枝（2007）．バイオ・サイコ・ソーシャルの統合を目指す口腔成育に期待するもの～歯科医療者が臨床心理学的観点をもつこととは？　第5回口腔成育研究会, 仙台市弁護士会館, 2007.6.2.

小椋たみ子・板倉昭二・久津木文・江上園子・黒木美紗（2007）．模倣とコミュニュケーション能力　日本赤ちゃん学会第7回学術集会, 2007.

小原優貴（2007）. 社会変動期のインドにおける女子の進路選択–デリーのポリテクニクを事例に　日本比較教育学会第43回大会自由研究発表　筑波大学

小原優貴（2007）. 初等教育の普及における政府と住民組織の連携：インドのオルタナティブ教育の考察から　第20回日本南アジア学会　大阪市立大学

Ohara, Y. (2007). The study on career decision-making of high school girl students in Japan. The Japan-China Joint Symposium on Educational Studies, Kyoto University, November 2007.
岡本真彦・土田亜矢子・小川絢子（2007）．子どもの他者の感情を推測する際の作動記憶容量の測定の試み(1)　日本心理学会第 71 回大会, 2007.
Okanda, M., & Itakura, S. (2007). Children's response tendencies to yes-no questions: Cross-cultural differences. International Workshop of Multicultural Studies: Collaboration with Kyoto University and Universiy of Vienna, Kyoto University, Kyoto, Feburary 6, 2008.
Okanda, M. & Itakura, S. (2007). Do you like this?: Children's yes bias toward subjective yes-no questions. 13th European Conference on Developmental Psychology. University of Jena, Jena, Germany, August 21-25, 2007.
Okanda, M. & Itakura, S. (2007). Do children show a yes bias to yes-no questions regarding facial expression? 13th European Conference on Developmental Psychology. University of Jena, Jena, Germany, August 21-25, 2007.
小野文生 (2007). 教育哲学の零度—未来の想起と過去の予感とのあいだで　教育哲学会第 50 回大会 研究討議「これからの教育哲学を考える」シンポジスト　広島大学
太田拓紀 (2007). 大学生の職業選択における教師志望の規定要因　日本教育社会学会第 59 回大会　茨城大学
大塚結喜・苧阪直行（2008）．ワーキングメモリの抑制メカニズムと読解力　日本ワーキングメモリ学会第 5 回大会，京都，2008.9.
大塚結喜・苧阪直行・苧阪満里子（2007）．言語性ワーキングメモリを支える脳内ネットワークに対する加齢の影響　日本心理学会第 71 回大会，東京，2007.9.18-20.
大薗博記・渡部幹・上田祥行（2007）．低コスト・シグナルに対するサンクションの効果　日本人間行動進化学研究会第 9 回大会，総合研究大学院大学，神奈川, 2007.12.6-7.
大薗博記・森本裕子・中嶋智史・小宮あすか・渡部幹・吉川左紀子（2007）．表情と言語的情報が信頼性判断に及ぼす影響　日本社会心理学会第 48 回大会, 2007. (発表論文集, 278-279)
大薗博記・吉川左紀子（2007）．笑顔の強度と印象判断との関係-日米比較実験-　日本心理学会第 71 回大会, 2007. (発表論文集, 90.)
大家聡樹（2007）．自分を超えた何か」の体験についての一考　日本心理臨床学会第 26 回大会，東京国際フ　　ォーラム，2007.9.
Osaka, N., Ikeda, T., Rentschler, I., & Osaka, M. (2007). PPA and OFC correlates of beauty and ugliness: An event-related fMRI study. *Perception*, 36, S174-175.
Osaka, N., & Osaka, M. (2007). Focusing attention in working memory: An event related fMRI study based on group differences. Society for Neuroscience 2007, Atlanta, USA, Jan 2007.
大塚結喜・苧阪直行（2008）．ワーキングメモリの抑制メカニズムと読解力　日本ワーキングメモリ学会第 5 回大会，京都，2008.9.
大塚結喜・苧阪直行・苧阪満里子（2007）．言語性ワーキングメモリを支える脳内ネットワークに対する加齢の影響　日本心理学会第 71 回大会，東京，2007.9.18-20.
Oyama, Y., & Sakai, H. (2007). Development of Web-based class observation system for university teacher training. 12th Biennial Conference for Europe Association of Research on Learning and Instruction. Budapest, Hungary, August 2007.
尾崎真奈美 (2007). 多面的集団スピリチュアリティ教育プログラムのストレス関連症状に対する効果　第 48 回日本心身医学会大会，福岡, 2007.5.24.
尾崎真奈美（2007）．スピリチュアリティ・タイプ分類によるうつ状態の分類と接近—自我成熟度に関連して　第 48 回日本心身医学会大会，福岡, 2007. 5.24.
Ozaki, M. (2007). The relation between spiritual health and sense of authenticity "Being true self" 2007 アジア健康心理学会議，東京, 2007.9.1.
尾崎真奈美（2007）．スピリチュアルヘルスと SOC（首尾一貫感覚）・本来感・フロー概念との関連　日本トランスパーソナル心理学・精神医学会大会，東京, 2007.11.11.
Ozaki. M. (2008). Joy: The Spiral Dynamics of Spiritual Health Realization. International Workshop

of Multicultural Studied: Collaboration with Kyoto University and University of Vienna (The Second Global COE Sponsored Workshop), Kyoto, 6 February, 2008.

尾崎真奈美（2008）．スピリチュアル・ヘルス実現　第25回国際生命情報科学会，東京, 2008. 3.15.

尾崎真奈美（2008）．愛と光のスピリチュアルダンス第4回　第25回国際生命情報科学会，東京, March, 2008.3.15.

Ozaki. M.（2008）. Spiritual Health Realization: Restoration of the Connectedness with Others, with Nature, and/or with the Transcendent. International Symposium for an exchange between the Institute of Education (IOE), University of London and Graduate School of Education, Kyoto University (Kyoto), "Self, other and language: Dialogue between philosophy, psychology and comparative education". London, 26 March.

佐伯恵理奈・齊藤智（2007）．課題系列コントロールと作動記憶—ランダムスイッチ状況における構音抑制の効果—　日本心理学会第71回大会，東洋大学白山キャンパス，東京, 2007.9.20.（発表論文集, 803.）

Saiki, J., & Miyatsuji, H.（2007）. Binding deficit in visual short-term memory reflects maintenance, not retrieval. Poster presented at the 7th Annual Meeting of the Vision Sciences Society, Florida, May 11-16, 2007.

齋藤桂 (2007). アメリカにおけるバイリンガル教育の動向—カリフォルニア州を事例として—　日本比較教育学会第34回大会　筑波大学

Saito, K. (2007). Education for language minority students in Japan. Paper presented at the China-Japan Joint Symposium on Educational Studies 2007, Kyoto, 6-8 Nov, 2007.

Saito, K. (2008). Language minority students and parent-school partnership. International Symposium for an exchange between the Institute of Education (IOE), University of London and Graduate School of Education, Kyoto University (Kyoto), "Self, other and language: Dialogue between philosophy, psychology and comparative education". London, 25-26 May, 2008.

Saito, K. (2008). Language minority students, identity, and parental involvement. 43rd Annual Meeting of the Philosophy of Education Society of Great Britain, Oxford, 28-30 May, 2008.

Saito, N. (2008). Ourselves in translation: Stanley Cavell and Philosophy as Autobiography. Annual Meeting of Philosophy of Education Society at Great Britain , Oxford, 29 March, 2008.

齊藤智（2007）．ワーキングメモリとアクション・コントロール　日本心理学会第71回大会シンポジウム「ワーキングメモリ研究の最前線」話題提供，東洋大学白山キャンパス，東京, 2007.9.20.（発表論文集, S15.）

齋藤豊・上野友香・吉井 誠・南 智惠子・神谷知宏・内田至・友永雅己（2007）．バンドウイルカにおける幾何学図形の知覚と記憶　日本動物心理学会第67回大会，早稲田大学, 2007.10.7-8.

酒井 歩・藤田和生（2007）．新世界ザルにおける絵画的奥行き知覚ーキャストシャドーの効果ー　日本動物心理学会第67回大会, 2007.

Sakai, A., Fujita, K., Parron, C., & Fagot, J.（2007）. Preliminary evidence for size constancy illusion in baboons (*Papio papio*) induced by texture gradients. The 30th Annual Meeting of the European Conference on Visual Perception. Arezzo, Italy. August, 2007.

酒井博之 (2007). 大学の遠隔協調学習におけるコミュニケーションについて（話題提供）　日本心理学会第71回大会 ワークショップ「メディアを介したコミュニケーション」　東洋大学

酒井博之・大山泰宏 (2007). Web を利用した公開授業システムの実用化に向けて　日本教育工学会第23回全国大会　早稲田大学

酒井朋子・三上章允・西村剛・豊田浩士・田中正之・友永雅己・松沢哲郎・鈴木樹理・加藤朗野・松林清明・後藤俊二・宮部貴子（2007）．チンパンジーの前頭前野の発達過程：核磁気共鳴断層画像法(MRI)を用いて　第23回日本霊長類学会大会，滋賀県立大学, 2007.7.14-16.

坂野逸紀・齋木潤（2007）．物体・シーンを対象とした瞬時的カテゴリ認識の比較検討　日本基礎心理学会第26回大会，東京都千代田区, 2007.12.8-9

Sakurai, R. (2008). The Spread of Non-formal Education and Future Challenges –UNESCO's Efforts—. Paper presented at the 52 nd Annual Conference of the Comparative and International Education Society, New York, March, 2008.

Sakurai,Y. & Takahashi, S. (2007). Brain-machine interface can detect dynamic neuronal activity and synchrony in the working brain. 2nd Internaional Symposium on Mobiligence, 淡路, 2007.7.20.

鮫島輝美（2007）.「白衣の天使」という看護師の社会的表象に関する歴史・文化的考察　日本グループ・ダイナミックス学会第54回大会, 2007. 6.（発表論文集, 46-47.）

サトウタツヤ・松本佳久子・足立絵美・森直久・安田裕子（2008）. 発達のプロセスとトランスフォーメーションを記述する試み—HSS とTEM という方法からTLMG という理論枠組みへ　日本発達心理学会第19回大会　大阪

サトウタツヤ・安田裕子（2007）. 質的研究入門からシステムの記述へ　日本家族研究・家族療法学会第24回大会　京都

清家理（2007）. 頚髄損傷受傷学生への多角的チームアプローチ　日本トレーニング科学学会(ポスター発表),2007.1.

清家理・岡本真紀（2007）. 急性期病院におけるMSW の転院支援活動. 医療マネジメント学会(口頭発表), 2007.7.

清家理（2007）. 退院支援におけるMSW の役割の重要性（筆頭演者）～地域連携パス未充足部分を担う専門性の検証にむけて～. 医療マネジメント学会(口頭発表), 2007.7.

清家理（2007）. 退院支援におけるMSW と退院調整看護師の専門性検証～脊髄損傷患者退院支援からの考察～　リハビリテーション合同ケア研究会(口頭発表), 2007.10.

千秋佳世・市原有希子（2007）. 自我体験と離人感の関連についての研究—質問紙調査の結果より—　日本心理臨床学会第26回, 東京国際フォーラム, 2007.9.

Shikishima, C., Yamagata, S., Hiraishi, K., and Ando, J.（2007）. Associations between general intelligence and social attitudes: A Japanese twin study. Paper presented at the 37th Annual Meeting of the Behavior Genetics Association, Free University, Amsterdam, 3-6 June, 2007.

清水亜紀子（2007）. 自我体験の語りに現われる主体の在り方について—体験の語りとロールシャッハ・テストとの関連を手がかりに—　日本心理臨床学会第26回大会, 東京国際フォーラム, 2007.9.

清水亜紀子・平松朋子・荒木浩子・浅田剛正・矢納あかね・山本有恵・山崎輝子・荒川喜博・林香織・小西哲郎・藤原勝紀（2007）. 筋ジストロフィー患児（者）の自立支援に関する心理臨床学的接近—臨床現場に生きるスタッフとの個別面接から—　平成19年度厚生労働省精神・神経疾患研究委託費 筋ジストロフィーの療養と自立支援のシステム構築に関する研究, 筋ジストロフィー患者に対する心理的援助の研究 平成19年度班会議,2007.12.

清水寛之・高橋雅延・齊藤智・友寄英哲（2007）. 超記憶力者における日常記憶の自己評価—円周率4万桁の記憶保持者に対するメタ記憶質問紙調査—　日本心理学会第71回大会, 東洋大学白山キャンパス, 東京, 2007.9.20.（発表論文集, 838.）

新堂研一・石井佑可子（2007）. 在宅非行少年における社会的スキル行使の様相（2）—少年たちの語りから—　日本社会心理学会第48回大会　早稲田大学

篠原郁子（2007）. 母親の mind-mindedness と18ヶ月児の心的語彙能力—語彙理解と表出に関する質問紙調査より—　日本赤ちゃん学会第7回学術集会　埼玉

篠原郁子（2007）. 母親の mind-mindedness と2歳児の心の理解能力：「見る-知る」関係の理解について　グローバルCOE 拠点形成記念公開シンポジウム「心が活きる教育に向かって」　京都

篠原郁子・遠藤利彦（2007）. 母親の mind-mindedness と18ヶ月児の内的状態への言及—心に関する発話の母親間差における背景を探る—　日本心理学会第71回大会　東洋大学

篠原郁子・遠藤利彦（2008）. 母親の mind-mindedness と2歳児の欲求理解の発達　日本発達心理学会第19回大会　大阪国際会議場

荘島幸子（2007）. 性転換を望む子どもからカミングアウトを受けた母親の語りなおしプロセス　GID 学会第9回研究大会　所沢市民文化センター ミューズ

荘島幸子（2007）. 性同一性障害者という身の在り方とその変容：当事者の語りから　日本質的心理学会第

4回大会　奈良女子大学

荘島幸子 (2007). ナラティヴが生成される重層的コンテクストとその解釈―次なるナラティヴインクワイアリーに向けて　日本発達心理学会第19回大会　大阪国際会議場

荘島幸子 (2007). 自己と環境の複数の交点に生み出される多形交錯的性／生：性同一性障害者の身体をナラティヴから問い直す　日本心理臨床学会第26回大会　東京国際フォーラム

荘島幸子 (2007). 自己物語論への《語り得ないもの》という視点導入の試み　日本心理学会第71回大会　東洋大学

Shojima, S. (2008). Family experience with a transgender child. Georgetown University Round Table 2008. Washington DC, USA. 14-16 March 2008.

十河宏行・佐藤貴之・大塚結喜・苧阪満里子・苧阪直行 (2008). リーディングスパンテストにおける注意制御と眼球運動　日本ワーキングメモリ学会第5回大会, 京都, 2008.3.8.

Spiel, C.・やまだようこ・戸田有一 (2008). Bildung-Psychology: A developmental perspective on education　日本発達心理学会第19回大会（特別講演 企画・司会）

尹秀安 (2007). 帝国日本と英語教育・月刊『英語研究』を中心に　教育史学会第51回大会　四国学院大学

須賀みな子 (2007). 野村芳兵衛の生活綴方における『言語』と『生命』　教育哲学会第50回大会　広島大学

杉万俊夫・宮田薫・高尾知憲 (2007). 10年間にわたる住民自治構築運動のインパクト 鳥取県智頭町「ゼロ分のイチ村おこし運動」による住民意識の変化と集落運営システムの変容　日本グループ・ダイナミックス学会第54回大会,名古屋大学,名古屋, 2007.

杉本均 (2007). アジアにおける教育改革　公開シンポジウム『日中教育課程改革の動向』（京都大学大学院教育学研究科・教育実践コラボレーション-センター主催, グローバルCOE共催）

鈴木晶子 (2007). リスク社会に生きる知恵　第80回日本産業衛生学会　大阪国際会議場

Suzuki, S. Leben und Tod in Japan – Poietik der „Dazwischen". „Leben" Tagung der Gesellschaft fuer Historische Anthropologie im Zusammenarbeit mit Sonderforschungsbereich Kulturen des Performativen und dem Interdisziplinaeren Zentrum fuer Historische Anthropologie der Freien Universitaet Berlin, Berlin, 25. - 27.Oktober, 2007

Suzuki, S. (2008). Theorie der Lernkultur in Japan–Selbstbildung als Poiesis. 21 Kongress der Deutschen Gesellschaft fuer Erzidhungswissenscaft, TU Dresden. 16-19 Maerz, 2008.

田垣正晋・今尾真弓・谷口明子・荘島幸子 (2007). 障害と病の質的心理学の到達点と未来（ラウンドテーブル）　日本発達心理学会第18回大会　大宮ソニックシティ

平知宏・横森大輔・野沢元・森本裕子 (2007). 話し手との共益関係から見た「あげる・くれる」の選好性　日本認知心理学会第, 京都大学, 2007.5.8.

平 知宏・中本 敬子・木戸口英樹・木村 洋太・常深 浩平・衣川裕子・楠見孝 (2007). 動詞文理解過程における空間表象の活性化 – 上下運動の心的シミュレーションとイメージ図式 –　日本認知科学会第25回大会, 成城大学, 2007.9. (発表論文集,90-95.)

Taira, T., Nakamoto, K., Kidoguchi, K., Kimura, Y., Tsunemi, K., Igawa,Y., & Kusumi, T. (2007). Comprehension of concrete and abstract action-sentence. Poster session presented at 28th Annual Conference on the Cognitive Science Society, Nashville, July, 2007.

髙橋歩美・辻河昌登・髙宮静男・植本雅治 (2008). 神経性食欲不振症の子どもをもつ母親の語りからみた世代間伝達の問題　小児心身医学会近畿地方会第26回総会, 西神戸医療センター, 2008.2.16.

高橋惠子・平井美佳・有田恵・菅原育子・小嶋秀夫・氏家達夫 (2008).「生涯発達」再考. 日本発達心理学会第19回大会シンポジウム, 2008.3.19.

高橋康介・齋木潤・渡邊克巳 (2007). 仮想物体の変形に対する視触覚間同時性知覚の順応電子情報通信学会マルチメディア・仮想環境基礎研究会, 東京大学 山上会館, 東京, 4-5, June, 2007.

Takahashi, K., Saiki, J., & Watanabe, K. (2007). Recalibration of vision-haptics temporal simultaneity. 8th International Multisensory Research Forum, Sydney, Australia, 5-7, July, 2007.

Takahashi, M., Lauwereyns, J., Sakurai, Y. & Tsukada, M. (2007). Sequential coding of spatial response bias in rat hippocampal CA1 neurons. 37th annual meeting of the Society for Neuroscience, San Diego, 2007.11.7.

Takahashi, M., Lauwereyns, J., Sakurai, Y. & Tsukada, M. (2007). Hippocampal code for alternation sequence during fixation period. 7th International Neural Coding Workshop (Neural Coding 2007), Logo Montevideo , 2007.11.7-12.

*Takahashi, M., Ushitani, K., & Fujita, K. (in press). Inference based on transitive relation in tree shrews (*Tupaia belangeri*) and rats (*Rattus norvegicus*) on a spatial discrimination task. *Psychological Record*.

Takahashi, S. & Sakurai, Y. (2007). Spatial information coded by the soma and dendrite of pyramidal cells in the hippocampus of behaving rats, 37th Society for Neuroscience Annual Meeting, San Diego, 2007.11.7.

高橋晋・櫻井芳雄 (2007). 行動中のラット海馬における錐体細胞の細胞体と樹状突起での空間情報表現 第30回日本神経科学学会大会, 横浜, 2007.9.10.

高橋真 (2007). 推論能力の進化に関わる選択圧―社会的文脈の推論課題の種間比較からの示唆― 日本動物心理学会第６７回大会, 自由集会, 早稲田大学, 2007.10.

高橋真・上野吉一・藤田和生 (2007). ニホンザルの推論における文脈の効果 日本動物心理学会第６７回大会, 早稲田大学, 2007.10.

高橋洋一 (2007). インフォームド・コンセントにみる「よさ」の問題―「よさ」の共有への教育可能性 第19回日本生命倫理学会年次大会,東京

高井清子・川上清文・川上文人・友永雅己 (2007). 微笑の起源(13) 日本発達心理学会第18回大会, さいたま市, 2007.3.24-26.

高井清子・川上清文・川上文人・友永雅己 (2007). 微笑の起源(14) 日本心理学会第71回大会, 東洋大学, 2007.9.18-20.

高見茂 (2007). 新しい学校財務システムに関する事例研究（竺沙知章、藤原義朗との共同発表） 関西教育行政学会７月例会

高岡祥子・森崎礼子・藤田和生 (2007). イヌにおけるヒトの音声と性別の関係認識 日本心理学会第71大会, 東洋大学, 2007.9.

高岡祥子・藤田和生 (2007). イヌにおけるヒトの性別のマルチモーダル概念 日本動物心理学会第67回大会, 早稲田大学, 2007.10.

高岡祥子・森崎礼子・藤田和生 (2007). イヌにおけるマルチモーダル概念 グローバル拠点形成記念 公開シンポジウム「心が活きる教育に向かって」, 京都大学, 2007.11.

高岡祥子 (2007). イヌの行動学・心理学（自由集会Ⅲ）「京都大学 CAMP-WAN レポート」日本動物心理学会第67回大会, 早稲田大学, 2007.10.

Takarada, M., Tauch, K., Kuroe, Y. (2008). Nursing care of recovery process for the patient with drug addiction, 11th East Asian Forum on Nursing Science (EAFONS) Annual Conference, Kaoushiung, 28-29 February, 2008.

高柳充利 (2007). スタンリー・カベルによるエマソンの完成主義と教師教育. 教育哲学会第50回大会(口頭発表).

竹腰千絵 (2007). イギリス高等教育におけるチュートリアルの伝播と変容 日本比較教育学会第43回大会 筑波大学

竹家一美 (2007). 子どものいない女性の生涯発達：不妊治療経験者と未経験者の比較から 日本心理学会第71回大会 東洋大学

瀧本彩加・黒島妃香・藤田和生 (2007). フサオマキザルの餌分配に関する実験的分析－サルは他者との不公平な餌分配に敏感か？－（口頭発表） 第67回日本動物心理学会, 早稲田大学, 2007.10.7-8.

瀧本彩加・黒島妃香・藤田和生 (2007). フサオマキザルの餌分配に関する実験的分析－サルは他者との不公平な餌分配に敏感か？－(ポスター発表) グローバル COE 拠点形成記念公開シンポジウム, 京都大学, 2007.11.17.

瀧本彩加・黒島妃香・藤田和生（2007）．視覚的交渉の遮断がフサオマキザルの他者への餌分配に与える影響(ポスター発表)　第9回人間行動進化学研究会，総合研究大学院大学, 2007.12.8-9.

玉岡愛・樂木章子（2007）．教科書分析による学校教育の検討と課題抽出　日本質的心理学会第4回大会，奈良女子大学，奈良, 2007.

田村綾菜（2008). 自発的でない謝罪に対する児童の反応. 日本発達心理学会第19回大会，2008.（大会発表論文集, 336）

田村綾菜（2007）．児童期における謝罪の認識と許容―加害者の表情と言葉をどう受け止めるか―　日本教育心理学会第49回総会, 2007.（大会発表論文集, 9）

田村綾菜（2007). 児童期の子どもにとっての謝罪―謝罪時の表情が怒りとその表出に及ぼす影響―　日本発達心理学会第18回大会論文集, 2007.（大会発表論文集, 563）

Tanabe, A. (2007). Inhibition in visual working memory of scene images. International Seminar for Young Psychologists on Cognitive and Developmental Sciences, Kyoto, 5 December, 2007

田邊亜澄・苧阪直行（2007）．視覚的ワーキングメモリと抑制機能 ―ピクチャースパンテストを用いた検討―　日本基礎心理学会第26回大会，東京，2007.9.8-9.

田中暁生・船橋新太郎（2007）．サルを用いたメタ記憶の神経生理学的研究のための行動課題　第30回日本神経科学大会，横浜市, 2007.9.10-12.

田中史子（2007）．白昼夢にあらわれる物語に関する一考察　日本心理臨床学会第26回大会，東京国際フォーラム, 2007.9.（発表論文集, 428.）

田中耕治（2007). 評価の時代を問う―学力評価の現状と課題　教育目標・評価学会第18回大会シンポジウム　大阪経済大学

田中正之（2007）．チンパンジーにおける食物カテゴリーの適用範囲(2)－カテゴリー形成におよぼす経験の効果－　日本心理学会第71回大会，東京, 2007.9.19.

田中正之（2007）．チンパンジーにおける視覚情報保持　日本動物心理学会，東京, 2007.10.7-8.

田中正之（2008）．タブレットPCを用いた療育の試み－課題場面を媒介とした教育の可能性－ 日本発達心理学会第19回大会,大阪, 2008.3.20.

田中正之・打越万喜子（2007）．人工保育のアジルテナガザルにおけるテナガザル各種の写真に対する好み　日本霊長類学会，彦根市, 2007.7.14-16.

田中美香・河合俊雄・金山由美・桑原晴子（2007）．甲状腺専門病院における摂食障害の事例－身体性に着目して　日本心理臨床学会第26回大会, 2007.（発表論文集, 89）

田中美香・金山由美・河合俊雄・桑原晴子・山森路子・窪田純久・深田修二・宮内昭（2007）．カウンセリングを受けているバセドウ病患者の心理的特徴－描画テストを用いたカウンセリング非受診者との比較－　第50回日本甲状腺学会, 2007.

田中毎実（2007). 大学教育に関する臨床的研究の位置について　日本高等教育学会第10回大会公開シンポジウム「いま、求められる高等教育研究とは？」　名古屋大学

田中毎実（2007). FDの工学的経営学的モデルとその生成性の回復のために　大学教育学会課題研究集会シンポジウムⅢ「FDのダイナミクス―FDモデルの構築に向けて」　龍谷大学

田中康裕（2007）．心理療法におけるリアリティー　甲南心理臨床学会, 2007.7.8.

田中優子・楠見孝（2007）．暗黙の前提に対する信念と論証形式が省略三段論法の評価に及ぼす効果　日本心理学会第７０回大会，東洋大学,2007.9.（発表論文集, 846.）

Tanaka, Y. & Kusumi, T. (2007). The belief in implicit assumption and argument form on the evaluation of enthymeme. Annual meeting of the society for judgment and decision making. Long Beach, CA, 17-19 November, 2007.

田中優子・中西政志・平山るみ・嶺本和沙・井上典子・服部貴大・楠見孝（2007）．暗黙の前提に対する信念が省略三段論法の評価に及ぼす影響　日本教育心理学会第49回総会，文教大学，2007. 9. 15-17.（発表論文集, 707.）

谷口弘一・金政祐司・若尾良徳・岡島泰三・北川恵・遠藤利彦（2007). 成人アタッチメント研究の最前線(2)（ワークショップ）　日本心理学会第71回大会　東洋大学

谷村綾子（2007). 特別支援教育に向けての制度的変遷―障害児教育の公私の関係に注目して　日本教育行政学会2007年9月大会

照屋信治 (2007).『沖縄教育』にみる「沖縄人」意識の形成—伊波普猷と親泊朝擢の言論に着目して— 教育史学会第 51 回大会 四国学院大学
田世民 (2008). 江戸日本儒禮實踐中的《論語》 台湾大学論語学術会議 台北
徳永俊太 (2007). 戦後イタリアにおける歴史教育理論の変遷 日本カリキュラム学会第 18 回大会自由研究発表 埼玉大学
徳永俊太 (2007). イタリアにおける学力調査の分析 教育目標・評価学会第 18 回大会自由研究発表 大阪経済大学
友永雅己・伊村知子 (2007). チンパンジーを探せ 2.0 —顔刺激の効率的探索は顔認識を基盤としているか— 第 23 回日本霊長類学会大会, 滋賀県立大学, 2007.7.14-16.
友永雅己・伊村知子 (2007). チンパンジーによる運動方向判断における前進運動バイアス(II) 日本心理学会第 71 回大会, 東洋大学, 2007.9.18-20.
友永雅己・伊村知子 (2007). チンパンジーによる知覚的補間におよぼす絵画的奥行き情報の影響 日本動物心理学会第 67 回大会, 早稲田大学, 2007.10.7-8.
友永雅己・伊村知子 (2008). 視線手がかりはチンパンジー幼児の注意の定位を反射的に引き起こすか 日本発達心理学会第 19 回, 大阪市, 2008.3.19-21.
Tomonaga, M., & Imura, T. (2008). Searching the object attended or ignored by the others: Efficient search for ignorance by the young chimpanzees (Pan troglodytes). XVIth International Conference on Infant Studies (ICIS2008), Vancouver, Canada, 27-29 March, 2008.
東畑開人 (2007). 容姿の美醜の生成と変容のプロセス—青年期を対象として— 日本心理臨床学会第 26 回大会, 東京国際フォーラム, 2007.9.
Tsubomi, H., & Osaka, N. (2007). Working memory consolidation causes attentional blink. 48th Annual Meeting of the Psychonomic Society, Long Beach, California, November 2007.
土田亜矢子・岡本真彦・小川絢子 (2007). 子どもの他者の発話から感情を推測する際の作動記憶容量測定の試み (2) —幼児版推論スパンテストの作成— 日本心理学会第 71 回大会, 2007.
Tsuchida. Y. (2007) . The Victims of Sexual Crimes and Dating Violence among apanese Youth. Paper presented at the 18th world congress of World association for Sexual Health, Sydney, Australia,
15-19 April .2007.
築山裕子・梅村高太郎・笹倉尚子 (2007) . アトピー性皮膚炎患者が抱える攻撃性について—P-F スタディにおける内的反応と外的反応の比較から— 日本心理臨床学会第 26 回大会, 東京国際フォーラム, 2007.9.28. (発表論文集, 363)
Tsunemi, K., & Kusumi, T. (2007). The role of autobiographical memories in story comprehension. Poster session presented at 28th Annual Conference on the Cognitive Science Society, Nashville, July, 2007.
辻本雅史 (2007). 近世思想から教育を考える—儒学学習の意味— 日本教育学会第 66 回大会公開シンポジウム「日本における教育思想の伝統と系譜—近世教育思想の視点から—」 慶応義塾大学
辻本雅史 (2008). 亀井南冥の『論語』観および全体コメント 国際シンポジウム『論語』国際学術会議 台湾大学
内田由紀子 (2007). 感情表出・推論の文化拘束性 (ワークショップ<感情の自動性および社会・文化拘束性>) 日本社会心理学会第 48 回大会, 早稲田大学, 2007.9.
Uchida, Y. (2007). Happiness and unhappiness in East and West. Expanding horizon of Cultural Psychology: Advances in research and teaching. Stanford, CA, the United States, August, 2007.
Uchida, Y. (2007). What predicts happiness? The relative significance of self-esteem and emotional support in three cultures. (Symposium "Cultural influence on self-view and self-presentation") The 7th Conference of the Asian Association of Social Psychology , Kota Kinabalu, Malaysia, July, 2007.
内田由紀子・遠藤由美・柴内康文 (2007). 社会的絆の広さと深さは幸福を導くか? (ワークショップ<資源としての社会的絆：人間関係の今日的結び方とその意義>) 日本心理学会第 71 回大会, 東

洋大学, 2007.9.
内田由紀子・ダフィー ショーン・北山忍 (2007). 描画に表れる自己と他者の認知：日米比較研究. 日本認知心理学会第 5 回大会, 京都大学, 2007.5.
Uchida, Y., Park, J., & Kitayama, S. (2008). Explicit and implicit social orientations: Independence and interdependence in Japan and the U.S.. Annual meeting of Society for Personalioty and Social Psychology, Albuquerque, New Mexico, the United States February, 2008
内野亮平・佐藤弥・吉川左紀子 (2007) . 情動表情による閾下感情プライミング—恐怖表情による効果の検討 日本心理学会第 71 回大会, 2007.
Ueichi, H.,& Kusumi, T. (2007). Structural equation modeling of risk avoidance in daily life. Poster session presented at International Meeting of the Psychometric Society 2007, Tama University, July, 20, 2007.
上田祥行・齋木潤・多湖真琴. (2007). 触覚におけるテクスチャの粗さ判断に視覚情報が及ぼす影響 日本認知心理学会第 5 回大会, 京都, 26-27 May, 2007.
上田祥行・齋木潤 (2007). 心理学的逆相関法を用いた異種感覚間における相互作用の検討 日本心理学会第 71 回大会, 東京, 18-20 September, 2007.
上田祥行・齋木潤 (2007). 触覚刺激による視知覚の変容 京都大学グローバル COE「心が活きる教育のための国際的拠点」拠点形成記念 公開シンポジウム「心が活きる教育にむかって」, 京都, 11 November, 2007.
上田祥行・齋木潤 (2007). 触覚刺激が視知覚に与える影響 電子情報通信学会ヒューマン情報処理研究会, HIP2007-105, 金沢, 19-20 November, 2007.
上田祥行・齋木潤 (2007). 付与された課題が新奇物体の形態学習に与える影響 日本基礎心理学会第 26 回大会, 東京, 6-7 December, 2007.
上垣恵一・高橋真・藤田和生 (2007). ツバイにおける左右対称性の認識 日本動物心理学会第 67 回大会 (発表番号：P-54) , 早稲田大学, 2007.10.7-8.
上野泰治・齊藤智 (2007). 言語対連合学習における長期記憶と visual buffer の役割 日本心理学会第 71 回大会, 東洋大学白山キャンパス, 東京, 2007.9.19. (発表論文集, 785.)
魚野翔太・佐藤弥・吉川左紀子・十一元三 (2007). 動的表情が視線による注意シフトに与える影響. 日本心理学会第 71 回大会, 東洋大学, 2007.
浦田悠 (2007). 禅僧のライフストーリーに見る人生の意味への問い 日本質的心理学会第 4 回大会 (ポスター発表)
浦田悠 (2007). 生きる意味の深さについて—生きる意味の類型・実存的空虚感との関連— 日本心理学会第 71 回大会
浦田悠 (2007). 人生の意味の心理学モデルの構成 日本人間性心理学会第 26 回大会
浦田悠・川島大輔・野村信威・松本光太郎・川野健治・佐藤眞一 (2007). 高齢者の語りをめぐって (3) 日本心理学会第 71 回大会 (ワークショップ司会) 東洋大学
牛谷智一・友永雅己 (2007). チンパンジーにおけるオブジェクトベースの注意の検討 —部分的に隠された刺激を使って— 日本心理学会第 71 回大会, 東洋大学, 2007.9.18-20.
Wakamura,T., Suzuki,K., Toichi,M., Tamaki,A., Horita,S., Matsugi,K.&SS Miyajima,A. (2007). Effects of positioning during afternoon nap on body temperature and heart rate variability in Japanese young healthy men,2nd World Congress of Chronobiology,東京,2007.11.4-6.
脇奈七 (2007). 地方自治と「指導力不足教員」認定制度 関西教育行政学会
渡部 幹・小宮あすか (2007). 評判情報の信頼性と戦略——コンピュータシミュレーション研究—— 日本社会心理学会第 48 回大会, 2007. (発表論文集, 186-187.)
Watabe, M., Gonzalez, R. Toriyama, R., Ishii, K. Nakamura, M., Morimoto, Y., and Ozono, H. (2007). Culturally Embedded Resource Allocation Strategy: An Ultimatum Game: Experiment and Agent-based Computer Simulation. Paper Presented at the Annural Meeting of American Sociological Association. New York , August, 2007.
渡邉慶・船橋新太郎 (2007) . 遅延自由選択課題における前頭連合野ニューロン活動 第 30 回日本神経科学大会, 横浜市, 2007.9.10-12.

渡邉慶・船橋新太郎（2007）．前頭連合野ニューロンの競合による眼球運動方向の決定．統合脳夏のワークショップ，札幌．

渡辺創太・足立幾磨・藤田和生（2007）．ハトは線分の長さを相対的に判断する　グローバル COE 拠点形成記念公開シンポジウム「心が活きる教育に向かって」，(発表番号：34)，京都大学，2007.11.17.

Watanabe, S., Fujita, K., Nakamura, N. & Uegaki, K. (2007). Do pigeons perceive Zöllner Illusion? Paper presented at the 30th *International Ethological Conference*, Dalhousie University, Canada, (Abstract p. 168; P1-30), 15-23 August, 2007.

渡辺創太・藤田和生・中村哲之・上垣恵一（2007）．ハトにおけるツェルナー錯視知覚研究 2　-平行か否かの弁別課題を用いて-　日本動物心理学会第 67 回大会（発表番号：口頭 OD-09），早稲田大学，2007.10.7-8.

渡辺創太・中村哲之・藤田和生（2007）．ハトにおけるツェルナー錯視知覚　日本心理学会第 71 回大会（発表番号：ポスター3EV033），東洋大学，2007.9.18-20.

Watanabe, S., Adachi, I., & Fujita, K. (2007). Is pigeons f judgment influenced by the surrounding stimuli? *The 30th International Ethological Conference, Dalhousie University*, Canada, (O11-4), 15-23, August.

和崎光太郎（2007）．中島力造の＜修養＞論－社会ダーウィニズムと国民形成のための心理学・倫理学－教育史学会第 51 回大会，2007.9.22.

項 純（2007）．素質教育を目指す中国の教育評価改革の動向と課題　日本教育方法学会第 43 回大会自由研究発表　京都大学

山田あさ子（2007）．学校における逸脱行為に関する考察－許容的かかわりの有効性について　関西教育学会第 59 会大会

山田恭子・鍋田智広・緒本翔平・中條和光（2007）．いつもの場面で勘違いは起きる —背景文脈の一致が虚再認に与える影響—　日本認知心理学会 5 回大会，京都大学，5.27.

Yamada, Y. (2007). A multi-cultural study of "The image map of my life" (1): For constructing chrono-topos models. The 13th European Conference on Developmental Psycholgy, Jena, 21-25 August.

Yamada, Y. (2007). Repeated voices and the side-by-side position of Self and Other: Basic models of communication from Japanese cinema. The 17th EECERA (European Early Childhood Education Research Association) Exploring Vygotsky's ideas: Crossing Borders, Prague, 29th August-1st September.

やまだようこ・川島大輔・浦田悠・川野健治・有田恵（2007）．死生の意味づけへの質的研究の展望—物語（ナラティヴ）という視点の可能性—　日本心理学会第 71 回大会（ワークショップ）　東洋大学

やまだようこ・川島大輔・田垣正晋・竹家一美・山崎浩司（2007）．失うことと生きること—喪失、障害、不妊の語り　日本質的心理学会第 4 回大会（シンポジウム 企画・司会）　奈良女子大学

やまだようこ・小森康永・野口裕二・東豊・児島達美・森岡正芳（2007）．家族臨床における家族研究の可能性　日本家族研究・家族療法学会第 24 回大会（大会シンポジウム　シンポジスト）

やまだようこ・安田裕子・山口智子・田垣正晋・川島大輔（2008）．質的心理学におけるナラティヴ分析の方法　日本発達心理学会第 19 回大会　大阪

山本有恵（2007）．事例検討会における〈よむ〉ことをめぐって－方法としての対話－　日本心理臨床学会第 26 回大会，東京国際フォーラム，2007.9.

山本有恵・平松朋子・荒木浩子・浅田剛正・清水亜紀子・矢納あかね・山崎輝子・荒川喜博・林香織・小西哲郎・藤原勝紀（2007）．臨床現場に根ざす実践研究に向けた課題と展望—筋ジストロフィー研究班での心理臨床研究を踏まえて—　平成 19 年度厚生労働省精神・神経疾患研究委託費 筋ジストロフィーの療養と自立支援のシステム構築に関する研究，筋ジストロフィー患者に対する心理的援助の研究 平成 19 年度班会議,2007.12.

Yamamoto, H., Fukunaga, M., Tanaka, C., Umeda, M.,& Ejima, Y. (2007). Inconsistency and Uncertainty in the Locations of Human Visual Areas in Talairach Space. The Japan Neuroscience Society 30th Annual Meeting. Pacifico Yokohama, Yokohama, Kanagawa,

Japan, 10-12 September, 2007. (*Neuroscience Research*, 58 (Supplement 1), S97).

山本佳世子 (2007). タイのエイズホスピス展示を考える：エイズ教育に関する一考察　第15回日本ホスピス・在宅ケア研究会全国大会, 飛騨高山, 2007.6.30.

山本佳世子 (2007). 着床前診断の適用に関する考察—母子の親密圏的関係に注目して　日本医学哲学・倫理学会第26回大会, 鶴見大学, 2007.10.20.

山本佳世子 (2007). 高校でいかに生と死を語るか：教員に対するインタビュー調査を通じて　第13回日本臨床死生学会大会, 早稲田大学, 2007.12.15.

山本和行 (2007). 日本統治期における「教育勅語」の導入について—「漢訳教育勅語」を中心に—　天理台湾学会第17回研究大会　天理大学

山本和行 (2007). 台湾総督府学務部による教育勅語の導入過程—国家教育社による教育事業とのかかわりに着目して—　教育史学会第51回大会　四国学院大学

山本和行 (2007). 日本植民地教育への考察から考える教育の課題　日中教育学系合同シンポジウム 2007 (第6回京都大学大学院教育学研究科国際シンポジウム)　京都大学

山本真也 (2007) 互恵性の進化的基盤の解明にむけて：チンパンジーでの利他的コイン投入実験　第67回日本動物心理学会大会　自由集会「社会的知性への比較認知科学的アプローチ」, 早稲田大学、2007.10.6

山本真也 (2008) チンパンジーにおける互恵性と他者理解の比較認知科学的検討　第19回日本発達心理学会　シンポジウム「比較認知発達神経科学の挑戦 2.0 ― 「他者」とは何か？ ―」、大阪、2008.3.19

山本真也・田中正之 (2007). 相互利他的協力場面においてチンパンジーは自発的に役割交代をするか？：協力への誘いかけとただ乗りへの罰　第23回日本霊長類学会大会、滋賀県立大学、2007.7.15

Yamamoto S, & Tanaka M. (2007) Do chimpanzees spontaneously take turns in a reciprocal cooperation task?: solicitation and punishment targeted at free-rider. The 30th International Ethological Conference. (18th August 2007, Halifax)

山本真也・田中正之 (2007) . チンパンジーにおける他者の利益に対する感受性　日本心理学会第71回大会, 東洋大学, 2007.9.19.

山本真也・田中正之 (2007) チンパンジーは隣の他者に食物を与えるか？　第10回SAGAシンポジウム, 上野動物園、2007.11.17

山本真也・田中正之 (2007) チンパンジーは隣の他者に食物を与えるか？：血縁関係・互恵的文脈による影響の検討　人間行動進化学研究会　第9回研究発表会,、総合研究大学院大学、2007.12.8

Yamamoto, T., Takahashi, S., Hanakawa, T., Urayama, S., Aso, T., Fukuyama, H.,& Ejima, Y. (2007). Different roles of the parietal and lateral occipito-temporal cortex for 3-D perception from motion. Paper presented at the 30th Annual Meeting of the Japan Neuroscience Society, Yokohama, 10-12 September, 2007.

山本哲也・山本洋紀・齋木潤 (2007) . 三日月形刺激を用いた立体運動効果の表面テクスチャー依存性　日本心理学会第71回大会ポスター発表, 東京都文京区, 2007.9.18-20.

山本哲也・山本洋紀・齋木潤・眞野博彰・梅田雅宏・田中忠蔵 (2007) . 立体運動効果のテクスチャーコントラストの知覚特性と脳活動特性の比較　日本視覚学会2007年夏季大会ポスター発表, 豊橋市, 2007.7.23-25.

Yamamoto, T., Yamamoto, H., Saiki, J., Mano, H., Umeda, M., & Tanaka, C. (2007). Functional magnetic resonance imaging of monocular depth cue integration using a stereokinetic effect stimulus. Paper presented at the 37th Annual Meeting of the Society for Neuroscience, San Diego, 3-7 November, 2007.

Yamamoto, T., Takahashi, S., Hanakawa, T., Urayama, S., Aso, T., Fukuyama, H., & Ejima, Y. (2007). Different roles of the parietal and lateral occipito-temporal cortex for 3-D perception from motion. Paper presented at the 30th Annual Meeting of the Japan Neuroscience Society, Yokohama, 10-12 September, 2007.

山本喜晴・藤田潤・藤村聡 (2007). 遺伝カウンセリングにおける臨床心理面接にあらわれたクライエントの語り 第31回日本遺伝カウンセリング学会学術集会, 2007.5.25-27.

山城博幸・山本洋紀・齋木潤・眞野弘彰・梅田雅宏・田中忠蔵（2007）．連続フラッシュ抑制時の見えない刺激に対するヒト低次視覚野のレチノトピックな応答　日本視覚学会 2007 年夏季大会，豊橋，1p6，*VISION*,19(3), 168.

Yamashiro, H., Yamamoto, H., Saiki, J., Mano, H., Umeda, M. & Tanaka, C. (2007). Relative weights on conscious and non-conscious visual processing in human retinotopic areas. 第 30 回日本神経科学大会，横浜，O2P-C04, Neuroscience Research, 58(Supplement 1), 54.

Yamashiro, H., Yamamoto, H., Saiki, J. , Mano, H. ,Umeda, M.,& Tanaka, C. (2007). Retinotopic responses to visible and invisible stimulus in human early visual areas during continuous flash suppression. Society for Neuroscience 37th Annual Meeting, San Diego, Program No. 201.20. 2007 Neuroscience Meeting Planner. San Diego, CA: Society for Neuroscience, 2007. Online.

大和田智文・浅井健史・家島明彦・塩崎万里・榎本博明（2007）．いま，若者の何が問題なのか？ ―若者に対する領域を超えた向き合い方の提案―　日本心理学会第 71 回大会ワークショップ（話題提供）　東洋大学

山崎徳子・金井一穂・尾垣和幸（2007）．保育の中の「記述」から「保育支援」の可能性を探る　第 60 回日本保育学会，十文字学園女子大学，埼玉，2007.5.20.

山崎徳子（2007）．保育園で軽度発達障碍を持つ子どもが育つこと－母親との対話から考えるアスペルガー症候群の子どもへの支援－　第 60 回日本保育学会，十文字学園女子大学，埼玉，2007.5.20.

矢野智司（2007）．生命原理としての遊びから見た保育の課題.日本保育学会第60回大会　シンポジウム『保育の原点を探る―遊びを中心においた保育の探求』，十文字学園女子大学，5.19.

矢野智司（2007）．贈与と交換の教育人間学という問題圏　教育思想史学会第17回大会，京都大学，2007. 9.17.

矢野智司（2007）．京都学派と戦後教育学．教育哲学会第50回大会，ラウンドテーブル，広島大学，2007. 10.14.

厳 平（2007）．帝国大学における留学生の入学問題―特設高等科に着目して―　教育史学会第 51 回大会　四国学院大学

矢追健・大塚結喜・苧阪直行（2007）．言語性ワーキングメモリにおけるフォーカス効果　日本心理学会第 71 回大会，東京，2007.9.18-20.

矢追健・苧阪直行・苧阪満里子（2008）．自己を含む人物表象へのメタ的評価とその脳内神経基盤　日本ワーキングメモリ学会第 5 回大会，京都，2008.3.

安田裕子・サトウタツヤ・森直久・Valsiner, J.・村上宣寛・菅原ますみ（2007）．文脈に埋め込まれた時間と共にある経験を捉える枠組み―HSS（歴史的構造化サンプリング）と TEM（複線径路・等至点モデル）　日本パーソナリティ心理学会第 16 回大会　帯広

安川由貴子（2007）．生涯学習論とコミュニケーション論の接点―G.ベイトソンのコミュニケーション論をめぐって―　第 54 回日本社会教育学会，東京農工大学，2007.9.9.

ヤユツナパイ（2007）．台湾原住民部落における部落発展の再考―観光事業による伝統文化の教育実践　天理台湾学会第 17 回研究大会　天理大学

雅幼滋娜白（2007）．從在日朝鮮人民族學校看台灣原住民族語教育―以教材、師資、課表為比較分析對象　原住民族教育理論與實務研討會　台灣

横森大輔・平知宏・野沢元・森本裕子（2007）．他者間の授与イベントにおける利益の認知－「あげる」「くれる」の選好性の観点から－　日本認知科学会第 24 回大会，成城大学，2007.9.

横尾知子・齊藤智（2007）．聴覚誘導性フラッシュ錯視に音高変化が及ぼす影響　日本基礎心理学会第 26 回大会，上智大学四谷キャンパス，東京，2007.12.8-9.

ユンスアン(2007)．帝国日本と英語教育・月刊『英語研究』を中心に　教育史学会第 51 回大会　四国学院大学

10. 講演

浅田晃佑・富和清隆・岡田眞子・板倉昭二 (2007). ウィリアムズ症候群児のコミュニケーション特性　2007年度京都大学霊長類研究所共同利用研究会「メタX ― 社会的認知における階層的処理過程の比較認知発達 ―」, 京都, 2007.8, 2007.9.

*蘆田宏 (2007). fMRI 順応法による動き情報処理の脳内機構の研究　日本基礎心理学会第 26 会大会シンポジウム「運動視の諸現象とメカニズム」, 上智大学, 2007.12.8.

遠藤利彦 (2007). 子どもに対する親の愛情：両刃の剣としての錯覚　京都私立幼稚園特別支援教育・設置者園長第 1 回研修会

遠藤利彦 (2007). 親子関係と子どもの社会情緒的発達　こどもみらい館共同機構研修会

遠藤利彦 (2007). 発達心理学の立場から保育の基本を見直す　京都市保育士の会（ふたば会）

遠藤利彦 (2007). 子育ての基本を見直す：錯覚という言葉をキーワードに　京都府幼稚園協会

遠藤利彦 (2007). 現代進化発達心理学から見るアタッチメント　第 3 回うみかぜシンポジウム, 滋賀県立大学

遠藤利彦 (2007). 日本の発達早期における「特別支援教育」の現状と課題：保育所・幼稚園への保育カウンセラー派遣の意義を探る　日中教育学系合同シンポジウム, 京都大学

遠藤利彦 (2008). カウンセリング・マインドについて　京都私立幼稚園特別支援教育・設置者園長第 2 回研修会

*藤田和生 (2007). 感情の比較認知科学　日本感情心理学会第 15 回大会オムニバス講演会講演, 大阪学院大学, 2007.5.19.

藤田和生 (2007). 霊長類と鳥類の視覚的補間と錯視（話題提供）　自然科学研究機構生理学研究所研究会「視知覚研究の融合を目指して－生理、心理物理、計算論」, 自然科学研究機構 岡崎コンファレンスセンター 中会議室, 2007.6.15.

藤田和生 (2007). 動物たちの心を探る　京都大学総合博物館「レクチャーシリーズ」講演, 京都大学総合博物館ミューズ・ラボ, 2007.9.22.

藤田和生 (2007). 比較感情研究の可能性（話題提供）　グローバル COE プログラム「心が活きる教育のための国際的拠点」シンポジウム『心が活きる教育に向かって』, 京都大学文学研究科第 1 講義室, 2007.11.17.

藤田和生 (2008). ねたみ、優しさ、思いやり－動物の高次感情について－　慶應義塾大学グローバル COE プログラム「論理と感性の先端的教育研究拠点」、京都大学グローバル COE プログラム「心が活きる教育のための国際的拠点」共催シンポジウム「理屈？屁理屈？理屈抜き？　考える心、感じる心」第 3 部パネルディスカッション話題提供, 東京国際フォーラム B7 ホール, 2008.1.19.

藤田和生 (2008). 動物のこころを探る～比較認知科学入門～　日本薬学会近畿支部公開講座「ヒトのこころ、動物のこころ」, 京都大学薬学部講堂, 2008.1.26.

Fujita, K. (2008). Function of affect in nonhuman social interaction: Experimental analyses. Talk presented at: The Joint International Symposium of Kyoto University and Freien Universität Berlin, "Glück und Risiko (Happiness and Risk)" February 20, 2008, Kyoto University

船橋新太郎 (2007). ワーキングメモリに関わる脳内神経機構　関西システム神経科学若手の会第 4 回研究会, 京都大学人間・環境学研究科, 京都, 2007.6.7.

船橋新太郎 (2007). こころとからだ領域　こころの未来研究センター開設記念シンポジウム, 京都大学百周年時計台記念館ホール, 京都市, 2007.7.8.

Funahashi, S. (2007). Primate model of attention-deficit/hyperactivity disorder　第 30 回日本神経科学大会シンポジウム "What is contributed by the primate model? ", 横浜市, 2007.9.10-12.

船橋新太郎 (2007). こころの未来研究センター　さきがけ研究報告会, 鹿児島市, 2007.9.29.

Funahashi, S. (2007). Discussion　グローバル COE 国際シンポジウム, 京都大学百周年時計台記念館国際交流ホール, 京都市, 2007.12.5-6.

船橋新太郎 (2007). ワーキングメモリの神経機構をもとに意志決定の仕組みの研究へ　シンポジウム「前頭連合野研究の発展と展望」, 東京大学駒場キャンパス, 東京, 2007.12.21.

船橋新太郎 (2007). 前頭連合野は意思決定にどのように関わるか　文部科学省特定領域研究「統合脳」冬の班会議, 学術総合センター, 東京, 2007.12.22-24.

船橋新太郎（2007）．前頭葉から心を考える　日本薬学会近畿支部市民公開講座，京都大学薬学部講堂，京都，2008.1.26.

船橋新太郎（2008）．脳から人のこころをよみとく　京都大学市民講座「よみとく」，京都大学百周年時計台記念ホール，京都，2008.2.16.

Funahashi, S. (2008). Prefrontal cortex and decision-making: how does delay-period activity contribute to the decision of the saccade direction? 1st International Mini-Symposium on Prefrontal Cortical Functions, Institute of Brain Science, Fudan University, Shanghai, 31 March, 2008.

Hagura, N. (2007). Sensing hand movement from visual and kinesthetic information. Innovative designs for fMRI studies., Okazaki, Japan , November, 2007.

林 創（2007）．社会的な認識に関わる二次の心的状態の理解とその発達　中部大学人文学部心理学科「第43回心理コロキウム」，中部大学，2007.5.23.

林 創（2007）．社会的な認識を支える二次の心的状態の理解の発達　日本心理学会第71回大会小講演，東洋大学，2007.9.20.

林 創（2007）．知れば楽しい認知心理学「II 思考の心理学」　京都光華女子大学平成19年度秋期公開講座，京都光華女子大学，200711.10.

林美里（2007）．物遊びからチンパンジーとヒトの発達を比較する　名古屋経済大学，2007.10.20.

Hiraishi, K. (2008). What constitutes one's environment? Proposal of internal environment theory of personality. PEER2008, Tokyo Institute of Technology, 24th January.

Ieshima, A. (2008). Psychological approach to Japanese comics: What do people learn from manga in Japan? Oral presented at the Department of Psychology Research Talks Spring 2008, Chicago, 30 Jan, 2008.

池田尊司（2007）．色記憶研究のこれまでとこれから　日本心理学会第71回大会，ワークショップ「色とは何か —知覚・認知心理学的アプローチ—」，2007.

井上明美（2007）．滋賀県東近江市少年補導・生徒指導研修会講師　2007.5.11.

井上明美（2007）．滋賀県高島市スクーリング・ケアサポーター研修会講師　2007.6.7.

井上明美（2007）．滋賀県東近江市少年補導連絡協議会研修会講師　2007.10.22.

Itakura, S. (2007). How do we discover mind? Challenge from the Developmental Cybernetics. Invited talk at Zhejiang Normal University Psychology Seminar, 2007.

Itakura, S. (2007). When does a mind appear? Challenge from the developmental Cybernetics. Invited talk at Zhejiang University of Sciences, 2007.

板倉昭二（2007）．ロボットから知る赤ちゃんの心　京都大学総合博物館レクチャーシリーズ no.62（京都大学総合博物館）

板倉昭二（2007）．日常的に存在するロボット：Developmental cybernetics　ロボットラボラトリー トークセッション，大阪市産業創生館，2007.

板倉昭二（2008）．赤ちゃんから子どもへ—心の発達—　都島すくすくフォーラム（ＪＳＴ），大阪市立総合医療センター，2008.

板倉昭二（2008）．広義の「心の理論」の形成過程とコホート研究　領域架橋型シンポジウム「自閉症スペクトラム研究」，2008.

*伊藤良子（2007）．感情と心理臨床：象徴化に向けて　第2回日本情動研究会，2007.

*伊藤良子（2007）．遺伝子から学ぶ心理臨床　日本心理臨床学会ワークショップ，日本心理臨床学会第26回大会，東京国際フォーラム，2007.9.

*伊藤良子（2007）．現代社会における遊戯療法の重要性　日本遊戯療法学会ワークショップ

角野善宏（2007）．心理療法の中で生かすバウムテスト－風景構成法との関わりも含めて－，南大阪地域における心理療法と心理テストの向上を目指して－バウムテストを中心として－ 講演会，大阪府立大学，2007.12.2.

*皆藤章（2007）．看護管理者が人間の心を理解してリーダーシップを発揮するために　日本看護管理学会第11回大会，高知文化プラザかるぽーと，2007.8.24.

皆藤章（2007）．風景構成法　日本描画テスト・描画療法学会第17回大会 ワークショップ，同朋大学，

2007.9.1.

皆藤章（2007）．描画法におけるメッセージ性と関係性　日本心理臨床学会第 26 回大会ワークショップ，昭和女子大学，2007.9.26.

金子勉（2008）．大学のガバナンス　京都光華女子大学

Kawai, T. (2007). Das Jenseits des Glückprinzips　第 1 回グローバル COE 主催国際シンポジウム「幸福とリスク」

*河合俊雄（2008）．力動心理学の成立の歴史的背景：Ellenberger の視点のもたらしたもの　第 11 回日本精神医学史学会

河合俊雄（2008）．日本における若者の病理の変化：ひきこもりと行動化　第 3 回こころの未来ワークショップ

Kawai, T. (2008). Consciousness and training of Japanese therapists. Symposium in International Seminar for Analytical Psychology.

*川崎良孝（2007）．法体系上的公共図書館地位与図書館目的（日美比較）　上海市図書館学会，上海図書館

木之下隆夫（2007）．中高年のメンタルヘルスについて　愛知大学公開講座，2007.6.30.

小島隆次（2007）．空間認知と言語理解：前後上下左右はどこからどこまでか？　日本心理学会第 71 回大会小講演，東洋大学，東京，2007.

*子安増生（2007）．オムニバス講演「進化と発達から感情を考える」　日本感情心理学会第 15 回大会，大阪学院大学，2007.5.19.（大会論文集, 11-12.）

子安増生（2007）．三つ子の魂、どんな魂？－幼児期の心の発達をさぐる－　京都大学総合博物館「レクチャーシリーズ no.61」講演，京都大学総合博物館ミューズ・ラボ，2007.10.20.

*黒江ゆり子（2007）．現代人とクロニックイルネス　第 1 回日本慢性看護学会，兵庫，2007.8.3-4.

*黒江ゆり子（2007）．特別講演 クロニックイルネスと Motivational Interviewing　関西行動医学会，神戸，2007.11.11.

黒江ゆり子（2007）．特別講演 クロニックイルネスと病みの軌跡　第 4 回北海道療養支援研究会，札幌，2007.7.21.

*日下部達哉（2007）．バングラデシュの農村内格差と人的ネットワークのグローバル化　早稲田大学アジア研究機構第 1 回次世代国際研究大会「アジアの教育問題―国内格差と国際移動」，早稲田大学

桑原知子（2007）．講演記録 女性の生き方～もう一人の私との出会い～　神戸女学院大学カウンセリングルーム紀要, 12, 14-20.

松田 憲（2008）．単純接触効果を支える概念形成過程　感性学研究部会第 7 回感性学研究会，日本認知心理学会・感性学研究部会・九州大学，2008.

真継和子（2007）．看護師が薬剤師に期待すること　摂南大学キャリアガイダンス，摂南大学枚方キャンパス，2007.11.29.

松下佳代（2007）．FD の現状と未来―高等教育機関での様々な FD 活動の取組み―　福井工業高等専門学校創造教育開発センター設立記念講演

松下佳代（2007）．PISA 調査の求めるリテラシーとこれからの授業デザイン　福井大学地域教育科学部附属中学校第 42 回教育研究集会全体研究会

松下佳代（2007）．FD のこれまでとこれから ―「FD 義務化」の時代に―　New Education Expo 2007

松下佳代（2007）．パフォーマンス評価　日本標準第 2 回教育セミナー

松下佳代（2007）．PISA 型学力の検証と全国学力テストの問題点　京都教育センター・公開学習会

松下佳代（2007）．全国一斉学力テストを考える―PISA 型学力の検証―　舞鶴教育研究集会

松下佳代（2007）．大学院生のための教育実践講座―3 年間の成果と今後の展望―　名古屋大学高等教育研究センター第 66 回招聘セミナー

松下佳代（2008）．OECD の PISA 調査結果にみられる性差　京都大学女性研究者支援センター「性差の科学」研究会

松下佳代（2008）．子どもたちにどんな学力を―PISA リテラシーを手がかりに―　府立高教組口丹ブロック教育研究会

松下佳代（2008）．パフォーマンス評価―子どもの思考と表現を評価する―　富士宮市立富士根北中学校学習評価講演会

*松沢哲郎（2007）．ヒトとチンパンジーの違い―ゲノム比較解析を中心に―　第27回日本医学総会，大阪，2007.4.

松沢哲郎（2007）．チンパンジーの親子と文化　第17回岐阜大学フォーラム，岐阜，2007.4.

松沢哲郎（2007）．チンパンジーの親から子へ：『緑の回廊』と『サンクチュアリ』　第16回法然院夜の森の教室，京都，2007.5.

*Matsuzawa, T. (2007). Cognitive development in chimpanzees. The annual meeting of the American Society of Primatologists, Winston-Salem, USA, June, 2007.

*松沢哲郎（2007）．チンパンジー研究からヒト赤ちゃん研究へ　日本赤ちゃん学会第7回学術集会，大宮，2007.6.

*松沢哲郎（2007）．チンパンジーの親子と教育　第34回BMSコンファレンス，鳥羽，2007.7.

*松沢哲郎（2007）．チンパンジーの親子と文化　平成19年電気学会産業応用部門大会，大阪，2007.8.

松沢哲郎（2007）．チンパンジーの知性，教育，文化　名古屋大学池上研究会，先端科学セミナー，名古屋，2007.8.

松沢哲郎（2007）．チンパンジーの親子と文化　第28回全国クレーン安全大会，名古屋，2007.11.

松沢哲郎（2007）．チンパンジーの親子と文化　摂南大学図書館文化講演会，寝屋川，2007.11.

*Matsuzawa, T. (2007). Cognitive development in chimpanzees. I Iberian Primatological Conference , Peniche, Portugal, Nonember, 2007.

松沢哲郎（2007）．チンパンジーの親子と文化　京都文化会議，京都，2007.12.

松沢哲郎（2007）．比較認知科学：チンパンジー研究から人間の本性の進化的基盤を探る　名城大学「比較認知化学研究所」開所特別記念講演，名古屋，2008.1.

松沢哲郎（2007）．チンパンジーの心　―新適塾―第1回「脳と心の神秘に迫る」，豊中，2008.1.

溝上慎一（2007）．ファカルティ・ディベロップメントの現在と課題　大谷大学

溝上慎一（2007）．今後求められる真の学習とは　京都府高校教育勉強会「櫂21」

溝上慎一（2007）．学生を育てる授業―アクティブ・ラーニングの多様性―　横浜国立大学

溝上慎一（2007）．多様化する学生への学習支援　同志社大学文学部

溝上慎一（2007）．青年期における同一化形成と関係性　2007年度プラザカレッジ21世紀学講座

溝上慎一（2007）．大学での学習が新しい時代を生きる力につながるのか？　私学次世代教育研究会

溝上慎一（2008）．学生の学びと成長における大学教育の課題　高等教育研究会

溝上慎一（2008）．今頃の大学生　岩手県立大学

溝上慎一（2008）．大学以降、生涯にわたって力強く生きていくための勉強のしかた　桃山学院高校

長岡千賀（2007）．心理面接場面における対話の構造：身体動作の同調性　日本心理学会第71回大会ワークショップ「カウンセリング対話を科学する（1）―非言語的行動の分析―」（企画：桑原知子）

Nagaoka C. (2008). Body movement synchrony in psychotherapy. International workshop on interaction dynamics, embodiment, and implicit primordial knowledge model. Kyoto, January. 2008.

西岡加名恵（2007）．日本における教育課程の改革　京都大学大学院教育学研究科・教育実践コラボレーションセンター・日中教育共同研究センター共催公開シンポジウム「日中教育課程改革の動向」，京都大学芝蘭会館別館

Nomura, M. (2008). Reading the Mind in the Eyes: cross cultural comparison . Kyoto University Kokoro Research Center Symposium and Workshop "Socio Cultural Aspects of Emotion Regulation and Psychological Well-being".

*布柴靖枝（2007）．精神（心理）療法的アプローチの必要性とは～事例を通してみる精神科医と臨床心理士のコラボレーションのあり方　第13回日本精神神経科診療所協会総会・学術研究会，仙台，2007.5.27.

*布柴靖枝（2007）．（シンポジスト）子どもの心の問題と家族関係～親との面接・支援のあり方　平成19年度宮城県学校保健会養護教員部会実践研究会，仙台，2007.9.25.

*布柴靖枝（2007）．自己を振り返る～死と再生のイメージワーク　日本電話相談学会京都ワークショップ，京都，2007.6.

*布柴靖枝（2007）．スーパーバイザーのためのセルフアウエアネス　日本電話相談学会仙台ワークショッ

プ，仙台，2007.

*冲永隆子（2008）．宗教とケア：ケアにおける宗教的側面をどう考えるか　スピリチュアル・ケアの可能性―信仰をもつ患者と信仰をもたない患者　日本医学哲学・倫理学会関東支部ケア・臨床倫理研究会，順天堂大学，2008.1.26.

冲永隆子（2008）．生と死の生命倫理学―死生観教育の可能性　帝京大医学部外科教室イブニング・セミナー，帝京大学附属病院，2008.1.29.

*苧阪直行（2007）．脳は意識するか　日本学術会議，本学術会議講堂，2007.3.16.

*苧阪直行（2007）．社会脳とは何か　日本学術会議，東大山上会館講堂，2007.6.3.

*苧阪直行（2007）．ワーキングメモリと内側前頭前野　脳電磁図トポグラフィー学会特別講演，神戸オリエンタルホテル，2007.6.15.

*苧阪直行（2007）．Color working memory　国際色彩学会，杭州（中国），2007.7.13.

苧阪直行（2007）．PPA and OFC correlates of beauty and ugly: an event-related fMRI study　欧州視知覚学会，アレッツオ（イタリア），2007.8.31.

*苧阪直行（2007）．社会脳－自己と他者－　高等研究所，京都，2007.9.8.

*苧阪直行（2007）．ワーキングメモリと内側前頭前野におけるセルフの脳内表現－社会脳からの考察－　日本心理学会シンポ「ワーキングメモリ研究の最前線」，2007.9.20.

*苧阪直行（2007）．メタ意識としてのセルフアウェアネスの脳内表現　日本理論心理学会，東北大学，2007.11.17.

*苧阪直行（2007）．意識の認知　科学臨床神経生理学会，独協医科大学（宇都宮），2007.11.21.

*苧阪直行（2007）．脳と高齢社会　日本学術会議「脳と意識」「神経科学」「脳と心」分科会合同シンポ 世話人，学術会議講堂，2007.11.26.

*苧阪直行（2008）．社会脳のニューロエシックス　国際公開シンポジウム 人間改造のエシックス：ブレインマシンインターフェースの未来，京都大学，2008.1.14.

*苧阪直行（2008）．基調講演 笑いの脳内表現　関西大学「笑い講」シンポジウム，2008. 2.23.

大塚雄作（2007）．京都大学工学部における相互研修型 FD とその組織化への挑戦　関西工学教育協会電気分科会平成 18 年度第 5 回研究集会，中央電気倶楽部

大塚雄作（2007）．FD の義務化をめぐって―大学院設置基準の改正にあたって　天理大学

大塚雄作（2007）．FD の現状と評価のあり方―学問学習共同体の形成に向けて　日本大学法学部

大塚雄作（2007）．授業評価をＦＤの現状と評価のあり方―学問学習共同体の形成に向けて　大正大学

大塚雄作（2007）．FD の意義とその実践―FD 共同体の形成に向けて　足利短期大学

大塚雄作（2007）．学生による授業評価の現状と課題　京都大学 FD 研究検討委員会授業評価ワークショップ

大塚雄作（2007）．FD 法制化の意味と実状　群馬県立女子大学

大塚雄作（2007）．大学教育評価のあり方を考える―授業改善と説明責任の狭間で―　名古屋大学文学部・第 13 回教育研究推進室ワークショップ

大塚雄作（2007）．授業アンケートの結果と分析　京都大学第３回工学部教育シンポジウム

大塚雄作（2008）．FD の意義とその実践―FD 共同体の形成に向けて　関西地区 FD 連絡協議会授業評価ワークショップ　立命館大学

大塚雄作（2008）．FD 義務化時代の大学教育と評価―教員・TA・学生の学びの共同体の形成に向けて―　福岡教育大学

大塚雄作（2008）．FD 法制化の意義と課題―遠隔高等教育の新たなる挑戦に向けて―　放送大学

大塚雄作（2008）．FD 組織化への挑戦と課題　第１ミニシンポジウム・コーディネーター　第 13 回 FD フォーラム　立命館大学

大塚雄作（2008）．大学評価時代の教育評価のあり方を問う―新たな学問学習共同体の形成に向けて―　熊本大学工学部・大学教育の質保証と評価に関するフォーラム基調講演

大塚雄作（2008）．FD 法制化の意義と課題―MOT 教育の次なるステップに向けて―　東京理科大学専門職大学院総合科学技術経営研究科

大塚雄作（2008）．FD 法制化の意義と課題―新たなる学問共同体の形成に向けて―　分子科学研究所

大塚雄作（2008）．相互研修型 FD の組織化をめぐって（特色 GP 評価シンポジウム）　第 14 回大学教

育研究フォーラムシンポジウム司会，京都大学

Oyama, Y. (2007). Insights on distance education at Kyoto University. Centro de Innovacion Educative y Desarrollo del Docente, Universidad de las Americas. Puebla, Mexico, June 2007.

Oyama, Y. (2007). Faculty Development as learning community of professors: An experience in Japan. Centro de Innovacion Educative y Desarrollo del Docente, Universidad de las Americas. Puebla, Mexico, June 2007.

大山泰宏（2007）．子どもの心育てを考える　奈良市立富雄南小学校講演会

大山泰宏（2007）．高校時代に何を学ぶか　奈良県立奈良北高等学校講演会

大山泰宏（2007）．学生に向き合い学生を理解するということ—大学改革の言説に流されず　大分大学高等教育開発センター大学院・学部合同 FD 講演会

尾崎真奈美（2007）．本来の自己を求めて：スピリチュアル・ヘルスの心理学的記述　スピリチュアリティ研究会夏のシンポジウム，逗子，2007.6.24.

尾崎真奈美（2007）．スピリチュアル・ヘルス：健康科学と心理学からのアプローチ　医療におけるからだとスピリチュアリティを考える会，大阪，2007.7.14.

尾崎真奈美（2007）．本来の自己との一致：心理学的記述と体からの気づき　ユング心理学研究会，東京，2007.9.20.

尾崎真奈美（2007）．スピリチュアリティ測定・モデル化の目的・効用・限界と可能性：心理学の立場から　スピリチュアリティ研究会冬のシンポジウム，東京，2007.12.2.

尾崎真奈美（2007）．中村論文「スピリチュアリティの心理学研究の意義」に関する報告　トランスパーソナル心理学・精神医学会基礎研究会，東京，2007.12.9.

*尾崎真奈美（2007）．個の成熟：マズロー・フランクル・アサジョーリモデルより　日本トランスパーソナル学会・中国支部基礎講座，福山，2007.12.17.

*尾崎真奈美（2007）．高次元意識に関する現代心理学による説明：その限界と可能性　サトルエネルギー学会・意識科学研究会講演会，東京，2008.2.16.

Saiki, J. (2007). Visual cognition in multiple object environments. Invited talk at Department of Psychology, University of New South Wales, Sydney, Australia, 15, August, 2007.

Saiki, J. (2007). Visual cognition in multiple object environments. Invited talk at School of Psychology, University of Sydney, Sydney, Australia, 17, August, 2007.

齋木 潤（2007）．オブジェクト認識における時間　「認識と運動における主体性の数理脳科学」研究会，国際高等研究所，京都，22 September, 2007.

Saiki, J., Koike, T., & DeBrecht, M. (2007). Saliency map models for stimulus-driven mechanism in visual search: Neural and functional accounts. Invited Symposium at International Conference on Cognitive Neurodynamics 2007, Shanghai, China.

Saito, N. (2007). *Philosophy of Education*, Teachers College. Columbia University. New York, U. S. A., 2 July-8 August, 2007 (part-time).

*Saito, N. (2007). Skepticism, tragedy and pragmatism: Emerson, Dewey and Cavell. "International Conference on Death and Spirituality" at Sogang University, Korea, 10 October, 2007. (Invited lecture).

Saito, N. (2007). *Beyond The Gleam of Light*: From Dewey to Cavell. Teachers College, Columbia University, New York, 18 July, 2007.

*Saito, N. (2007). Beyond the limits of Deweyan pragmatism: Dewey, Japan and globalization. International Conference, "John Dewey Reconstructing Democracy." Matera, Italy, 26 May, 2007.

Saito, N. (2007). Truth is Translated: Cavell's Thoreau and the Transcendence of America. K. U. Leuven , 21 May, 2007.

Saito, S. (2007). The role of verbal short-term memory in task-switching and action control. International Symposium on Executive Function in the Mind, Kyoto University, Kyoto, Japan, December 5, 2007.

Saito, S. (2008). Exploring the role of verbal working memory in action control. Psychology Colloquia

at School of Philosophy, Psychology and Language Sciences, University of Edinburgh, UK, January 7, 2008.

酒井博之・林 創（2007）．2006 年度工学部卒業研究調査の結果と分析―追跡調査から見えてきたこと―工学部・高等教育研究開発推進センター共催第 3 回工学部教育シンポジウム，京都大学

櫻井芳雄（2007）．脳と機械をつなぐ～ブレイン－マシン・インタフェースの進展～ 「脳を育む」シリーズ講演会，大阪，2007.3.24.

*櫻井芳雄（2007）．究極のオルガテクノ：ブレイン・マシン・インタフェース オルガテクノ国際会議 2007，東京，2007.7.18.

*佐藤卓己（2007）．＜8 月 15 日の神話＞の超克 韓国言論情報学会，延世大学

*佐藤卓己（2007）．“終戦”の記憶を問い直す―世界の中の日本 日文研ミニシンポジウム，日文研ホール

*佐藤卓己（2007）．教育将校・鈴木庫三の軌跡―日本大学助手から情報局情報官へ 2007 年度日本大学教育学会秋季学術研究発表会，日本大学文理学部

*佐藤卓己（2007）．情報宣伝から世論調査へ―戦後「世論」の正立史― 日本世論調査協会大会，中央大学記念館

佐藤卓己（2007）．戦争とメディア、そして生活（第二部司会とコメント） 科研「東アジアメディア産業研究」シンポジウム，東京大学

*佐藤卓己（2007）．ファシスト的公共性の射程：《ナチ宣伝》か《ナチ広報》か 日本広告学会全国大会，JR 京都駅前メルパルク KYOTO

荘島幸子（2008）．私の質的研究―性同一性障害／トランスジェンダー研究― 中部質的心理学研究会

*杉万俊夫（2007）．人間科学：当事者と研究者の協同的実践 第 24 回日本家族研究・家族療法学会，2007.5.25-27.

Sugiman, T. (2007). Phase transition in the development of 'communication' of the Vitae systems: Revitalization of a rural depopulated area in Japan. The international conference on Vitae Systems: New paradigm for systems science, Kyoto, Japan, December 1-2, 2007.

杉本均（2008）．ティーチング・ポートフォリオと授業改善 滋賀県立大学人間看護学部 FD セミナー

*Suzuki, S. (2008). Die Zukunft verhandeln: Risikoforschung und Bioethik in Japan und Deutschland, Wissenschaft zwischen den Kulturen. Wie Deutschland und Japan voneinander lernen. Historische Aspekte und aktuelle Entwicklungen, Berlin-Branden burgische Akademie der Wissenschaften 13. Maerz 2008

高見茂（2007）．これからの学校経営―管理職のリーダーシップを考える 長岡京市教育支援センター主催講演会

高見茂（2007）．学校の管理運営の状況 監査法人トーマツ 学校評価試行研修

高見茂（2008）．学社連携を考える―学校整備と企業 CSR 野洲市教育委員会・栗東市教育委員会・京都産業大学包括連携協定締結記念教育フォーラム講演

竹内みちる（2007）．産むことと育てることの切り離しをめぐる家族規範 日本グループ・ダイナミックス学会，ショート・スピーチ（社会問題），名古屋大学，2007.6.

田中耕治（2007）．学力と評価の新しい地平 愛知教育大学附属名古屋中学校第 50 回教育研究発表会

田中耕治（2007）．学力と評価の新しい考え方―生きて働く力を求めて― 新潟大学教育人間科学部附属長岡小・中学校教育研究協議会

田中耕治（2007）．教育評価の新しい考え方―生きて働く力を求めて― 北海道教育評価研究会第 40 回大会

田中正之（2007）．こどもの育ち方 ～ヒトとチンパンジーの同じところ、違うところ～ 全国私立保育園連盟青年会議，2007.11.15.

田中康裕（2007）．ユング派心理療法と錬金術の論理 日本ユング心理学研究所，2007.6.17.

田中康裕（2008）．心理現象としての＜解離＞ 日本ユング心理学研究所，2008.1.13.

田中慶江（2007）．青年期の自分探し 佛教大学四条センターセミナー講師，佛教大学四条センター，2007.9.

友久茂子（2007）．現代社会と若者の心 神戸市ＰＴＡ家庭教育アカデミー講師 神戸市総合教育センター，2007.6.20.

友永雅己（2007）．チンパンジーにおける社会的認知とその発達 ―顔の認知を題材として― 日本基礎心理学会 2007 年度第 1 回フォーラム『系統発生的視点から見た知覚，認知』，立教大学新座キャンパス，2007.6.30.

友永雅己（2007）．チンパンジーの心を探る―中期目標・中期計画― 第 10 回 SAGA シンポジウム「これからの類人猿研究」，上野動物園，東京大学，2007.11.17-18.

友永雅己（2008）．こころを読むことの進化―比較認知科学からの示唆― 日本発達心理学会第 19 回大会シンポジウム『「こころを読む」ことの発達・進化・障害』，大阪市，2008.3.19-21.（抄録：発表論文集, 120）

辻本雅史（2007）．江戸の学習文化と日本の教育 日中教育系合同シンポジウム 2007，京都大学芝蘭会舘

辻本雅史（2007）．江戸の「学び」と今の「教育」 NPO 法人国際生涯学習文化センター市民講演，大阪科学技術センター（NHK ラジオ第 2 放送「文化講演会」12 月 16 日 21:00-22:00 放送）

*内田由紀子（2008）．文化心理学から見た文化とこころ 早稲田大学文化人類学会第 9 回大会総会シンポジウム「文化概念の再構想 ――心理学・経済学との対話を通して」，早稲田大学，2008.1.

Uchida, Y. (2008). How social relationships affect well-being? Social support and friendship in Japan and the U.S. 京都大学グローバル COE プログラム こころが活きる教育のための国際的拠点共催 第 3 回こころの未来ワークショップ："Socio Cultural Aspects of Emotion Regulation and Psychological Well-being", March, 2008.

魚野翔太（2008）．表情が視線による注意シフトに与える影響―定型発達者とアスペルガー障害における検討― 特定領域研究「実験社会科学」集団班ワークショップ，北海道大学

渡邊洋子（2007）．生涯学習支援を考える 日本看護学教育学会第 17 回学術大会，福岡国際会議場（九州大学）

渡邊洋子（2008）．『おとな』を『おしえる』という考え方のすすめ 看護教育研修会，京都大学附属病院看護部管理室

*やまだようこ（2007）．老年期にライフストーリーを語る意味 日本老年看護学会

*やまだようこ（2007）．ナラティヴ（物語・語り）アプローチと家族研究 日本家族研究・家族療法学会

やまだようこ（2007）．ナラティヴの聞きかた・分析のしかた 日本赤十字看護大学大学院

Yamada, Y. (2007). Generative life cycle model. Invited lecture at University of Vienna, 17 August.

Yamada, Y. (2007). Image map of my life. Invited lecture at University of Vienna, 14 August.

雅幼滋娜白（2007）．賽德克族語教育發展與正名運動 第三屆社會轉型國際會議（臺灣第一民族：發展，自治與人類安全），台灣

雅幼滋娜白（2008）．原住民族正名運動 台東大學南島文化研究所，台灣

11. 受賞歴

番浩志（2007）．2007 年度日本視覚学会夏期大会ベストプレゼンテーション賞（番浩志・山本洋紀・花川隆・麻生俊彦・浦山慎一・福山秀直・江島義道（2007）．遮蔽された物体の低次視覚野 V1/V2 におけるトポグラフィックな表象：fMRI 研究 日本視覚学会 2007 年度夏季大会，愛知県豊橋市，ホテル日航豊橋, 2007.7.23-25.）

二見隆亮（2007）．大阪 YMCA 創立 125 周年研究フォーラム 研究フォーラム賞

服部裕子（2007）．International Ethological Conference. Poster talk 賞（第 3 位）

林 創（2007）．平成 19 年度「発達科学研究教育奨励賞」 財団法人 発達科学研究教育センター

日下部達哉（2008）．日本比較教育学会 平塚賞（受賞決定 2008 年 6 月授賞式）

李基原（2007）．京都大学教育学研究科同窓会国際論文賞受賞

松野響（2007）．2007 年度 日本基礎心理学会優秀発表賞

小川絢子（2007）．財団法人発達科学研究教育センター 平成 19 年度「発達科学研究教育奨励賞」受賞

斎木潤（2007）．2007 年度 電子情報通信学会マルチメディア・仮想環境基礎研究会第 1 回 MVE 賞（高橋康介、渡邊克己との共同受賞）

斎木潤（2008）．2008 年 ヒューマンインタフェース学会研究会賞（高橋康介、渡邊克己との共同受賞）

篠原郁子（2007）．平成 19 年度日本心理学会優秀論文賞（篠原郁子（2006）．乳児を持つ母親における

mind-mindedness 測定方法の開発―母子相互作用との関連を含めて― 心理学研究, 77, 244-252.)

篠原郁子 (2007). 平成19年度「発達科学研究教育奨励賞」 財団法人 発達科学研究教育センター

荘島幸子 (2007). 2007年日本質的心理学会第4回大会 研究発表優秀表現奨励賞

山本洋紀 (2007). 2007年度日本視覚学会夏期大会ベストプレゼンテーション賞 (番浩志・山本洋紀・花川隆・麻生俊彦・浦山慎一・福山秀直・江島義道 (2007). 低次視覚野V1/V2における遮蔽された物体のトポグラフィックな表象と事前知識がその表象に与える影響 : fMRI研究 日本視覚学会2007年度夏季大会, 愛知県豊橋市, ホテル日航豊橋, 2007.7.23-25. (*VISION*, 19(3), 178-179).)

12. 社会的貢献等 (教員に限定)

蘆田宏 : 和歌山県立日高高校スーパーサイエンスハイスクール講義 「視覚の不思議と脳機能」(2007年7月12日)

Becker, C. : 「爆問学問」にて『宗教学と死生学の紹介』2月26日NHK総合テレビ

遠藤利彦 : 日本心理学会常任編集委員 (~2007年11月)、日本教育心理学会常任編集委員、日本発達心理学会編集委員、日本赤ちゃん学会評議員

藤田和生 : 日本心理学会領域別委員、日本心理学会国際委員会委員、日本学術会議連携会員、日本動物心理学会常任理事、動物心理学研究編集長、関西心理学会常任委員、Primates誌編集委員

伊藤良子 : 日本遊戯療法学会常任理事、日本遺伝カウンセリング学会評議員、日本心理学会心理学ワールド編集委員、学校法人神戸女学院評議員、日本学術振興会科学研究費委員会専門委員

川崎良孝 : 日本図書館研究会理事長、日本図書館情報学会理事、京都大学図書館情報学研究会会長

子安増生 : 日本発達心理学会常任理事、同理事長、よみうり子育て応援団講師 (讀賣新聞社大阪本社)

楠見孝 : 日本心理学会代議員, 日本教育心理学会常任編集委員・優秀論文賞選考委員、日本認知科学会運営委員, 日本認知心理学会運営委員・編集委員・大会実行委員, Psychologia Associate Editor, 京都市研究開発学校運営指導委員会委員

桑原知子 : 日本箱庭療法学会常任理事、編集委員長、中央教育審議会専門部会委員

松下佳代 : 日本教育方法学会理事, 日本カリキュラム学会理事, 教育目標・評価学会理事, 大学教育学会理事, 京都高等教育研究センター研究員, 学校図書算数教科書著作者

溝上慎一 : 日本青年心理学会理事、大学教育学会理事、広島大学高等教育研究開発センター客員研究員、・International Conference on the Dialogical Self、Scientific Committee委員、兵庫教育大学客員准教授、・比治山大学高等教育研究所客員研究員、財団法人電通育英会・大学生調査アドバイザー

苧阪直行 : 日本学術会議「脳と意識」分科会委員長、心理学評論刊行会代表・心理学評論編集委員長、文部科学省・科学技術・学術審議会・脳科学委員会委員

大塚雄作 : 日本教育心理学会常任編集委員、日本テスト学会監事、大学評価・学位授与機構短期大学機関別認証評価委員会委員、特定非営利活動法人実務能力認定機構理事

大山泰宏 : 医療法人 竹村診療所 非常勤カウンセラー、日本臨床心理士会 総合企画・事業委員会 委員

佐藤卓己 : 日本マス・コミュニケーション学会理事、国際日本文化研究交流財団招致・派遣事業審査会委員、 読売新聞社読書委員、朝日新聞社紙面審議会委員、放送分野におけるメディア・リテラシー教材の普及・啓発に関する調査研究会 (総務省) 委員

杉万俊夫 : 公開パネルディスカッション「第4回自立を目指す市町村 元気サミット・イン・智頭」(企画・講演・パネル司会.

杉本均 : アジア教育研究会の主宰

鈴木晶子 : 日本学術会議・教育学・心理学委員会・心と身体から教育を考える分科会・委員長、同・社会と科学委員会・科学力増進分科会・副委員長 、同・環境リスク分科会・委員 、同・医学教育分科会・委員

高見茂 : 京都府教育委員会「まなび教育推進プラン」政策立案委員会委員、同「学校の組織運営の在り方研究会」委員、日本教育行政学会理事、関西教育行政学会会長、広陵町都市計画審議会委員

田中耕治：京都府学力向上検討委員会座長

田中毎実：教育哲学会常任理事、日本教育学会編集委員、教育思想史学会理事、大学教育学会常任理事）社会的活動、日本学術会議連携会員、山形大学『樹氷プロジェクト』諮問委員、大阪大学大学教育実践センター外部評価委員、文部科学省中央教育審議会専門委員

田中康裕：日本臨床心理士資格認定協会評議員、日本箱庭療法学会理事、日本ユング心理学会常任理事

辻本雅史：日本思想史学会会長、教育史学会理事・事務局長、関西教育学会理事・副会長、日本教育学会理事、日本学術会議連携会員、放送大学（テレビ科目）「教育の社会文化史'04」主任講師、奈良県教育委員会教育懇談会会長、心学明誠舎理事、石門心学会理事

平石界：日本認知科学会常任運営委員、日本人間行動進化学会常務理事

渡邊洋子：社会教育主事講習講師、滋賀県人権施策推進委員、滋賀県高島市人権施策推進懇話会、京都市ユースサービス協会理事

やまだようこ：日本質的心理学会常任理事、日本発達心理学会理事、日本学術会議連携会員

資　料

ロゴマークについて

本拠点のテーマである、有能感・達成感・生命感が合わさって幸福感（心が活きる状態）が生まれる様子を、３つの色が重なり合い中心に白い空間が生まれることで表現しています。

このデザインは、京都大学学術情報メディアセンター客員教授奥村昭夫先生によるものです。奥村昭夫先生は、ロート製薬・ディアモール大阪シンボルマーク、グリコのCI、グリコ・月桂冠・田辺製薬・牛乳石鹸・近鉄百貨店のパッケージデザインなどを手がけた著名グラフィックデザイナーです。

http://www.okumura-akio.com/

About Our Logo

The white part of our COE project logo indicates how a sense of happiness or revitalizing conditions for hearts and minds is formed when three themes of our project, a sense of competence (capability), a sense of accomplishment, and a vital sense of life overlap.

This design was created by a visiting professor, Akio Okumura, Academic Center for Computing and Media Studies, Kyoto University. Prof. Okumura is a well-known graphic designer who created a number of designs such as symbol marks for Rohto Pharmaceutical Co., Ltd., and Diamor Osaka, CI Mark of Glico, and various package designs for Glico, Gekkeikan, Tanabe Seiyaku Co., Ltd. , Gyunyu Sekken, and Kintestu Department Store.

For further information on Prof. Okumura, please refer to
http://www.okumura-akio.com/

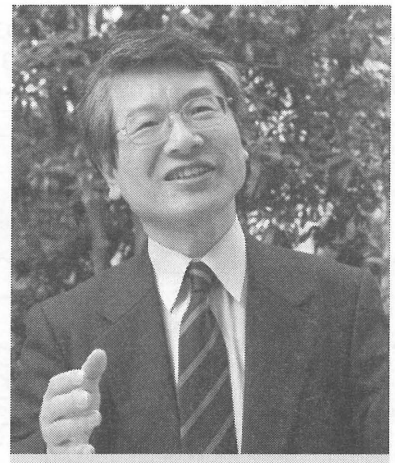
楽友（Kyoto University Newsletter）：2008, Issue 13, p.11.

Revitalizing Education for Dynamic Hearts and Minds

Our Center conducts research on *revitalizing education for dynamic hearts and minds* through the academic disciplines of *psychology* and *educational studies*. Our diverse concentrations include philosophy and history in education, cognitive studies, neuropsychology, comparative psychology, developmental psychology, clinical psychology, lifelong learning, media studies, and cultural studies. Our researchers in psychology and educational studies come from the Graduate School of Education (Departments of Education and Clinical Studies of Education), the Institute for the Promotion of Excellence in Higher Education (Section I), the Graduate School of Letters (Department of Psychology), the Graduate School of Human and Environmental Studies (Department of Human Coexistence), and *Kokoro* Research Center.

Our Center takes three approaches to seeking knowledge: *empirical studies* that analyze problems, *clinical studies* that deepen understanding of problems, and *practical studies* that carry out solutions to problems. The four research units are: (A) *Basic Processes Unit*, which conducts research on both vital and non-vital states of mind; (B) *Systems Unit*, which conducts research into the design of systems necessary for revitalizing education for dynamic hearts and minds, as well as methods of explaining and applying these to society; (C) *Support Unit*, which researches the kinds of psychological support and educational commitments that are effective in revitalizing education for dynamic hearts and minds and puts these into practice; and (D) *Development and Evaluation Unit*, which evaluates the theories and practices proposed by each unit, and is implementing a project called "Cross-Cultural Research on the Sense of Happiness."

The Center aims to develop prominent, incisive, broadminded researchers in psychology and educational studies capable of publishing in acclaimed international academic journals and presenting papers at international conferences and meetings. To accomplish this, we are developing an educational system that will enable the Center to offer graduate education programs in psychology and educational studies. The Center will also reinforce its position as an international nexus for research and education through official academic exchange agreements with highly regarded research institutions abroad, including Michigan University, Lancaster University, the China National Institute for Educational Research, Beijing Normal University, the Free University of Berlin, and the Institute of Education at London University. The aim is to create in Kyoto University a meeting place for scholars in psychology and educational studies from all over the world.



Program Leader:
Prof. Masuo KOYASU

We hope that this integration will (a) achieve significant developments in the humanities discipline within Kyoto University and in academia as a whole; (b) promote scholarly information and understanding, which in turn will promote social reform and innovation; and (c) facilitate wider engagement in effective and fruitful educational practice.

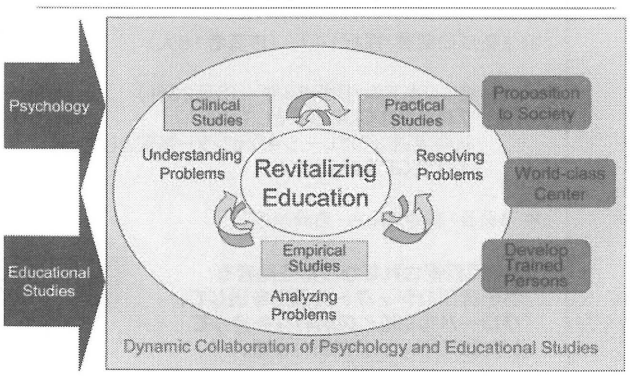


Figure 1. Main Academic Disciplines Covered by the Center

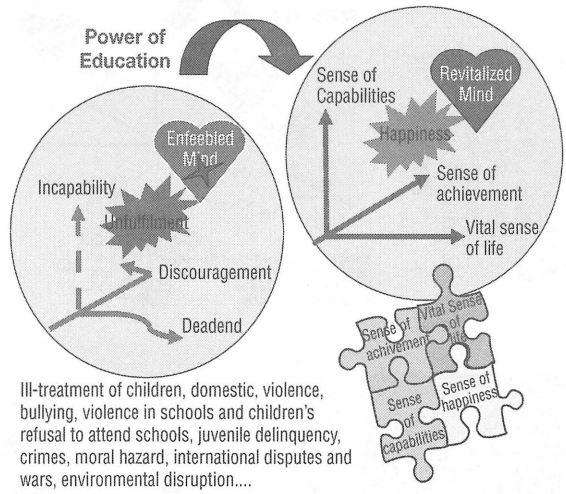
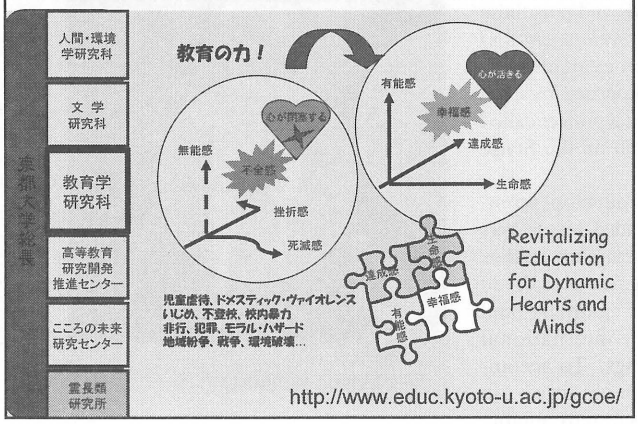


Figure 2. A Schematic Representation

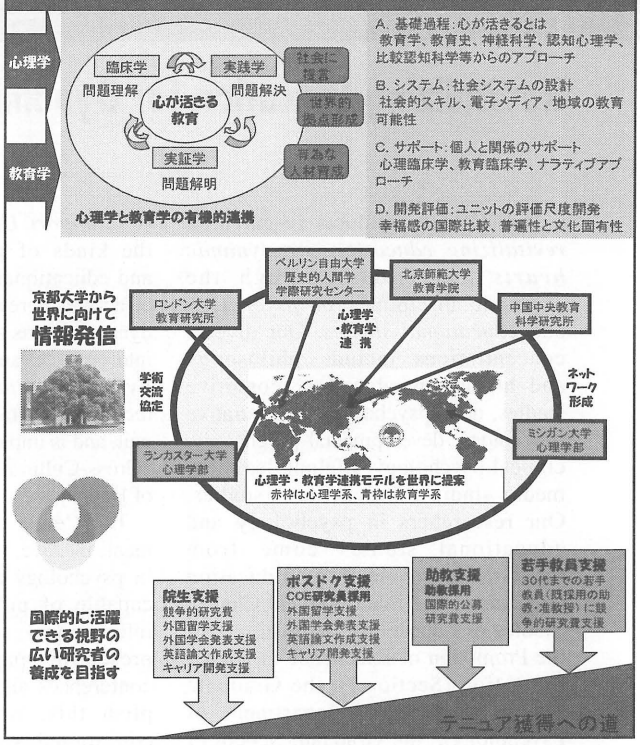
京都大学グローバルCOE「心が活きる教育の国際的拠点」

平成19年度～23年度（人文科学分野）
拠点リーダー：子安 増生（教育学研究科）
趣　旨：
① 京都大学の心理学と教育学の有機的連携
② 国際的ネットワークの形成
③ 大学院からテニュア取得までの人材育成
特　色：
① 実証学・実践学・臨床学の三学連携
② 基礎過程（A）、システム（B）、サポート（C）、開発評価（D）の四ユニット体制

心理学
教育学



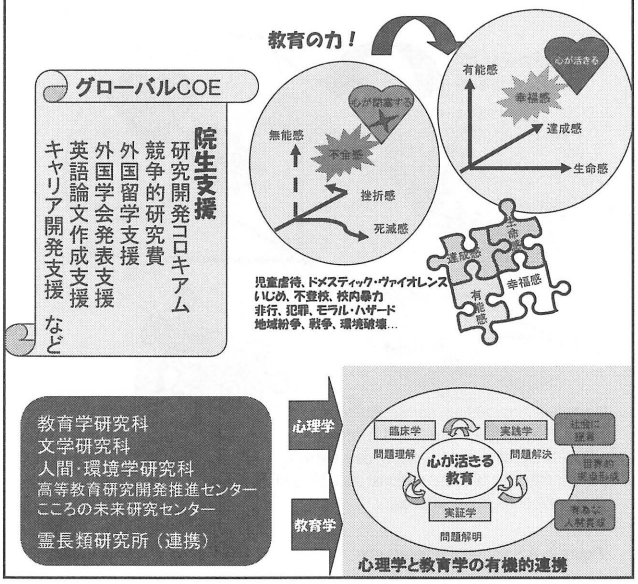
Kyoto University Global COE: Revitalizing Education for Dynamic Hearts and Minds



グローバルCOE説明会（院生対象）

「心が活きる教育のための国際的拠点」が採択されました。
京都大学の心理学と教育学が連携して、「国際化」「人材育成」を柱に平成19～23年度の5年間実施します。詳しくは、説明会にどうぞ！

日 時：2007年7月20日（金）　午後5時～6時
場 所：教育学部1階　第1講義室



グローバルCOE説明会（院生対象）

各種公募の採択が決定されました。
アピールする申請書はどう書けばよい？　研究費は何に使える？
詳しくは、説明会にどうぞ！　登録院生等は自由に参加できます。

日 時：2007年10月4日（木）　午後1時～2時
場 所：教育学部1階　第二講義室

助 教 2 名：大塚結喜・楠山　研（応募者21 人）
研究員3名：A廣瀬信之・B小島隆次・D櫻井里穂（応募者30人）
※ユニットCの研究員は再募集の予定

海外留学経費：採択5人（応募者6人）

院生養成研究費：採択14人（応募者16人）

研究開発コロキアム：採択23件（応募23件）
・グローバルCOE事業として8件
・教育実践コラボレーションセンター事業として6件
・大学院GP事業として9件

事務局員：高井まゆみ・島崎暁子

今回採択されなかった登録者も、各研究プロジェクトの活動を通じて、グローバルCOEとの関わりを持っていただくチャンスがあります。

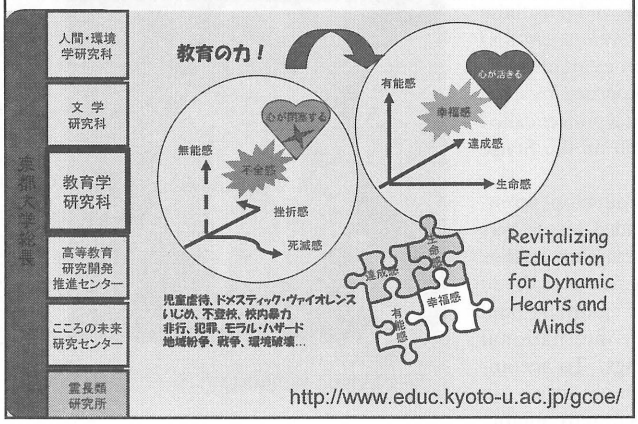
http://www.educ.kyoto-u.ac.jp/gcoe/

拠点ロゴマーク決定

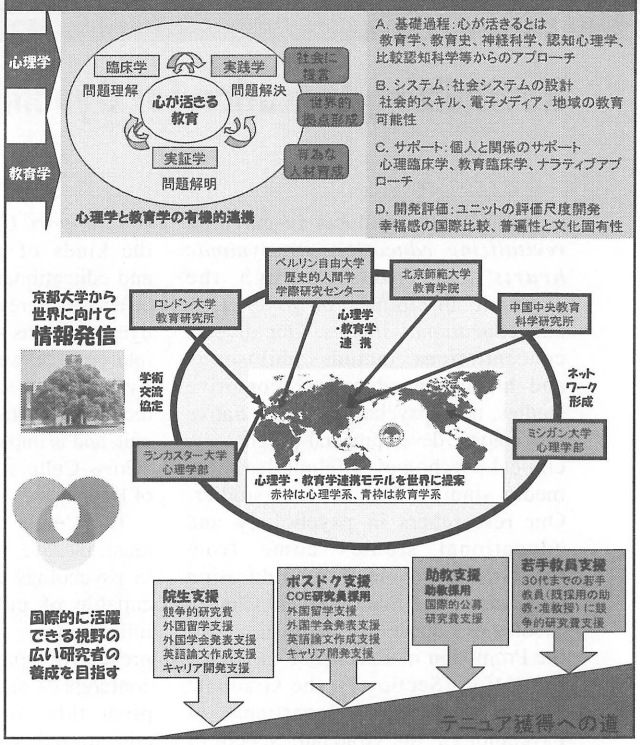
京都大学グローバルCOE「心が活きる教育の国際的拠点」

平成19年度～23年度（人文科学分野）
拠点リーダー：子安 増生（教育学研究科）
趣　旨：
① 京都大学の心理学と教育学の有機的連携
② 国際的ネットワークの形成
③ 大学院からテニュア取得までの人材育成
特　色：
① 実証学・実践学・臨床学の三学連携
② 基礎過程（A）、システム（B）、サポート（C）、開発評価（D）の四ユニット体制

心理学
教育学



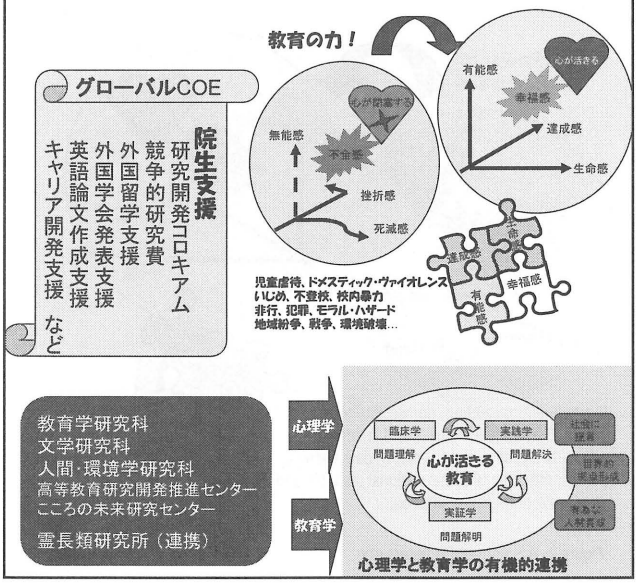
Kyoto University Global COE: Revitalizing Education for Dynamic Hearts and Minds



グローバルCOE説明会（院生対象）

「心が活きる教育のための国際的拠点」が採択されました。
京都大学の心理学と教育学が連携して、「国際化」「人材育成」を柱に平成19～23年度の5年間実施します。詳しくは、説明会にどうぞ！

日 時：2007年7月20日（金）　午後5時～6時
場 所：教育学部1階　第1講義室



グローバルCOE説明会（院生対象）

各種公募の採択が決定されました。
アピールする申請書はどう書けばよい？　研究費は何に使える？
詳しくは、説明会にどうぞ！　登録院生等は自由に参加できます。

日 時：2007年10月4日（木）　午後1時～2時
場 所：教育学部1階　第二講義室

助 教 2 名：大塚結喜・楠山　研（応募者21 人）
研究員3名：A廣瀬信之・B小島隆次・D櫻井里穂（応募者30人）
※ユニットCの研究員は再募集の予定

海外留学経費：採択5人（応募者6人）

院生養成研究費：採択14人（応募者16人）

研究開発コロキアム：採択23件（応募23件）
・グローバルCOE事業として8件
・教育実践コラボレーションセンター事業として6件
・大学院GP事業として9件

事務局員：高井まゆみ・島崎暁子

今回採択されなかった登録者も、各研究プロジェクトの活動を通じて、グローバルCOEとの関わりを持っていただくチャンスがあります。

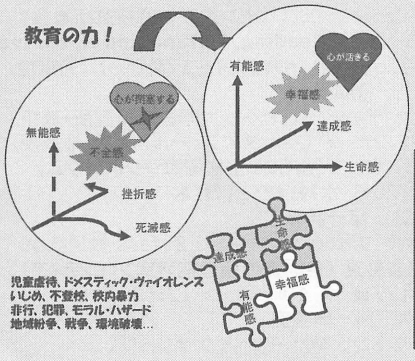
http://www.educ.kyoto-u.ac.jp/gcoe/

拠点ロゴマーク決定

グローバルCOEニューズ

京都大学グローバルCOE
「心が活きる教育の国際的拠点」

・各種公募の結果
　拠点ホームページに掲載しています
・研究開発コロキアム（後期授業）のスタート
　シラバスで確認してください（教務掛）
・COE研究員（ユニットC）1名公募
　平成19 年11 月9 日（金）書留郵便必着



Revitalizing Education for Dynamic Hearts and Minds

講演会、シンポジウム、ワークショップの案内がホームページに随時掲載されます。

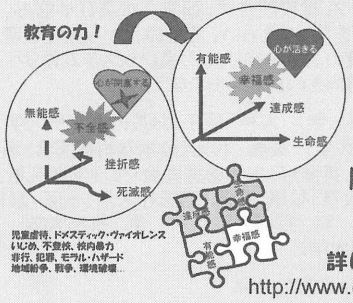
http://www.educ.kyoto-u.ac.jp/gcoe/

公開シンポジウム「心が活きる教育に向かって」

グローバルCOE拠点形成記念　公開シンポジウム

「心が活きる教育に向かって」

主　催：京都大学グローバルCOE「心が活きる教育のための国際的拠点」
日　時：2007年11月17日（土）9時～18時
　※12時～13時は大学院生のポスター発表
場　所：京都大学文学部　第一講義室、第二講義室
演　者：子安増生, 杉万俊夫, 杉本　均, 鈴木晶子, 辻本雅史, 西平　直, 藤田和生, 山田洋子, 大山泰宏, 齊藤　智, 齋藤直子, 渡邊洋子.
備　考：ご来聴歓迎、事前連絡等不要
連絡先：グローバルCOE事務局（gcoe-jimu@educ.kyoto-u.ac.jp）



Revitalizing Education for Dynamic Hearts and Minds

詳しいプログラムなどは：
http://www.educ.kyoto-u.ac.jp/gcoe/

第7回　京都大学大学院教育学研究科国際シンポジウム
心の高次制御機能に関する国際シンポジウム

International Symposium on Executive Functions

開催日：2007年12月5日（水），6日（木）
場　所：京都大学百周年時計台記念館
　2階　国際交流ホールIII

― 講演者 Speakers ―

Thomas Goschke (Dresden University of Technology, Germany)
Claire Hughes (University of Cambridge, UK)
Shoji Itakura (Kyoto University, Japan)
Michael J. Kane (University of North Carolina at Greensboro, USA)
Masuo Koyasu (Kyoto University, Japan)
Kang Lee (University of Toronto, Canada)
Charlie Lewis (Lancaster University, UK)
Akira Miyake (University of Colorado at Boulder, USA)
Stephen Monsell (University of Exeter, UK)
Louis S. Moses (University of Oregon, USA)
Satoru Saito (Kyoto University, Japan)
Priti Shah (University of Michigan, USA)

共催：京都大学教育研究振興財団
　京都大学グローバルCOEプログラム
　「心が活きる教育のための国際的拠点」

詳細については以下のホームページをご覧下さい
http://www.educ.kyoto-u.ac.jp/

グローバルCOEニューズ

本年もよろしくお願いします
1月の行事予定などお知らせします

・COE研究員（ユニットC）公募結果
教育学研究科D3・清水亜紀子（2008年4月1日採用）

・これからの講演、シンポジウム、ワークショップ
第7回グローバルCOE共催講演
日　時：2008年1月10日（木）午後4時00分～5時30分
場　所：京都大学大学院人間・環境学研究科棟2階　233演習室
講演者：土谷尚嗣　博士（カリフォルニア工科大学）
タイトル：Attention, Awareness and Aftereffects

第8回グローバルCOE共催講演
日　時：2008年1月15日（火）午後4時30分～6時00分
場　所：京都大学教育学部2階　中央装置室（215室）
講演者：Prof. Anne Inger Helmen Borge (University of Oslo)
タイトル：Theory of mind and young children's social behaviour: Does friendship make a difference?

第1回グローバルCOE主催シンポジウム
本拠点は、慶應義塾大学グローバルCOE「論理と感性の先端的教育研究拠点」と共同で以下のように シンポジウムを開催します。定員500人、参加申し込み制。
日　時：2008年1月19日（土）午前10時00分～午後6時00分
場　所：東京国際フォーラム（東京都千代田区丸の内3-5-1）
発表者：以下の三部構成で行う
　第一部（渡辺茂×子安増生）
　第二部（作家・瀬名秀明、田尻悟郎×大津由紀雄）
　第三部（慶應義塾長・安西祐一郎、伊東裕司×藤田和生×鈴木晶子×入来篤史）

グローバルCOEニューズ

第3回院生対象説明会を開催します。
講演・シンポジウム・ワークショップも続々開催。

・助教の国際公募について：
国籍不問、英語に堪能な者（1名）
公募期間：2008年1月21日～2008年3月31日
採　　用：2008年7月
※ホームページ「公募情報」に募集要項を掲載

・院生対象説明会について：今年度報告様式と次年度募集
日　時：2008年2月7日（木）午後5時～6時
場　所：教育学部1階　第二講義室

・ラウンドテーブルディスカッション：「若きサイコロジストの悩み－若手から見た心理学後継者育成環境のいま、これから」
日　時：2008年2月2日（土）午前9時30分～12時00分
場　所：京都大学百周年時計台記念館2階 国際交流ホールⅢ
趣　旨：若手助教、ポスドク、現役院生に、研究上の喜びや悩み、将来への抱負などを語ってもらい、若手の目から見た心理学後継者育成環境の現状を知り、より良いシステム作りへの提言に向けた前向きの討論をおこなう。

討 論 者：大江　朋子（東京大学）　大神　優子（お茶の水女子大学）　片畑真由美（京都大学）　後藤　和宏（日本学術振興会・慶應義塾大学）米田　英嗣（日本学術振興会・生理学研究所）　篠原　郁子（京都大学）杉尾　武志（同志社大学）十河　宏行（愛媛大学）　高田　明（京都大学）　林　創（京都大学）
司 会 者：大塚　結喜（京都大学）

http://www.educ.kyoto-u.ac.jp/gcoe/

グローバルCOEニューズ

第3回院生対象説明会を2月7日(木)に開催
2月開催の講演・シンポジウム・ワークショップ

・院生対象説明会：今年度報告様式と次年度募集の概要
日　時：2008年2月7日（木）17時00分～18時00分
場　所：教育学部1階　第二講義室

・多文化研究の国際ワークショップ：ウィーン大学との共同研究会
日　時：2008年2月6日（水）13時00分～18時00分
場　所：教育学部3階　320教室
発表者：Dagmar Strohmeier (University of Vienna, Austria)
Anna Grabner (University of Vienna, Austria)

・危機にある批判的思考（Critical Thinking in Crisis）
日　時：2008年2月10日（日）13時30分～15時30分（日本語解説付）
場　所：百周年時計台記念館2階　会議室Ⅲ
講演者：ポール・スタンディッシュ（ロンドン大学教育研究所教授）

・読むこと・書くこと・語ること（Reading, Writing and Narrative）
日　時：2008年2月13日（水）14時00分～17時00分（通訳付）
場　所：教育学部1階　会議室
講演者：ポール・スタンディッシュ（ロンドン大学教育研究所・教授）
アマンダ・フルフォード（英ハダスフィールド大学・准教授）

・幸福とリスク（第1回グローバルCOE主催国際シンポジウム）
日　時：2008年2月20日（水）および21日（木）
場　所：文学部（新館）第一講義室
講演者：C.Wulf 教授、J.Koerner 教授、J.Zirfass 教授ほか

・社会脳の定型・非定型発達（自閉症の脳機能研究フロンティア）
日　時：2008年2月27日（水）10時30分～12時00分
場　所：教育学部1階　第一講義室
講演者：千住 淳（ロンドン大学バークベック・カレッジ）

詳細はhttp://www.educ.kyoto-u.ac.jp/gcoe/

グローバルCOEニューズ

平成20年度院生対象研究費等の公募開始。
講演・シンポジウム・ワークショップも続々開催。

■平成20年度大学院生対象の「海外留学資金」「院生養成プログラム研究費」「研究開発コロキアム」の公募を開始しました。締め切りは2008年2月29日（金）午後4時（郵便必着）です。募集要項（応募用紙を含む）は、GCOEホームページ「学内専用ページ」に公開しています。
http://www.educ.kyoto-u.ac.jp/gcoe/internal

■「幸福とリスク　Happiness and risk」
（第1回グローバルCOE主催国際シンポジウム）
日　時：2008年2月20日（水）9時30分～18時00分
21日（木）9時30分～12時00分
場　所：京都大学文学部（新館）第一講義室
講演者：Christoph Wulf 教授（ベルリン自由大学）
Juergen Koerner 教授（ベルリン自由大学）
Joerg Zirfass 教授（エアランゲン－ニュルンベルク大学）
鈴木晶子・藤田和生・河合俊雄・子安増生（京都大学GCOE）

■千住淳博士講演会「社会脳の定型・非定型発達」
（第11回グローバルCOE共催講演会：ユニットA）
日　時：2008年2月27日（水）10時30分～12時00分
場　所：教育学部1階　第一講義室
講演者：千住淳博士（英ロンドン大学バークベック・カレッジ、研究員）

■ユニットB主催講演会「繁栄と幸福に関する開発研究：ブータン王国などの事例から」（第4回グローバルCOE主催講演会）
日　時：2008年2月27日(水) 15時00分～17時00分
場　所：教育学部1階　会議室
講演者：草郷孝好氏（大阪大学・人間科学研究科）

グローバルCOEニューズ

3月開催の講演会開催案内
詳細はhttp://www.educ.kyoto-u.ac.jp/gcoe/

三村將博士講演会（第12回グローバルCOE共催講演会：ユニットA）
主　催：日本ワーキングメモリ学会（第5回大会特別講演）
日　時：2008年3月8日（土）11時00分～11時45分
場　所：京都大学文学部新館　第三講義室
講 演 者：三村　將（昭和大学医学部准教授）

・ユニットD主催講演会「ヘルス・コミュニケーションと環境：複雑なリンク」（第4回グローバルCOE主催講演会）
日　時：2008年3月14日（金）16時30分～18時00分
場　所：時計台記念館2階　会議室Ⅲ
講 演 者：マルタ・ヒル＝ラクルス教授（スペイン・サラゴサ大学）

・ユニットC主催講演会「Kyoto-Vienna International Lectures: Life-Span Development and Life Long Learning」（第5回グローバルCOE主催講演会）
日　時：2008年3月17日（月）13時30分～16時30分
場　所：百周年時計台記念館2階　国際交流ホールⅠ
講 演 者：①Prof. Christiane Spiel ②Dr. Georg Spiel

・ユニットC主催「"Bildung-Psychology":A developmental perspective on education」（第6回グローバルCOE主催講演会）
日　時：2008年3月19日（水）15時00分～17時00分
場　所：大阪国際会議場（日本発達心理学会大会の参加者対象）
講 演 者：Prof. Christiane Spiel

・ユニットD主催講演会「WHO-QOL尺度：知覚される生活の質への実証的アプローチ」（第7回グローバルCOE主催講演会）
日　時：2008年3月21日（金）12時45分～14時45分
場　所：大阪国際会議場（日本発達心理学会の参加者対象）
講 演 者：マルタ・ヒル＝ラクルス教授（スペイン・サラゴサ大学）

平成１９年度活動報告書「心が活きる教育のための国際的拠点」
発 行 者: 子安 増生（グローバル COE 拠点リーダー）
刊行年月: 平成 20 年 5 月
印刷会社: 株式会社 北斗プリント社
連 絡 先: 〒606-8501 京都市左京区吉田本町
京都大学大学院教育学研究科・子安 増生
電話・ファックス 075-753-3063
電子メイル HGB03675@nifty.com